

---

# こんな恋の話

愛梨airi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

こんな恋の話

### 【Nコード】

N9114G

### 【作者名】

愛梨 a i r i

### 【あらすじ】

優太が好きなのに素直に言えない衣。

自分に正直にまっすぐに衣を追いかける優太。

男勝りなその性格と外見で女扱いなんてされたことがなかったけれど、そんな自分に紳士的な聖に恋をした、本編の主人公、未散。

手痛い失恋をした故に言葉にうまくできないながらも未散に目に見える愛情を注ぎ続ける聖。

不器用にしか聖を愛せなくて別れた今も聖が忘れられない日和。

恋人と辛い別れをしてから臆病になっていたけれど、傷ついた未散に手をさしのべ守ろうとした佳佑。

そしてそんな彼らを友情という形で見守り続ける理と隼。

今回はそんな恋の話。

4月。

真新しい制服を身に纏い1人の長身の女が教室に入ってきた。

彼女は本編の主人公。

名は吉岡未散。

まだ15歳だというのにすでに身長は176センチある。

そのせいだろうか、普通に歩いているだけなのに何となくまわりは目を伏せる。

やっぱりあたしは高校でも『怪物』扱いなのね……。

もう慣れたとはいえやっぱり切ない。

中2の頃からめきめきと身長は成長し続け、気がついたら校内一のデカ女になっていた。

そのせいで大半の女子先輩には『ナマイキ』と目を付けられ、後輩の女子や男性陣からは『コワイ』とヒソヒソ言われ続けてきた。

デカいのはあたしのせいじゃないもん、かってに大きくなっただけだもん……。

はぁ、とため息をついて空いていた席に着いた。

「未散？……よかつたぁ、同じクラスだぁ！」

おはよーと未散に挨拶し未散の席の前にちよこん、と座ったのは小橋衣。

彼女は未散の中学からの親友だ。

こちらの方はというと身長153センチ。

おまけに顔も目もまんまるなので、未散とは違って「小さなかわいらしい女の子」という言葉が似合う。

「ああ、おはよ

未散はほつとして衣に挨拶を返した。

「おはよー！」

「ひゃあっ！」

ハイテンションで挨拶し衣の頭をしゃぐしゃと撫でるのは並木優太。なみきゆうた

彼も未散の中学からの部活仲間。

そして衣は思わぬ災害に悲鳴を上げていた。

「……おはよ」

未散がそう言うつと優太はニコニコしながら未散の隣の席にどかつ、と荷物を置いた。

「優太、なにその荷物」

「なに、つて決まってるだろ。俺の商売道具。もう今日から練習に行くもんね」

お前も行くだろ？と優太は未散に聞きながら椅子に座る。

「入るつもりはあるけど、今日は行かない」

未散は机に頬杖をつく。

「なんだよ、やる気ないなあ」

いいよいよ俺一人行くから、と優太は少しむくれた。

そんなやり取りを2人がしている間に衣は手鏡を見て髪を直していたが、

「あーもう直んない、優太のばかつ」

あたしトイレ行って来る、とブラシを片手にプリプリしながら衣は教室を出て行った。

「優太さあ、もうちよつと愛情表現変えたら？」

何も怒らせなくても、と未散は優太を見る。

「何言ってるんだよ、怒ると可愛いから怒らせるんじゃないか」

わかってないねえ未散さんは、と優太はイヒヒヒと笑った。

やれやれ。

そう思いながら優太を見て未散は肩を少し竦めた。

「そうやっていつまで意地悪ばかりするつもり？」

未散はさりげなく優太の脛を蹴った。

「早いほうがいいと思うよ？だつてさ……衣がここに座った途端教室中の男がみんなこっち見てるし」

早くしないと誰かに取られちゃうかもよお、と未散は優太にけしかけた。

そうなのだ。

衣が未散の前に座ってからは男子達の熱い視線は2人に注がれていた。

それは紛れもなく彼らが衣を見ようとしていたとしか言いようがない。

残念ながら未散は……衣を見ようとすると視界に入ってくるだけでそれ以上の意味は無い。

「そ、それは困る！衣が他の男に取られるなんて！」

「……あたしがどうかした？」  
げっ。

いつの間にか戻ってきていた衣に2人はぎよっ、とする。

「あ、俺、トイレ行って来るわ」

動揺しまくりの優太は机の角に足をぶつけては「いてっ」とか言いながら教室を逃げるようにして出て行った。

「……どうしたの？」

何も知らない衣は普通に思ったことを未散に聞いた。

「あ、ああ……ココでも衣は男の注目の的だって言っただけ。でも衣は優太以外の男にはいくら言われてもダメだもんね」

いつか優太は衣に言ってくれるのかな、と未散は、イヒ、と笑う。

「また未散は変な事言う！優太がそんなこと言うわけないでしょ！」

そう言う衣はぷいっ、と前を向いてしまった。

あらら、また怒っちゃった。

いつものこととはいえちよっただけ気まずくなる。  
そう。

このややこしい状況を未散が知ってもう2年半になる。

衣と優太は実を言うとお互いがお互いの想い人。

なのに優太の言動は小学生レベルだし、衣は衣で優太の言動を真に受けているので「優太はあたしのことなんて嫌いなんだよ」とかってに勘違いしているので実に中途半端なままココまできている。

一体この2人、いつになったらくつつくんだろう……。

また3年間見守らなきゃいけないのだろうかと未散は腕を組みながらため息をついた。

## Vol.1 (後書き)

はじめまして、愛梨です。

たくさんある小説の中からお越しくださいますてありがとうございます！

私には1つこだわりがあります。

ジャンルがジャンルなのであまりに突飛過ぎたり内容がてんこ盛りでは臨場感がないような気がするし、あまりに過激だと私が書けない(それだけヘタレなんです……すみません)ので読んだ方には「ああそれ、わかるわ」「そんなときもあるよね」「こういう展開、現実でもあるよね」と一種の親近感あるいはもう10代ではない方には懐かしい感じになるようにしたいなと思つてます。

「計算」や「打算」ができない、うまくやれない……そんな頃の恋愛を綴つていこうと思います。

よかつたら最後までお付き合いいただければと思います。

さて。

今回は半分登場人物の紹介でした。

読んでわかつたと思いますが、まずは未散でなく彼女の友たちのひと騒動を展開していきます。

最初はこんなふうにするつもりはなかったんですけど、書いているうちにこうなっちゃいました(汗)。

変わった形かなとは思いますが、応援していただければと思います。

では、またです。



入学式から2日後。

優太に連れられて未散はバスケット部の部室に向かっていた。

「行ったらびつくりしたよ、だって未散と背がおんなじぐらいの人はっかなんだぜ！」

「当たり前じゃない高校生なんだから……ってか、優太が小さすぎるのよ」

「るっさいな、今から伸びるんだよ。見てろ、絶対そのうち未散よりでかくなってやるからな！」

「はいはいわかりました。じゃ、とりあえず頑張って15センチぐらい伸ばして下さい」

言いながら未散は女子バスケット部の部室のドアをノックした。

優太のほうはというと「くっそー180センチになって未散を見下ろしてやる！」とぶつぶつ言いながら男子バスケット部の部室へ歩き出した。

そんな優太を未散はちよつと鼻で笑って見送り「失礼します」とドアを開ける。

その瞬間、

「いらっしゃーい！」

黄色い声が部室に響いた。

「吉岡未散さんだよな？お待ちしてました、ようこそ我がバスケット部へ！」

1人の先輩が目をまあるくして立ち尽くす未散の手を取りブンブンと上下に大きく振る。

「あの、すみません、どうしてあたしの名前を……？」

自己紹介も何もしていないのにまるですつと前から自分の事を知っているかのような歓迎を受けた未散はちよつとだけ目を白黒させる。

「県内の高校の女子バスケット部員で吉岡さんを知らないとか、吉岡さんを欲しがらない学校は多分ないと思うよ？その身長が1人いたらぜんぜん違うもの」

「そ、そうですね……」

確かに中学生の段階で170センチ以上の身長を持つ女子バスケットボールプレイヤーはそういない。

先輩の答えに未散も多少納得した。

しかし「デカイ」というだけでこんなにも人に喜ばれたことは初めてで、未散はかなり気持ちが悪そばゆい。

「……で、今日はどうしたの？さっきはついつい『いらつしやい』なんて言っちゃったけど、それで正解だった？」

「あ、ハイ、よろしくお願いします！」

未散が頭を下げると女子バスケット部に再び歓喜の叫びが沸きあがった。

やっぱり優太ってすごいわ……。

スコアボードをゴロゴロ引っ張りながら、隣で笑顔を振りまき手をギャラリィに振り『並木くん！』と女の口達に手を振り返されている優太を未散は半分尊敬の眼差しで見下ろしていた。

今からバスケット部は新入生歓迎の男女混合の練習試合を始めるのだが、いつどこでその話を聞いたのか体育館の観客席にはありえないくらい女子生徒がこった返していた。

その原因を作ったのは……この優太め、である。

「優太っていつの間にかこんな有名になってるの？」

「……知らん」

「こんなことして先輩達は大丈夫なの？」

「ってより先輩達が『やれ』って言うからやってるだけ」

そう未散に返ししながら優太はまた笑顔で『ありがとー』とか言いながら手を振った。

中学のときもそうだったのだが、どうも世の女性達には優太のル

ツクスは受けがいい。

未散が優太を男として見れない原因の1つにもなっているが、見た目の上での唯一の欠点は「ど」がつくくらいチビである事ぐらいか。だって……いまだに身長は158センチだし。

しかしよくもまあ、優太1人にこんなにも女のゴぼっかり集まるもんだ。

ボードを出し終わり今度はボールカゴを倉庫に取りに行きながら眺めていた未散だが、沢山の女のゴ達の群れの中に衣を見つけて硬直した。

優太は相変わらずファンサービスを続けている。

それを見ていた衣は今にも泣きそうな表情かおをしていた。

隣にいた未散には作り笑顔で手を振ってくれたが、すぐにその笑顔は消え未散に背を向け始めていた。

やばい、優太気づいてない……。

「優太っ、愛想振りまくのやめなっ！」

未散は手を振るためあげていた優太の腕を強引に下ろした。

女のゴ達からは「やだぁ!」「ちよっとなによあのデカ女!」とブーイングモードが始める。

「な、なにすんだよ?!」

不意をつかれた優太はびっくりして未散を見る。

「衣が来てたんだってばっ!」

ほらあそこ!と未散はあごで衣がいたところを指す。

しかし……衣の姿はすでに人ごみに紛れて消えていた。

嘘だろ……。

優太の表情からも笑顔が消える。

「せ、先輩、あと何分で試合始めますかっ?!」

優太は焦り顔で漫談で盛り上がっている先輩達の輪に入った。

「うん?あ、もうこんな時間か。そろそろやるか。……どうした並

木、顔真っ青だぞ」

部長の小田佳佑おたけいすけが優太に答えながら顔色が悪い優太を心配した。

「す、すみません、ちょ、ちょっとトイレ！」

佳佑の言葉を半分聞いたかどうかのところ、優太は衣を追いかけるため走り出した。

「あ、あたしも行って来ます！」

これはまずい、と思った未散も優太の後を追いかけた。

「……随分我慢してたんだな」

佳佑は未散と優太の猛ダッシュを見て呑気に言いながら「よし始めるぞ！」と部員達に声をかけた。

未散と優太が衣を追いかけ始めようとしていた頃、衣のほうは目にいっぱい目を溜めてひたすら下を向いて小走り気味に教室へ向かっていた。

『ねえ知ってる？なんか今年の1年生で超可愛い男のコがいるらしいよ』

『知ってる知ってる、並木優太くんでしょ？』

『今日バスケ部って練習試合やるらしいんだけど並木くん出るんだって！』

『ほんと?!行こ行こ!』

すれ違う女のコ達が体育館に向かいながらそう楽しそうに会話をしているのを聞いているだけで衣の目からはみるみる涙がこぼれていく。

小学生のときからそうだった。

優太はいつも人気者だった。

勉強はイマイチだったけど、カッコよくて明るくて優しくて正義感のある、スポーツならなんでもこい!の男のコだった。

小学校1年生のとき『可愛いからいじめてしまっ』心理そのもののクラスの男共にとありとあらゆるいたずら……とはいつてもスカート捲りとか追いかけて髪を引つ張られる程度だが、それを毎日のようにされていた衣は反撃することもできずにいつもめそめそと泣いていた。

その時必ず衣の目の前に現れては、

『女の子泣かしちゃダメだって先生言ってただろ!!』

あっち行けっ!と奴らを蹴散らしてくれたのは同じクラスの優太だった。

そしてその後は必ずといっていいほど、

『衣ちゃんもう大丈夫だから泣かないで』

そう言っでは衣が泣きやむまでぎゅっとしてくれて頭もなでなでしてくれた。

断っておくが当時の優太は衣に対してなにか特別な感情　つま  
り「恋愛感情」があったわけでない。

当時の担任の「男の子は女の子に優しくしましょう」という言い  
つけをちゃんと守らなくては、ということとそれを実行しただけだ  
った。

それからぎゅっとしたのも、いつも優太の母君が自分が泣いてい  
るしてくれることを真似しただけ。

だから……優太の方は特に深い意味でやったわけではない。

だが衣にとつてはそんなことをしてくれる優太は「優しくて強い  
ヒーロー」だった。

たったそれだけことから衣にとつての優太は、大きくなるにつれ  
て「ヒーロー」から「想い人」へと変わっていく。

けれど、ヒーロー優太はだんだん衣だけのヒーローではなくなっ  
ていった。

困っている人がいたらほっとけない。

女の子が泣いていたらほっとけない。

そう言っでは皆に分け隔てなく優しい優太が、

「優太くんて、優しいしかっこいいしいいよねー」

と、女の子達みんなのヒーローになっていくのに時間はかからな  
かった。

ただ1つ救いがあったとすれば当時の優太は女の子に全く興味が  
なかったことだ。

いろんなクラスの女の子に「優太くん好き」と言われても、

「俺も好きだよ、沙希ちゃんも洋平もみんな好きー」

そんなアホな返事をして、

「優太くんのバカッ！」

と、告白をした女の子に怒られて、

「え、なんで……？」

.....  
と、おまじな、とばかりおぼつらなうかがおあつた。

小学校6年生になってからはますます優太人気は上昇した。

今もそうなのだが当時から「ど」がつくくらいチビの癖になぜか優太はバスケット部に入部。

大丈夫なのかと衣は心配したが、優太のほうはというと「どチビだからこそできるんだよ」とフットワークを生かしたプレイングで関係者たちが注目する選手にまで成長した。

そして女のコ達からはというと、同級生や後輩達には「カッコイイ」先輩達には「カワイイ」と評価され、声を掛けられれば笑顔で応えるし、「あげる」と差し入れを渡されればそれがこと食べ物となると「どうもありがとう！」とやっぱ嬉しそうに笑って言ってしまう性格も手伝って外部にまで知られる人にまでなっていた。

けれど衣のほうは……そんな積極的なことができなかった。友達から誘われなかったら試合には行ったことがないし、差し入れのほうもしてあげたいと思いつつも「嫌いなものをあげちゃったらどうしよう」「ウザいと思われたらどうしよう」と考えただけで気後れしてしまって何もできずにいた。

そうやって優太はどんどん衣から離れていってしまったのだ。

しかし、そこに救世主が現れた。

それが未散だった。

未散とは中学1年生のとき初めての席替えで隣になった。

そのときは未散もまだ衣より少し大きいくらいで怖くなかったし、

「あたし英語わかんないよーどうしよー衣教えてー」

と、人懐っこく話しかけてくれた。



で、いつも、

「優太っ、衣天才だよ、あんたも教わりなよ」

そう言っつては優太をも巻き込んでくれたのだ。

すでにこのときには、

「優太っつてすごいよねえ、今日も3年生のすっごい綺麗な先輩に告白されてたよ。これで何日連続なんだろ」

と、未散が何気に優太のことを口にしたのに対して、

「優太その女ひとになんて言っつてた?!」

と思わず聞いてしまったことにより、あっけなく「自分が優太が好きだ」ということを未散に白状してしまっていた。

小学校が一緒、しかも同じクラスになったこともあるのにまともにしたことが1回もないのを未散はこのときに知り、それはそれは驚いていたが、

「まあ、任せてよ」

ということ、いつも勉強ができない馬鹿なふりをしつつ衣と話をし、そのあとさりげなく優太にも話をふっつていつの間にかそれなりに優太と会話ができるようにさせてくれた。

こうして優太を好きになって7年目にして衣はやつとまともに優太と話せるようになったのだ。

……しかし。

話せるようになったのはいいのだが何かというとすぐに、

「衣かわいい」

「衣大好きっ」

「衣愛してる」

と、どこまで本気なのかさっぱりわからない歯の浮くような台詞を優太は毎日のように衣にのたまっていた。

「何言っつてんの、バツカじゃないの!？」

衣はいつもそう冷たく優太には返すのだが、

「その怒った顔もかわいいっ!」

とまたそんなことを言い残し、必ず犬コ口にするみたいに頭を撫

でて「じゃあなー」とすたこらさつさと去っていく。

「もう！あたしは犬じゃないっ、バカ優太っ！」

と、優太のせいでくしゃくしゃになってしまった頭を自分で撫でながら優太の背中に怒るのだが、半分はいつも嬉しくて笑ってしまっていた。

3年になり、衣は信じられない噂を耳にした。

優太が県内にあるバスケットが全国レベルでも屈指の私立高校のスポーツ推薦を蹴って、自分と同じ高校に入るために勉強を始めたというものだった。

もちろんまわりも初めは誰も優太が本気でそんなことをするわけないと信じちゃいなかった。

スポーツ推薦でその高校に行けば高校バスケットボール界のトッププレイヤーになれること間違いなしなのにそれをやめるなんて、どう考えてもおかしい。

それに、衣は常に学年3本指に入る秀才であったが優太は学年でいつも3ケタ。

とてもじゃないが成績では差がありすぎてありえない話だったのだ。

しかし、部活引退後の優太の成績はめきめき上がり続け最後の定期テストでは学年で7番をとってまわりをあつと言わせた。

そして……衣と同じ高校に合格してしまった。

一体何が優太をそこまで動かしたのかを知っているのは未散だけで、まわりはもちろんのこと衣も本当の理由は知らない。

タテマエ上は、

『男は賢くなきゃダメだろ。バスケットできたって生きていけない、食ってけないだろ』

とまあ随分と大人の理由にはなっているのだが。

だが衣にとつてはそんなとはどうでもよかった。

また優太に毎日会えることが嬉しかった。

優太には失礼だが、成績のことを考えたらもう高校は一緒ではないだろうと諦めていたからだ。

……けれど。

毎日会えるということは優太が女のコ達に言い寄られるのを見てしまうということ。

今日みたいなことを毎日見るとのこと……。

まだ入学して10日も経っていないのに、ギャラリーにいた彼女達から見た優太はすでに「女のコたちのヒーロー」だった。

本当ならみんなに紛れて一緒になって声を掛けられればどんなに気が晴れるだろう。

だけど衣にはそんな勇氣はない。

……いや、そんなのは綺麗ごとだ。

彼女達と一緒にだと優太に思われたくない。

冗談かもしれないけれど、優太の「大好き」という言葉は自分だけの特権だと思いたい。

だけど彼女達が羨ましいと思っている自分がいるのも確かなわけ  
で。

……それに。

優太はバスケット仲間ということ以外なにもないとはどんなに頭ではわかっていても、部活でも隣にいられる未散にでさえ嫉妬することもある。

さつきだって未散に頑張って笑ってを振ったけれど本当はこう思っていた。

お願いだから優太の隣になんかないでよ！離れてよ！　　って。

でも……親友に腹を立ててしまう自分に情けないやら悔しいやらで、衣の頭の中はすでにドロドロになっていた。

あたしおかしいよ……。

「ひっ……くっ……」

とうとう衣は歩くことができなくなりその場にしゃがみこんでし

まった。

学校の廊下なので声を上げて泣くこともできない。

泣きやまなきゃいけないのに涙は容赦なく流れていく。

その時だった。

「衣っ、どこだっ！衣っ！！」

え？

一瞬びっくりして衣の涙が止まった。

優太……？

衣は立ち上がり振り返るが誰もいない。

いるわけないよね。今から練習試合が始まるのに。

冷静になった衣は涙を手のひらで拭ってまた歩き始めた。

「おいっ、衣待てっ！」

しかし衣が2歩も歩かないうちに、後ろからダダダダという足音とびんびん響く自分を探す優太の声がこだましてきた。

なんで来るの？なんでなんで？！

一度は落ち着いたはずの頭が優太の声でまたパニックなり始める。

帰ろう……帰らなくちゃ……帰りたい……！

とりあえず結論を出し衣は教室へ走り出していた。

だが相手はバスケット部の、すばしっこさだけがとりえの男。

あっという間に「衣っ！」と優太の叫ぶ声はすぐ後ろまで来ていた。

どうしよう……こんな顔見られたら、優太はきつと『衣どうした、誰に泣かされたっ？！』て聞いてくる。『あんたのせいよ！』なんて言えない……！

衣も衣で全速力で逃げた。

なんとか教室までたどり着き、席に戻って荷物をひったくるように掴んで教室を出ようと左ドアに向かった。

その瞬間。

ダンッ！

大きな物音が右から聞こえ、衣はびくつとし、足が止まる。

ビクビクと衣が物音がした右方向を向くと、教室のドアは思いつきり開いていて、そこにちよつともたれかかつて肩でぜーはーと息をしているユニフォーム姿の優太がそこにいた。

「なんだよ、帰っちゃうのかよ。俺の勇姿を見ていけよ

言いながら優太は衣に1歩1歩と近づく。

「こ、来ないでよっ！つてか、早く戻んなさいよっ！」

練習試合始まるんじゃないの？と衣も1歩1歩また歩と後ずさる。

「……ふざけんじゃねーぞ」

俺から逃げられるわけねーだろっ！と優太は一気に机を払いながら衣を捕まえに速攻をかける。

「来ないでつたら来ないでよっ！」

衣も衣で精一杯走って教室のドアを開けようと手を伸ばす。

だが、追いついた優太が衣の後ろから乱暴にドアに右手を押し付けた。

「俺のことなんだと思ってんだよ、おとこの体力測定の50メートル走で校内トップ取った男だぞ、観念しろ」

またぜーぜー言いながら、優太は衣が逃げられないように今度は左手をドアに置いた。

「なによお、なにしに来たのよお」

優太との距離が余りに近すぎるのといつになく真剣な優太の口調に衣は振り向けない。

荷物を前に抱え、優太に背中を向けたまま必死で悪たれを言い放つ。

「なにつて、お前が体育館から消えたから追いかけてきたんだろっ  
が」

「……なにそれ、バツカじゃないの?!」

返事の意味がわからない衣は半分バカにしたように言いながら優太に向き直り睨みつける……はずだった。

そんな表情、しないで……。

優太の顔を見た途端、衣は足から力が抜けてしまいへなへなと座り込んでしまった。

力が抜けてしまった理由は優太の瞳だった。

衣の知っている優太の目はいつも笑っていた。だけど今は違う。

怒っているような泣いているような……衣の知らない瞳。

だからだろうか、座り込んでしまっても優太の瞳からはそらせず衣は優太を見上げていた。

「衣、1回しか言わないからよく聴けよ」

ドアから手を離さないまま優太は少しずつ腰を下ろし、衣と同じ目の高さに合わせて。

「俺にとってはバスケットは大事だよ。すっげー大事」

「だけど、と優太はちよつと間をおいて続ける。

「だけど、バスケットは2番目なんだよ。……練習試合だろうがなんだろうが、そういうの全部放り出しても大事にしなきゃなんないものが、俺には1個だけあるんだよ」

「……………」  
「未散に『衣が来てる』って聞いたから、お前をここまで追いかけってきた」

「……………」  
衣はもう優太のオーラに吞まれてなにも言い返せない。

ただ黙って優太の言うことを聞いていた。

「女にヘラヘラするような男だつて他の女にはそう思われたつて構わない。だけど、衣にだけは『あれはただの演出だ』って言い訳しなかった……どうしてかわかる？」

優太は衣に問いかけた。

あたしが欲しい答えが返ってくるの……？

衣の心臓の鼓動はどんどん大きくなる。

俺にとつて、と優太は口を開いた。

「俺にとつて一番大事なのは衣だから……『好き』って言ったのも『愛してる』って言ったのも全部ホントなんだよ、衣はいつつも本気にしてくれないけど」

優太の言葉が真実であることを証明するかのように、言い終わった優太の顔は真っ赤になっていた。

嘘っ。嘘嘘嘘っ。

衣の方はというと、いざ言われてみるとにわかには信じがたくてそれこそ落ちそうな勢いで目を見開いた。

「……もう無理、限界。衣かわいすぎ」

衣から目を逸らす優太の手はドアからはなれた。

そしてその手はあつという間に衣の背中に回り、強引に優太の胸へと引き寄せられる。

「優太っ、ちょ、ちょっと!」

突然の優太の行動に衣は動揺を隠せない。

「いいからおとなしくしてろ!」

何も聞かれたないかのように優太は怒ったように声を荒げた。

「……………」

衣は衣で優太の勢いに押され黙ってしまった。

なんか熱い。なんでこんなに熱いの……？

少し時間がたって余裕が出てきた衣は周りを見渡す。

……そこで大変なことに気づいてしまった。

ユニフォーム姿なので当たり前なのだが、今の優太の姿は思っている以上に優太の体温が衣に直に伝わってくるのだ。

お願いだからもうはなして……恥ずかしい……!

でも一方でこのままでいたい自分もいるわけで、衣は一人「ばかばかばかっ、ナニ考えてんのよっ!」と葛藤していた。

「衣……………」



その時だった。

優太の腕の力がふと緩んだ。

さつきとは違う、静かで優しい声。

「……………」

葛藤はどこへやら、優太の声に衣の胸はきゅうつと締め付けられる。

「大きい声出してごめんな？」

そう言う優太の手は、衣のまつげに伸びる。

「目、腫れてる……………どうした？誰かに泣かされたのか？」

そう衣に聞きながら、優太の指は腫れぼったい衣の目の下にそつと触れる。

衣は小さく肩を震わせた。

「衣」

自分の名を呼ぶ甘い声に衣は操られるように優太を見上げる。

見上げるとあったのは、優太の愛しい女ひとを見るあたたかい眼差し。

それに衣は射抜かれた気がした。

もう首を振ることさえできないくらい、衣の全てが優太に奪われて動けない。

……………しかし。

その間に優太の手が衣の髪に触れていく。

ナニ？何するの？！

優太の手が自分の頬に回った途端、衣は急に酔いが覚めた気がした。

めくるめく展開にだんだん怖くなってきて衣は思わず目をぎゅつと閉じた。

「衣、いいの……………？」

優太は衣が目をつぶった理由を完全に誤解した。

優太は手を衣の肩に置くと、少しずつ少しずつ衣に顔を寄せていく。

それを衣は空気で感じ取った。

ダメダメダメ、もう耐えらんないっ！

衣はバツ、と目を開けた。

すると目の前にあったのは……目を閉じる寸前の優太、だった。

こんなところで無理無理無理っ！！

「は、はなしてっ！」

あまりの恥ずかしさに衣は優太を突き飛ばした。

「おわっ!？」

不意打ちだったため優太は思いっきりひっくり返ってしまった。

「……あ、あたし帰るっ！」

こんな優太目の前にしてたら、あたしの心臓いくつあっても足りないよ……！

衣はその場から逃げ出そうとするかのように立とうとした。

……が、腰が抜けてしまったらしくて立とうとしてもすぐに尻餅をつく。

それでも足だけジタバタと動かしてなんとか後ずさりし、手をガタガタと震わせて後ろ手でドアを開ける。

そして開いたと思ったたらくるりと向いて荷物を抱えて転びそうになりながら教室を出た。

後ろで「衣待って！」と優太が叫んでいたが、衣は聞こえないフリをしてしてひたすら走った。

昇降口に着いて上履きを脱ぎ、投げように靴箱に入れ靴を引っ張り出し、履いたかどうかのうちに再び走る。

普通ならこんなに喜ばしいことはないのだが、好きな男に好きと言われるわ抱きつかれるわ髪やら顔やら触られるわ自分が目を瞑ってから優太が自分に何をしようとしていたのか何となくわかるわで、あまりにいろいろありすぎて衣の頭はさっきのたった数分間の出来事だけがぐるぐると回っていた。

そんなわけで「衣どうしたの?!」という未散の声を聞いたような気がしたが、……衣に振り返る余裕はなかった。

一体何ごと…？

なんだかよくわからないけれど逃げるように帰る衣の後姿を見ながら、未散は肩ではあはあ言いながら昇降口で立ち止まっていた。

先輩達にトイレに行くこと偽って優太と体育館を出た未散は、衣を挟み撃ちしようということで優太は左へ未散は右へ分かれて走った。

で、未散が見つけたのは…あわてて校門に走っていく衣の姿だった。

未散は外履きにも変えず校門へ走る。

しかしすでに未散が校門に着いたころには衣はもう100メートルくらい先にいて、さすがに追いつくのは無理と思いついかけるとは諦めた。

一応「衣どうしたの?!」と言ってはみたものの聞こえてないのか、そのまま衣は右へ曲がってしまい見えなくなった。

「えーと、優太優太、優太はどこだ…?」

いい加減、戻らないとマズいよね。

とりあえず衣のことはおいとくことにして未散は優太を探し始めた。

「優太あ、どこ?」

優太を呼んでいるとふと自分の教室が目に入ったので未散はそこへ行ってみることにした。

教室のドアは開いている。

「優太、いる?」

そう言いながら教室に入った途端未散が目にしたのは。

片ひざを立てたその上に腕を寄せ、そのまた上に頭を乗せて一点をぼんやり見ている優太の姿だった。

「どうしたの? なにかあったの?」

衣はあわてて帰ったみたいだし、と未散は優太にたずねる。

「……未散、頼みがあるんだけど」

優太は未散の質問には答えず同じ姿勢のまま未散に話しかける。

「なに？」

未散は優太を見下ろす。

「先輩達にさ、『並木は下痢が止まらないのでしばらくトイレにこもりますから始めててください』って言うつといて」

「え、ちよつと待ってナニ……」

なんでそんな展開になるのか理解不能の未散は優太に返そうとした。

しかしそれはガンツ！と教卓の横を拳骨で殴った優太に止められる。

「……もういいから行ってくれよ！頼むから一人にしてくれよ！」

未散に見られないように目が痒いフリをしながらこぼれてしまった涙を乱暴に拭い、優太は未散に怒鳴り散らす。

「……わかった、そう言っておけばいいのね」

ダメだわこりゃ。優太、なんかやらかしたな。

もうこれは後で聞くしかないと思った未散は「じゃあ先に行くからね」と優太を残して教室から出た。

「……くっ……」

ようやく一人になれた優太は、静かに涙を頬に伝わせる。

俺の5年間の片思い、これで終了かよ。

やっと話せるようになったのにまた逆戻り？

そう思っただけで1日中でも泣いていられそうだった。

優太が衣の存在に気づくのは小学校5年生のときだった。そう。

実際には衣とは小学校も同じだったのに、クラスだって1年生のときと2年生のときは一緒だったのに、優太のほうはそれをさっぱり覚えいないのだ。

新学期初日のこと。

教室に入って席に座り何となく教室の中を見渡したときだった。

すっげーカワイイ……。

優太はぼかん、と口を開けて衣に見とれてしまった。

小さくて目が大きくてちょっと茶色っぽいまっすぐな髪が肩までかかっていた。

そしてなんといつでもその愛くるしい笑顔。

その衣の姿に優太は一目で恋に落ちた。

しかしほどなくして、衣と話すことは非常に困難なことを優太は知ることになる。

自分を含め男の子の前になると優太を虜にしたあの笑顔は消え、怯えた目をして無口になる。

それならまだマシな方で、酷いときはクラスの男子に「おっはよー」と肩をぽんつと軽く叩かれただけなのに「触らないで！」と泣

き叫び大騒ぎになることもあった。

原因は1年生のときのクラスの男子にいじめられていたことがあり、それ以来衣の中では『男子が話しかけてくるあるいは触れてくるイコールいじめられる』という公式があるようで……というのをクラスの女のコ達が言っていた。

そのため「小橋衣は大の男嫌い」と男達はかつてに噂していた。そのため嫌われたくない優太は、男子にはもちろん女子にもする「元気」「明るさ」「優しさ」の大盤振る舞いサービスを、衣にだけはサービスどころか挨拶さえも提供できなかった。

けれど近づけないと思うほど、手に入らないと思うほど、衣への思いは募っていく。

なんで俺は男なんだろう。

なんで俺は男に生まれてきたんだろう。

女に生まれたかったな。

そうすれば毎日一緒に遊べるし、一緒に帰れたのに……。女に生まれていたら衣に対してこんな思いはするはずなのに、そんなことに全く気づきもしない優太は本気で自分が男である事を後悔する日々を送っていた。

そうこうしているうちに優太も6年生になる。

優太の学校は6年生になると校内にある運動部のどこかに所属する決まりがあった。

「んーどうすつかない」

優太は教室で自分の席に座り鉛筆を鼻の下ではさんで腕を組んで真剣に悩んでいた。

勉強は大嫌いだけど運動ならなんでもやりたい優太は、初めは担任に、

「先生、全部入りたい！」

と入部届に小さく全部の運動部の名前を書いて提出した。

しかし担任は苦笑いし、

「おまえの気持ちはよくわかるしそうしてくれたほうがみんなも喜ぶとは思う。おまえ1人いればその部は強くなるしな。けど、……並木1人だけそれを許すわけにはいかないんだ、すまん」  
「……というわけで担任から新しい入部届をもう一度貰って教室に帰ってきたのだ。」

「あーどうしよっかなあ……」

優太は届に記されている運動部をじーっと見る。

……そのときだった。

クラスの女子たちが教室に入ってきた。

そして同時に優太の心臓はドクツ、と音を立てた。

「ここここ、小橋さんっ。」

教室に入っていた女子の群れの中に隣を歩いていた女の口と笑い合っている衣がいたのだ。

「やっぱかわいいなあ。ちょっと、もうちょっと、こっち見てくれないかな……」。

鉛筆だけでも普通に持てばいいのに、優太は相変わらず鉛筆を鼻の下に挟んだままで衣に見とれていた。

「ねえねえ、何部にした？」

優太がそんなことをしてることに誰も気づかず、1人の女子が全員に質問を始めた。

「あたしバレー」

「あ、あたしも」

「あたし卓球」

「あたしはバドミントン」

めいめいが好き勝手に喋りだす。

「衣は？」

誰かが衣に質問する。

「……あたしは、バスケ」

「バ、バスケえ?!」

衣の返事にみんなが驚いた。

「だ、大丈夫？ バスケって結構ハードだよ？」

また誰かが衣を心配した。

彼女が心配するのも無理はない。

衣は勉強の方は常にクラスで1番の秀才だけど、運動の方はあまりよろしくなかったのだ。

「あたし、小さいときからバスケやってるところ見てるの好きなのだから入ればすぐ近くでいつも見れるでしょ？」

衣はそう答えて笑っていた。

……そこから優太はもう、女のコ達の会話は聞いちゃいなかった。

一瞬で届に「バスケットボール」と書き、届を左手にそして鉛筆を右手に握り締めて職員室へ走った。

「先生つ、よろしく願いますっ！」

優太は職員室に入る前の挨拶も口クすっぱしないまま、担任の机にパンツ！と届を置いた。

「……並木、本気か？」

担任が何を心配しているのかは視線でわかったが、優太はニカッと笑って返事もせず職員室を出た。

そうなのだ。

今もそうだが、小学6年生の優太も138センチの「どチビ」。

別に何を選ぶのも自由だけど、でもよりによって身長がないと不利なスポーツを選ばなくても……。

担任はそう言いたかったに違いないのだ。

けれど、優太の気持ちはもう変わらなかった。

バスケをやっていれば小橋さんは俺を見てくれるかもしれない。

そんな根拠のない期待に胸を膨らませたのだ。



……しかし。

現実には甘くなかった。

部員は全員身長150センチ以上あるのに一人だけ極端に小さい優太はいつも埋もれてしまい、何をやるにしても上手くいかない。シュートしようと思えば必ず邪魔され、パスしようと思っても簡単にカットされてしまう。

せつかつこいところを衣に見せたくて始めたバスケットなのに、これではみつともない所をさらけ出しているだけで本当にカッコ悪い。

これでは見て欲しくない状態だ。

なんかないのか？なんか方法ないのかわからない？！

優太は毎日毎日頭を使っただけで考えるが、残念ながら脳みそからは何も出ない。

そのうちだんだん考えるのも嫌になってしまっただけで、練習に身が入らなくなっただけだった。

……だが、世の中そんなに捨てたもんじゃない。

ある日の放課後。

とうとう優太は練習に行かずにバスケット顧問のところへ転部願いを申し出る。

「先生、今から他の部に変えることってできますか？」

それは優太にとって人生で初めて味わった挫折だった。

本当はこんなことは言いたくない。

きつともう少し頑張れば何とかなるのかもしれない。

だけど、隣で衣が見ていると思うともう逃げ出したかったのだ。

「並木、これ貸してやる。今から教室戻って見てこい」

突然顧問はカバンの中から取り出した1本のビデオテープを優太に差し出した。

「……何ですか？コレ」

優太は担任を見上げ、目をぱちぱちさせる。

「これはもともと並木が行き詰って追い詰められたら見せてやろうと思ってた。コレを見れば並木が……いや、並木にしかできないことがきつとわかるはずだ」

顧問はそう言っで優太の手を取るとビデオを持たせた。

「ほら、早く見て来い」

顧問は優太の肩を取りくりりと背を向けさせ、背中を押した。

「……じゃ、見て来ます」

顔だけ顧問に向けて優太はぺこつと頭を下げる。

「並木」

「……はい」

顧問に呼び止められ、優太は振り返る。

「俺は並木がバスケット部に入って来てくれたときから考えてたことがあった。もしそれを並木がやってくれるならうちのチームは絶対優勝できると思ってる。だから気づいてくれよな？」

顧問は優太につこり笑って「ほら、早く行け」と手をしゅしゅと振る。

うーん、何が映ってるんだろう……？

顧問の話は国語力がかなり乏しい優太にはほとんど理解できないままだったが、とりあえず見てみるかと職員室を後にした。

そして、そのビデオを見た時から、優太の逆襲（？）が始まるのだ。

球技大会小学生の部決勝戦。

ピ、ピーッ。

体育館のフロアにホイッスルが鳴り響く。

その音に優太はコートのだ真ん中で、

「勝ったーっ！」

とバンザイし目をうるうるさせた。

チームのメンバーも優太のところに集まり「勝った！勝った！」

と喜んだ。

あれから3ヶ月が過ぎていた。

どチビのためにまったくバスケで花が咲かずもうバスケを辞めようとしていた優太が、今ではムードメーカー兼司令塔にまで大出世していた。

もうバスケット部を辞めると言いに行ったあの日に顧問から借りたビデオで優太は変わった。

優太が見たビデオにはアメリカで活躍している日本人プレイヤーが映っていた。

彼はアメリカ人というか黒人の中にいるせいもあってひときわ小さく見えた。

しかし彼はチームには欠かせない存在だった。

とにかく足が速い。

チーム員が「いて欲しい」と思うところにいるのかい。

パスを貰ってからは早いしドリブルも低いので誰も追いつけないし誰もカットできない。

で……あつという間にボールはリングをくぐる。

またよく彼を見てみると……試合に出ている選手の中で群を抜いていちばん走っている。

コートの中をいつも見てあつちへこつちへ走りまくる。

なのに試合が終了しチーム員だけでなく相手チームのプレイヤー全員もバテ気味の中で1人だけ「なんならもう1ゲームやりましようか？」と言いたげな涼しい顔をいつもしているのだ。

すげえ！カッコいい！

優太はそのビデオを擦り切れるんじゃないかという勢いで何回も巻き戻しては見ては「すごい！」「カッコいい！」を連呼した。

そうか、俺にしかできないのはこれだ！

優太はひらめいた。

イライラしながらビデオが全部巻き戻るのを待ち、巻き戻し終了と同時にせわしなく取り出しボタンを押す。

そしてビデオとテレビの電源を切り猛ダッシュで体育館に走った。

「せんせーいっ！」

体育館に着いた優太は投げつけるように顧問にビデオを返し、こう言った。

「先生、俺絶対にこの人みたいになる。先生が見たことない選手になつてみせる、見ててください！」

顧問はいつもの元気で明るいキラキラした優太の顔を見て、目を細め深く頷いた。

……で、今日に至るのである。

どチビじゃなきゃできないんだよ、俺のやってることは。

デカイ奴には絶対できない、俺のやってることは。

あの日から優太はそう胸を張って言えるようになった。

……でも。

友達クラスの女のコ達、学校中のみんなに「すごい」と言われても優太には何の意味もなかった。

衣に「すごい」と言われなければなら意味がなかった。

だけどこのときの優太には衣が自分をどう見ているのかを確かめる術は何一つ持っていなかった。

見ててくれるのかな、見ててくれるといいな……。

そうすぎるしかなかったのである。

こうしてせつかくのチャンスを全く活かさないまま、一度も衣と口を聞けないまま優太は中学生になる。

だが、クラスメイトでありバスケット仲間でもある未散出会うことで大きく運命は変わっていったのだ。

「優太ってさ、衣のこと好きだよな」

「……え」

「ほんと優太ってわかりやすいわ、見てればわかる。『未散いいなあ、俺も喋りたいなあ』って顔に書いてあるよ」

……と、いともあっさり未散にバレたのは4月の終わり頃。  
部活が終わって一緒に帰ったときだった。

「……うん」

多分違うと言ってもそれがかえって怪しまれると思った優太は素直に認めた。

衣が優太を好きだと知ったのが先だったから、この時点で未散は「実は2人は両思い」ということを知るのだが、しゃかりきになつて二人をくつつけようとするのもどうかと思つたのか、特に何かをして貰った記憶は優太にははっきり言っていない。

ただ衣と話しているときについてに優太を巻き込んで話してくれたりとか、衣に試合や練習試合の日を教えてくれてはいたようで、なんとか衣との接点を持てるようにはしてもらった。

初めは未散がいなくて衣は自分とは口をきいてくれなかったが、1カ月後には別に未散がいなくても話せるようになっていた。

……とはいってもほとんどの場合、衣が何かしら返事をするしかないことを優太が言ったりやりたりして、それを聞いた衣は大概は怒り、

「なにすんのよ!!」  
か、

「なにそれ、バツカじゃないの?!」  
という返事ばかりだったけれど。

でも、それでも優太は幸せだったのだ。

けれど中3の春。

優太は悲しい現実を突きつけられる。

「並木どうだ、ココに行く気ないか？」

ある日の昼休み、優太は担任と顧問に呼び出されて突然そう切り出された。

「実はな、並木のことを欲しいって言ってるんだよ、この高校が」  
言いながら顧問はある高校のパンフレットらしきものを優太に見せ、「ココなだけだな」とテーブルに置く。

この頃の優太は県内では押しも押されもしない『注目度ナンバーワンバスケットボールプレイヤー』になっていたので、優太の住む町から車で5つ分離れたところにあるインターハイベスト4常連校の高校からオファーが来ていたのだ。

「先生これって……」

優太はドキドキしながらパンフレットを手にした。

「いよいよ並木も全国区へデビュー、ということだな」

嬉しいねえバスケットでこんな話が来たのは初めてだから、と顧問はニコニコ笑って近くにあったイスにどすつと座る。

「好きなもので高校受かるなら並木にとっても悪い話じゃないだろ」

担任もイスに座ったまま勧めてくる。

俺が全国区のプレイヤーになる……俺が、全国トップレベルのチームでバスケットがやれる……？

優太の心はぐらぐら動いた。

「あの、先生、すぐ返事しなくちゃダメですか？」

「まさか。ちゃんとご家族の人にも話してもらわないといけないし」

結論は急いでないからゆっくり考えなさい、と担任も顧問も少々

おろおろ気味の優太に微笑みかける。

「ハイ、呼び出しは終わりだ」

戻っていいぞ、と先生2人はイスから立ち上がった。

「ああ、優太もその話されたんだ」

「『も』って、未散もされたのか？」

「でも2人ともすごいねえ」

呼び出しから帰ってきた優太は、「ナニナニ、何の話？」と興味津々の未散と衣に呼び出された内容を報告した。

衣は感心してくれたが未散の方は随分淡泊な反応だ。

「未散はどうすんだよ」

「行かないわよ。即で断った」

「なんで?!」

未散のコレまた淡泊な返事に優太は質問を返す。

「だってスポーツ推薦なんかで高校行ったらバスケットだけで3年間終わっちゃうでしょ。そんなのあたしは絶対イヤ」

未散はそう言いながらしかめっ面でゆっくり首を横に振る。

「じゃ、どーすんだよ」

「衣と同じ学校に行くよ。一応射程範囲だし」

優太の質問に未散はまたあっさり答えた。

「でも……そうなっちゃうと優太だけ高校別になっちゃうね」

衣はぼそつと呟いた。

……その言葉に優太の胸はズキン、と痛んだ。

そうなのだ。

たとえオファーを断ったとしても、頭のデキでどのみち衣と同じ高校には行けないのだ。

衣は学年3本指に常に入る秀才なのに対して自分はいつも学年3桁。

一緒の高校に行けたら奇跡としか言いようがないだろう。

だったらバスケットで高校に行こうかな……でも……。



高校が別になつたらきつと衣とはこれっきりになる。

そうなつたら衣はきつと自分の事なんて忘れてしまつたろう。

そしてすぐに彼氏なんかできちゃつて「あ、優太?! 久しぶりだね。……あ、紹介するね、私の彼氏で……」なんて偶然道端で会つたら頼みもしてないのに彼氏なんか紹介されちゃつたりして……。

「並木イ、体育館行くぞお!」

「……俺、行つてくるわ」

クラスの男子に声をかけられたのが幸이었다。

未散が心配そうな顔をしていたがそれにはわざと気づかないフリをして優太は2人からはなれ、体育館に遊びに行こうとする面々の群れに入つていった。

これ以上衣を見ていたらその場で泣き出しそうだった。  
もう何も考えなくなつたのだ。

5日後。

優太は担任と顧問のところに行った。

「おう、もう答えだしたのか」

「先生、あの……」

優太は担任の質問を完全において口を開く。

「今から学年1桁目指すのって、やっぱりムチャなことですか?」

「うーん、やつてのけた生徒は見たことはあるけど……だけど急いだつしたんだ」

担任の質問に優太はウツ、と詰まつた。

だつて。

俺いろいろ考えたんですけど、やっぱり好きな人と同じ高校に行きたいんです。

だけど、彼女はすごい頭よくて今のまんまじゃ同じ高校には行けなくて。

でも今から死にもの狂いで勉強したら成績上がるなら俺勉強します。

だからすみませんがこの話はなかったことにしてください。  
……って優太の頭の中はもうこうなってしまうていたから。  
でもこんなことを正直に言おうものならそれこそクラスの、いや、  
学年中の笑い者になるのは目に見えている。

「……男は賢くなくちゃダメだと思うんす。バスケができるだけじや生きていけないですから。だから……バスケに頼って受験するのは辞めようと思って」

かなり苦し紛れだったが優太は2人に理由を説明した。

「……並木なりにけっこう考えてるんだな」

顧問には感心されながらもやっぱり笑われてしまった。

そして優太のこの迷言……いや、名言はどこから漏れたのか瞬間に広まった。

「優太、本気なの？」

当然話を聞いた未散は受け取り方によっては実に無礼なことを部屋のドアを開けて入ろうとした優太に聞いた。

「なんだよ、未散も馬鹿にしてんのかよ」

どうせ俺は万年学年3桁男ですよーだ、と優太は頬を膨らませた。

「いやそうじゃないけど。だけど優太にはどう考えたっていい話じゃない、何でわざわざ……」

「あーもう！わかった、わかったよ！言えばいいんだろっ?!」

カリカリしながら優太はキツ、と未散を睨んだ。

優太にガンを飛ばされひるむ未散に「しょうがねーなあ」とぼりぼり頭をかきながら優太はぼそつと一言呟いた。

「衣とおんなじ高校に行きたいんだよ……」

「……え？」

よく聞こえなかった半分自分の聞き間違いじゃないかと思った半分で、未散は思わず優太に聞き返していた。

「あーもう！うるさいうるさい！練習行くぞ！」

優太は顔をカツカさせながら「オフア―を断った本当の理由」を第3者に最初に最後に口にする、未散の顔も見ずに部室のドアをバンツ！と閉めた。

そして部活を引退してからはそれこそ血へドを吐く思いで勉強した。

そうやってやっとの思いで『合格通知』と『衣と毎日会って毎日馬鹿をやれる特権』を手に入れた。

……なのに。

今までのそうやって自分で頑張ってきた努力をこのわずかな時間で全てフイにしてしまったのだ。

こんな悲しいことが他にあるだろうか。

衣が一番大事だと意を決して言ったときの、あの衣の驚いた顔。理性が飛んで歯止めがきかなくなった自分を拒否した衣。

……そして。

「は、はなしてっ！」

衣のあの時の一言が優太の胸に突き刺さる。

衣に嫌われた……。

「……うっ……ひっ……」

優太のトイレはまだまだ終わりそうもない……。

Vol.10 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

今のところ『優太と衣のコイバナ』でお送りしています。  
いかがでしょうか？

この設定は自分で言うのもナンですけど、もうベタ中のベタ、王道(?)です。

幼馴染とはちがうけど、まあそれに近い2人のお話です。  
バカがつくほど素直で正直者の優太と意地っ張りなくせにイザとなると根性ナシの衣。

この2人、どうやってくっつくんだか。

すみませんが、しばし見守ってやってください。

ちなみにしばらくは未散はこの手がかかる2人のお世話を焼きますので恋愛どころではありません。

彼女のコイバナはいつになるんだか……(汗)。

ということ、またお会いしましょう。

それでは、またです。

出てきた出てきた。

男子バスケ部のドアをずっと開くの待っていた未散はやつと優太を見つける。

「下痢は止まったの？」

未散はいたずらっぽく笑うと壁に寄りかかっていた背中を起こした。

「……さつき、ごめんな」

優太はバツが悪そうにして未散に謝る。

「さて、あたしに八つ当たりした理由をお聞かせ願いますか」

「……はい、すみません……」

ただでさえ小さいのにもっともっと小さくなって優太は歩き出した。

「わかればよろしい、行くよ」

未散はかばんで優太の背中をバシッ、と叩いた。

八つ当たりしたお詫びということで奢ってもらったソフトクリームを片手に未散はコトの一部始終について優太の口を割らせた。

なるほどねえ。衣じゃなかったらおとなしく優太のされるがままだっただろうけど、衣じゃそうなるよねえ……。

思わずニヤニヤしてしまいがらも、

「そんなことしたら衣だったら逃げちゃうよ、馬鹿だなあ」

人を選んでやんなさいよ、と笑わないように頑張つて未散は優太に睨み顔を作る。

「だってさあ」

「だって、なによ？」

だって衣かわいかったんだもん、だからつい……なんていったらまた未散にどやされるよなあ……。

「……いえ、なんでもありません。ごめんなさい、ハイ」

優太の方は事情を報告してからは言い訳をしようと思っても未散が上から目線で「なによ？」と睨みをきかせるので、それがおっかなくて「ごめんなさい」しか言えないままトボトボ歩く。

「だからあたしに謝ってもしょうがないでしょ……ほら行くよ」

未散は優太の腕を掴みつかつか歩き始めた。

「な、なにすんだよ、どこ行くだよっ?!」

「決まってるでしょ、衣んち」

「ややや、ちよ、ちよつとたんま！俺心の準備できてない」

衣の家に連れて行かれるなんてたまったものではない。

優太は足に力を入れて未散を止める。

「そんなもん衣んち着くまでにしなさいよ!」

未散のほうも負けじと「歩けー!」と優太を引っ張る。

「そうやって、

「たんま!」

「うるさい、歩け!」

を二人で喚き合っ。

「未散、頼むから今日だけは勘弁して?」

「何言ってるんの、そんなこと言ったってどうせ優太は明日になっただってやらないでしょ?!」

「いやいやいや明日やる、明日やるから今日はもう帰らせてくれよ!」

「ここまで来てなに往生際悪いこと言ってるの!いい加減腹くくれ、歯を食い縛れ!」

「そんなあ」

「……ここは衣の家の前。」

傍目からすると謝りに来た弟とその姉が、謝る相手の家の前でギャーギャー喧嘩しているようにしか見えない。

「頼むから今日はもう帰ろ、ね?」

優太は未散の袖を掴んで上目遣いで目をうるうるさせて訴える。

「そんな顔したって他の人には通用しても残念ながらあたしには通用しませんから」

「うわ、や、やめろお！」

未散は優太の両手を片手で払いながら衣の家のインターホンを押した。

「もう無理っ、もうやだっ、俺帰るっ！」

この期に及んでまだジタバタする優太の首根っこを掴んで、

「おばさーん！未散でーすっ！」

未散はドアが開くのを待った。

ほどなくして「はいはい」と中から声がしてガチャとドアが開いた。

「……なあに？どうしたの？」

優太の情けない姿を見てつい噴出しながら、衣ママは2人を中へ通した。

お茶をすすり遠慮がちに饅頭を食べながら、優太はリビングのソファーに小さくなって座っていた。

「優太はここにいて。おばさんすみません、あたし衣の部屋に行きます」

未散はそうぴしゃりと言い残し衣の部屋に行ってしまったので、今優太は衣ママと2人きり。

未散のヤツウ。

優太はチツ、と舌打ちした。

「でもあの優太くんがこんなに大きくなって、こんなにカツコよくなっちゃってねえ」

確か最初に来たのは小学生1年か2年の時よねえ、と夕食の準備をしながら何も知らない衣ママはウキウキと優太に声を掛ける。

「あの時は衣を送りに来てくれたのよね。あのコったら泣いてばかりでお礼もできなかつたのに、優太くんは『衣ちゃんが男の子にいじめられて泣いちゃったんで連れてきました』って学校からずーっとあのコの手を繋いでココまで歩いていてくれて。もうなんてエ

ライの！って私感激しちゃったのよね」

そ、そうなの？俺覚えてないや……。

衣ママには「ああ、ハイ」と答えながらも優太はちょっと困惑する。

「その後来てくれたのはもう中学生になってからかしら？もうびっくりしたわ、衣に聞いて『え？！あの優太くん？！』って。当たり前前だけど、あんなにかわいらしかったのに背も大きくなって顔も男の子になって」

「ああ、ハイ、おかげさまで……」

こんな受け答えでいいのだろうかと思いつつ、優太は衣ママに相槌を打つ。

「衣から優太くんの話はいっぱい聞いてたのよ。小学生のときは『今日も助けてくれた』とか『3年と4年はクラスがばらばらになっちゃった』とか『5年生と6年生はまた優太くんと同じクラスになった』『背が小さいのにバスケット部入って大丈夫なのかな』『優太くんが活躍して球技大会は優勝した』とか。中学生になってからは『優太くんとはもう高校は同じところには行けない、バスケットで私立の高校に行っちゃうんだって』『私立の高校行くの辞めてあたしと同じ高校目指して勉強頑張ってるんだよ』とか……」

もつきりがないわ、と衣ママはフッフと笑った。

「あ、優太くん、今の私の話聞かなかったことにしてね？衣は小さいときから優太くんが大好きだから優太くんに知られちゃったなんてわかったら私怒られちゃう」

衣ママはウインクして人差し指を唇に当てた。

「……そういえば今日ってどうしたの？未散ちゃんも優太くん置いて上に行っちゃうし？」

衣ママはニンジン洗いながら優太に今更の質問をした。

「おばさん、ちょっとすみません！」

優太はちびちび飲んでいたお茶を一気に飲み干すと、すくっと立



ち上がり階段を駆け上がった。

おばさんの言ってることが本当なら、俺、明日死んじゃってもいい。

「衣っ！」

ノックもせず優太は勢いよく衣の部屋のドアをバーン！と開けた。

するとそこには、啞然として優太を見ている未散と泣きはらして顔がパンパンになっている衣がいた。

優太がそんなことをしていた頃もう一人の客人の未散はというと……衣に事情聴取をしていた。

衣の部屋の前に立ったときは「入るな」と抵抗されるかと思いつ躊躇したが、思い切ってノックをしたら……簡単に入れた。

未散が思ってたとおり衣は後悔の念に駆られている様子で一人で泣きはらしていた。

この2人は一体何なの。

未散はかなり呆れてしまっていたがこの際仕方がない。

「衣、座ろうか」

未散は部屋のドアまで自分を迎えに来てくれた衣と一緒に部屋の中に入り絨毯の上に座った。

「衣さあ、くつつきたいならくつつこうよ。あたしもいい加減疲れてきたんだけど」

「……はい……ごめんなさい……」

「いや、謝られても困るんだけど」

「ごめんなさい……」

「……だから、あたしに謝らないで」

まったくこの美少年美少女コンビはどっちも主人公泣かせでしょうがない。

「わかっていると思うけど、優太は『衣に嫌われた』って思っているからね。衣がなんにも言わなかったらここで話は終わっちゃうからね」

未散はちらと衣を見てちょっとだけ冷たく言い放った。

「未散う」

衣の方は口をへの字にして泣くのを我慢しているが、すでに瞬きしただけで涙がこぼれそう。

やっぱり衣ってかわいいわ。

未散はその姿に思わず、

「衣、もういいよ。もうわかったから」

……そう言いそうになる。

しかしそれではダメなのだ。

なぜならそれは、優太が『察する』ということができないがきちよ……いや、少年のような男なので、残念ながらこの衣の複雑な思いを汲み取る器量がないから。

未散はわざとぷいつ、とそつぽを向いた。

「もう！かわいく泣いたって優太にはわかんないわよ、あいつニブいんだから」

「……ふえーん……！」

自分でもわかっていることを未散にまた言われ、衣ははらはらと涙をこぼす。

しまった、強く言い過ぎた。

衣の姿に未散はビクツとする。

あーもうどうしよう……收拾つかないよ……。

ごめん悪かった、と謝り衣の頭をぽんぽんと撫でながら未散は考えを巡らせる。

優太も5年も好きな女の言動パターンくらい把握しておいてほしいよ……なんであそこまで鈍感なのよ……。

未散は心の中で優太に文句をたれる。

……とそのときに、

「衣っ！」

と優太がそう叫びながら登場したのだ。

「……だから、なんで優太っていつつもそうなの?!いきなり人の部屋のドア開けないの、しかも女の子の部屋なのに！」

未散は優太にお説教をする。

「……で、なんなの?今度は何？」

多分下で衣ママに何か言われて衝動的にココに来たんだろうと感づいた未散だったが、あえて気づかないフリをして優太をわざと睨

みつける。

「いや、あの、えっと……」

未散の質問に優太は辟易する。

それを見て未散は思わず噴出してしまった。

もういいや、優太にまかせちゃおっと。

無責任この上ないがふと思いついた案に未散は開き直った。

どれ、と未散は立ち上がる。

「じゃああとは若いお2人でどうぞ」

まるでお見合いを取り仕切っているオバちゃんのごとく「ほら入って」と未散は廊下で突っ立っている優太を衣の部屋に入れると、

「はい座って」と衣の正面に立たせた優太の腕を下へと引つ張り座らせた。

「優太、今度は……」

ドアを閉めようと振り返った未散は優太に「早まるんじゃないわよ」と言おうとしたが、

「……まあいいやなんでもない。これ以上言うとオバちゃんみたいだからやめとく」

じゃあね、と未散はボタンと部屋のドアを閉めた。

あーもうー大丈夫かなあ……。

本当は心配でしょうがないがあの場合に自分がいても不自然なだけ。

未散の長年の悩みは今日で解消されるのかは定かではないが下で待つことにした。

廊下を歩いている途中で「なんだよオバちゃんて」と優太の不服そうな声が聞こえたが、未散は完全に無視して階段を下りた。

「ねえねえ未散ちゃん、今日って何かあるの？」

はいどうぞ、とお茶とお饅頭を出しながら衣ママは未散に聞く。

「今日はですね……」優太が衣の未来のお婿さん候補になるかもしれない日』なんですよ」

未散はいただきますと手を合わせ湯のみ茶碗を持ち、ふーふーとお茶に息を吹きかけながらしれつと答えた。

「おばさん、優太が衣の彼氏だったらどうです？反対ですか？」

未散は衣ママに質問しながら一口お茶を飲んだ。

「まあまあ！そんなことになったら素敵ねえ！」

衣ママはすでに浮かれている。

血は争えないってまさにこのこと？

未散は衣ママにはわからないように苦笑する。

少しはなんか喋ってるのかな、まさか2人で固まっていたりしてないよね……？

未散はお饅頭の包みを開けながらなんとなく衣の部屋がある方へ顔を上げた。

下ではそんな会話をたしなんでいる間若い2人はというと。

「……………」

未散の不安は的中していた。

衣は優太を直視できず俯いていて、優太も未散に正座させられたのはさすがに崩したがそれ以上は動けず固まっていた。

お互いに何を言ったらいいのかわからず沈黙ばかりが続く。

「……………さつき」

先に口を開いたのは優太だった。

衣は声につられて顔を上げる。

「びつくりさせちゃったかもしんないけど、あれは冗談で言ってるつもりないから」

だから、と優太は続ける。

「だから、真面目に答えて。……俺は衣がすっげー好きだよ。衣は俺のこと好き……?」

優太はそう言っただけに微笑んだ。

大丈夫。さっきおばさんは「衣は優太くんのこと大好き」って言っただけだから。

優太は衣に言いながら必死で自分にも言い聞かせる。

だが……衣は困ったように目を伏せると下を向いてしまった。

そして黙ったまま何も答えない。

衣頼む、「好き」って言っただけ。「いや」「うん」って言ってくれるだけでいい。いやいや首を縦に振ってくれるだけでもいいよ。頼むから肯定してくれよ……」

落ち着き払って言っているつもりだが、実際の優太は必死で「お願いします、神様仏様衣様っ！」と心の中で手を合わせていた。

言わなきゃ言わなきゃ、言えっばっ!

衣は衣で優太の「すっげー好き」の言葉と笑顔に顔がかーっとなり恥ずかしくなってしまうていた。

それでも返事はしなきゃと思っただけはいるのだがどうしても口が開かない。

優太は「衣に嫌われた」って思っているからね。

かわいく泣いたって優太にはわかんわよ。あいつニブいんだから。

未散の手厳しい言葉が衣の頭の中でさっきから何度も繰り返されてきた。

どうしよう言わなきゃ……けどやっぱり言えない……恥ずかしいよ……。

だったら首を縦に振ればいいのになぜかこのときの衣にはそれが思い浮かばなかったらしい。

そのため衣は1人で「言わなきゃ」「言えないどうしよう」と赤くなったり青くなったりしていた。

返事ないよ……どうしよう……。

だんだん優太には衣が自分の告白に困ってしまっているだけに見えなくなっていた。

自信も少しずつなくなっていく。

衣の話はおばさんの勘違いなのかな……。

そう思った途端優太の顔にわずかにあった微笑が消えていた。

そうだよ、もとはと言えば衣に謝りに来たんだよ……ただそれだけだったんだよ……『あたしに謝ってもしょうがないでしょ』  
って未散にムリヤリ連れて来られただけなんだよ……。

今更気がついて悲しくなった。

優太は力なく立ち上がると衣に背を向けた。

え？どこに行っちゃうの？

服のこすれる音がして衣は顔を上げると、そこにあったのは優太が衣の部屋をを出て行こうとドアのノブに手を掛けようとしている姿だった。

「……衣」

優太はドアのノブを回しながら衣の顔を見ようともしないで話しかけた。

「……もういいよ、わかった。今日ごめんな、迷惑だったよな」

優太は努めて明るいい声で謝る。

「今日俺が衣に言ったこともしたことも、全部忘れて？」

寂しそうに衣にそう言っつて優太はドアのノブを引いた。

待つて。違う、違うの！

「優太待つてっ……！」

気がついたら衣は顔を上げると優太にそれだけを必死で叫んだ。

「衣どうし……！」

「迷惑なんかじゃないよ……！」

突然待てと衣に言われた太の方はなにがなんだかわからず聞こうとするが、衣はただ、優太を引き止めるのに精一杯で優太の言葉なんて聞いていなかった。

「今日言ってくれたこともされたことも忘れる言われたって、そんなの無理だよ……！」

「いや、だから、それは悪かったって」

優太も優太で衣の話をちゃんと聞いていないのか何か勘違いして謝る。

「もう！だから、違うんだってばっ！」

「どうしよう、何を言ったらわかってもらえるの……？」

「あたしも優太が好き」って言ってしまうえば話はすぐ終わるのに、恥ずかしさが先に出てしまいでどうもその言葉が口に出せない衣は他の言い方を考えるのだが、残念ながら優太には何一つ伝わらない。

それが悔しくて悲しくて、だんだん優太の顔がかすんで見えなくなっていく。

「あたしはただ恥ずかしかっただけ……優太が、いつもの優太じゃなかったからちょっと怖くなっちゃっただけ……イヤだったんじゃない……！」

優太ごめんね……だけどあたし、これ以上言えない……。

この期に及んでまだそう思ってしまう自分に情けなくて涙が出る。あれほど未散に忠告を受けたにもかかわらず衣はしくしくと泣き出してしまっていた。



「……衣、もういいから」

言葉に詰まった衣を見ているうちにいたたまれなくなり、優太はドアのノブを手からはなしていた。

もしかしたら今から自分がしようとしていることは衣を泣かせることなのかもしれない。

嫌われることなのかもしれない。

だけど……もう嫌われたってかまわなかった。

衣が泣いてるんだもん、ほっとけねーよ。

「衣、もういいから泣くな」

涙を拭い続ける衣に近寄ると優太は衣の前に座り、自分の腕を伸ばしてそつと衣を包み込んだ。

「衣が泣きやむまでだから。でも、やだったら言っ……？」

こんなことできるの、もうこれで最後なのかな。

優しく衣の髪を撫でながらそんなことを思う優太にもじわつと涙が溢れ出す。

もう少し、もう少しだけでいい。泣きやまないで、やだっって言わないで、このままでいさせて……。

衣に言ったことは裏腹に気持ちは反対のことを思ってしまう。

衣を抱き締めているその腕は無意識のうちに力が籠っていく。

そして衣は……優太の腕をはなすまいと学ランの袖を握り締めていた。

衣ちゃんもう大丈夫だから泣かないで。

まだ幼い男の子の声が耳にこだまする。

その声は……幼き日の優太の声。

クラスの男子にからかわれて泣いてしまう自分をただ1人、いつも守ってくれた優太は「あっち行けっ！」といじめっ子たちを追い払ってくれて、

「衣ちゃんが泣きやむまでこうしててあげるね」

小さい体を一生懸命に伸ばして自分を抱きしめてくれた。

そんな遠い日の優太を衣はふと思い出していた。

あれから月日は随分流れたにもかかわらず、優太の腕の中のあたかさはなにも変わってなかった。

そして優太の「泣かないで」も昔と一緒に優しい。

「……優太はさ」

衣は鼻を少しだけ啜り上げながら喋り出した。

「あたしが泣いてるといつつも『泣くな』って言うてくれて抱き締めてくれた。それだけが毎日意地悪されてたあたしの支えだったってこと、優太知らないよね」

「衣、今なんて……」

衣の話に優太の腕は緩んだ。

けれど衣は「それから」とまた話し始める。

「ちっちゃいのにバスケットなんか始めちゃったもんだからどうなるんだろうって心配だったけど、今じゃ超有名人になって……なのに『バスケットができたって生きていけない』ってスポーツ推薦全部断って優太は勉強頑張った……それで今もまた同じ高校通えてて」

あたしね、と衣はまた続ける。

「優太から『先生からスポーツ推薦の話をされた』って聞いたとき、もう諦めてた。高校はきつともう優太とは一緒じゃない、今よりも優太はもつともつと遠い人になっちゃってあたしなんか手の届かない人になっちゃって……いつかはあたしのことなんて忘れるんだろうな……って」

だから、と衣はまた続ける。

「奇跡だっと思って、信じられなかった……ていうより、今もまだあんまり信じてないけど……」

「あのなあ」

衣の話に優太は衣の頭を撫でながら少し呆れたように言葉を返す。

「『バスケット』は衣が見てるの好きなんだろ？」

優太は衣から腕をはなすと笑って衣を見つめた。

「小6の部活決めるとき衣がそう言ってたから俺はバスケットにした。」

チビなのになにもバスケットを選ばなくてもってみんなに言われたけど、俺には関係なかった。もし衣が『サッカーを見るのが好き』って言うてたらきつと今頃はサッカーやってた。それしか衣に俺を見てもらえるチャンスはあの時はなかったから」

「……………」

初めて聞いた『優太がバスケットを始めた理由』に衣は言葉が出ない。そんなこと言ったっけ？という表情で衣は優太を見つめ返した。それを見た優太はほんのちよつと困ったように笑ったがすぐに「ま、いつか」と呟き、衣の頬についた涙の痕を右手の親指で拭いた。

「衣のそばにいられるんだったら、衣が俺を見てくれるんだったら、俺は何だつてする。だから必死で勉強もしたしスポーツ推薦も惜しくなんかなかった。だから先生に大嘘ついて断った。衣が見てないのにバスケットやってても俺にとっては無意味なんだよ」

「わかった？と優太はまた笑った。」

「……………優太」

「うん？」

涙声の衣が優太を見上げ、優太はそんな衣を見下ろした。  
すると…………衣は突然優太に突っ込んできた。

「好きっ！」

「おろわっ?!」

さっきまであんなに言えなかった言葉もすんなり言いながら、衣は優太に抱きついた。

衣のその行動は優太には予測不可能な範囲だったので優太は衣の勢いに押されひっくり返りそうになったが、かろうじて抱きとめた。「衣のその返事のほうが俺からしてみたら奇跡だって…………」

衣の背中に手を置いてそれを呟いた優太からは、笑顔と少しの涙がこぼれた。

かなりの時間をかけてようやくお互いの想いがお互いに伝わった。

そんな瞬間だった。

にま。

にまにまにま……。

衣の家を出てから優太はずっとこの調子だ。

「……優太、大丈夫？」

とつても気持ち悪いんだけど、と未散はちょっと引きつりながら優太の隣を歩く。

「んふふふ。大丈夫大丈夫」

気にするな俺のことは、と優太は言いながらまた1人にやける。

「そんな顔してたら誰だつて気になるわよ！」

何なの一体！？と未散は優太のほっぺをむぎゅっ、とつねった。

しかし優太には全く効果なし。

相変わらずにやけ顔が続けている。

「そんなに聞きたい？」

なんか優太は偉そうな態度。

未散かがんで、と優太は未散に手招きした。

未散はしょうがないので優太に耳を傾けた。

「実はさ……」

ひそひそ言う優太の言葉に未散の顔は一気に紅潮した。

「優太、手早っ！」

なにどさくさに紛れて密室でちくりあつてんのよっ?!と外なものも忘れて未散は大声を上げた。

「ば、バカっ、声でかいって！」

しーっ!しーっ!と優太は大慌てで未散の口を手でふさぐ。

「……あーそうか。だから優太おばさんの顔まともに見れなかったのねえ」

優太の手を払いながら未散は優太を見て口先だけで笑った。

つい5分前に未散と優太は衣の家を後にしたのだが、衣の部屋を

出てきたときから2人の様子がなんかおかしかった。

2人で階段を下りたと思ったら、

「おばさん俺帰りますっ、お邪魔しましたっ。未散、帰るぞっ」

優太はそう一方的にまくし立てて帰ってきてしまったのだ。

「また来てね」

衣ママはそう言うってくれたが「また来ます」と返事をしたのは未散だけで、優太の方は未散をおいてすたすた出てきてしまっていた。

さらに衣ママに「おじゃましました」と挨拶したついでにさりげなく見た衣の顔は、幸せいつぱいの状態で未散に手を振っていた。

「……優太の癖にナマイキっ」

未散は優太の尻をぺちつと叩いた。

「未散う、好きな女の唇っていいぞお」

優太はまた思い出し笑いをする。

「ちよつと……その生々しい表現やめて。聞いているこっちが恥ずかしいよ」

未散は優太の肩をどんつ、と押した。

「いや、だって未体験ゾーンだろ未散は」

教えてやってるんじゃないか、と優太はまた偉ぶる。

「……はいはいはい、貴重なお話ありがとございますっ」

もついいから帰るよ、と未散は大またで歩き始めた。

「あ、照れてやんの。未散ってウブだよなあ」

優太は未散をからかいなが追いかけた。

……しかし。

幸せは時に辛いことも一緒に運んでくるときがあるようです。

そのため未散はもう少しだけ人の恋路のお世話をすることになる。

Vol.15 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

楽しんでいただけているでしょうか。

せつかくまとまったはずなのに何を壊そうとしてるの?!と突っ込まれそうですけど……はい、すみません、ちょっとだけ壊します(笑)。

モテる男と付き合つと必ずこういうことあるでしょ?……っっていう展開を用意しております。

さてさて、衣ちゃんはどんな目に遭ってしまうんでしょうか……。

というところで、今回はこれにて。

それではまたです。

それは、付き合い出して3日目のことだった。

痛っ……。

上履きを取ろうとしたら、ぷすっ、と何かが衣の人差し指に刺さった。

見てみると、人差し指には画びょうが刺さっている。

どうやら上履きに入っていたらしい。

だが、どう考えても「たまたま入ってた」わけではない。

「衣、おはよー」

未散が後ろから声を掛けてきた。

とっさに衣は指から画びょうを抜き取り左手に隠した。

「おはよー」

そして衣はいつものように未散に挨拶した。

まさか、優太のファンのコたち……？でも、未散以外は誰も知らないはずだし……。

どういふことだろうと昇降口を後にしながら衣は画びょうを手のひらでこころころ転がした。

衣の「未散以外は誰も知らないはず」というのが実は大間違いだった。

衣が言わなかったとしても、未散が黙っていたとしても、残りの1人はもう話したくて話したくべらべらと喋ってしまったのだ。

……そう。

バカがつくほど正直者の優太は、もう嬉しくて嬉しくて友達という友達に話していた。

そのため優太のファンのコたちの耳に入るのは時間の問題だったのだ。



「吉岡、ちょっと」  
バスケット部副部長の福原理が、につ、と笑って帰ろうとする未散を呼び止める。

「……はい」

何の用だろうと思いつながら未散は理に返事する。

「お前どうせ暇だろ？ちょっと付き合え」

理はそう言つて未散の腕を取つて歩き出した。

「え、あ、ちょ、ちょっと待ってください！」

有無を言わせない理に未散は足をもつれさせながらついていった。

「あのお……」

なんだかわからないけれど上機嫌の理の隣で未散はぼそつと声を掛ける。

理と学校の近くにあるコーヒーショップに入った未散は、一緒にオーダーの順番を待っていた。

しかし生きた心地がしない。

というのも、理は「バスケット部副部長」という肩書きのほかに「生徒会長」という看板まで背負っている有名人。

そのため制服を着た客、つまり、同じ高校のみんなは自動ドアを開けると同時にびっくりして未散たちを見て振り返る。

理由は未散が隣にいるからに他ならない。

並んでいる間にも5人くらいから、

「彼女か？」

と理の友達らしき人に言われると理は、

「そ。綺麗なコだろ？」

と返して、かなり強引に未散の肩を組もうとする。

「ち、違いますっ！」

未散はぶるぶる首を振つて否定するのだが、

「1年生? いいね、初々しくて」

と、わけのわからないコメントを残して「理、またな」と去っていった。

「理先輩、いいんですか?」

「なにが?」

「だってあたし、ただの部活の後輩じゃないですか。それなのに彼女だなんて……」

未散はまたぼそぼそ理につぶやく。

「大丈夫、誰も本気にしちゃいないから」

「……そうですか」

「それとも何? そのほうがいい?」

理はにっこり笑う。

「いや、け、けっこうですっ!」

未散はまたぶるぶると首を振る。

「当たり前だバーカ! 俺よりデカい上にこんなジャジャ馬なんか彼女にできるか!」

理は未散のおでこを、ピンっ、とはじいた。

「いったーい! 何するんですかっ?!」

おでこをさすりながら未散は理を涙で睨みつける。

「吉岡さあもう少しおとなしくなれよ、せつかく綺麗なものにもったいない。そしたら並木レベルで男にモテるのにさあ」

そう言いながら「はいはいごめんなさいね」と理は未散のおでこを撫でた。

「……いや、あそこまでモテるのも考えものじゃありません?」

未散がそう言うと、店員が「大変お待たせいたしました、ご注文どうぞ」と声を掛けてきたのでメニューを見る。

「まあいつでもいるさ、ああいう存在の男は。並木が入ってくるまでは佳佑がそうだったし」

すみませんコレを、と理は指をさして店員に注文する。

「……佳佑先輩が?」

メニューを見ながら未散は理に尋ねる。

「そ、我がバスケット部長小田佳佑くんは、ああ見えてモテモテなんです」

「佳佑先輩いいですよ、癒し系で」

「じゃコレください、と未散も注文しながら理に言葉を返す。

「……『癒し系』ねえ。俺からしてみたら『ぬーぼー系』だけだな」

あんなのただポケットとしてるだけだろ、と理は鋭く突っ込む。

「ぬ、ぬーぼーって……」

未散も負けずに突っ込み返した。

「……ま、あれはあれでいいんだけどね、佳佑だから」

会計を済ませた理は2人分のコーヒーカップを持って「ほら座れ」と未散を見ながら空いていた席をあごで指した。

「多分言わないと吉岡が納得しないだろうから話すけど、コレはもう学校側としては忘れたい話だから他言無用で聞いて」

座り始めた途端、理はいつになく真面目な顔で未散を見ながらコーヒーをブラックのまま一口飲んだ。

「これはもう俺達3年生しか知らない話なんだけど……2年前、あの男子生徒の彼女がほんとにひどい目に遭ったんだよ。……そのせいで男の方は今でもその時のトラウマというかがあって、恋愛することをやめちゃったんだよ」

「……それってもしかして、佳佑先輩のことですか？」

恐る恐る口にしながら未散はカップに砂糖を入れた。

「……なんでわかった？」

理は驚いた顔で未散を見る。

「いや、話の流れでなんとなくそうなのかなって……」

違ってたらすみません、と謝りながら未散はカフェオレが入ったカップにスプーンを入れてクルクル回した。

「……わかつちやっただったらそれでしょうがないからいいけどさ。……でな、俺が恐れているのは、その時の悪夢がまた蘇る

んじゃないかってことなんだよね」

「……というと？」

次に何の話が出てくるのかときどきしながら未散はカップを口に付ける。

「……並木さ、彼女できただろ」

「……ごほっ……！」

本当なら誰も知らないはずの情報を口にする理に、未散は驚いてカフェオレを飲み込んでしまいむせる。

「もう大変だよ、女子なんか大騒ぎ。俺のクラスの女子なんか俺にこう言うわけよ、『彼女の名前聞いてきて』って。『なんで？』って俺が聞いたらそいつなんて答えたと思う？『ワラ人形で呪い殺してやる』だって」

おっそろしいだろ？と理。

「理先輩、情報源はどこですか？」

未散はまだ少し痛む胸をさする。

「どこ、って並木本人に決まってるだろ。一昨日かな、ノックもしないであのヤロウ、ばーん！ってドア開けて俺の手を取って言うわけよ、『理先輩、聞いてくださいっ、俺彼女できたんですっ。5年間ずっと好きだったコの、彼氏になれたんですっ！』……ってまあ喜んじゃってて。『そうかそうかよかったな』って俺は言っちゃったけど……多分あの調子であっちこっちに言いふらしてんじゃないかと俺は思っただよね」

そこまで言うとなんて理はいったんテーブルに置いたコーヒーの入ったカップを手にした。

あのバカ、ナニ考えてんのよっ。

未散は心の中で優太に文句をつける。

「吉岡、顔が怖いぞ」

ぶっ、と理は噴出すと「しかしさあ」と背もたれに寄りかかる。

「並木ってそういうところもバカだよな、自分の立場わかってないっていうか。あれじゃ彼女が嫌がらせに遭っちゃうよ……てよりす

でに遭ってるかもしれないけど」

俺さ、と理は姿勢を戻してコーヒーを飲んで話を続けた。

「もうあんなの2度とゴメンなんだよ、今でもあの時の佳佑のこと  
思い出すともう言葉じゃ言えないくらい切ないっていうか悲しすぎ  
るっていうか」

でな、と理はカップをテーブルに置くと未散を見た。

「吉岡に頼みがあつて……もし、並木の彼女の衣ちゃんが、怖いお  
姉さまたちにいじめられているのを見かけたり証拠があつたら俺に  
教えて欲しいんだよ」

「いいですけど、どうするんですか？」

なにかするんですか？と未散はカップを持った。

「俺の政治力で未然に大悲劇を防ぐ。せめて並木だけでも助けてや  
らないと。……だからいいか、コレは徒会長命令だ、心して引き受  
ける」

理は大真面目な顔でそう言うとビシッ、と未散を指した。

「……かしこりました」

未散は素直に頭を下げた。

「……いいねえその仕草、吉岡かわいいじゃん。いつもやれよそれ」  
理は未散の頭をわしわしと撫でた。

「理先輩の前ではもう絶対やりませんっ！」

やめてくださいっ！と理の手をペチペチ叩きながら未散は悲鳴を  
上げた。

未散と理がそんな会話をしていた頃。

なにやってんだ……？

自分の下駄箱の前でだろうか、手紙を何個か抱えてうつむいている小さい女の口をちょうど帰ろうとしていた佳佑は怪訝そうに見ていた。

あれって確か、並木の彼女の……。

昨日ちようど部活の終わりごろに優太のことを迎えに来た女の口だったような、と思い、佳佑は彼女に歩み寄る。

「今日は迎えに行かないの？」

佳佑が衣に声を掛けると、びくつとした顔で衣は佳佑を見る。

そのはずみではさばさと手から手紙が落ちた。

「あらららら」

佳佑は床に落ちてしまった手紙を拾った。

なんか、嫌な予感がする。

宛名も差出人も書いてないその手紙に、佳佑の心臓は吐き気がするほど締め付けられる。

「ごめん、開けるよ」

衣の返事を聞く間もなく佳佑はそこにあった手紙の封を全部開けた。

「……………」

中身なんてちゃんと見なくてもすぐにわかった。

2年前、佳佑自身が時々見かけたものと同じものだった。

嫉妬に狂った女達からの、怨み辛みが込められたおぞましいまでの手紙の山……。

「……………これいつから？並木は知ってるの？」

「……………もういいんです……………もう、貰うことはないと思いますから……………」

衣は佳佑の問いには答えず、床に落ちた手紙も佳佑の手の中にもあつた手紙をひったくるようにしてかき集め立ち上がった。

「ちよつと待つて、『もう貰うことはない』ってどういうこと？」  
立ち去ろうとする衣の腕を取り、佳佑はまた衣に聞いたのだした。

「……さつき優太に言つてきました『別れよう』って。それがわかればもうおさまると思いますから……」

それだけやつと言つと、衣はその場で泣き崩れた。

佳佑、怖いよ、助けて。

そう言つて同じように女の口が自分の腕の中で泣き叫んだ光景が佳佑に押し寄せた。

優太のそばにはいたいけれど、こんな目に遭うのは耐えられない。

別れると言つたのも断腸の思いだつたに違いない。

ましてや相手はあの優太。

きつとなんで別れると衣が言い出したのか全く理解できていないに違いない。

またこんなことが起こるなんて……。

小さくなつて肩を震わせている衣を見ると2年前に引き戻されていく。

どうすればいい、どうすればこの口はアイツの二の舞にならずに済む……？

言いようのない怒りと悲しみが佳佑の中に湧き上がる。

「……優太つて、自分の大事な人が傷つけられたらだれかれかまわず本気で懲らしめに行くんです。しかも精神年齢低いからやることけつこう残虐で」

少し落ち着いた衣が突然佳佑に話し始めた。

「中学のときも、急に背が大きくなつた未散がからかわれて泣いちゃつたときも、からかったコたちみんなを男も女も関係なく殴つちやつて、先生に『手加減しろ』って注意されちゃつて」

「……なるほどね。友達でさえそこまでやつちやうんなら、彼女と

なつたら大変なことになるね……だから並木には言えなかつたんだ」

佳佑は衣の隣にしゃがんだ。

衣は黙って頷いた。

「俺ね、昔付き合ってた彼女が同じ目に遭ったことがある。まあ俺は彼女には『別れてくれ』とまでは言われなかつたけれど……けどもし言われても俺は絶対納得できない。なにがなんでも守ってやるって思うよ」

佳佑はそう言うのと衣の持っていた手紙を引き抜いた。

「でも結局俺はそれができなくて彼女を失った。……あんな目に遭うのは俺一人だけでたくさんだ」

佳佑の言葉に衣は佳佑を見る。

「別れなくていいよ、並木のそばにいてやってよ。ある意味小橋さんは『スーパープレイヤー並木優太の生みの親』なんだから」

すでに優太からバスケットを始めたいきさつを聞いていた佳佑はそう言うのと衣に笑いかけた。

「2人のことは俺が守ってやる。絶対助けてやる。だから、ちょっとだけ待って」

佳佑は衣の頭に手をのせ、衣に微笑んだ。

衣はぼろぼろ涙をこぼしながら何度も頷いた。



Vol.17 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

いったんまとまったハズの優太&衣に暗い影が忍び寄っておりま  
す(汗)。

そして今、さっそく衣がコテンパンにやられた状態です。

一方それを知った佳佑先輩。

どうやら彼は衣を見て元カノを思い出したようです……。  
ここでさらに触れた佳佑の過去は機会をみて徐々に明らかにな  
っていくので、気になった方は……すみませんが読み進めて下さい  
(笑)。

さてと。

衣はこんな感じですが、優太はどんな感じ？

次回はそのへんをお送りします。

それではまたです。

一方の優太は。

……奈落の底に突き落とされていた。

優太、ごめん。あたしと別れて。

衣に言われたその一言が優太の頭の中でずっと自動で繰返される。

「なんでだよ……なんで……？」

部屋のドアを閉めて優太はその場に頭を抱えへたり込む。

別に優太が直接的にか衣にやらかしたわけでないから何が原因で衣がそんなことを言ったのかわかるはずもない。

そして周囲の想像通り、衣にはこの所ずっと不幸の手紙ならぬ脅迫状が送りつけられていることなど優太は知る由もない。

まさに不意打ちにあった状態なのだ。

未散はなんか聞いているのかな。

ふとそんなことを思いつき、優太は自分のロッカーを開けバッグから携帯電話を取り出した。

未散の番号を発信する。

はい？もしも？

未散はいつもと変わらない口調で電話に出た。

それに安心したのか、優太は嗚咽をこみ上げる。

「未散、助けてくれよ……」

それを言うのが精一杯だった。

ちよつと、どうしたの、なんか言いなさいよっ?! 優太っ?! と未散のいつものちよつと怒った声が聞こえてくるが、優太にはもう返事をする気力はなかった。

「ちよつと、優太っ、聞いてんのっ?!」

ぐすぐす言っているだけで何も返ってこない優太に未散はとにかく

く何か喋らせようと話し続ける。

「吉岡、学校に戻るぞ」

理はカップに残っていたコーヒを飲み干して席を立つ。

「優太、今どこにいんの?! 部室?!」

未散も理に釣られて立ち上がった。

かろうじて「うん」と呟く優太の声が聞こえた。

「からそっちに行くから、そこにいてね?! いったん切るよ」

未散も電話を切りながら荷物を持ちカップに入っていたカフェオレを一気に喉に押し込んだ。

「思ったより攻撃は早かったか……」

眉間にしわを寄せながら理は片づけを済ませ店を出る。

そして、未散が店を出るのを待たずに学校へと走り始めた。

未散も理の後を追った。

校門を出て少し歩いた頃だった。

理と、吉岡……?」

ひとり歩いていた佳佑は、意外な組合せがこっちに向かって走ってくるのを見て立ち止まる。

「なあ」

お疲れ、とだけ言って横を通り過ぎようとする理を佳佑は理が持っていたカバンを引っ張って引き止めた。

「別に明日でもいいかなと思っただけど、会ったついでに。コレ」

「何だよ一体?!」

段取りを狂わされてイライラしながら理は佳佑に差し出された封筒を乱暴に取る。

「……佳佑……おまえ、どうやってこれ……」

中を見るのと同時に理は佳佑を見上げる。

「さつき自ら身を引き裂く思いで並木に別れを告げた小橋さんから預かった」

だってほっとけないだろ、と佳佑は理にちよっと笑った。

「おまえにだけは知られたくなかったのに……こういうときに限ってこれだもんなあ……」

理は手紙に目を戻してふっ、と笑った。

「今さっき、こういう類のものの回収を吉岡に頼んでたんだよ。きつと……衣ちゃんも『あの時』と同じ目に遭うだろうって思ってたから」

しかしすごいなこりゃ、と手紙を読んで理は苦笑する。

「ほんとはおまえのことも何とかしてやりたかったけど、あの時の俺にはそんな力はなかった……けど、今は違う。せめて並木たちだけでもなんとかしてやりたくてさ」

理は出していた手紙を元に戻した。

「あ、ちようどよかった。佳佑、どうせ暇だろ。ちよっと付き合え」

「はいはい。……で、俺は何をすればいいの？」

佳佑は理に手紙を戻されながら理からの依頼を聞いてみる。

「今から並木に説教たれる予定だからさ。もしも俺と吉岡、特に吉岡はヒートアップすると思うから、收拾つかせて」

「え、あたしは大丈夫ですよ」

理の言葉に「失礼な」と未散は頬を膨らます。

「いや、それはありえない」

並んで歩き始めた佳佑と理は後ろをついてくる未散に振り返り声をそろえて言い返す。

「吉岡は友達思いだから、ついつい熱が入っちゃうんだよなあ」

佳佑は未散を見て笑った。

「まあ世話焼きすぎ、という見方もあるけどな」

理もつられて言い、噴出した。

「もー先輩たちひどいっ！」

未散はついムキになって年上2人相手に本気で背中を叩いた。

「まあそんなに怒るなって」

「そうそう。美人が台無しだぞ」

先に佳佑、次に理が少し顔をしかめながらもまた未散に言葉を返した。

そんなことを繰り返しているうちに優太がいると思われる現場に着いた。

「並木い、入るぞ……うわあっ！」

先頭を切って部室に入った理はまるで幽霊のように生氣なく座っている優太を見つけどっと身を引いた。

「優太、大丈夫?!」

しっかりして、と未散は優太の目の前に手をかざして振ってみる。

「……なあ未散、俺なんかしたのか……?」

「……優太は心当たりないの?」

「……ないよ、そんなの」

ダメだこいつ、なんにもわかってない。なーんにも。

ついさっきまでは可哀想にと同情していたが、今の一言で本気でわかっていない優太に未散は無性に腹が立つてくる。

「……この、あんぽんたんっ!!」

未散は急に優太に当り散らし始めた。

「み、未散?!」

優太は般若のような未散の顔に顔を引きつらせた。

「優太は自分が女のコたちにどんなふうに見えるのわかってなさすぎなのよ! あんたに彼女ができるってことは人気がある芸能人に彼女ができたのと同じなの! そういうのわかってないでしょ?!」

「いや、俺芸能人じゃないし」

未散の話に全くピンとこない優太はとんちんかんな事を言い出す。

「だーかーらー! 優太はココでは芸能人と同じなの、アイドルみたいなもんなの、わかる?! じゃなかったらたかが練習試合であんな

に人が来るわけないでしょ、みんな優太を見に来たんじゃない、なんでわからないのよっ?!」

なんでこんなところで1人カツカしてるんだろっさらに腹を立てながら未散は優太にすけすけ言い放った。

「……吉岡、もういいだろ、な?」

はいはい未散ちゃん落ち着きましようね、と理は未散を椅子に座らせた。

「並木、衣ちゃんがおまえに別れを告げた理由はコレだ」

佳佑出して、と理は佳佑に声を掛け、佳佑は机の上に手紙の束を置いた。

「……なんですか、これ」

優太はきよとんとし、理を見上げた。

「まあ、モテる男と付き合ってた代償ってヤツ?」

見ればわかるほれ、と理は中身を優太に差し出した。

優太は理から受け取り読み始める。

「……………」

静かに読んではいるが、優太の手はかすかに震えていた。

手が震えているときの優太はすでにブチ切れする一歩手前なのを知っている未散はいつナニが飛んでくるかと冷や冷やしながら優太を見ていた。

「ちつくしよう、許さねえっ!」

優太は突然立ち上がり、読んでいた手紙をびりびりと破いた。

そして破いたその手紙を床に叩きつけぐしぐしと踏みつけると、

キツと別の手紙を睨みつけて手を出そうとした。

「並木、やめろ」

理が冷静に優太を制するように腕を掴んだ。

「なにするんですかつ、放して下さいっ!」

優太は理の手を振り払おうとする。

しかし、理は負けなかった。

ぐつと優太の腕を握り締め「並木」と理は優太を見る。

「悔しいのはわかる、すつごいよくわかる。けど、我慢してくれ。証拠がなくなる」

「……理先輩……」

頼む、これ以上は我慢してくれ。 。  
きつくきつく優太の腕を捕らえた理の手がそう言いたげに震えていた。

それを目にした優太には、もう理に抵抗する気はなくなっていた。

「来週生徒総会がある。そのときにこれを証拠に俺は『いじめ撲滅』っていう建前を使っておまえ達のことみんなに認めてもらう。そのためにはこの手紙をたくさん集めなきゃいけない。数が多ければ多いほど訴えに説得力が増すからな」

だからさ、と理は優太に続ける。

「辛いだろうけど、衣ちゃんには申し訳ないんだけど、おまえ達はそのまままだ付き合っていることにしておいてくれないか。並木が何も言わなければ周りはおまえ達はまだ別れてないって思うはずだから」

やってくれるか？と理は優太に優しく微笑んだ。

「……はい、すみません……」

自分達のために一肌脱いでくれようとしている理に優太は鼻をすすり上げて返事した。

「おいおい泣くなよ、俺がいじめたみたいじゃんか」

もう泣くなよお、と理は優太の頭をぐしぐし撫でた。

今回は俺は何も喋らなくてよさそうだな……。

始終黙って後ろで見守っていた佳佑は、少しほっとしながら微笑み腕を組んだ。

「……それにしても、毎日毎日すごいな」

部室に入って未散から預かった『本日回収した衣への嫌がらせの品々』を机にバサツと置くと、数の多さに佳佑は肩をすくめた。

今日は手紙や紙切れだけでなく口にするのもおぞましいことがペ  
ンで書いてある衣の上履やズタズタに切り裂かれた衣の体操着まで  
ある。

「すみません、なんか先輩たちまで巻き込んで……」

シャツを脱ぎながら優太は佳佑に謝った。

「いや俺は別にかまわないよ、特別並木たちのために何かしてやつ  
てるわけでないし。それよりも……小橋さんは大丈夫なのか？」

優太に尋ねながらすでに部室の隅っこで陣取っているゴミ袋3個  
を佳佑は見る。

「まあ衣自身は俺や未散が護衛してるんで大丈夫ですけど、衣のモ  
ノがいろいろと被害に遭ってるというか……」

「……確かにそうだろうね」

優太に相槌打ちながら佳佑はテーブルにある上履きを見た。

「……先輩、俺ってひどい男ですよ」

「はぁ？何だよ急に」

優太の自虐的な言葉に佳佑は目が点になった。

「だって衣のことこんな目に遭わせてるの俺だし……」

机の上とゴミ袋を見て優太は涙声になっていた。

「それに……未散に言われるまで自分が何なのかって全然わかって  
なかったし……」

俺最悪ですよ、と優太は無理に笑った。

「……しょうがないだろ、並木はそういう男だし」

「……へ？」

言っている意味がわからない優太は佳佑を見てぼかんとする。



「練習はサボらず一生懸命で、試合に出れば役割上一番タフで、いろんな意味でおバカさんで、あんなにたくさんの方たちにちやほやされてもずっと一人の女しか見てなくて。……並木は天下無敵。あの意味誰もかなわない」

言いながら佳佑は自分のロッカーを開けた。

「けどさ、そういうのって女から見ると余計に嫉妬心煽るみたいなんだよね。なんでなのがよくわかんないけど」

佳佑はシャツのボタンに手を掛けた。

「……つまり、並木のその行動がこの原因」

佳佑はそう言って顎でテーブルを指した。

「けど、明日で終わりにしてやるからな」

佳佑はシャツを脱ぐとバッグに放り込んだ。

「並木たちのことは俺たちがちゃんと守ってやるよ。俺達はお前の味方だからな」

佳佑は優太にそう言って微笑んだ。

「先輩、ありがとうございます、ありがとう……」

優太はお礼を言おうとしたが感無量で言葉が出ない。

「……………」

それを見ていた佳佑は微笑んだまま何も言わずにジャージをかぶった。

「……じゃ、そういうことでよろしく」

理は佳佑にそう言っただけでノートを閉じた。

「了解」

佳佑は理にそう答えると椅子から立ち上がる。

「……でも、ほんとにいいのか？ここまで頼んでおいて今更だけど」

理は机の上に散らばった紙を集めながら佳佑に聞く。

今の理はなんとなく申し訳なくて佳佑の顔を見れなかった。

今から生徒総会を始めるのだが、理は臨時で提出する議題についての段取りをしていたのだ。

もちろんそれは優太と衣のこと。

しかし、取扱い1つ間違えるとみんなには理の職権乱用という解釈にもなりかねないのでそうならないように考えなくてはならなかった。

そうなるかどうかでも『佳佑の過去』を引っ張り出すのが一番手っ取り早いのだ。

しかし佳佑のその過去はあまりにも酷すぎた。

目の前でそれを見ていた理さえできれば思い出したくない出来事だった。

それを当事者の佳佑が聞いている場で自分が朗々と語るのはいくらも気が引けてしまうのだ。

「……約束したからさ、俺が守ってやる」って。俺はもう俺や理みたいな過去を持つ人間を作りたくないだけだから」

佳佑は少し笑った。

「理は好きに喋っていいから。俺のことは気にしなくていいから。2人のこと、守ってやって」

佳佑は笑って片目を閉じる。

理はそれを見て何も言わずに切なく笑い返して頷いた。

そして今朝まで集めた「証拠の品」が入ったゴミ袋全部を抱えて  
部室のドアを開けた。

「以上で生徒総会を終了します……」

総会の司会者であった副会長がそう告げると、「はい、はいはいはいっ！」と元気よく右手を上げて一人の男が議長が座っている前まで歩み寄った。

よし、行ってみますか。

そう思いながらこの行動に出たのは言うまでもなく理である。

生徒会の面々は知っているので普通の態度だが、生徒たちの方は何が起きたのかと一瞬どよめいた。

「はいすみません、はいそこ！座って座って！」

理は生徒達を静ませた。

「えー会長の福原です。みなさん、お疲れ様でした」

理は副会長の彼女からマイクをぶんどると挨拶を始めた。

「実は昨日まではこれで総会は終了する予定でした。……ですが、今朝になってぜひ生徒総会の場で話をしてほしいという案を持ってきた方がいました」

……もちろんコレは嘘。

理の考えた目暗ましである。

「まあ僕としましては『今日言われてもねえ……』と一度はお断りしました。でも『あるもの』を見せられて僕は考えを変えました。コレです」

理は役員に「持ってきて」と指示をするとゴミ袋7個を運ばせた。

「……僕はこのゴミ袋を抱えてやってきた彼に聞きました、『コレは何だ?』と。すると彼の返事はこうでした、『2週間の間にある1人の女子高生の靴箱や机の中に入れられ続けた手紙だ』って」  
理はそう言いながらゴミ袋に目を落とした。

「で、彼はさらにこう言いました、『2年前、自分の身に起こったあ

の惨事がまた起ころうとしている。コトが起ってからでは手遅れだから早くやめさせてほしい』って」

理はそういったあと全員を見渡した。

「3年生の方はもうおわかりでしょう。……そうです、この件を持ち込んできたのはその事件の当事者である小田佳佑くんです」

佳佑の名前を出した途端3年生はいっせいに騒がしくなった。

「はい、静かにして！」

理は制した。

「私事で恐縮ですが……僕はあの時の彼を目の前で見てました。1・2年生の皆さんには申し訳ありませんが、詳細はともじやありませんが僕の口からは言えません。多分、勇気を出して彼が本にでもして出版したら爆発的ヒットするんじゃないかと思うくらい、あまりに悲しい出来事でした」

まあそれは冗談ですが、と理は付け加える。

「で、話を戻しますが……生徒会長としてもあのような惨劇は2度と起こってはならないと思います。少しでも話しておく、この事件により1人の女子生徒が犠牲になりました。もしかしたら今回のコレもその始まりかもしれない……そう思ったら、僕はもうこの提案の提出を拒否する理由がなかったんです」

理はそこまで言うのと全員の反応を見るためにしばらく黙る。

「……………」

話を聞いていた生徒達は、理の思惑通り誰も理の話が単なる公私混合とは解釈していなかった。

全員黙り込んでしまった。

よし、うまくいった。

理は1人心の中でほくそ笑む。

「……………ま、暗い話はこのままでにしましょう。じゃ、本題にいきますね」

理はそう言いながらゴミ袋から一つの手紙を取り出した。

「もう1回最初から話しますと、最初にこれらを発見したのは皮肉

にも先ほど話にも出てきた小田くんでした。この事実を知ってから、彼は今皆さんの目の前にある手紙を被害者の彼女から全部集めていたんです」

そう言う物理は一番自分の近くにあつたゴミ袋を上から軽く叩いた。

「まあここでは誰がやったのなんて追求するつもりはありませんけど……俺がまず言いたいののは、こんな身の毛もよだつようなことウチの高校に受かるような可憐な乙女が書きちゃダメですっ！ってことです」

ちよつと読みますね、と理は持っていた手紙の封筒を破り読み始めた。

「……………」  
理の朗読中、体育館の雰囲気は一気に気まづくなる。

「…………今、1つ読んだのを聞いただけでけっこう気分がへこんだはずです。もしこれを毎日のように何回も貰っていたらどうなります？気が狂いそうになりませんか？どうです？」

理は女の口たちに意見を求めるような眼差しを向ける。

当然、誰もなにも返事をしない。

よしよし、みんな青くなつたな。

生徒達の反応を確認して理はすかさず話を次に進める。

「あの、1つ断っておきますけど、俺は別にこの手紙を貰った彼女とその彼氏くんがくつつこつが別れようがどうでもいいんですよ。ただどね、ここまでやってしまうのはただのイザコザじゃすない。れっきとした彼女への集団いじめです。だってそうでしょ、彼女1人にこーんなに沢山の人数でよつてたかつてこんなことしたわけだから」

理は手紙を持った手を人差し指を生徒達に向けながら左から右へ動かす。

「こつこつというつて一歩間違えると命に関わります。もし小田くんが気づかなかつたらこの学校から自殺者が出たかもしれぬ。恐ろし

いことです」

だから、と理は話を続ける。

「だから俺は総会後で申し訳なかったですけど登場させていただいたわけです」

理は、一度口を閉じたがまた開く。

「あの、どうせならもつと堂々とやってください。こんな卑怯なやり方ではなくて、ちゃんと正面から彼女に宣戦布告しましょうよ、『あんたから奪ってやる』って。それならいじめになりませんから」

言いながらつい笑ってしまった理に釣られて何人かも笑う。

「けど、その時ひとつだけ気をつけてほしいことがあります。……それはですね、そんなことをすると彼女の彼氏くんが黙ってない、ということですよ」

理はそこまで言うと言紙を封筒にしまった。

「どうやら話によりますと、その彼氏くんはかなりの暴れ者です。例えば……自分の友達がいじめられていたら、誰だろうと関係なくまわりが止めるまでいつまでも暴行を加えるそうです。それはたとえ女相手でも一緒らしいですよ」

佳佑から聞いた話を思い出しながら理はちよつと話に尾ひれをつけた。

「それからこれは俺の前で起こった話ですが……このゴミ袋の中身については当然彼氏くんも知るところとなりました。で、手紙の1つはこうなりました」

理は制服のズボンのポケットに手を入れた。

そして、拳を握ってポケットから手を出す。

その手は理の頭の上に掲げられると、握られていた拳を広げた。それと同時に手からはだいぶ大きめではあるが紙吹雪が舞い散った。

そして最後には床に落ちた紙をゴミ屑のように何度も何度も踏みつけた。

「……………」  
生徒達は息を呑んで見ていた。

「……………すごいでしょ？差出人不明の手紙にここまでやったんです。もし、差出人の相手を彼氏くんが知ったら差出人の女性がどうなっちゃうか……………俺は正直言つて知りたくないです、ハイ」

理はせっせと紙吹雪を拾いながら、「まあ、それはいいとして」とまた喋る。

「もし、彼女に自殺なんかされたら面倒だと思うなら、彼に憎まれなくなかったら、もうこんなことはやめたほうがいい。……………それでも構わないというならもう俺は何も言いません、ご自分の責任でどうぞ遠慮なくおやりください。でもそのときは……………誰もあなたのことを庇つてはくれません。俺も申し訳ないけれど……………そのときは警察に突き出します」

理はそう言うにつっこり笑った。

「……………」  
理を見ていた全員はその理の笑顔がなんだか怖くて気持ち仰け反った。

「あ、そうそうもつひとつ」  
理はわざと思い出したようにまた口を開いた。

「まあココまで言ったらさすがにもうやめるとは思ってますけど念のため言っておきます。……………このゴミ袋ですが、被害者である彼女が卒業するまで生徒会の権限で保管しておきますので彼女に1回でもお手紙を送った記憶のある人はそのことを忘れないでください。

……………ああそれと」  
まだ喋るネタがあるのか？という顔をみんなにされながらも理は最後の締めを口にする。

「もし、今後このような嫌がらせの手紙を受け取ってしまった方は遠慮なく生徒会役員へ提出してください。そのときはこのゴミ袋と一緒に警察へ届けて指紋を検出します。指紋が一致した方はそれなりの処分が学校側からあると思ってください。学校側としても2年



前のような事件が発するのは避けたいのでそこまでやるつもりです」

もちろんそこまでするつもりはないのだが理はダメだしをしておいた。

「以上臨時の議題についてでした。質問異議がなければ、拍手をお願いします」

誰も文句を言えるはずもなく拍手が湧き上がった。

「……ご静聴ありがとうございました。では、解散します」  
理はそう言って一礼した。

「……もつとちゃんと言えよよかったのに」

部室にゴミ袋を持っていきながら同じようにゴミ袋を抱えて隣を歩く理に佳佑は理の演説の感想を述べる。

「学校側から『あんまり言うな』って釘刺されてたんだよ」  
理は佳佑にそう返した。

……もちろんそんなのはデタラメだった。  
これは理なりの佳佑への思いやりだった。

ホントは吹っ切ってないくせに後輩のために強がっちゃってさ。

初めて衣から預かった手紙を渡してきたときの佳佑の表情かおを思い出すとこっちまで悲しくなった。

佳佑の優しさに甘えちゃいけない。

理はそう思ったのだ。

「お、理先輩っ！佳佑先輩っ！」  
後ろから呼ばれて理と佳佑は振り返ると優太がどたとと走ってきた。

「なんだよ騒々しい」

理は優太に笑いながら少し怒った。

「あ、あの、ほんと、すみません、ありがとうございます。ありが……」

優太は頭を下げながらお礼を言おうとしたが、感激のあまり途中で詰まる。

「……つたく、並木泣きすぎだから」

また俺の言ったことに反応しやがって、と理は優太の首を腕で絞めた。

「まあそうだな、おまえの力で地区大会1回戦敗退が常のうちのチームを県大会まで連れてってくれよ。そしたら許してやる」

頼むぞ並木、と理はさらに首を絞めた。

「わ、わ、わかりました、だから、はなしてください……俺死んじやう」

「よし、よく言った」

いつの間にか泣きやんだ優太を見て理は腕を放した。

「じゃ、俺からもわがままを1つ」

首をさすっている優太に佳佑は肩を組んだ。

「必ず大会までに小橋さんとよりを戻すこと。あとは今度はちゃんと小橋さんのこと守ってやること。これは部長命令だからな、ちゃんとやれよ？」

佳佑は優太の肩から手をはなしてぼんぼんつ、と優太の頭を優しく叩いた。

「……佳佑先輩ーっ！」

せっかく泣きやんだのにまた優太は大声で泣き出した。

「俺の努力ムダにしやがって……佳佑のせいで台無しじゃん……もう知らねーぞ、佳佑が泣きやませろよ」

理は呆れたように佳佑を見ると佳佑と優太を置いて部室へ歩き出した。

参ったな。並木ってこんなに泣き虫なのか……。

予想外の展開に、残された佳佑はわんわん泣いている優太をあやしなから苦笑した。



総会から1週間が過ぎた。

理の恐怖政治が功を成して衣には再び平和が訪れていた。

しかし『幸せ』の方はというと……まだ取り戻せていなかった。

「だから、もう大丈夫だって」

もう何十回とこの言葉を未散は衣に言って優太とヨリを戻すように促しているのだが、衣の方は頑として首を縦に振らない日々が続いている。

「……そうやって意地張ってるって優太どっかに行っちゃうよ？いいの？」

もちろんそんなわけはないのは未散は知っているが、わざと衣に危機感を持たせようと半分脅迫まがいのことをも言ってみた。

「優太も『やり直そう』って言うてくれてるんでしょ？なんでその好意に甘えないかなあ」

「……………」

未散はまた言ってみるが衣の答えはやっぱり変わらない。

頑なに口を閉ざし俯いたままだ。

ダメだ。もうお手上げ。

何を言ってもだんまりの衣に未散は隣でため息をついた。

衣は衣で葛藤しているんだとは見ていればわかる。

衣、前におまえが言ったこと、撤回してくんないかな。

見た目とは裏腹に案外男らしい優太は総会があった日の放課後に衣にそう言ってくれた。

だけど。

またあんなことがあったら怖い……。

衣の思考回路はその繰り返しで止まることを知らない。

そんな状態なのだ。

「未散、もういいよ。優太と付き合っなんて贅沢すぎる夢だったんだよ」

ありがとね、と衣は未散に微笑む。

「……………」

未散にはもう衣に返す言葉が見つからない。

そんな衣に優太はいよいよ賭けに出る。

「衣、10分でいい、話聞いて」

帰る支度をしている衣の前に優太は立っていた。

「あたしはなんにもないから」

衣は優太と目を合わせようとせせず立ち上がり帰ろうとする。

「衣」

優太はとつさに衣の腕を掴む。

「なによ、はなしてよ」

衣は優太の手をほどこうとする。

だが衣にはわかっていた。

優太の手を振りほどくことなんかできないことを。

「なによ、なんなのよ、お願いはなしてっ……………」

半分泣きそうになりながら衣は力なく腕を振る。

「もう、今日で最後だから。もうこんなことしないから。頼むから、

話、聞いて？」

「……………最後？」

最後、という言葉に反応してしまった衣は思わず優太の顔を見る。

なんでそんな顔するの……………？

衣が見た優太の顔は悲しそうな笑顔。

優太のその表情に衣の腕の力は完全に抜けていた。

「俺のせいで衣にはひどい目に遭わせた。けど、俺は謝らないから」

優太はまっすぐ衣を見る。

「俺と一緒にいたら衣はもっと辛い目に遭うかもしれない。……けど、それでも俺は衣にはずっと隣にいてほしい。また学校中の女が衣の敵になるんだとしても、俺は衣しかいらぬ。これからは俺が何が何でも守るから」

約束する、と優太は掴んでいた衣の腕をさらに強く握る。

「……明日、試合なんだ。もし、俺とやり直す意思があるなら応援に来て。でも……明日1日待って衣が応援に来てくれなかったときは、もう諦めるから」

優太はそう言うのと衣から手をはなした。

「じゃ、練習行くわ」

優太はニツと衣に笑いかけると、席に戻り荷物を肩に引っ掛けた。

「……あ」

「え？」

優太の声に衣は優太に振り向いた。

「さっき、諦めるって言ったけど……あれ取り消していい？」

「どういふこと？」

「俺が諦めるのは『衣とやり直すこと』だけでいい？」

俺さ、と優太は続けた。

「5年も衣のこと好きでいたからそんなに簡単に諦めらんないっていつかどうやったら諦められんのかわかんないからさ。あ、でも衣は気にしなくていいからな。他の誰かを好きになるのも、他の誰かと付き合うのも、それは衣の自由だから」

こんなこと衣の顔を見てなんか言えっこなくて、優太は衣に背を向けたまま言葉を口にしていた。

「衣」

優太は顔を横に向ける。

「俺が他の誰かを好きになれるまでは、衣のこと好きでいさせて。それぐらいは許してくれよな」

「……………」  
「じゃ行くわ」

衣に一度も振り返りもせず優太は教室を出ていった。  
廊下に出た途端必死で堪えていた涙が溢れ出し、優太はそれを乱暴に拭った。

俺が他の誰かを好きになれるまでは、衣のこと、好きでいさせて  
それぐらいは許してくれよな。  
そう言いながら寂しそうに笑った優太の横顔が衣の目に焼きついて  
いた。

やだよ……………そんなのやだ……………優太があたしじゃない誰かを好き  
になるなんてそんなのやだよ……………。

一度も自分を見ることなく教室を出て行った優太の後ろ姿を見つ  
めたまま衣は徐々に込みあがってくる嗚咽を止めようと唇を噛み締  
めていた。

翌日。

外は体育館にいるのがもったいないくらいいい天気。

……けれど。

優太の心は雨降り。

「いつもならココで終わっているのに」と喜ぶ先輩達に「これもひとえに並木のおかげ」とお褒めの言葉を頂戴しているのだが、今日はそれを聞いても素直に喜べない。

本当にほめて欲しい女ひとに褒めてもらえてない。

それどころか、今日はその女ひとの姿を見ていない。

ボールを見てしまえばギャラリーで何が起ころうが何も見えなくなり、誰が何と叫ぼうが全く何も聞こえなくなる自分の集中力に今日は救われていた。

でなければ今日はもう動けていない。

くっそー空青いなあ……。

優太が見上げた空は涙でにじんだ。

そのころ未散はスポーツドリンク2本を片手に人を探していた。もちろん相手は優太。

ダテに優太と3年つるんでないし優太のなんでも顔に出る性格も手伝って、おかしなのが気になって気になって仕方がない。

今朝は「いやあ、さすがにインターハイ予選となると緊張しちゃって眠れなかったんですよあ」と目が腫れている理由をみんなに説明していたが、実際は震度5の地震が来ても平気で寝ていられるほど肝っ玉が座りすぎている男なのでそんなわけがない。

そして試合開始前後やタイム中は、誰も気がついていないが何度も何度もギャラリーを見渡しては落胆していた。

初めて衣が試合を見に来たときから優太はどこに座っていようが



必ず衣を見つけ、

「衣っ、見てるよ、絶対勝つからな！」

とカツコよく勝利宣言をし、

「負けたら承知しないから！」

と言いつ返す衣を指差し、笑ってコートに入っていく姿をいつもなら1日1回は見かけるのだが、今日はそれが無い。

それに、……まあ、別に試合に支障が出ているわけではないのでいいといえばいいのかもしれないが、今日の優太を見ているとわざと疲れるように追い込んでいる気がしてならないのだ。

それはまるで、空いている時間は疲れで何も考えられなくなるようにしているようで痛々しい。

「……はい」

体育館の外に出てようやく優太をつけた未散は、優太のほっぺに少しぬるくなってしまうペットボトルを当てた。

「……サンキュ」

受け取った優太は蓋を開けぐびぐびと飲み始めた。

「本日の我がバスケ部MVPがなんでこんなところにいるわけ？」

未散も蓋を回す。

「……そんな気分じゃねーんだよ」

「……そう」

半分飲んだところで暗い顔をして言葉を返す優太に、未散はそう返事をして隣に座る。

「……昨日さ」

「え？」

優太の声に未散は優太を見る。

「昨日衣に言っちゃったんだよね、『今日衣が応援に来なかったら俺はもう衣とやり直すのは諦める、衣は自由にすればいい』って。

けどさ……ほんとにそうなっちゃったら俺耐えらんねーよ……」

優太が持っていたペットボトルはめきめきと音を立てて壊れそうになる。

「……………」  
未散は何も言葉が見つからないまま半分つぶれたそのペットボトルを見つめていた。

未散はペットボトルをぶらぶらさせながら廊下を歩いていた。

これ以上優太のとなりにいても気まづくなる一方でなんとなくいずらくなり「搜索され始める前に戻ってきなさいよ」と言い残して優太を置いてきてしまったのだ。

だけど「薄情だったかあ」と思うと足取りが重い。

「うりゃっ!」

「ひゃあっ!」

後ろから気配なく近づいてきた男に脇腹を掴まれ未散は声を上げた。

「ちよつと、なんなの?!」

未散はムツとして振り返った。

「なんだよなんだよ、そのどよんモードは」

そこにいたのは……なんだか偉そうに腕を組んで立っている理だった。

「ごめんなさい、大きい声出しちゃって……」

「……なんだよ、そのしおらしいのは」

素直に謝る未散に理は気持ちが悪いものでも見たかのような顔をする。

「だつておとなしくなれって言ったの、理先輩じゃないですか」

なんとか意地で未散は理に言い返す。

「冗談だよ、どうせ並木の雰囲気呑まれたんだろ」

理はやれやれという顔をする。

「なあ吉岡」

「はい」

「吉岡は友達思いだよな?……ってことは、先輩思いでもあるってことだよな?」

「……はい？」

理の唐突な話に未散は質問系の返事をする。

「このまま並木と衣ちゃんが元に戻らなかつたら俺とか佳佑に申し訳ないと思うだろ？」

「思うよな?!と理は強制的に未散に同意を求める。

「……まあそうですね」

未散はとりあえず同調する。

「それとさ……俺達さ、並木がいるから今夢見ちゃってんだよね、  
『もしかしたら県大会行けるかも』って。けど、あの並木のまんま  
じゃ不安なんだよ。……これは副部長命令だ、なんとかしろ」

「……またですかあ？」

「やかましいっ!俺と佳佑に報いをよこせっ!」

渋い顔をする未散に理は、びしいっ、と未散を指した。

「お前のその世話焼きスピリッツはこーいう時に使うもんだろ、違  
うか？」

「違わないよな?!と理はまた強制的に頷かせようとする。

「タイムリミットは2時間だ。時間の許す限り世話をして来い」

「ほら行けっ!と理は未散の背中を押した。

「もーっ!わかりましたよ、やればいいんでしょ、やればっ!」

行ってきますっ!と未散はやけになつて返事をする走り出した。

「……さすがだね」

伸びをしながら後ろから佳佑が理に声を掛ける。

「吉岡と並木はウチのムードメーカーだから暗くちゃ困るからさ」  
頼むぞ吉岡、と聞こえはしないのだが佳佑は未散の背中にそう咳  
いた。

「けど……佳佑よく気づいたな。並木が元気ないのは俺もわかった  
けど吉岡はわかなかつたよ。そういうのって気づくのいっつも俺な  
のに」

「なんで?と理は手を腰に当てながら佳佑を少し見上げる。

……理のこの作戦、実は立案したのは佳佑だった。

「こういうときは神経逆なでたほうがいいと思うから理から言ってみて。俺だと言ってもそういう捕らえ方できないだろうから」

衣と優太のことで気が晴れない未散を何とか元気にしようと佳佑は考えて適任者の理に頼んだのだった。

「さあ、なんででしょうねえ……」

佳佑は少し頬を緩ませる。

「……そういうことか」

理はそれ以上聞かず意味深に笑った。

Vo1・23（後書き）

どうもこんばんは、愛梨です。

実は次回で優太&衣のコイバナは終了します。

最後の最後はやっぱり未散に活躍してもらいます。

さて未散はなにをするんだか……ご期待下さい。

それから最後にちょっとだけ「え？」っていう発言をした佳佑。

これについてはまたあとで話の展開がありますので今は覚えておいてください。

というところで、またです。

試合会場がそんなことになっている頃、衣は……まだ家の玄関にいた。

もうとっくに出かける準備もしていた。

もっと言えば優太が出る最初の試合に間に合うように出ることも可能だった。

けれど……やっぱり足がすくんでしまう。

またなにか嫌がらせを受けてしまうかもしれない。

誰が書いたのかわからない手紙が何個も下駄箱や机の中に入っていたり、上履きに画びょうが入っていたりたずら書きされていたり、体操着がなくなっていたかと思っただけで切り返かたに切り裂かれて戻ってきたり、正体不明のシミがついて机の上においてあったり……。理の働きかけがあったので今はおさまってはいるもののやっぱり怖いものは怖い。

だけど衣が恐れているのはそれだけではない。

それを知った優太が今度はどう出てくるのかなのだ。

中学生のうちはまだ先生にゲンコツの1つでも貰えばそれで済んでいた。

だが今はもう中学生じゃない。

下手をすれば停学処分を食らってしまうだろう。

そうなれば優太はバスケットを取り上げられてしまうかもしれない。

そうなってしまったらもう、優太に合わせる顔がない……。

けどどこに自分が座ろうとも、

「衣見てるよ、絶対勝つからな！」

まわりに人がいるのも気にしないで大声を張り上げ自分にだけ笑いかけてくれる優太に今日も会いたい自分が確かにいる。けど……。

電話？

突然携帯電話の着信音が鳴った。

相手は、未散だ。

「……はい」

衣はボタンを押し電話に出た。

『ちよつと衣、どこにいんの？！最後の試合始まつちやうよ？！』

「……うん」

言われると思った言葉に衣は頷く。

『ねえ衣、何がそんなに心配なの？何度も言ってるでしょ、もう大丈夫だつて。また同じことがあつても、みんな助けてくれるつて』

「……でもなんか悪いし」

気持ちありがたいのだが申し訳ないという思いのほう先になつてしまい、衣は遠慮の方向で返事をする。

『じゃあ何？総会のときのウチの先輩たちの努力、全部無駄にしたいんだ。それはひどいんじゃない？』

「……別にあたし頼んでないし」

つい心にもないことを衣は言ってしまった。

『ちよつと衣、あんたいい加減にしなさいよ』

さすがに頭にきたらしい、未散の口調が明らかに変わった。

『並木優太つて言つたら学校中のアイドルでしょ？そんな男の愛情を一身に注いでもらうんだから学校中の女にやきもち妬かれて当たり前でしょ？！こんなことぐらいで負けてどうすんのよっ？！』

「み、未散？」

衣は未散の始まつた暴走にびっくりしているが未散には知つたことではない。

未散は構わず続けた。

『衣がこんな目に遭わなくてすむ方法は優太とよりを戻さないつていうのもあるけど、もう1つあるでしょ？』

「……もう1つ？」

衣が聞き返すと、「ああっ、もうっ！」「と未散は電話の向こうでま

た1人で怒る。

『まわりが「あのコが彼女じゃしょうがない」って諦めるくらいの  
イイ女に衣がなればいいだけの話でしょ?!』

衣は、と未散は少しだけ落ち着きを取り戻しながらまた口を開い  
た。

『衣はかわいいし頭もいい、運動はダメだけどまあそれもいい。け  
ど、優太のことになるとちよつとのことですぐ弱気になるのが衣の  
唯一の弱点。みんなそこを狙ってきていたんだから跳ね返すぐら  
いになんなきゃ』

「……………」

ちよつと衣聞いてんのっ?!とうんともすんとも言わない衣に未  
散はまくし立てた。

「……はい」

未散に思いつきり痛いところを突かれた衣は涙を浮かべてやつと  
返事だけする。

『それに、また衣になんかあつても絶対に先に気づくのはあたしと  
かまわりだから、優太の暴走は絶対止められる。それは保障するか  
ら』

それも心配してたんでしょ?と言う未散は口調はようやくもとに  
戻った。

「なんで知ってるの……?」

未散にはそんなことは一言も言っていないのに見透かしたように  
そう口にした未散に衣は驚きを隠せない。

そんな衣に「あたしのことなんだと思ってるのよ?!」と未散は  
笑いながらこつ答えた。

『佳佑先輩……ほら、衣が昇降口で会つた先輩いたでしょ?彼が教  
えてくれたの。衣が優太に何の前触れもなく突然別れようつて言つ  
た理由をね』

「……………」

衣は未散に言葉を返せなかった。



未散もそうだけど理といい佳佑といい、どこまで人がいいのかわからないくらいお人よしのバスケ部の面々に涙が出る。

『今どこにいるか知らないけど家なら今から出れば間に合うから。』

……じゃあね、待ってるからね』

未散は最後に言うだけ言って電話を切ってしまった。

「……………」

電話が切れた後の音をぼんやり聞きながら衣は考える。

ぱたんと携帯を閉じてカバンにしまった。

並木優太って言ったなら学校中のアイドルでしょ?! そんな男の愛情を一身に注がれるんだからやきもち妬かれて当たり前でしょ。

未散が言っていたそんな当たり前のことをすっかり忘れていた。

自分が惚れた男はあの並木優太なのだ。

本人には一切自覚がないけれど、いつでもどこでも女のコたちの注目の的だった男なのだ。

そんな男に彼女ができたとなれば誰からも祝福されるわけがないってこと、どうして今まで気がつかなかったんだろう……。

未散の言うとおりだ。あんなことぐらいで泣きべそかいて白旗を簡単に揚げちゃったあたしもあたしだ……あたしがこんなんじゃないダメだ……強くなんなくちゃ……。

こんなところでいじいじしている自分が急に情けなくなった。

衣はごしごしと涙をシャツの袖で拭いた。

そして靴を履きバッグを持って玄関のドアを開けた。

お願い、間に合って……!

衣は玄関を左に曲がると全速力で走り出した。

決勝戦開始5分前。

「なんだよー来ないのかよー」

半分いらいら半分そわそわしながら理は観客席を見渡した。

「先輩もついいです……それより……あそこまでしてもらったのに

すみませんでした」

弱々しく言いながら優太は理に頭を下げた。

「いや俺は別にいいよ。まあ謝るなら知られる必要がなかった人  
まで俺に過去をバラされた佳佑に謝りな」

もういいからやめろ、と理は優太の姿勢を元に戻してやった。

「おい吉岡、どうなってるんだよ?!」

衣ちゃん来ないじゃんかよっ?!とすぐ後ろにいる未散に理は怒  
鳴る。

「多分ですけど、来るのは試合開始ギリギリだと思います」

「なんで?」

「あたしの電話を切った後に衣は家を出ていると思うんです……だ  
からすみません、もうちょっと待っていてください」

未散は理に申し訳なさそう笑った。

ピーッ。

試合開始のホイッスルが鳴ってしまった。

間に合わなかったか。

理はがっくり肩を落とした。

「理先輩、俺勝ちに出ますから。約束だから県大会連れて行きます  
んで待っていてください」

優太は精一杯理に笑いかけた。

「……わかったよ」

さあ行つて来い、と理は優太の頭をぐりぐりと撫でてやり切なく  
笑った。

それからすぐだった。

「……あ」

コートに入ろうとした佳佑が観客席を見て声を上げた。

「佳佑どうし……あ!」

佳佑に釣られて理も観客席を見て声を上げる。

「ちょ、ちょっと、未散、あれ」

「なんですか？……あつ！」

未散より先に気づいた女バス部の先輩が未散に教え、教わった方に目を凝らして未散も叫んだ。

バスケット部員が見ていたものは一緒だった。

それは観客席の一番前を人ごみを掻き分けながら走る衣の姿だった。

「優太っ！」

衣は優太の後ろ姿に力いっぱい優太の名前を叫んだ。

衣……？

「衣っ！？」

優太は衣の声が聞こえた気がして観客席を必死で探す。

「優太っ、後ろ、後ろだつてばっ！」

「並木っ、そつちじゃねーって！」

バスケット部みんなはもう衣を見つけていたのだが優太だけ衣を見つけれない。

部員みんなが優太にわーわー叫んで衣の居場所を教えようとした。

だが優太にはもう誰の声も聞こえていなかった。

たったひとつだけ、衣の声を除いては。

どこ？衣どこ？！

右に左に優太は振り向いた。  
いた。

自分に気づいて欲しくて何度も何度も自分名前を叫び続ける衣がそこにいた。

「衣……」

優太の目に映る衣は自分と目が合うと笑顔になった。

その笑顔は優太が一目惚れした、あの愛くるしい笑顔だった。

「優太っ、負けたら承知しないからね！」

なんか言いなさいよっ、と衣はいつものようにちょっとだけ怒る。

「……………」

優太はちよつとだけ衣に笑った。  
そしていつものようにすつと衣に指すと声を張り上げた。

「……………優太……………」

その言葉に衣の、優太の笑顔を映す瞳は涙でどんどんばやけていた。

「うわー並木って佳佑並みにかゆいやツ」

優太の台詞に理は首を掻いた。

並木、それはそれで結構だけど俺たちのためにも勝ってくれよな……………」

佳佑は優太に苦笑した。

ちよつと、優太の癖にカッコいいんじゃない？

「……………やるなあ、優太」

見ていた未散は腕を組みながらふつと笑った。

「衣、見てろよ、絶対勝つからな！」

その勝利宣言は今だけは変わっていた。

それは。

「衣、見てろよ、お前のために勝つからな！」

ずっとずっとと言えなかったけれど、試合で衣が来てくれるたびに思っていた優太の本当の気持ち。

随分時間がかかったけれど、やっと衣に伝えられた瞬間だった。

こうして人騒がせな2人はようやくここでめでたしめでたし、と

相成つた。

Vol. 24 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

これにて優太&衣のコイバナは終了となります。  
いかがでしたでしょうか。

ここから思いつきり私のどうでもいい話になるんですが、私はまず書きたい内容を映像化しそれを言葉に置き換える、という方法で書いてます。

なので……いつの間にか優太と衣に関してはこの芸能人で動かしてしまおう、というのがありました。

その人とは……。

優太は小池徹平くん。

そして衣は長澤まさみちゃんか榮倉奈々ちゃん。

……です。

まあ確かに彼らの実年齢を考えたらかなり無理がありますけどね  
(汗)。

さて。

次回からはやっと(?)未散のコイバナが始まります。

それに伴い新キャラも登場します。

また、前回の最後にちよっとだけ暴露された佳佑の本音の部分もどこかで大きく関わってきますのでそのへんを楽しんでいただければと思います。

それでは、またです。

それは5月の初め頃。

優太と衣にとっては思わぬ再会が、そして未散にとってはとうとうというかやっつとというか、そんな出会いが待っていた。

「よし、終わった終わった」

ふんふんと鼻歌を歌って優太はいそいそと身支度をする。

学校としては定期考査1週間前なのだが、バスケット部は県大会出場のため今から普通に練習。

テスト週間が始まったというのに普通に練習ができるなんてこんなに嬉しいことはない。

「行ってらっしゃーい」

衣はそんな優太にかなり不満そうに手を振る。

「衣？なんか怒ってる？」

優太は荷物を肩にかけながら衣を気にする。

「やっぱり優太ってバスケが一番大事なんじゃん……」

テスト週間に入れば部活がない分一緒にいられる時間が増えると思っていた衣は、今朝、

「衣、聞いて聞いて。テスト週間だけど普通に練習するんだって！」

とそれはそれは喜んだ様子の優太から話を聞いてからずっと機嫌が悪かった。

で、優太は今頃やっつと気づいた……というわけなのだ。

「わかったわかった、悪かったよ」

衣に謝りながら優太はきよるきよるとあたりを見渡した。

まわりは雑談する人も帰る人で誰も優太と衣のことなんて気にしない。

「衣」

「何よ？」

優太の呼ぶ声に相変わらず拗ねた顔で衣は優太を見上げる。  
と同時に……一瞬だけ衣の唇に何かがかすった。

それは多分。

「なっ……！」

なにすんのよっ?!と叫ぼうとする衣に優太は人差し指を衣の唇に当てて「騒がないで」と合図する。

「これで許して」

「……………」

衣に微笑む優太に衣は顔を熱くなる。

「練習終わったら電話する。待つてろよ」

衣の唇から放した手で優太は衣の頭を優しく撫でた。

「……はい」

衣はおとなしくなるより他がなく小さく返事をする。

「よし。じゃ、またな」

衣の頭から手を放した優太はあっという間に教室から姿を消した。

しょうがない、許してやるか。

こんなことで「自分は優太に愛されている」と感じてしまう自分を現金なヤツと思いつつも、優太のわかりやすい愛情表現にいつの間にか不満は解消されている自分に、衣は一人苦笑いした。

一方優太は廊下で一人、思い出し笑いをしながら歩いていた。

やつべえよなあ………なんであんなにかわいいんだ？

練習が終わったら電話するから待つてと言ったあとの衣の「はい」という返事とそのときの自分を見上げた表情かおを思い出すだけで思わずにやけてしまう。

だがそのにやけ顔は相当なものらしくすれ違つ人みんなが「なんだ並木のヤツ」と不思議そうな顔をして振り返るが、完全に一人の世界に入っている優太は気づくわけがない。



そしてその勢いのまま部室のドアを開けた。  
「ちーす」

いつものように挨拶し、優太はドアを閉めまだ思い出し笑いが止まらないまま肩から荷物を下ろす。

……が。

部室の真ん中で座っている男を目にしたとき優太の思い出し笑いは驚きの笑顔に変わっていった。

「……嘘」

え？なんでなんで？

「マジで？！すっげー久しぶりじゃん！」

そこまで優太の顔の表情を変えた彼の話し相手をしていた佳佑が「懐かしい人だろ」と優太に言いかけるや否や、ひゃー！と優太はよくわからない奇声を上げてその男に飛びつく。

「久しぶりだな優太。今日からよろしくな」

彼は「相変わらずちっちゃいな」と優太の背中をぽんぽん叩いた。

112

男バス部の部室がそんなことになっている頃。

未散はというと運悪く職員室で「ついでに」と雑用を次から次へと頼まれて帰るに帰れなくなっていた。

「あーもうっ！」

やっと職員室からてきた未散はぷりぷりしながら部室へ向かっていた。

体育館へ入ると全員すでに練習を始めていた。

いくら『やめとけ』って言われてもやっぱりカツコイイなあ……

理と真面目な顔をしてホワイトボードを使って話している佳佑を未散の目はすぐに捉える。

優太と衣の世話ばかりで未散には浮いた話は一つもないのかとい

うとそういうわけではなかった。

優太や衣に言っていないだけで未散は未散でこっさり淡い恋心を抱く男はいた。

その相手は……バスケット部主将、小田佳佑。

癒し系なのが大きい。優太が入学してく前の2年間大ブレイクしていた男だ。

……だがそんな未散に水を注じたのが彼の親友、福原理。

すっかり油断して佳佑を柄にもなく恋する乙女のような顔をして見ていたのがある日理に見つかってしまったのだ。

「ふーんそういうこと……」

含み笑いをする理に、

「ち、違いますっ!」

と否定したが既に時遅し。

「心配するな。誰も吉岡の惚れた男の名前なんか興味ないから」

誰にも言わないって、と理は未散の頭に手を置いた。

……しかしそのあと理はこう言ったのだ。

「だけど、もしも普通の恋愛したいなら佳佑はやめとけ。佳佑と付き合いたいなら命と引き換えだぞ。それでもいいのか」

何が言いたいのかわからない忠告に、

「……どうということですか?」

未散は理に聞いたのだが、

「あいつの背負ってる過去を佳佑と一緒に背負う覚悟、吉岡にはあるか?あるなら教えてやってほしいし佳佑もお前のこと大事にすると思う。……どうする?聞くか?」

理はそう返してきたのだ。

そのときの理の表情は「中途半端な気持ちならやめろ」と言わんばかりで、未散はなんとなく怖気づいてしまった。

そして、

「……やめときます」

いともあっさり降参してしまったのだった。

佳佑先輩のあの穏やかな笑顔の下にはどんな悲しみがあるのかな……？

理から話を聞いたあの日から、笑っている佳佑を見てるとふとそんなことを考えてしまう。

あれ？あの人、誰……？

ふと佳佑の前を通り過ぎた男に未散は気を取られる。

初めて見る顔だった。

大きい人……。

バスケットには「未散より身長がある男」というと佳佑しかいなかった。

しかし彼はその佳佑よりもはるかに大きい。

ダンクとか余裕そう……カッコイイだろうなあ……あ、横顔きれい……。

さっきまでの佳佑への思いはどこへやら、未散は彼から目が離せなくなっていた。

ぼーっとぼんやり、彼を眺めていた。

だから……その彼がうっかりボールを飛ばしてしまっていたことも、そのボールが未散の方へまっしぐらに飛んできていることにも、未散は全く気がつかない。

「あぶない！どいて！」

誰かの声に未散は我に返り、声がした方へ顔を向けた。

しかしそれがいけなかった。

次の瞬間……未散の右の頬にそのボールがぶつかっていた。

そしてさらにボールに追いつけなかった大柄の男がそのまま未散に体当たりする。

ドタン！と音がし、未散はその彼と一緒に倒れた。

「痛つてえ」

彼は腕をさすりながらも未散の顔を見た途端、

「ご、ごめんなさい、大丈夫ですか?!」

どこか痛くない？と未散を起こし、肩を触診する。

「あ、はい、大丈夫です……」  
彼に言いながらふと見下ろすと、彼の膝の上に乗っていることに未散は気づく。

「あのっ、ごめんなさいっ、すみませんっ！」  
未散は大慌てで彼の膝から降りた。

どうやら倒る瞬間に彼は未散の下敷きになっ てくれたらしい。  
そのおかげで未散は直接床に叩きつけられずに済んだのだ。

「うわーほんとにごめんなさい、すぐ治るだろうけど」

未散の肩に異常がないことを確認した彼はボールの後がくつきりついた未散の右の頬に手を伸ばし、心配そうに触れた。

「こっちこそすみません、大丈夫なんでそんなに心配しないで……」

未散は言いながら彼の顔を見て言葉を失った。

う、嘘でしょ?! どうしよう……

実を言うと未散がぶつかってきた相手をまともに見たのはこれが最初だった。

その相手は……ついさっきまで未散が見とれていた彼だったのだ。

「あ、あのっ、ほんとに大丈夫なんでっ」

きれいな顔立ちしていると遠くから眺めていた男が今はこんなにも近くにいて、しかもありえないくらい紳士的。

これ以上こんなことされたら身が持たないと思った未散は立ち上がりその場を離れようとした。

……が。

「……痛っ！」

未散の右足首に激痛が走り、未散は顔を歪ませた。

「おいおいどうした」

「ちよつと大丈夫?!」

男も女もなくバスケット部員一同とたどたと未散たちに駆け寄る。

「ちよつとくじいちゃった。保健室行ってきます」

未散は右足を引きずって歩こうとした。

「……そんなんじゃない保健室着くまでに夜になっちゃうよ?」

「よっ、と言いなながら彼は未散の後ろから軽々と抱え上げた。

「すみません、彼女連れて保健室行ってきます」

彼はみんなにそう言つと未散を抱えたまま歩き始めた。

後ろでは優太と理を筆頭にみんなでおもしろがって冷やかし始める。

「もう!練習に戻ってくださいっ!」

未散は身を乗り出して注意するが誰も聞くわけがない。

「はいはい姫、暴れないで。落っこっちゃうよ」

今度は彼が未散に注意する。

「はい、すみません……」

彼にたしなめられた未散は静かになる。

「……もしかして、吉岡未散さん?」

「はい、そうですけど……なんで……?」

未散は突然自分の名前を言い当てた彼を見上げてたずねた。

「小田先輩だっけ、彼が言ってたから。『今年は女子も男子も来る

はずのないプレイヤーがココに来てくれた』って」

「来るはずのないプレイヤー……?」

「なんのこっちゃ、と未散は首をかしげる。

「優太と吉岡さんのことみたいだよ。……あとはまあ俺のことも入れてくれたけど」

そう未散に返しながら彼は未散を抱えなおした。

「けど俺もびつくりした。まさか優太と吉岡さんがいるとは思わなかった。2人ともてつきりスポーツ推薦で私立に行ったと思つてたから」

彼は言いながら右へ曲がった。

「あたしはバスケに自分の全部を捧げる気がなかったから。優太は……バスケより好きなコをとったから、かな」

自分の事はともかく優太のことまでいいのだろうかと思ひながら

も未散は彼に喋っていた。

「……好きなコ？」

未散の答えに驚いたのか、彼は未散に質問を返した。

「そ。バスケもココに来たのも全て彼女に振り向いて欲しかったから。ようやく最近その願いが叶ったってとこ。……長かったよ、優太はそのコのこととは小5から好きだったみたいで」

未散は彼の質問に答えた。

「……じゃ、俺も知ってるコかもしれない」

「……え？」

彼から戻ってきた意外な言葉に未散は彼を見上げる。

「小1から小4までだけど、優太とは同じ学校でクラスも一緒だったから」

「……そう」

これまた意外な答えに未散はあとで考えたらそっけなかったかもしれないという返事をする。

「……でも、それだけじゃないよね？」

「それだけじゃないっていうと？」

彼は未散を見下ろす。

「いや、なんていうか……『優太』ですごく言い慣れてる感があるっていうか……」

見下ろされたわけだから当たり前なのだが、未散は彼と目が合ってしまった。

その距離があまりに近くてドキドキしてしまう。

そのせいで話し方がしどろもどろになってしまった。

「鋭いね。……小4の終わりに俺が引越しちゃったからそれつきりになってたけど、それまでは毎日毎日何回もあいつの名前呼んでたから」

だが彼はそんな未散に気づくこともなく普通に應對する。

「……そう」

彼の答えに未散はまたそっけない返事をする。

「けど……俺が1番驚いてるのは入部初日からこんなことがあったことかな。あとでみんなに自慢できるよ」

彼は未散に笑いかけた。

「え、なんで？」

何を自慢できるんだ？と疑問を持った未散は再び彼に質問をした。

「中学のときは吉岡未散っていったら『県内男バス部員の高嶺の花』だったからね、まさかこんなことができるなんてね。……お会いできて光栄です」

彼は未散にまるでどこぞの令嬢に仕えている執事のように微笑んだ。

あ、あたしが『高嶺の花』……?!

「それはどうも……」

あまりのびっくり発言に未散は愛想のないお礼を彼に述べてしまった。

「あれ、知らなかった？優太から聞いたことない？」

「優太はそういうの、疎いから」

「なるほど、あいつって自分の事もわかってなさそうだしなあ……俺の憶測だけど、この前の総会のアレも、ホントは優太のことだったんじゃない？」

この人、鋭い。

未散はまた驚いて彼を見上げた。

「まず立案者がバスケ部主将だったから被害者はバスケ部関係者しか考えられない。それにあのレベルで被害に遭うとしたらウチの高校だったら優太だけでしょ。……どう？当たってる？」

彼は未散の反応に答えるかのように自分の推理を述べ終わると未散を見下ろした。

「……当たり」

彼に見下ろされてなんだか恥ずかしくて未散はうつむきながら返事をした。

そこから未散は彼になにと話し掛けられても首を振るぐらいはしていたが黙りこくってしまっていた。

彼の『中学時代の吉岡未散は県内男バス部員の高嶺の花』発言のせいもあつたが、それだけではない。

今まで出会った男とは明らかに違った。

身長ともとの性格もあつて今までは男と並んで歩いていても自分の方が男に見えることが多かったけれど、彼の腕の中にいる今は自分が女だということをイヤでも自覚してしまっていた。

自分が見上げなければならぬほどの背丈。

自分がすっぽりと包まれてしまふくらい大きな手。

自分が寄りかかつてなんとかなさそうな広い胸と肩幅。

とても同級生とは思えない大人びた顔立ち。

そして……ぶつかったときもその後完全に未散を女性扱いしてくれた上に、実にあつさりどと気取ることもなく未散をお姫様抱っこして校内を歩き回ってくれる彼に、佳佑のことなんかすっかり忘れて未散が恋に落ちるまで時間はかからなかった。

彼の名前は、西倉聖にしくらひとしという。



Vo1・25（後書き）

こんばんは、愛梨です。

ここからはやっと、未散のコイバナでお届けします……って前置き長すぎですよ（笑）。

それからこの回より登場したのは、未散の恋のお相手聖くん。

なかなか紳士的（？）な登場でしたが……色々面倒を抱えている男でございます。

その部分についてはおいおい明らかになっていきますし、そのせいで未散は随分泣く羽目にはなるんですが……おっと、予告はこのぐらいにおきますね（苦笑）。

それでは。

引き続きご贖いのほどよろしくお願ひします。

部活が終わった帰り道。

大きい影と小さい影が1つずつ、夕日に照らされ道路に映し出されていく。

大きい影は普通にまっすぐ動いているが、小さい方は右に左にぶれながら動いていた。

「ったくぼさつとしてんじゃねーよ！どうしたら顔面にボールぶつけるんだよ、よけるだろ普通は！……俺には絶対理解できん」

自分の分のほかに未散と聖の荷物を持って優太はよろよろしながら歩く。

「……うるさいなあ、しょうがないでしょ!？」

だって聖くんの前顔があまりにもキレイなんだもん、だからつい見とれてしまったというか。

……なんて言えるわけもなく、未散はさつきから文句を言い続ける優太には「うるさい！」しか言い返せない。

「優太もついいから、俺が悪かったんだから」

「聖は未散を背負い直しながら「ごめんな」と優太に謝った。

「……あの、あたしのほうこそごめんなさい。家まで送ってもらっちゃって」

「少しだけ身を乗り出して未散は聖に謝った。

「だって帰れないでしょその足じゃ」

「お安い御用だよ、と聖は未散に笑いかけた。

「聖、いいよいいよそんな気イ遣わなくて。未散は大丈夫、その辺の男より強いんだから……な、未散」

しかし優太の悪乗りは容赦ない。

このまま優太に喋られては自分がどれだけ女らしくないかをバラされるのも時間の問題だ。

「もう！いいから黙ってて!」

優太にこれ以上何を言われるのかと考えただけで恐ろしくて仕方がない。

未散は懇願した顔で「もうやめて！」と優太に口をぱくぱくする。

おかしい、なんか未散いつもと違うな……。

いつもならこのあとはもっともっと自分にくっついてかかってきているまわりに笑いを提供するぐらいは当たり前なのに、今日はやけにおとなしい。

確かに背負われている身なので自由がきかないというのもあるのだろうが、いつもの未散だったら少々無理をしても自分に叩きのひとつやふたつ入れてくるはずなのに。

今日は未散のヤツやけに女の子だな……。

喋り方も顔の表情のひとつひとつもいつもと随分違う。

おしとやかといつかなんといつか……下手をすると衣よりも女の子に見える。

聖と会話する未散の姿は優太には初めて見る姿で、気味が悪いといつかものめずらしいといつか、なんだか変な気分になりながらチラチラと未散を見てしまっていた。

その原因を作ったのは聖だということにのちのち優太は気づくのだが、それはもう少し後のことである。

「本当？じゃ、西倉くんも同じ学校だったんだ」

未散を家に届け聖とも別れた優太はそのまま衣の家に寄っていた。

「クラスが違うから俺も知らなくてさ、だから今日部屋行ってびっくり、ってヤツ」

衣に言いながら優太は衣ママからもらったケーキについているシートをはがす。

「今どこに住んでるの？」

「こっから電車で30分、って言ってたな」

「ふーん」

「衣もケーキのシートをはがす。」

「でも随分変な時期に入部したね」

「衣はフオークを持った。」

「それがさ……俺なんだって。最初は通学が大変だから部活やる気なかったらしいんだけど、俺がココにいるって最近知ったみたいでさ。聖とバスケはやったことないから今からすっげー楽しみ」

「ケーキのせいなのか聖のせいなのか、優太は実に機嫌よくフオークをケーキに刺した。」

「ふーんそうかあ、懐かしいなあ……5年ぶりぐらいになるのかな」

「衣もケーキにフオークを入れる。」

「衣さ、聖に会いたい？」

「優太は大きく口を開けてケーキを口に入れる。」

「会ってみたい気もするけど、あたしのことなんて覚えてるのかなあ。だって小1と小2のときしかクラス一緒じゃなかったし、喋ったこともないし」

「衣もケーキをほおぼる。」

「ま、そのときはそのときだよ」

「よし決まり、と優太は残りのケーキをぐさつと刺した。」

翌日の部活開始前。

「聖さ、衣……小橋衣、覚えてない？……小1と小2でおんなじクラスだったんだろ？」

「優太は聖に荷物を出しながら質問していた。」

「ちなみに今は俺の彼女。5年かかって口説き落とすした」

「……そう」

「幸せそうに話す優太に聖は努めて普通に返事をする。」

「衣は聖のこと覚えてるみたいだから、会ってみない？」

優太の提案に対し聖は予想外という顔をした。

「……え、小橋と会うの？」

口調はいたっていつもと同じにしたが、心の中ではかなり動揺しながら聖は優太に返した。

「……いや、俺はいいよ」

聖は優太に断りを入れロッカー開けた。

「え？なんで？」

「なんでって……」

即で優太の突込みが入り聖は言葉に詰まる。

「もしかして聖が衣のこと覚えてないとか？」

優太がまた質問してきた。

「……そういうわけじゃないけど」

「じゃ、なんで？……あ、もしかして俺に氣イ遣ってる？」

「……そうじゃないけど」

「じゃ、なんで？」

「……」

言っても言っても質問が返ってくる優太に聖はもう返す言葉が思いつかない。

「……よし、決まり。衣にメールしておくわ」

優太はかつてに決定して携帯電話取り出した。

マジかよ……。

断りきれなかった聖は優太に氣づかれないように深くため息をついた。

というのも、聖にとって衣は……「会いたくない人」だったのだ。

優太は聖のことを「小3から小4までの2年間いつでもどこでも

何をやるでも一緒だった、でっかくて男らしい、無二の親友」と思っ  
ていて、それ以前の記憶はない。

衣も聖のことは「小1と小2でクラスが同じで、みんなよりちょ  
っと大きい男の子。でも小4が終わったと同時に引っ越してしまっ  
た」ということぐらいしか覚えいない。

だが聖はしつかり覚えていた。

実は小1のとき衣をいじめていた張本人は自分だったこと。

優太とはそのことで毎日のように取っ組み合いの喧嘩をしていた  
こと。

そして、衣をいじめた理由は愛情の裏返しだったということを知  
る。…。

Vo1・26 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

あら？なんか未散の方は最初からいいムードじゃない？って思いきや、そんなのは気のせいでした(汗)。

そうなんです、聖の過去には今とは全く違った形で衣や優太がいるんです。

これが未散と出会ってしまった今にどんな障害となって降りかかるのか、見ていただければと思います。

では次回からはしばらくタイムスリップして小学生の頃の聖・優太・そして衣をご覧ください。

それではまたです。

「いえーいっ！」

聖は悪友たちとガッツポーズ。

その先では衣が「えーん！」と声を上げて泣きじゃくっている。

聖を筆頭に男3人で隙を見ては衣のスカートをめくり髪の毛を引っ張っていたのだ。

体育があつた日は走るのが遅い衣に「とろいんだよ！」と罵声を浴びせ、テストではクラスで『唯一の100点』をよく衣は取るので「女の癖にムカつくんだよ！」と罵る。

初めは衣も聖たちを睨みつけ「もうやめて！」と叫んだりして抗戦してくるのだが、やはり女の子1人なので到底叶わない。

そして最後はいつも負けてしまい泣き出していた。

悪趣味もいところなのだが、聖は衣の怒った顔と泣き出す寸前の顔がかわいくて大好きだった。

もちろん笑顔も好きだったけれど。

けれど笑顔は普通にしていれば見ることはできるが、怒った顔や泣いたはこつちが何かいたずらをしない限り見ることができない。

だから聖は毎日のように「今日は何をして怒らせようか」と考えでは泣かせていたのだ。

しかし、ある日から邪魔者が入るようになる。

「女の泣かしちゃダメだって先生言ってただろ！」

やめるー！あっち行けーっ！と教室に立てかけてある竹刀を振り回し聖たちに攻撃してくる男がいた。

そう、それが優太だったのだ。

なんだよ、ちっこいくせに……！！



「おい、なに正義のヒーローぶってんだよ」

お前こそあっち行けっ！と聖は優太グーでパンチを出す。

しかし昔からすばしっこい優太はささっと聖のパンチをかわす。

「お前のパンチなんか怖くないよーだっ！」

そしてそのあとは必ず「遅っせーんだよっ！」と優太は聖にアカ  
ンベーをする。

「このやる……いい気になってんじゃねーぞ！」

聖は人よりちよつと身長がある分ちよつと長い腕で優太を捕まえ  
る。

そして床に2人で転がり服を掴み拳を振り上げる。

男の子達は「やれ！」「いけ！」と囂し立て、女の子達は「やめ  
て！」「優太くんがんばれ！」と応援とも悲鳴とも言いがたい声を  
上げる。

だが……結局は殴り合っているところで担任に見つかり、  
「たいがいにしる！」

とそれぞれが一発ずつ担任からげんこつをくらって終了。

そして職員室に連行され30分正座をさせられ、最後は無理やり  
仲直りの握手をさせられた。

当然そのときはお互いに、

「ふんっ！」

右に左にあっち向いてホイ、をしていた。

そんなことを聖と優太は毎日のようにやっていたのだ。

だがある日を境に、聖は衣へのいたずらをやめてしまうのだ。

Vol. 27 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

聖・優太・衣の小学生時代はいかがですか？

それにしても……優太変わってないなあ（苦笑）。

今でこそ親友の聖と優太ですが、10年近く前はまさに犬猿の仲だったわけです。

それがどうやって今に至るのかをしばらく綴っていこうと思いますのでお付き合いいただければと思います。

それでは、またです。

今日もまた衣が泣き出した。

「いえーいっ！」

聖は悪友たちと大喜びする。

もちろんしつかりと怒った顔も泣きそうな顔も拝ませてもらった。

そして……いつものようにまた優太が現れて、

「なにしてんだよっ！あっち行けっ！」

竹刀を片手に聖を追い回す。

で……いつもならここで取っ組み合いを始めるのだがこの日は違っていた。

あれ？

優太に追いかけられるだろうとわかっていた聖は逃げ回っていたのだが、その気配がないのことに気がついて走るのをやめた。

「なんだよつまんねーな……」

追いかけて来いよ、と優太に喧嘩をふっかけようと聖は優太を見る。

「お……」

しかしそこまだった。

聖の胸にずん、と何かが重くのしかかった。

聖がそこで見たものは、

「衣ちゃんもう大丈夫だからね、泣かないで」

優太が衣を泣きやませようと一生懸命になって頭をなでなでというかぐりぐりと撫で、そして「ぎゅっ」としている姿と、

「うん、うん……」

優太が着ているトレーナーをぎゅっ、と掴んで泣きそうになっは泣き出し、泣いてるかと思ったら泣きやんで……を繰り返す衣の姿だった。

聖がその姿を見ていちばん衝撃を受けたのは、優太が、  
「泣かないで」

と優しく言っただけで何度だって衣が泣きそうな顔をするこ  
うだ。

優太と自分では衣を泣かせている理由が明らかに違う。

自分は「怒り」と「恐怖」、それから「悔しさ」。

でも優太は……安心という名の「あたたかさ」や「優しさ」。

その違いに何となく気づいた聖は優太に子供心にも嫉妬を覚えた。

「な、なんだよっ、女とくっつきやがって!」

こじつけもいいところ、聖はそう言っていると今度は「優太のスケベ」  
と喚き始めた。

それを聞いていた聖の仲間も一緒になって騒ぎ始る。

初めは優太も、

「な、なんだよっ、そんなんじゃないよっ!」

と必死で言い返した。

けれど相手は3人。

徐々に優太は劣勢に傾いていく。

そして段々「スケベ」と辱めを受け続ける優太の目に涙が浮かび  
始めた。

よしっ、泣け泣けっ!泣けーっ!

どこまでも腹黒い聖は徹底して仲間と「泣けーっ!泣けーっ!」  
と優太を煽った。

だが、そこまでだった。

「いい加減にしてっ!」

どこかからか女の張り上げる声が出た。

へ………?

聖は驚いて言うのをやめ、声の主を探してきよるきよるする。

すると横からどんっ！と聖は誰かに押された。

「うわあっ！」

聖はバランスを崩ししりもちをつく。

「痛ってーな、なにすんだよっ?!」

誰だこのやるっ！と聖は怖い目をして相手を探した。

「なにすんだよ、はこつちのセリフよっ！この最低男！」

聖を張り倒したと思われる女の声が聖を責め立てた。

「なんだとお……！」

声のした方へ顔を向けたとき、聖の頭に中に「がああぁん……」

という音が鳴り響いた。

声の主は……なんと衣だったのだ。

さっきまでのか弱い女の子の姿とは違いまるで女勇者のようだった。

泣きべそを掻いている優太を庇うように前に仁王立ちになって聖を睨みつけていた。

そしてつかつかと聖のそばへ来ると、ばちん！と聖の左のほっぺを力いっぱい叩いた。

「あんたなんか大っ嫌い！優太くんのこといじめたらあたしが許さないからっ！」

そう言っって衣は軽蔑の眼差しで聖を見下ろしていた。

聖はこの一瞬で、衣は優太が大好きで自分のことは大嫌い、ということを知ってしまうのだった。

そう。

聖のこの恋は自業自得ではあるが「大失恋」で終わる。

そしてこの日から、聖は衣にも優太にも一切口をきかなくなるのだった。

こんばんは、愛梨です。

おバカなんだけど可愛い聖少年、いかがでしょうか。

もう悪ガキの典型です(笑)。

ちなみにですが、衣と比べると随分記憶のギャップがありますが、そこはまあ、記憶力の違いあるいはインパクトに残っていることが違うということでもよろしく願います(苦笑)　　おいおい。

さてと。

次回からは優太との友情がどうやって生まれるのかを綴っていますと思います。

これもまた小学生らしく可愛いんだけど実におバカさんです(笑)  
。よかつたら「ふっ……」ってほくそ笑んでやってください(笑)。

それでは、またです。

3年生になり、クラスが変わった初日。

げっ、げげげっ！

クラス替えの張り紙を見て聖は心底嫌な顔をする。

というのも、自分の名前の上に、

「並木優太」

を発見してしまったからだ。

まさか小橋も同じクラス……？

不安になりながら聖は女子のメンバーを確認する。

よかった、違う……。

違うクラスの欄に衣の名前を見つけ聖はホッとした。

だけど……参ったなあ……また並木と一緒に……。

1年生のあの時の大失恋から聖が願っていたことはただ1つ、

「神様、どうか次のクラス替えでは小橋と並木とは別々になります

ように！」

だったのに、残念ながら神様は半分しか叶えてくれなかった。

おまけに次のクラス替えは5年生に上がるときまでお預けなので

2年間我慢するしかない。

しかも俺の席の前あいつじゃん……もう最悪だ……。

すっかりブルーな気分です聖はのろのろと廊下を歩いた。

というのも……このときの聖は、この後すぐに優太と友情の契り

を交わすことになるなど塵にも思っていなかったのだ。

翌日。

「よし、じゃあ発表するぞ。まずは……」

担任は次々とペアを発表していった。

これは担任の「1学期中にクラスのみなんと1回は話そう」という勝手な企画のもと、今日から始まったクラス内の行事だった。

手順はこうだ。

まず、一人一人が「誰かの助けを借りて直したいこと、克服したいこと」を紙に書き、担任はその内容を見てペアを決める。

期限は1週間でどちらも克服できたら担任からご褒美がもらえる、というものだった。

「んじゃ次……お、お隣同士だな。並木と西倉」

な、な、なんだと……?!

優太と一緒に名前を呼ばれた聖は愕然とする。

しかし優太の方はというと、

「よろしくな」

くるりと後ろを向き、にかつと笑って聖に挨拶する。

なんで笑うんだよ……。

理由は単に優太が1年生のときのことを何も覚えていないからなのだが、聖の方はその無邪気な優太の笑顔がこの時はなんだかとても怖かった。

お昼休み。

「これがお互いの克服したいものだ」

はい、と担任は2人を見ながら両手を差し出した。

「……はい」

「……ありがとうございます」

担任にもらった折られた紙を2人は同に開ける。

そして、2人同時に読んだ。

「……嘘だよお！マジで?!信じらんねえ！」

そして……2人同時にお互いを指差しバカにしたように笑った。

「仲いいな、お前たちは」

期待してるぞ、と担任は2人の頭に軽く手を乗せたあと教室から出て行った。

「なにこれ、おまえばっかじゃねーの？」

「おまえこそなんだよ、こんなのできねーヤツ信じらんねえ」



席に戻りながら聖は優太を、優太は聖をバカにする。

「でも……おまえにとってはできないから辛いことなんだよな？」

優太は紙を見ながら呟いた。

「……よし、絶対何とかしてやつからさ、俺のもよろしくな」

優太は聖にまたニツ、と笑った。

「……うん」

聖には優太の笑顔はなんだか眩しくて頷くだけで精一杯だった。

放課後。

聖と優太は教室にいた。

まずは優太の克服したいものを一緒にやり始めた。

優太の克服したいもの、それは「算数ができるようになりたい」だった。

「じゃあ、やってみて。はい」

聖は担任からもらった算数のプリントを優太の机に乗せた。

「……やるの？」

優太はすでに涙声。

「だってなんで算数が苦手なのか俺わかんないし。……はい、やって」

聖はプリントを優太に押し付けた。

「……間違っても怒んない？」

優太は目をうるうるさせて聖に聞く。

「怒んないからやって、ほら早く！」

聖は優太をせかした。

「……はい」

優太はかなり渋々鉛筆を取り出し計算を始めた。

早速聖が優太の様子を見てみると……早いのはいいのだがミスが多すぎることに気がつく。

「……あのさ、なんで『 $14 + 27$ 』が『 $31$ 』になんの？」

「……え、なんでって……だって4と7足したら11じゃん。で、……あ……」

こんな具合のミスばかりを優太は連発していた。

うーん、どうすりゃいいのかな。

聖に違う違うと連呼されもう泣きそうな顔をして聖を見つめる優太を見ながら聖はうーむと腕を組む。

ゆっくりやったらミスが減るかな。

「……あのさ、別に急がなくていいからもっとゆっくりやってみなよ」

はい、と聖は担任にもらった算数のプリント2枚目を優太の机に置いた。

「……うん」

鼻をすすり上げ優太はもうもう一度鉛筆を持った。

おっ、おっ、いいぞいいぞ……。

今度の優太はスピードは多少落ちたもののほとんどミスなく計算を終える。

「……すげえ！80点取れた！」

聖がマルつけをした答案用紙を掲げ、優太は今まで見たことがない点数に感動する。

今までどれだけひどい点数だったんだろうな……。

聖にとって算数での80点は「良くも悪くもない普通の点数」の部類なので、喜びの小躍りをする優太を見て呆れ笑いをする。

「すっげーなおまえ、天才だよ！」

うっほーい！と優太は聖の手を取りそのまま引っ張った。

「よし次はお前の番だ、行くぞ！」

「え、おいつ、ちょっと待ってって！転ぶっ！」

足をもつれさせながら聖はハイテンションの優太についていく。行き先はグラウンド。

それは聖の克服課題である「逆上がりができるようになりたい」に挑戦するためだった。



算数で生まれて初めて80点を取った興奮が冷めないまま優太は聖を連れてグラウンドにある鉄棒の前に来ていた。

別に聖を庇護するつもりはないのだが彼は決して運動音痴ではない。

「だが、どうも逆上がりだけができないのだ。」

「じゃ、やってみて」

優太はどうぞ、と聖を促した。

「……やるの？」

「だってなんで逆上がりできないのか俺がわかんないもん」

「ついさっきまで口にしていた台詞をそのまま優太は聖に、聖は優太に言っていた。」

「うう……カッコ悪いなあ……。」

鉄棒を握ったまま、聖は固まる。

「……あ、わかった。まずそれがダメ」

「……あ？」

「ダメだって、こんなに肘がまつすぐじゃ」

もつと鉄棒に寄って、と優太は聖の背中を押す。

「……はい、やってみて」

優太は聖にニコニコと笑う。

「……」

「こんなのでいいのだろうかと思いつつも、聖は地面を蹴った。」

「あ！」

聖のしている世界が下から上へと回った。

そして、……鉄棒はちゃんとおへその下にあった。

「すげえ！できたっ！」

「やっほーい！と優太はまた踊りだした。」

「なあ、もう一回やってみて？」

着地した聖を優太はわくわくした顔で見る。

「いくよ……ほっ」

聖はまた地面を蹴り上げた。

足やおなが鉄棒に吸い寄せられていく。

そして……2回目も無事に成功した。

「よっしゃーっ！できたできたっ！よし、行こうぜ！」

優太は鉄棒から降りたばかりの聖の手を取った。

「行ってくどこに？」

聖は優太に聞く。

「決まってるだろ、先生に言いに行くんだよ！絶対俺達が1番乗りだつて！」

せんせーい！と職員室に向かって優太は叫びながら聖と手を繋いで走り始めた。

こんな感じで聖がすっかり優太のペースに巻き込まれるような形で始まったのだが、この日をきっかけに聖は優太といつもつるむようになる。

のちのちこの2人の仲の良さは学年内の名物となり、学年一小さい優太と学年一大きい聖で「チビデカコンビ」と誰かに名づけられた。

だがこの友情はわずか2年で幕を閉じる。

というのも、小学校4年の終わりに親の仕事の都合で聖が転校してしまったからだ。

だが風の噂で優太がバスケットをやっている事を知り、聖も中学からバスケットを始めた。

いつか、きつといつかまた優太に会えると信じて。

残念ながら中学のときは一度も会うことはなかったが、高校生になり偶然ではあったのだがその夢が叶ったのだ。

……しかし。

それは同時に衣との再会も意味していたのだ。

Vol. 30 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

聖少年編はいかがでしたでしょうか。

それにしても……優太も聖もできないことが随分かわいいなあ…

…(笑)。

さてさて。

次回からは現代に戻ってまいります。そこですでに大問題が発生します。

とはいっても実に些細なことなんですけど、それが大問題になるのが高校生のコイバナです。

どんな大問題が起きるのか、気になる方はまたお越し下さい。

それではまたです。

気乗りしないまま聖は優太と歩いていた。

行き先は衣の家の近くにある公園。

「あ、俺飲み物買ってくる。聖先に行つてて」

「いやいいよ、俺買ってくるよ」

優太が自販機へ走り出そうとするのを聖は制する。

「いいからいいから。俺は毎日でも衣に会えるけど、聖はそうじゃないんだからさ」

多分あそこに立ってるのが衣だから、と優太は公園でぴよんぴよん跳ねながら大きく手を振っている女の子を指差すとそのまま自販機へ行ってしまった。

「うわーやだなあ……」

「西倉くーん！」と笑顔で手を振っている衣がはつきり見えてくるにつれ、聖の心は罪悪感でいっぱいになる。

「久しぶりだね。……やっぱり5年で大きいね、優太が一緒じゃなかったらちよつとわかんなかったかも」

「へーへーと言いたげな顔で、衣は聖を見上げる。」

「……そんなに変わった？」  
きよろきよろするフリをして、聖は衣に目を合わせないようにする。

「だつてこんなに大きい人が来るなんて思つてもみないし、顔もちよつとだけ面影が残ってるかなあつて程度のような気がする。……」

「まあ、あたしや優太が変わらなすぎなのかもしれないけど」

衣は楽しそうに聖に笑いかけた。

衣は忘れたフリをしてきているのだろうか、その後も普通に聖と話をしてくれていた。

だが聖の方はというと、9年前の苦い思い出が頭をよぎって言葉が少なくなっていく。



「……西倉くん、どうしたの？なんか変だよ？」

何を話しても「うん」「いや」しか言わない聖を衣は心配そうに覗き込んだ。

「あ、いや、頼むから動かないで、あんまり近づかないで」

聖は衣に目を逸らし手で壁を作る。

「……変なの」

不自然な聖の態度に衣は腑に落ちない顔をした。

「……小橋さ、俺に気が遣ってるよね？」

これはもう衣に聞くしかないと思った聖は意を決して衣に口を開いた。

「え？なんで？」

何を言っているんだろう西倉くんは、という顔を衣はする。

「……本当のこと言うとき、小橋にだけは合わせる顔がないって思ってた。優太のゴリ押しで結局来ちゃったけど正直言っただけで会いたくなかったっていうか……」

聖は衣に言っても今更どうしようもないことを言い始めていた。

「え？なんで？」

しかし衣の方は聖の言っていることがさっぱり理解できない。

きよとん、と聖を見上げた。

「……いや、もうわかった。小橋覚えてないみたいだし、いいよ。

忘れて、俺が今言ったこと」

聖は衣にかき消すかのように手を振った。

「昔のことって？なんかあったっけ……？」

あつたとしたら小1か小2の時だよねえ……と衣は真面目に考え始めた。

「あつたよ、大アリだった。少なくとも俺にとってはね」

衣が考えている間に聖は答えを言ってしまった。

「まだ小1のときさ、俺は小橋がすっげー好きで……でも俺は小橋のこと毎日いじめて泣かしてた……最後には小橋に思い切りビンタされて、大っ嫌いって振られた」

衣を直視することができず、聖は前を見たまま自嘲気味に衣に話していた。

「あーとうとう言っちゃったよ……。」

聖はすでに言ったことを後悔していた。

けれど一度開いた口は閉じることはなく、自分の意思とは反対に聖は話を続けた。

「ほんとはずつと謝りたかった。だけど、もうなんて話しかければいいのかわかんないし、口きかないままのほうがいいのかなって思ったし、それに……俺転校しちゃったし……。」

「ばかばかばか、もうやめろって。」

言えば言うほど墓穴を掘ってしまっている気がしていたが、今思ったことをそのまま全部聖は衣に話してしまっていた。

「もういいよ、昔のことだし。……たしかに男の子達に意地悪されたのは覚えてるけど、それが西倉くんだったかまでは覚えてないんだよね。」

「……ほんとに?」

「優太に助けてもらったことは覚えてるんだけどね。」

衣は聖に笑った。

「あれからずつと好きだったんだろ?よかったな……まあ驚いたっちゃ驚いたけど。」

聖はやつと衣を見て笑えた。

「……ありがとう。」

衣も聖に微笑んだ。

「あーでもよかった。」

聖はそばにあったベンチにどかっと座った。

「もうさ、小橋に『大っ嫌い!』って言われちゃった反动でさ、小橋のこと忘れらんなくてずつと気になってたんだよね。」

「西倉くん、それってどういう……。」

衣は何気に言われたその言葉の真意を聖に聞こうとした。しかし衣の言葉が聞こえていない聖は衣の質問を遮った。

「あーすつきりした！」

聖は笑いながら大きく伸びをした。

「……………」  
聖の笑顔に衣は口をつぐんだ。

聖は1人、電車に乗っていた。

あのあと優太が戻ってきて、1時間くらい喋っただろうか。  
9年後にこんな形で2人に会えるとは思ってもみなかった。

それにしても小橋に謝れたのはよかった……。

肩の荷が下りたというか胸のつかえがとれたというか、今の聖は  
そんな気分だった。

……………しかし。

小橋に大っ嫌いって言われた反動でさ、小橋のことずっと忘れら  
なくて気になってたんだよね。

「……………あ」

ふと自分が言った言葉を思い出していた。

ちよつと待てよ……………これって……………まだ俺が小橋を好きみたいな

言い方じゃん……………。

「うわーやつちゃったよ……………」

聖は独り言をつぶやいた。

聖としては今もまだずると失恋の痛手を引きずっているわけ  
ではなくただ衣に謝れなかったのですつと忘れられず気になってい  
ただけなのだが、あの自分の台詞は普通なら、

「俺は今でも小橋が好き」

と受け取るだろう。

しまった、言葉足りなかったか……………。

聖は優太に釈明をしようと携帯を取り出すが番号を聞いてないこ  
とに気がついた。

ま、いいか、明日でも。小橋だって優太に喋るとは限らないし。

聖はそんなふうに呑気に構えていた。

だが、聖の知らない間に話はよからぬ方向へ動いてしまつのだ。

公園を出てすぐに衣の家まで着くと、

「また明日な」

衣の家の玄関が思いつきり道路に面しているのも忘れて、優太は衣の頭に手を乗せると顔を衣のおでこに近づけた。

「優太、怒らないで聞いてくれる？」

優太の顔が自分から離れた後、衣はうつむいた。

「何？どうした？」

帰ろうとして衣に背を向けた瞬間に衣が言うので、優太は首だけ衣に振り向いた。

「優太がいない間にね」

優太に言わないのは自分が心苦しいので衣は言葉を選び全てを話した。

「……そう」

優太はできるだけ落ち着いて一言返した。

「怒ってる？」

優太にとつては決して気分のいい話ではない。

衣はちら、と優太を見る。

「……またな」

優太は衣に笑うと背中を向け歩き出した。

けれど明らかに優太の目は笑っていなかった。

「やっぱり怒ったよね……」。

わかっていたとはいえ気が重い。

はあと衣は小さくため息をつき、優太の背中を見送った。

翌朝。

あれ、喧嘩でもしたのかな。

自分には普通に挨拶をしてくれる優太と衣だが、衣は優太を避け

優太は衣を怒っているように未散からは見えた。

「ねえ衣、どうした？なんかあった？」

どうも2人の様子が気になる未散は衣の席に近づくと衣の隣にしゃがみこんだ。

「うん……昨日ね……」

何も知らない衣は未散に包み隠さず話をする。

それはつまり、未散が早くも恋に破れたということの意味していた。

お昼休み。

「おいっ、衣っ！」

未散とお弁当を広げようとしていた衣に優太がものすごい剣幕で近づいた。

「なあに？どうしたの？」

見ていた未散が優太を見て笑った。

「なんで？なんで未散はそんなに平気なんだよっ？！」

衣に「何怒ってんのよねえ？」と普通に笑いかける未散が優太は気の毒でかわいそうでしょうがない。

「衣ちよつと来い」

「え、なんで？」

「いいから！」

優太は衣が持っていたお弁当の入った袋を無理やり取り上げて机に乱暴に置くと、腕を掴んで衣を連行していく。

「ちよつと！何なの一体？！」

衣は1人でカンカンに怒っている優太に連れて行かれるまま歩く。

衣の問いかけに答えようとしてか優太は急に立ち止まった。

「……お前、未散に何言った？」

優太は衣に振り返り怖い顔をして睨みつけた。

「え、なにっ……」

「なんて言ったのかって聞いてんだよっ！答える衣っ！」

衣の言葉を遮って優太は衣の腕から手をはなすと上から言葉を投げつけた。

「……………」

衣の方は優太がここまで自分に怒ったのを見たのは初めてで圧倒され言葉が出ない。

「なんでだよ……なんで話すんだよ……なんで聖のこと、よりによって未散に喋っちゃったんだよ……」

「なんでっ……だって未散が聞いてくるから……」

鬼のような形相でぶつぶつと自分に呟く優太に怯えながらも衣はぼそぼそと答えた。

なんてことしてくれたんだよ、ばかばかばかっ、衣のばかっ！

衣の困惑した顔を見れば見るほど余計に腹が立つ優太は、すでに廊下を通る人やすぐ目の前の教室にいる人全員の注目の的となっているにも関わらずとんでもないことを叫んだ。

「衣のアホ！お前なんか大っ嫌いだっ！」

優太は言いたい放題言っていると、衣に背を向けずんずん歩き出した。

優太の衣への怒りは頂点に達していた。

聖の好きな女が未散の親友である衣だということがどうにも許せない。

未散の恋路をいちばん残酷極まりない形で邪魔をした衣にどうしても怒りの虫がおさまらない。

衣からしてみたらとばっちりもいいところなのだがそんなことに優太が気づくはずは……当然ない。

なんで聖が好きなのは衣なんだよ……なんで衣は未散に「聖に好きって言われた」って言っちゃうんだよ……。

「あーっ！くそっ！」

優太は抑えきれないこの怒りを置いてあったゴミ箱の蓋にぶつけ

た。

蓋はガンツと音を立てて勢いよくクルクル回った。



優太がここまで怒り狂った発端は未散の一言だった。

「優太さあ、そのぐらい許してあげなよ」

「ご飯を食べる前の手洗いをしていた優太を捕まえ、

「ほんつとに優太って衣のことになると見境なくなるよね」

と、未散は呆れながら優太を見て笑っていた。

「何の話だ」

何の事を言われているのかわからなかった優太は水で濡れた手を振って水を飛ばしながらそう返す。

「優太はさ、衣が聖くんに告白されたことなのか聖くんが衣に告白したことなのかわかんないけど、それを怒ってるんでしょ？」

「未散……それ……」

あまりの驚きに優太は手を振るのをやめていた。

「別にそのぐらいいいじゃない。聖くんが優太から衣を取って食おうとしてるなら問題だけど、そういうわけでもなさそうだし」

優太の動揺に気づいてない未散はいつもの説教を始める。

「ね？衣かわいそうだよ？仲直りしてあげて？」

わかった?!と未散は優太に念を押して教室に戻って行った。

だが優太は見逃さなかった。

未散がうつすらと目に涙を浮かべていたことを。

なんで知ってるんだ、なんで衣喋っちゃったんだ……。

優太はこのことを1番知られちゃいけない未散に知られているのが、しかも、未散の好きな男から告白を受けた上に未散の親友という立場の女から教えてもらうという最悪なパターンなのがこの上なくショックだった。

……で、怒りのあまり衣に攻撃をしてしまったのである。

そしてもちろん怒りの矛先は聖にも向かった。  
「ちーす」

言いながら優太が部室のドアを開けると、ちょうど着替え終わった聖がロッカーを閉めるところだった。

「あ、優太、昨日のことなんだけどさ……」

聖が話かけるや否や、優太は自分の荷物を投げ飛ばすように置くと聖に掴み寄った。

「聖、なんでだ?! どういうことだよ?! どうして衣なんだよ?!」

バンツ! と優太は聖をロッカーに叩きつけた。

「別に女なんか他にいるだろ? 衣よりイイ女なんかいっぱいいるだろ?!」

優太は聖の顔を見た途端そう叫んでいた。

「優太、悪かった、でもあれはちが……」

優太の怒りの理由を察した聖は弁解を試みようとしたが、すぐに優太に遮られた。

「違う! そういうことじゃない! 俺が怒ってるのはそういうことじゃない!」

「……優太?」

「違うんだよ……そうじゃねえんだよ……!」

優太は聖に力なくもたれぼろぼろと涙をこぼした。

優太はとにかく悲しかった。

悲しくて……悔しかったのだ。

未散が聖におぶられて帰ったあの日からなんとなく気がついていた。

でも確信がつかめなかった。

けれど今日決定的瞬間を見て優太は確信した。

それは……未散は聖が好きなんだということだった。

未散はずっとずっと自分たちの事を見守ってくれていた。

だから今度は自分がそれをやってあげようと思っていた。  
それなのに……確信したと同時にどうしてあげることができない  
こともわかってしまったのだ。

おまけにその理由を作ったのが自分の彼女であり未散の親友であ  
るなんて、なんとという皮肉なんだろう。

「聖い頼むよ……頼むから気づいてやって……？」

「優太？」

「聖のこと好きになっっている」絶対いるから……衣とおんなじぐら  
いイイ女が聖のこと見てるから……お願いだから気づいてやって……  
……」

それだけをやつと言うと優太はわんわん泣き出した。

遅かったか……。

優太が自分に投げつけた言葉で聖は大体のことを把握していた。  
結果としてわかったのは「完全に誤解されている」ということだ。

しかし今ここで話しても優太は半分も覚えてないだろう。

こりやまたの機会だな……。

「優太、わかったからもう泣くな」

とりあえず今は優太を泣きやませるのが先だ。

聖はしゃっくりをあげる優太の背中に手を置きそつとさすった。

Vo1・33(後書き)

どうもこんばんは、愛梨です。

こつこつ展開になったときって当事者よりも見ている面々のほうがキツかったりしますよね(苦笑)。

特に優太のような立場の人間はホントにしんどい。

そのしんどさが皆さんに伝わったらいいなあ……と思いつつ書いてきました。

未散と聖がこれからどうなっちゃうのかはもちろんですが、この2人にせい(?)で悩みに翻弄される優太にもご注目いただければとも思いますが(笑)。

……で。

次回はしばらくお休みしてした未散も出てきます。

未散と優太の『男と女を越えた厚き友情』に、よかったら泣き泣き読んでください。

それではまたです。

優太と聖が部室から出ると未散が待ち構えていた。

「優太、ちよつと顔かして」

未散は優太のほっぺをぎゅううつとつまんでそのまま歩こうとする。

「イタイイタイイタイ！何だよ、今から練習だろ?!」

とつても変な顔になりながらも優太は未散に抵抗した。

「馬鹿言わないで！練習より大事なことに決まってるでしょ?!」

未散はつぶやいて優太のほっぺから手を離れた。

「優太さ、あたし言ったよね!? 『衣に謝れ』って。謝った?!」

「……何を?」

優太は真つ赤になったほっぺをさすりながら未散の問いただしにけるりと答える。

「この男は……!」

「ふざけんじゃないわよ！アホは優太の方じゃないつ!」

優太の返事が大いに気に入らない未散はべしつと優太の頭を叩いた。

「痛つてえな！なんなんだよつ?!」

今度は頭をさすりながら優太は上目遣いで未散を涙目になりながらも睨む。

「謝らない上にさらにわめき散らして何がしたいの優太は?!」

「何つて……だつて……」

「だつてじゃない！なんで優太に怒られたのかわかんなくて衣はさつきからずつと泣いてるんだからね?!」

このおバカツ！と優太の言い訳一切無用で未散はもう一回優太の頭をぺしつと叩き、相変わらず怖い顔をして優太にガンを飛ばした。

こりゃ収まりそうにないな。

「優太、行って来い」

優太と未散の喧嘩を傍観していた聖が実に客観的な意見を述べる。

「……う、うん」

まだ頭をさすりながら優太は聖に頷いた。

「衣教室にいるから早く行って！」

未散は優太の背中をどん！と押した。

「聖、佳佑先輩にちよつと遅くなるって言うておいて！」

背中を押された勢いに乗って優太はそのまま廊下を猛ダッシュで駆け出していった。

「ホント優太ってバカだよねえ、どうしようもないことに怒っちゃってさ」

未散は優太後ろ姿を見送りながら腕を組むとため息をついた。

「……あれ、吉岡にもバレてる？」

「バレてるよお。聖くんもとんだ災難よね」

お気の毒さま、と言わんばかりに未散は聖に苦笑した。

「いや、かわいそうなのは俺より小橋だろ。わけもわからず優太に叱られて、あげく大嫌いまで言われてさ」

優太が角を曲がるところを見ながら聖は両手を自分の頭に寄せた。

「なんでそんなことまで知ってるの？」

未散は驚いて聖を見上げた。

「だって……現場が俺のクラスのまん前の廊下だったからさ」

未散の問いに答えながら聖は今度はこきこきと首を鳴らした。

「まあ俺が悪いんだけどね……言葉足らずだったというか……」

「え？」

「あ、いや、こつちの話」

独り言のつもりが未散には聞こえてしまったらしい、聖は慌ててごまかした。

「あ……そういえば、もう大丈夫？」

話を逸らそうと聖は怪我のことを持ち出して未散にたずねた。

「ああ、もう平気。今日から練習やれるし」

ほら、と未散はジャージのすそを巻くり完治した足首を聖に見せた。

「いや、俺が言ったのはこっちだけど？」

聖はそう言うつと未散の目の高さまでかがんだ。

そして……そつと未散の頬に手を伸ばした。

当然未散の方は。

聖の手が自分の頬に触れた時、心臓が飛び出しそうな思いをしながらも動けなかったのは言うまでもない。

「未散、ゴメンな」

突然優太は未散の顔も見ないで謝り出した。

部活が終わった帰り道。

今日は珍しいことに、優太は衣を先に帰らせ未散と帰っていた。

「ほんとだよー。ほんとと優太って世話が焼ける」

未散はぼん、と軽く優太の頭を叩いた。

「衣にちゃんと謝った？」

「……うん」

「ならいいよ」

よかったよかった、未散は満足げに頷いた。

「いや未散、そうじゃなくて」

優太は立ち止まった。

「……しんどかったろ、衣から話聞いて」

「何の話？」

未散は「何言ってるの？」という顔をして優太に笑いかけた。

「俺の前で無理すんなよ、ほんとに苦しいんだろ？」

「なんで？」

「だって……衣があんなこと言うから……」

優太はぼそぼそと呟く。

「だから何の話？別にあたしには何の関係も……」

「嘘つくな！」

あくまでシラを切ろうとする未散の腕を掴むと、優太は強引に引っぱり自分に顔を向けさせた。

「言っとくけど俺は、衣よりも未散の方が一緒にいる時間長いんだぞ？だから変な話だけど衣のことよりもおまえのこのほうがわかってるんだからな」

水臭いよ未散、と優太は少し悲しい顔をして未散を見上げた。

「優太……」

未散の目からひとしずく、涙が頬を伝った。

「未散」

優太は未散に優しく微笑んだ。

「この話は衣も聖も知らない、俺しか知らない話だから。だから……今から未散が泣こうが何しようが俺は見なかったことにできる」

優太はそこまで言うのと背伸びをして未散の頭に手を置いた。

「優太、5分でもいい、背中貸して」

「ごめんね、と未散はまたひとつ涙をこぼした。

「5分と言わず何分でもどうぞ。小さい背中で申し訳ないけど」

優太はハイ、と未散に背中を差し出した。

それを見た未散にはもう強がる気力はなかった。

優太の肩に手を置き頭を優太の背中につけ声を押し殺した。

肩に置いた手はどんどん力がこもった。

その通りだった。

優太の言うとおりであった。

本当は誰も悪くない。

優太の取った行動は大馬鹿もいいところだ。

そんなのは初めからわかっていた。

だから未散は衣の話も関心がなさそうに聞き、優太をアホとこき



下ろし、聖にもご愁傷様と同情した。

だけど優太の「ほんとは苦しいんだろ？」の言葉に、辛うじて繋いでいた我慢の糸はぷつりと切れていた。

それでもこんなところで泣いてしまつては優太はまた何をしでかすかわからない。

あくまで優太は衣の彼女。

優太だつて久しぶりに会った親友が自分の彼女に言い寄っていたことをおもしろくなく思っていたに違いないのだ。

……それなのに。

優太が今いちばん心配しているのは自分のこと。

彼女を先に帰らせてまで思う存分泣けとそばにいてくれる。

それに……聖だつて今きつと自分と同じ想いをしているのだ。

恐らくだけど、もう叶わないとわかつている衣への想いを封印するため……いや、捨てるためにわざと自分を傷つけた。

けれど……その傷を癒してくれる人は誰もいないのだ。

優太の優しさが、聖への自分の想いが、そして……聖の行き場のない心の痛みが胸にしみる。

未散はもう立っていられなかった。

嗚咽も堪え切れなかった。

そして最後には、優太の肩から手が離れずると落ちていった。

未散、頑張れよ……。

優太は未散からもらい泣きしそうになるのを必死で我慢して、後ろ手で未散の頭を子供をあやすように撫で続けた。

この日を境に、未散と優太は立場が逆転するのである。

こんばんは、愛梨です。

未散と優太の友情編はいかがでしたでしょうか。

こういう友情のあり方は男同士あるいは女同士ではできなかったりしますが、異性での友情ならこういうのはアリなんじゃないかと私は思っています。

「いやそれ、そう思ってたのあんただけだから！」って時に突っ込まれたりもしましたけど(汗)、学生時代はなんていうか「仮にコイツが女だったとしても友達になっただろうな」と思える殿方ってちらほらいたんですよ。

つまり、もう男とか女とかじゃなくて1人の人間として好きだったというか。

まあこの辺は同意していただける方いただけな方があると思うんですけど、私は「男女間の友情はアリ！」と思ってるのでこのように書いてみた次第です。

なので、残念ながら(？)今回はこれがきっかけで泥沼化……とはなりませんのであしからず(苦笑)。

……さて。

ここしばらくは未散視点で綴ってきたのでそろそろ聖視点で参ります。

何にも知らない未散と思いつきり勘違いされている聖がちょっとかわいそうになるくらいの甘いプラトニッククラブ(?)でお送りします。

というところで、またです。

聖の朝は通学・通勤ラッシュとの戦いから始まる。

ホームに立っていると電車がやってきてドアが開き、どやどやと人が降りる。

降りる人がいなくなると今度はぞろぞろと人が乗る。

その中で聖はなるべく最後に乗り窓側をキープする。

電車から押し出されそうになるのを何とかこらえているとドアが閉まった。

電車は今日も超満員。

人より背が高いことが幸いして顔を押しされることは避けられているが足は必ず踏まれる。

しかも日によっては自分の足を踏んでいるのがヒールの高い靴だったりして、そのときは脂汗をかきながら我慢する。

しかし電車に乗って20分もすると今度は必死になって窓の外を見る。

いた。

電車からの景色を眺め、聖は一人微笑んだ。

入学3日目から聖には朝の電車の中での日課が1つあった。

それは、線路沿いの道路を歩く一人の彼女ひとを見つけること。

電車はあつという間に彼女の前を通り過ぎ、彼女は後ろへと消えていった。

聖はそれを自分の視界から消えるまでずっと目で追いかける……。

その彼女は同じ学校に通っているがクラスが違うので朝から顔を合わせるのなかなか難しい。

それでも授業が終わる7時間後には彼女に会えるし話だつてできるが、もしもここで見過ごしてしまうと丸1日近く彼女の顔を見ることができないのだ。

よし、よしよしよしっ！

無事に彼女の姿を今日も発見できた聖は心の中でガッツポーズをした。

西倉聖の人生の中には、

「できれば2度と会いたくない女」と、

「会いたければ再び会うのは無理だろうと諦めていた女」<sup>ひと</sup>がいる。

前者にはついこの間までは衣も入っていたのだが、衣が聖についての記憶が欠落していたのと聖の念願だった彼女への謝罪が完了したため、今はもう「昔好きだった女」というカテゴリーに移り今はそれ以上の感情はない。

ただひとつ、自分の説明不足により今も自分が衣に恋焦がれているという大いなる勘違いをされてしまっていることが今は悩みの種。

……そして。

後者の女は高校の同級生という形で巡りあわせが来た。

彼女は中3のときは、本当の彼女の性格を誰も知らないということもあって県内の男バス部員の憧れの的だった。

聖も例外なく一瞬で目を奪われた。

彼女の名前は吉岡未散。

……そう。

未散が聖のことを知るのは高校生になってからだったが、聖の方は未散のことをもう1年近く前から知っていたのだ。

中3の6月。

聖は県大会の会場にいた。

「聖、すっげー美人がいる。見に行こうぜ」

中1から中3までの聖のことをいちばん知っている男、そのだしゅん園田隼が聖を誘った。

「いいよ別に、めんどくさい」

聖は目の前でやっていている試合を見ながら隼の誘いを断った。

「なんだよなんだよ、『もう女はこりこり』ってか？」

隼は聖の隣に立つたまま腕を組んだ。

実はこのとき聖は半年近く付き合っていた彼女と別れたばかりだった。

そのいきさつは人によつては女性不信にも発展しかねないものだったのだ。

「見に行くだけだしさ、いい目の保養になると思うよ」

隼は聖にもう一度誘いをかける。

「……そんなにイイ女なのか？」

ちよつとだけ好奇心が芽生えた聖は隼を、ちら、と見る。

「……と思うよ。だって今、みんなこっそり見に行ってるし」

「ふーん……」

隼の答えに聖はかったるそうに隼に返事をした。

「わかったよ、行けばいいんだろ、行けば」

しょうがねえなあ、と聖はやる気なく立ち上がった。

「そうこなくつちゃ、行くぞ聖」

隼は聖の腕を引いて軽やかに歩き出した。

「……で、どこにいるんだよその美女とやらは」

聖はダラダラと歩いて隼についていく。

「えーとえーと……あ、いたっ！」

「あ？」

「ほら、あの背の高いコ！」

隼は見つけられない聖に背の高い彼女を指差して教える。

「どうよどうよ、聖の元カノとは系統違うけどイイ女だろ？」

綺麗なコだよなあ、と隼は目じりを下げる。

「……………」

聖は顔の表情1つ変えずに彼女を見ていた。

「名前なんていうのかなあ、知りたくない？」

隼の顔はどんどんしまりのない笑顔になっていく。

「……知るか、んなもん自分で聞いてくればいいだろ。バカバカしい、俺は帰る」

聖はユニフォームのポケットに手を入れて回れ右をし、来た道を戻った。

隼には興味のないそぶりをしていたが本当はそうじゃなかった。

まずい……やられたかも……。

彼女の姿を捉えたとき、これ以上黙っていられない感覚に襲われた聖は隼を置いて戻ってきてしまったのだ。

あんな女初めて見た……『美』とか『凜』という言葉が似合いそうな女……。

しばらくの間聖の脳裏から彼女が離れなかった。

そしてその5分後に聖は隼から聞いて、彼女の名前が吉岡未散だということを知るのである。

だがそれ以上の手がかりは聖にはなかったし、もう会うこともないだろうという諦めもあって、いつの間にか日常に流され彼女への記憶は薄れていった。

時は流れ、聖は高校生になった。

入学2日目。

聖は人生初の電車通学というものを経験する。

みんなが乗る時間なので当たり前なのだが、とにかく乗っている間はぎゅうぎゅう詰め。

これ、これから毎日続くのかよ……。

自宅から自転車で15分のところにある受験候補だったもう1つの高校を思い浮かべ、「やっぱりあっちの高校にすればよかったかなあ」とすでに後悔していた。

だが聖のその後悔はそのまた次の日には覆されることになるのだ。

今日も乗車率500パーセントぐらいの勢いで電車は超満員。

おまけにやたら香水をつけている人がそばにいるようで聖の鼻に匂いが漂ってくる。

そのせいで聖はすでに半分乗り物酔いしていた。

あーもう早く着かないかな……。

人ごみのおかげで倒れずにすんでいるがすでにフラフラになりながら立っていた。

空でも眺めてるか、しょうがない……。

気を紛らわそうと窓に目を向けた聖の眼差しが一点に集中した。

嘘、だろ……。

聖は思わず身を乗り出していた。

そこには聖の通う高校の制服を着てすぐ脇の道路を歩いている未散がいたのだ。

最初は他人の空似かと思った。

というのも未散はバスケットボールの選手として優秀だという話はちらりと聞いたことがあったから、なんで別にバスケが強いわけでもないこんな公立高校にいるのかの答えが聖の中で出てこなかったのだ。

しかし次の日も、その次の日もそのまた次の日も、聖が電車に乗った20分後あたりで正面にある道を未散が歩くのを聖は見つけていた。

もう絶対に会えないと思っていたのに。

間違いない彼女が未散だという確信を持たたとき、聖の目は少しだけ潤み手の甲で口元を抑えながらも微笑んでしまっていた。

さらにその日の放課後、聖はさりげなく体育館に足を運んだ。

そのとき見たのは……部員と練習をする未散の姿だった。

そこで聖は彼女が高校でもバスケットを続けていることを知るのである。

それまで聖には高校でバスケットをやる気は微塵にもなかったのだが、5月になつたらまたバスケットを始めようとこのときすでに決めていた。

そしてバスケット部が県大会に向けて練習する初日に、聖はバスケット部の部室のドアをノックしたのだ。



Vol. 35 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

もしも自分の恋い慕う人が実は自分よりもはるか昔から自分を見ていたとしたら……って考えたら、もう言葉では言えません。

もう、「ぎゃあ〜!!」って感じです。そうなのか? (苦笑)

ちよつとちよつとなによこれ! って思っていただけなのなら嬉しい限りです。

なのでよかったです……優太と同じ気持ちでハラハラしていただけだと思います (苦笑)。

で、次回ですが。

前に未散視点で聖とぶつかったときのエピソードを書きましたが、今度は逆です。

初めて目の前で見た未散は聖にはどう見えたのか。

こっちは男の子なんでちよつとだけ下心つき (笑) の聖にご注目下さい (苦笑)。

というわけで、またです。

聖がドアをノックすると「はいはい」とドアの向こうから聞こえガチャリとドアが開いた。

「すみません、入部したいですけど」

ドアを開けてくれた男に聖は声を掛ける。

「もしかして、西倉聖？確か……県内だったか地区だったか忘れたけど、中学生の中で一番でかい男」

「まあ、一応去年はそう言われてました……」

立ち姿だけでずばり聖だということを言い当ててきたその男に、聖は正解である事を伝えた。

「うわー！すげー！西倉も入ってくれるってよ！」

ウヒョー！とその彼は部室中に触れ回った。

なんだなんだ？

聖は1人大喜びして部室を走り回る男を見て瞬きを3回した。

「理、西倉がびっくりしてるぞ。……ゴメンな変なヤツで、どうぞ」

すると今度は奥からそこそこかっこいいのにかなりポーツとした男が出てきた。

そしてその男は聖を見て穏かに笑うと中に入るように勧めた。

説明するまでもないだろうが一応説明しておくと、部室を駆けずり回ったのは理で、聖を部室に案内したのは佳佑である。

「しかし今年は大豊作だなあ」

聖を椅子に座らせたあと自分も聖の正面ある椅子に座り、理はそれはそれは嬉しそうにうんうん頷いた。

「そうだな。本来なら来るはずのないプレイヤーが3人もいるもんな。並木に吉岡に、それと西倉。こんなこと、あと10年先ないだろうね」

ベルトを外しながら佳佑も心なしか楽しそうだ。

「女子は逸材が吉岡一人だから限界あるだろうけど、男子は2人いるし今年は県大会もいいところまで行くんじゃない？」

「今年は何なら全国行っちゃう？」

「おう、行くかあ」

半分冗談半分本気で他の部員も淡い希望に夢を馳せる。

小さいことが優太の武器なら聖の武器は正反対だった。

それは……現在187センチあり、今も尚伸び続けているこの身長。

高校生であつても185センチ以上の選手はそんなに多くない。

ましてや中学生となればほぼ皆無。

そのため優太ほどではないのだが、聖もそれなりに有名人なのだ。

あれ？今『並木』って言ったよな……？

佳佑の話に聖は耳を疑った。

「すみません……さっきの『並木』って、並木優太のことですか？」

信じられない名前が出てきて聖は思わず佳佑がまだ着替え中なのも忘れて振り向いた。

「他に誰がいるんだよ、だから今年は大豊作なの」

理は「よろしく頼むぞ西倉」と聖の肩をばしばし叩いた。

こんな偶然あるもんなんだな……。

聖の顔は自然とほころんだ。

というのも、こつそりバスケット部を覗きに行ったあの日は未散いかどうかを見ていただけだったので実を言うと……男子の方は全く見ていなかった。

そのため優太がいるなんてことは気づきもしなかったのだ。

「まあ同い年としてはあのレベルのプレイヤーと同じチームでやれるなんて夢みたいなお話だろ」

俺達もそう思ってるけど、と佳佑はバッグに脱いだ服をしまった。

「いえ、それだけじゃないんです。……優太は小4の終わり以来会ってなかった親友で……もしかしたらそう思ってるのは俺だけかもしれませんけど」

聖は椅子に座りなおしながら佳佑にそう答えた。

そしてその言葉を聖が言い終えた3秒後、

「ちーす」

と言って優太が部室に入って来て、荷物を置いたとたんに奇声を上げた優太に抱きつかれるのだ。

そしてこのあと45分後。

いよいよ聖は未散と出会うことになる。

それは紅白戦の最中のことだった。

あ、やべ。

聖が投げたボールは思っている以上に左へ反れた。

そのせいで受ける側が誰もいなくて、ボールは廊下のほうへ飛んでいった。

やばい、あのコにぶつかる！

ボールが飛んだ先には立ち止まっている背の高い女のコがいた。

聖は反射的に立ち上がり駆け出した。

「あぶない！どいて！」

聖は走りながら彼女に避難警告を発した。

しかしそのときには既に遅く、ボールは彼女の頬に激突していた。

さらには聖はボールを追いかけてきた自分の勢いを制御できない。

俺までぶつかるっ………！

聖はとっさに彼女の体に腕を回し自分が下になるように彼女と倒

れた。

間一髪彼女の体は床に叩きつけられずすんだが聖の方は背中やら腕やらが痛い。

「痛ったあ……」

聖は彼女の下敷きになった自分の腕をさする。

あ、あのコは？！

「ご、ごめんなさい、大丈夫ですか?!」

聖は自分の上で突っ伏している彼女を起こしながら声を掛けた。

「あ、はい、大丈夫です……」

聖の腕に支えられて彼女は起き上がった。

そしてそれと同時に彼女は顔も上げた。

「……………」

その顔を見たとき、聖の心臓は一瞬止まった。

本物の、吉岡未散だ……。

本物の彼女は聖の記憶の彼女よりも小さかった。

そして華奢で肌の色が白くて……綺麗だった。

どうしようポールぶつけちゃったよ……おまけになんにも知らないでだけ抱きついちゃったよ……。

感動半分だけ困惑と動揺半分で聖は彼女から目が離せない。

まわりに誰もいなかったことと自分の肌の色が少し浅黒いことが

幸いだっただけだ。

もしそうでなかったら顔色が明らかに変わっているのがバレてしまっていた。

あーかわいそうなことしたなー痛そうだな……。

未散の頬を見るとくつきりとポールの痕がついていた。

聖は思わず彼女の頬に手を伸ばしていた。

「うわーほんとにごめんなさい。すぐに治るだろうけど……」

最初は本当に「痛そうでちょっと見ていられなくて」というのが嘘偽りない気ちだった。

「……………」

実際に触れてみると未散の頬は柔らかくてすべすべし

ただ……実際に触れてみると未散の頬は柔らかくてすべすべし

……………」

ていて感触が良すぎる。

「ばっかつ、いい加減はなせつて。」

必要以上に触っていては変なヤツに思われてしまう。

だがわかつてはいても手がいうことをきかない。

図々しくも聖は未散の頬を指先で触れるだけでなく掌全部で包み込んだ。

「神様、もう少し、もう少しだけお願いします……。」

未散になんと思われているのかとビクビクしながらも、聖はその心地よさに動けなくなっていた。

……が。

「あ、あの、ほんとに大丈夫なんです」

まるで聖の下心を見透かしたかのように未散は逃げるように立ち上がる。

「俺のバカ。」

手持ち無沙汰になった手を引つ込めながら聖は心の中で自分の浅はかな行為を悔やんだ。

だがすぐに神様は聖に味方した。

「いったっ」

歩き始めた途端未散は悲鳴を上げたのだ。

「チャンス。」

そう思ってから聖は早かった。

未散が足を引きずりながら保健室に行くと言い出すとすかさず、

「そんなんじゃないや夜になっちゃうよ」

とわざと呆れた口調で言いながら未散を抱き上げ、そのまま保健室まで歩いた。

そして「もしかして、吉岡未散さん？」なんてまるで今日初めていたのを知ったかのようなフリをし、なぜこの高校にいるのかまで教えてもらい、最後には未散を背負って玄関までではあったが家まで行ってしまった。

だから聖としては「初日にしてこれだけの幸運に恵まれた」と言

つても過言でない状況だったのだ。

……ところが。

じわりじわりとその幸運が尽きてきたのは衣との再会からだった。

衣に会うのはできれば避けたかったのだが、優太の大きなお世話……いや、再会を一緒に喜びたいという小さな親切心から会うことになってしまった。

はじめはもつと気まずいかと思ったがそれはまったくなかった。

というもの、いじめていたことを覚えているのは聖だけだったからだ。

そして最後は無事に長い間果たしたかった彼女への謝罪も無事に終わり、安心してきっていた。

しかしそれがいけなかった。

安心したあまり誤解を招くことを口走り、衣と優太に大喧嘩をさせてしまった。

それはとりあえず未散の活躍で收拾がついたのでいいとしても、今困っているのはどういういきさつでなのかわからないが未散にまで誤解されてしまっていることだ。

早く違うと言わなきゃとは思っているものの、なんかどうも機会を失いいまだに言えていないのだ。

まずいよなあ……いい加減言わないとなあ……。

自分でまいた種ではあるが刈り取りがこの上なく厄介。

「あーくっそあ！めんどくさいなあ！」

そう言うってはがりがり頭をかく日々を最近の聖は過ごしていた。

県大会前日の、最後の練習の休憩中。

「……なあ優太」

「ああ？」

「おまえってさ、吉岡のこと女としてみたことないわけ？」

「……は？」

優太は聖の疑問に返事するように「何を言ってるんだ聖は」という顔をした。

ここ最近の聖の疑問は1つ。

それは、未散と優太のありえないほどの仲の良さだった。

それは単に聖にはあんなに男同士のように何でもかんでもい合える女性の存在が今までいかなかったただけなのだが、それにしても2人の関係が聖にとっては考えられないのだ。

「だって、中学のときは吉岡って美人で有名だったじゃん。優太知らないか？」

「え、そうなの?!」

聖の聞き捨てならぬ情報に優太はぎよつとして聖を見る。

これはどう考えても優太に聞いたのが失敗だったな……。

自分の好きな女以外は誰がかわいとかそういう話にはてんで弱そうな優太にはしてはいけない質問だったと、自分のミスを認めざるを得なかった。

「あーでも聞いたことあるよ、それ」

「うん、俺も知ってる」

「俺さ、今だから言えるけど吉岡のことこっそり見に行った。みんな巻き込んで」

「俺も行った。『吉岡さんがいるぞ!』って誰かが言うから『嘘?!どれどれ』って」

「でもちよつと実物見てがっかりしたかなあ、黙ってればいいのに」



並木相手に本気で喧嘩するし。あれは女じゃない」

「あ、それ言ってる」

「でもそれだからいいんじゃない？並木とおんなじで。あの見た目で中身も女っぽかったらそれはそれで扱いにくい気がして俺はヤダね」

「あーそうかもなー」

いつの間にか聖と優太会話を聞いていたまわりがやいやいや言い始めていた。

「正直言っていないなあ、未散とは最初からあんな調子だし」

難しい顔をしながら優太は聖に答えた。

「……でも」

優太はまた首をひねって聖に答える。

「俺の背があと15センチくらいでかいか未散の背が15センチくらい小さかったらわかんなかったかも……まあ仮定の世界だけど」

いや待てよやっぱりそんなことになっても一緒かな、と優太はまだぶつくさ言っている。

「小橋がいるのか？」

聖は試しに優太に突っ込んでみた。

すると優太からはこれまた驚きの答えが返ってきた。

「だって先に仲良くなったの未散だし。衣なんか未散がいなかったら喋れてねーもん」

そう言いながら優太は立ち上がった。

「確かにおせっかいだしすぐ怒るし暴力的だけど、俺は衣とは違う意味で未散は好きだね。なんていうの、未散は聖とおんなじなんだよ、男とか女とかじゃないっていうかさ」

そこまで言うとうと優太は座っている聖を見下ろした。

「俺は未散の彼氏になりたいとは思わない。けど、未散の彼氏が変わな男だったら俺きつと許さないだろうね。アイツに変な虫がつかないようにしないと」

「……お前は吉岡の保護者か」

腰に手を当て鼻を膨らまして語る優太を見上げ、聖は鼻で笑った。

だが、聖は思う。

優太は未散を友達と思っている。

けれど、未散は……？

こういうときに限ってどっちかが恋愛感情持っていたりするからなあ……。

実は聖はそれを恐れていた。

惚れるときは背が自分より低いとか友達が惚れているとかなんて関係ないもの。

もし未散がそれに該当しているとしたら……。

ひとまず様子を見てみるか……。

そんなわけで聖の偵察はまだまだ続くのだ。

未散の核心に迫るそのチャンスはすぐに訪れた。

バスケ部は毎日交代で男女一人ずつあと片づけをすることになっている。

で、今日は優太と未散が当番なのだが、

これは聖に片づけ当番を代わってもらわなくちゃ。

きつと未散が喜ぶだろうという実に安易な考えのもと、本当は今日の男子の当番は自分なのだが優太は帰ろうとする聖の背中を追いかけシャツの裾を掴んだ。

「聖、片づけ当番代わって。次聖に当たった日に俺やるから」

優太はお願いっ！といわんばかりに聖に手を合わせた。

「いいけど、な……」

聖が「なんで？」と聞こうとする間もなく、

「サンキュ、じゃ、よろしく！」

優太はあっという間に部室へ消えていった。

相変わらず早いな。

聖は「な」だけ言ってやめていた。

「あれ？優太は？」

その頃未散はというと、転がっているボールを拾いながら優太を探していた。

「優太は俺に当番押し付けて帰ったよ」

はい、と聖はすぐそばにあったボールを拾って未散に渡した。

「あ、ありがと……」

もーなんてことすんのおバカ優太っ、少しは心の準備させてよ……。

優太から何も聞いていなかった未散はこの急展開についていけず心の中で優太にクレームをつけ、聖に対してちゃんと笑っているだろうかと不安になりながらも聖に笑顔を作って礼を言った。

これって偶然？それとも優太がわざと？……いや、それはないな……うん、ないない。優太に限ってそれはない。

ついさっきまで自分が言いだしっぺで男子の間で未散の話をしていたのでもしかして感づかれたかと思ったのだが、考えてみたら優太がそこまで敏感じゃないことに気がついて聖は掃除用具室にモップを取りに行きながら1人納得する。

「……あのさ」

唐突すぎるかなと思いつつも聞くなら今しかないと思った聖はモップをかけながら思い切って未散に声を掛けた。

「何？」

未散は相変わらずボールを拾い続けている。

「吉岡ってさ、ありえないくらい優太と仲いいよね」

「え？」

「いや、俺には2人の世界は不可解というか」

どんな顔をしているのかわからないが、未散がこっちを見ているのが明らかにわかるのを感じながら聖はあえて床に目を落としたままモップをかけ続ける。

「吉岡は優太が男に見える時ってないの？」

「え」

「ま、俺の素朴な疑問なんだけどさ」

聖はモップの柄に寄りかかるようにして立つと意識して自分が発した言葉のままの表情で未散を見た。

「んーよく聞かれるんだよね、それ」

未散にとつては「またか」という質問だったらしい。

別に驚きもせず淡々と答えた。

「確かにバスケやってる姿はカッコイイよ、それは認める。だけど……バスケ取っちゃったら落ち着きないしおバカだし、あたしよりもすぐくちびだし。だからあたしの中では、実際はタメだけど『世話の焼ける後輩』に近いよね」

まるで優太と打ち合わせしたかのように、未散も優太をけなし始めた。

「けど、と未散は続けた。

「けど……喋ったこともないのにずっと衣が好きで、バスケも勉強も衣そばにいたい一心で頑張ってる……そんなのずっと隣で見えてきたから、優太に対しての『好き』は、もう別物になってたな。……あ、でも、そんなこと優太に言ったら絶対いい気になるから言ったことないけどね」

未散はちよつと笑いながら持っていたボールをかごにしまった。

「それ……嘘偽りない？」

「え？」

「誤魔化してない？」

「……うん」

なんで聖はそんなに確認するんだろうと思いつつも、未散は頷いた。

「いや……俺は女とそういう人間関係って作れないからすごいなって思っただけ」

「……そう」

未散にはあからさまには言えないのでなんとか聖はその場を取り繕った。

もしかして変に思われたかも、と心配ではあったが、未散の方は別に不信感を持つことなくまたボール拾いを始めていた。

よし、だったら次は「あの話」を修正すればいいな……。  
このときの聖はそう思っていたのだ。

……だが。

翌日に聖には予測不可能なことが待っていたのだ。

それはいつまでも未散に誤解を解かなかった代償として聖に襲い掛かる。

そして。

その代償に未散も巻き込まれてしまうのだ。

こんばんは、愛梨です。

ずっとこれを読んでいる方なら「聖、それはないから」って突っ込みたくなるでしょうけど、実は聖、かなり本気で「未散はもしや優太が好きなんじゃ？」と気にしました。

ああ、なんかいいなあこっぴい展開。

モロに高校生って感じで（笑）。

さて、次回からは県大会の模様をお伝えしつつ、最後にちらりと書いた『代償』もなんなのかを綴っていきます。

これ、「聖は衣が今でも好き」っていう誤解がなかったらただだ「きやあ〜！」っていう展開なんです、その誤解がある故にかなり心理的に切ない展開になります。

何が起ころのかは……読んでみてのお楽しみ、ということではないですか？ なにをもったいぶってるんだか（笑）

ということ、またです。

県大会は準々決勝が終了した。

……なんと。

聖たちはまだ残っていた。

つまり……県ベスト4に選ばれてしまった、ということである。

これは聖たちの高校では初の快挙らしい。

「ま、これもひとえにチビデカコンビのおかげだな」

どうも「チビデカコンビ」という言葉の響きが相当笑いのツボになっ  
ているらしく、理はぶくくくと笑った。

「チビデカコンビじゃないよ、ゴールデンコンビだって」

訂正しろよせっかく俺が考えたのに、と佳佑は理を少し口を尖ら  
した。

理のいう『チビデカコンビ』と佳佑のいう『ゴールデンコンビ』  
は同一人物たちを指している。

チビデカコンビの時点ですでに面が割れてしまっているが、これ  
は聖と優太のこと。

ゴールデンコンビの方はちゃんと佳佑が考えて命名したのだが、  
チビデカの方は、

「そついやさ、チビデカコンビ5年ぶりじゃん！」

なんて優太が聖に嬉しさのあまりうっかり言ってしまった、それを  
聞いていた理がかなり気に入ってしまったようで、どんなに佳佑が  
「それ言うな」と怒っても「あいつらゴールデンってガラじゃねー  
よ。いいんだってチビデカで」と一向に直そうとしない。

だが、チビデカコンビなんていうとまるでお笑い芸人のコンビ名  
だが、実力はどうとゴールデンに限りなく近かった。

いつもコートの中を冷静に見ては敵が「やられた」と思うところ  
にいつの間にかいて、ボールは奪い取るわ奪ったボールは絶対敵に  
回さないわおまけに点数までかつさらうわの並木優太と、圧倒的な

存在感で敵を威圧し次々とダンクを決めあつという間に観客を味方につけてしまう西倉聖のプレイングは、去年までは弱小バスケット部だったことも手伝って他のどんな一流プレイヤーよりも注目を浴びていた。

チームの方も聖が入部してきた日に冗談で言っていた「全国行っちゃおう？」がどんどん現実になりつつあり、チーム員のモチベーションは上がっていく一方。

さらにはついさっきまでやっていた準々決勝では、毎年県大会ベスト4か8まで勝ち残る高校になぜか勝ってしまったので本当にインターハイが見えてきていたのだ。

だが、やはりベスト4となるとそう易々とは行かない。

準決勝、残り時間2分。

現在、43対40で負っていた。

「まずいなあ、完全に並木の動きを封じていやがる」

「しかも、並木もさすがに疲れてますよね」

ベンチでスタンバイしている理をはじめとする部員一同は苦虫をつぶした顔をしてコートを見ていた。

相手は聖は身長があるので潰すも何もできないと踏んだようで優太を潰しにかかっていた。

優太一人に何人もついてマークしていたのだ。

それでも優太は何とか振り切ってきたが、いつもの3倍は動いているのでさすがの優太もバテてきていたのだ。

ここまで来たのに、こんなところで終わってたまるかっ。

3人がかりガードされながらも負けず嫌い根性丸出しで優太は肩で息をしながらも3人相手に睨みをきかす。

3人の様子をうかがっている間に、残り時間は1分になるうとしていた。

隙アリっ。

一人が隙を見せ、そこを突いて優太は前に出た。

見ていた聖が優太にボールを出す。



優太はボールを貰ってそのまま走った。  
ボールは……見事にリングをくぐった。  
味方の観客は総立ちで歓喜の声を上げた。

あと1つ、あと1つ……。  
ボードが40から42に変わるのを見ながら優太は元の位置に戻った。

だが敵もなかなか手ごわい。  
優太の奇襲を恐れてか今まで以上にディフェンスがきつくなる。

あと、どのくらい？

優太は時計を見る。

残り30秒。

あと1回ならたぶん持つな……。

正直足がもうぶるぶるしているが、30秒しかないならもう1本自分が決めて後はみんなでボール片手に逃げ回ればいい。

優太は敵の動きを見てフェイントをかけた。

敵は見事に引っかけかりガードが外れた。

見ていた佳佑が優太にボールを回す。

そして優太はそのまま走る……はずだった。

な、なにーっ?!

敵が一枚上手だったようだ。

先回りされ動きを止められる。

くそっ、誰か、誰かいないのかよっ?!

優太はボールを守りながらあたりを見渡した。

いた。

そこには、ノーマーク状態の聖がいた。

「優太、出せ！」

自分を見つけたと認識した聖は走り出した。

優太は聖を見てボールを放した。

敵は「しまった！」という顔をしながら慌てて聖に走り寄る。

だがその間にボールはすんなりと聖の手に移った。

聖は時計を見た。

残り時間、あと5秒。

ランニングシュートはもう距離的に無理。

くそ、こんな所からかよ。

そこは聖がいちばん苦手なシュートポジション。

でも、もう迷っている時間はなかった。

できる限りリングに近づく。

ピー……………。

ホイッスルが鳴った。

それと同時に聖はボールから手を放した。

ボールはまだ弧を描いてリングへ飛んでいた。

これが入れば逆転勝ち。

でも入らなかつたらここでチームは解散。

頼む、入ってくれ、頼む……………！

聖も優太も、佳佑も理も、みんなみんなボールの行方を送っていた。

聖の隣に椅子を運んでくると理はどかつと座った。

「西倉、正直助かったよ。ほら、俺たち受験生じゃん？このまま勝つちゃってたらみんな浪人生コースだったし。心優しい西倉は俺たち3年のことを考えてわざと外してくれたんだろ？」

理はそう言っただけで持っていたペットボトルを開けると入っていた水を飲んだ。

「公立の進学校が県ベスト4まで残るだけでも大したもんだ」

理は聖の左肩にもたれるように手を置いた。

「だからさ、そんなに落ち込むなって……な？」

理はできる限り笑顔を作り、聖の顔を覗き込んで聖に同意を求めた。

「……すみません……俺のせいで……」

しかし、聖は理の顔も見ないで謝るとまたうなだれてしまった。

理は完全にお手上げの表情でみんなに手で『ダメダメ』と合図した。

それを見た部員全員が最後の頼みの綱だった理の答えにがっかりしながら聖に目をやる。

こりゃほつとくしかないか……。

作り笑いをやめ理はさっきから誰が何を言っても謝る以外は何も語らずピクリとも動かない聖にため息をついた。

「おい相方」

理は優太に肩を組むとしゃがませた。

「なんかないのかあいつを立ち直らせる方法は。みんな帰れねーよ」

理は優太にヒソヒソ話す。

あのあとボールは……リングにはじかれ床へバウンドし、試合は終了した。

でも3年生は、

「今まで地区大会1回戦敗退が常だった俺たちがここまで来れた。それだけで何も思い残すことはない」

「ここで終わっておかないと受験がヤバイ」

とかなりの爽快感あるいは安堵感がなく、他のメンバーも、

「優太1人ではここまで来るのは無理だった。聖が来てくれて、コンビ誕生のおかげでここまで来れた」  
と思っっている。

つまり、聖を責める気など誰一人として更々ない。

だが聖はというと、

「負けたのは全部俺のせい」

とすっかり悲劇の主人公になってしまっているのだ。

最初は佳佑が、

「西倉が来てくれた最後の2週間がいちばん楽しかったよ。おまえと並木のおかげで俺たちは夢を見た。ありがとな」

と声を掛けたのだがそれがいけなかったらしい。

聖はこのときも佳佑の顔を見ずに、

「……連れてけなくて、ほんと、すみません……」

と、佳佑は涙ながらに謝罪されて終わってしまったのだ。

そのあとみんなであれこれ考えて聖に声をかけるが全てムダに終わってしまった。

もう打つ手がない。

しかしこのままにするわけにもいかないので多分何も出ないとわかってはいるのだが理は優太に案を練らせようとしたのだ。

「んなこと言われても俺わかんないっすよ。あそこまで落ち込んだ聖見たことないし、試合に負けても俺あそこまで落ち込まないし……」

……俺に聞かないでくださいよ」

理の想像通りの返事が優太から来る。

「並木はほんとおめでたいヤツだな……お前のその性格、少し西倉に分けてやれよ」

「んなこといわれても。あれが聖のいい所なのに俺みたいになっちゃったらダメに決まってるじゃないですか。聖はいいんです、あれで」

理の嫌味に全く気がついてない優太は真っ向から正論で反撃する。

「わかる、それはわかるよ、うん。並木が2人いたら俺たちも迷惑だしな……って、バカ。今はそんなことどうでもいいんだよ、なんかないのかよ?!」

話に乗った自分が悪いのに、理は優太に責任転嫁した。

「じゃあ聞きますけど、理先輩がもし落ち込んだらどうしてほしいんです?」

「そりゃ決まってるだろ、かわいい女の口に『元気出して!』って言うて貰う」

「……それって、聖にアリだと思います?」

「あん?」

理が気のない返事をする、優太が藁にもすがる思いのような目で理を見つめてくる。

やべ。こいつ俺の答え、本気にしてやがる。

こっちはちつとも真面目に答えていないのに優太は大真面目に理に質問してくるから理はちょっとだけドキドキしてしまっていた。

「さあなあ……けど、男に言われるよりは少しは意味あるんじゃない? だって男がさんざん励ましたのになれだぞ?」

理は優太にそう言いながらやっぱ1ミリも動かない聖を再び見た。

「……わかりました。理先輩、あとは俺がなんとかしますから打ち上げ先に行っていていいですよ」

優太は理に自信満々な顔をした。

「……ほんとに大丈夫か?」

理はそんな優太に心底心配な顔をする。

「はい……多分ですけど」

「……わかった、あとはまかせた」

理はニツと笑って優太の頭をぐりぐりと撫でると、

「よし、みんな帰るぞ、打ち上げ行くぞ！」

と手をパンパン叩いてみんなの輪の中に入っていった。

そして優太の方は……部室の物陰に隠れ携帯電話を取り出し未散の番号をしていた。

かわいくないけどまあいいだろ。未散のこと聖は綺麗なコッと思ってるし。

優太は未散の番号を見つけると発信ボタンを押した。

優太から電話が入るなんてこれっぽちも考えていない未散は、「男子お疲れ様会」の会場になっているカラオケボックスで他の女バス部員と一緒に歌って踊ってタンバリンを振り回していた。未散たちのいる部屋は主役達そっちのけで大いに盛り上がった。

「もしもし?! え?! なに?! 聞こえない!」

ポケットに入っていた携帯がぶるぶるいうので出てみたが、何も聞こえない。

「ちよつと待つて! 切らないで!」

未散は部屋を出た。

「……はい、ごめんなさい。どなたです?」

『どなたです? じゃねーよ! なんだよこっちは大変なのに!』

電話の相手は優太だった。

『未散、悪いんだけどさ、学校戻ってきて?』

「なんで?」

『いいから戻ってきてくれよ』

「だから、なんでって聞いているの。なんで戻らなきゃいけないのよ」

いきなり命令を出してくる優太に対して、学校まで自転車で15分もかかるのでめんどくさいと思ってしまった未散はなんとか逃げる口実を作ろうとする。

『未散さ、最後聖が外したの見てただろ?』

「うん」

『誰も聖が最後に外したことなんて責めてないのに、どうもまだ最後に外したこと気にしてもう1時間も座ったまま動かないんだよ』

「……で?」

『で、もう男じゃダメだから女にしようってことになって……』  
「……で、あたしなわけ？」

優太の用事がようやくわかった未散は今度は逆に優太に質問をした。

『だって未散しか思いつかなかつたんだもん……』

優太の答えは語尾になるにつれ小さくなる。

『な、このままじゃ聖動かないんだよ。未散頼む！待ってるから』

「え、や、ちよ、ちよつと優太?!」

イイモイヤも未散が言う前に、電話はぶちつと切れた。

なんなのよ、言いたい放題言つて。

「あーもう！なんなのよ!」

携帯をポケットにしまいながら怒りつつも、未散はもう1回ポケットに手を入れていた。

そして……自転車の鍵を握り締め廊下を走り始めていた。

「……な、ひどいだろ？」

「……………」

優太のことを無視して未散は聖に気づかれないようにこっそり開けた男バス部の部室のドアを無言で閉めた。

「……ね、ほんとにあれをあたしがなんとかするの？」

眉間にしわを寄せて未散は優太に振り返った。

「なんとかして。とりあえず俺たち男はもう降参だから」

「ごによごによと言いながら優太はポケットから部室の鍵を取り出した。

「ハイこれカギ……あとは頼んだ!」

優太は部室のカギを無理やり未散に押し付け、逃げるように行つてしまった。

「やっぱり優太はおバカだ……………」

優太の小さくなっていく足音を聞きながら未散は大きく大きくため息をつき頭を抱えた。



昨日といい今日といい一応優太としては気を利かせているつもりなのだろうが、これはちよつと違う気がする。

ただの部活仲間の女と好きな女では同じ「元気出して！」の言葉でも相手への入り方は全く違う。

それをわかっていてやるなんて気が遠くなりそうだった。

あたしなんか来たって意味ないじゃん……あたしが言ったってしょうがないじゃん……衣が言わないなら誰が言ったっておんなじだよ……。

未散はまた、はあと深く深くため息をついた。

誰かが部屋に入ってきたようで、ギイという開く音と、バタンと閉じる音が聞こえた。

誰もいない部屋はドアの開いた音さえも響き渡る。

誰だ……？

聖はそうは思ったものの顔を上げる気力すらない。

だがドアを開けたその人影は何も気にせず聖に近づくとすぐ正面に立った。

「聖くんいつまでそうしてるつもり？もう行こ？みんな待ってるよ」

声を掛けてきたその女は、そう言つと聖の目の前まで来てすつとしゃがみ込んだ。

なんでここにいるんだよ……カラオケやってたんじゃないの  
よ……。

顔なんか見なくても、自分の名前を呼ぶその声だけで誰なのかは  
すぐにわかった。

こんな情けない姿をいちばん見られなかった女。

だけどホントは、いちばんここに来て欲しかった女……。

その彼女 未散が、今は手を伸ばせば簡単に触れられるぐらい  
すぐそばにいる。

そう思っただけで顔を上げそうになり、この手が未散を手繰り寄  
せそうになった。

そのまま未散に甘えてしまいそうになった。

……だけど。

そんなにみつともない自分を未散にさらけ出す勇氣なんて聖には  
ない。

「……別に吉岡には関係ないだろ？！何しに来たんだよ！お前こそ  
さっさと帰れ！」

今未散の顔を見てしまつたら涙腺が壊れてしまいそうだった。

聖はわざと顔をそむけ大声を張り上げた。

「帰れないよ……そんな聖くん置いて帰れないよ……」  
だが、未散は全く動じない。

聖の横顔を優しい眼差しで見詰める。

未散のその声もその瞳もどこまでも暖かくて、荒んでしまつた聖の心に染み込んでいく。

「なあなんで……なんで誰も俺を責めない……なんでみんなそんなに優しいんだよ……？」

ずっと誰かに聞きたくても理由はないけれど何となく怖くて聞けなかつたことを、目の下を涙が出ないように抑えながら聖は独り言を言い始めた。

「俺が外したから終わっちゃつたんだよ？俺が最後入れてたら、俺たち勝つてたんだよ？インターハイだつて行けたかもしれなかつたんだよ？なのに俺は……」

そこまでだつた。

聖はそれ以上は続けられなかつた。

言葉にした途端思いがどんどん溢れてきて、その思いはみるみる涙に変わっていく。

涙は聖の指や腕を伝い、床へ1つ、また1つと落ちていく。

「……そうだね、聖くんが外しちゃつたからみんなの努力全部台無しになつちゃつたよね」

え？

急に冷たくなつた未散に驚いて聖は涙も拭わずに未散を見た。

未散はいつの間にか立ち上がつていて、冷やかな目で聖を見下ろしていた。

「だいたいさあ、なんであんなところから投げたわけ?!あそこは聖くんがいちばん入らないところじゃない。あと5秒もあつたのにまっすぐ走つちゃつてさ、焦って博打みたいなこととしてしてバツカじゃないの?!」

未散は「言い返せるもんなら言い返しなさいよ」と言わんばかりに腕を組み、聖を斜めからじーっと睨んだ。

このっ……！！

「わかったようなこと言うんじゃないよー！お前に何がわかるんだよ！」

未散の言葉に聖は完全に血が上がっていた。

立ち上がるとその勢いで未散に近づき思いきり彼女の左肩を押しつけた。

未散の体は後ろへ放り出され……そのままロッカーにぶつかった。

ぶつかった衝撃に耐えられず未散は顔をしかめた。

「……ご、ごめん」

言われてついカッとなつてやったものの目の前で痛さに顔を歪ませる未散を見て、「女相手に何やってるんだ」と我に返った聖は未散に手を差し出した。

しかし……未散はその手を押し戻した。

「いい、大丈夫、大丈夫だから……これぐらいのことされるってことぐらいわかってたから」

痛さで顔が上げられなくなっていたが、未散はそれでもなんとか聖に言葉を返した。

「……気が済んだ？」

なんとか顔を上げ、未散は聖に聞いてくる。

「……え」

だが未散が何を聞きたいのかわからない聖は何も答えられない。

その様子を見た未散はできる限りの笑顔を聖に向けた。

「誰かに1回はこのぐらい責め立てて欲しかったんだよね？これでよかった……？」

未散はまだ痛みを堪えようとして左肩を自分の右手で押さえると唇を噛んだ。

「ごめんね聖くん、傷口に塩塗るようなことして……」

肩が痛いせいなのか自分をなじったことに心が痛いのか、謝る未散は声を詰まらせた。

それでも自分を心配して「あたしは平気だからね」という代わりに聖に懸命になって笑いかけた。

「吉岡……なんで……？」

どうしてそこまでしてくれる？

なんでわざわざ学校に戻ってきてくれた？

そうやって笑ってくれて「みんな待ってるよ」って迎えに来てくれて。

逆ギレされる覚悟で毒づいてくれて、ホントはなんにも悪くないのに「ゴメンね聖くん」って謝ってくれて……。

未散に聞きたいことは次から次へと溢れてくる。

そのせいで言葉がついてこない聖は、その一言だけをやっと呟いた。

「なんで、って……だってしょうがないよね、優太に頼まれたっていか押し付けられちゃったし……でもね」

ちょっとだけ未散は笑うと聖を見つめた。

「もうこれ以上自分を責めないでほしかった。だって……誰も聖くんのせいで負けたなんて思っていないもん。優太1人の力じゃこまで来ることはできなかったって、みんなわかっているんだよ……？」

未散は足もとにあった聖のバッグを手に取った。

「だから……早く行こ？」

ほら早く持つて！重い！と最後は冗談で怒りながら、未散はバッグを持ったその手を聖に差し出した。

こいつを、誰にも渡したくない。

未散の笑顔に聖は完全に負けた。

理性も倫理観もなにかもが全部飛んでいった。

聖はバッグを持ったままの未散の手をそのまま自分へと引っぱった。

その行動に驚いた未散は、バッグから手をはなしてしまった。

バッグはドサツと音を立てて床に落ちる。

けれど聖にはそんなものは聞こえていなかった。

優しくなんかできなかった。

ただ、ほんとにただ、ほんのわずかでもそばにいたくて力いっばい未散を抱きしめていた。

「もっいいいよ……俺のためにそんなに頑張るなよ……ごめん……痛かったよな……」

背中に戻っていた聖の片方の手はロッカーに当たってしまった未散の肩を、そしてもう一方の手は頭を優しく撫でていた。

それがよほど堪えたのか、堰を切ったように未散は泣き出した。

今ここにいる未散はいつもの「男勝りのデカ女」なんかじゃなかった。

どこにでもいるごく普通の女の口。

自分の腕の中で小さくなって泣いている、自分の誰より愛しい女ひと

……。「頼むからそろそろ泣きやんでくれよ」

聖は困ったように笑うとなかなか涙が止まらない未散の肩に手を置いて少しだけ体を起こした。

「う……う、ん……う、ごめ……ごめん、ね……」

未散は一応そう返事はしてくれたものの、目を閉じたまましゃっくりを上げ涙を拭い続けている。

その未散の姿があまりにかわいらしくて、聖の心臓は肩に置いた自分の手から未散に伝わるんじゃないかというくらい大きく音を立てた。

「……………」  
それは聖の中にあつた『最後の理性の砦』のようなものが崩れ去った瞬間だった。

「……………」  
聖は何も言えないまま背中を丸めてかがんで未散へ顔を寄せると、左の瞼の上にそっと唇で触れた。

その唇がゆつくりと脛からはなれると、聖の手は未散の肩からもはなれた。

その手はまるで未散を包むようにロッカーに置かれると、再び未散との距離を縮めた。

少し時間がたって未散からから離れると、未散はなんともいえない微妙な表情をしていた。

嬉しそうでない……けれど悲しそうでもない。

でもだからといって怒っているわけでもなかった。

「……ごめん」

今まで自分が感じたことのない気まずい空気に、聖の頭の中は真っ白になっていた。

だが何の承諾もなくあんなことをしたわけだから……とは思ったように、聖は未散に謝った。

謝った自分に未散はなんと返してくるのか……。

いきなりひっぱたかれるのかそれとも逆に横に首を振って笑ってくれるのか、それとも。

さつきから未散が俯いているのをいいことに、聖は不安げな顔を隠すことなく未散を見下ろしていた。

だがそれに対しての未散の言葉は、聖にとっては余りにも意外だった。

「なんで？なんで謝るの……？」

「え……？」

未散はまだ顔を伏せたままだった。

それなのに目が泳いでいるのがはっきりと聖から見えるほど、未散は聖から謝られたことに動揺していた。

「いや、だって俺かつてにあんなこと……」

謝った理由を言わなくてはならなくなった聖はそう口を開いたが、その口調が気に入らないのか未散は聖を突然押しつけた。

未散は顔を上げた。

その表情は……明らかに切なそうで、そして悔しそうだった。

「吉岡……？」

その表情の理由<sup>わけ</sup>が聖にはわからないまま聖は彼女の名前を呼ぶが、そのあと未散が発した言葉に聖は衝撃を受けた。

「なんで謝るの？衣の代わりだから？！謝るくらいなら最初からこんなことしないでよ！」

「衣の代わり」と言った途端、聖を睨みつける未散の目にはまた涙があふれた。

「吉岡、違うよ？俺は小橋のことはもう……」

衣の代わりにしたつもりなんかこれっぽっちもなかった。

もしここに衣がいたのなら少なくとも自分はもつとそつない対応をしたはずだ。

『帰れ』なんて怒鳴りもしないし攻め立てられて逆上することもきつとない。

そして……あんなふうに触れることも決してない。

自分があんなことをしたのは目の前にいるのが未散だったから。

それ以外の理由なんてどこにもない。

しかし話を聞きたくない未散はとめどなくこぼれる涙を自分で拭いながら、聖が言っているそばから言葉を重ねた。

「言い訳なんかしないで！認めなさいよ、衣の代わりにしたって！」

「吉岡、頼むから聞いて？俺は……」

「もういいやめて！そんなのしなくていい……そんなのいら……！」

すでに感情的になっていく未散には聖の声なんて聞こえなかった。

未散は聖を睨みつけそう言い放つと自分で顔を覆った。

部屋にはただ未散のすすり泣く声だけがこだまする。

それを聖はまるで何時間も聞いているような錯覚に陥っていた。

「……聖くんもう行って、みんな待ってるから」



やっと喋れるようになった未散は涙を拭いながら聖に呟くと、聖の肩を押した。

「吉岡そんなにして行けないだろ」

自分を追い出そうとする未散の手を聖は取るうとした。

だがパシツと乾いた音を立てながら、未散は聖の手を払った。

「あたしは大丈夫だから心配しないで……あとであたしも行くから、聖くん先に行つて」

未散は再び聖の肩を押し始め回れ右をさせた。

「ちよつと待てよ、俺一人で行つたらおかしいだろ」

聖は振り向きながら未散に反論する。

「いいからもう行つて、早く！」

しかし聖の話を全く聞かず、未散は聖を今度は無理やり引つ張つて部室のドアを開け廊下へ出すと、荷物も聖めがけて投げつけた。

「吉岡ちよつと待つてつて、おいっ……！」

聖がバッグをキャッチするのに気を取られた隙に未散は、バン！とドアを閉めた。

「おい、吉岡、開けろつて！」

未散にカギまでも内側から掛けられてしまった聖は部室のドアをガンガン叩いた。

「お願いだからもうほつといて！優しくなんかしないで……！」

ドアの向こうで未散が泣き叫んだ。

未散の声を聞いた聖はもう、ドアを叩くことができなかった。

ドアを叩こうと振り上げていた拳を聖は虚しい思いで下ろした。

なにやっつてんだ俺は……こんなはずじゃなかったのに……。

未散はドアの向こうできつと今も泣いているのだらう。

たった1人で悲しい誤解をしたまま。

吉岡……ゴメン……ゴメンな……。

本当は声に出して言いたかった。

だけど今は言えば言つほど未散は受け入れてくれない。

それがわかる聖はドアにもたねると届くことのない謝罪を今はもう姿の見えない未散に繰り返していた。

数センチもない未散との隔たりのはずなのに、今の聖にはこのドアが想像を絶する厚さを感じていた。

Vol. 41 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

実はこのシーン、もう何回書き直しをしたかわかりません。

どうやったら読んだ方が「うわ、これ切ないわ」って思うかを考えて考えて考えて書きました。

でも……今でも正直満足してないです。

だからここはこれからも思いついたら書き直すと思います。

結局未完成な感じのまま公開してしまいます、すみません……。

ここまでではどちらかという聖視点で書いてきたので、次回は未  
散視点でお送りします。

聖の気持ちなんてこれっぽっちもわかってないが故の切ない心境  
を語ってもらいましょう。

というわけで、またです。

Vo1・42(前書き)

中途半端に推敲しては保存してたので読みにくい時間があったと思います。

すみませんでした。

部室にひとりになった未散は嗚咽を堪えようとして下唇をギリ、と噛んで大きく肩を震わせた。

優太に聖をなんとかしてくれと頼まれたあのときからわかっていたはずだった。

今日まで苦楽を共にした仲間たちにどれだけ慰められても立ち直れなかった。

そうなってしまった聖の笑顔を取り戻せるのはたった一人、聖の想い人 衣だけだ。

だけどいくら優太でも自分の彼女を差し出すわけにはいかない。だから半分おせっかい、でも半分はなんとかしてほしくて未散に頼んできたのだろう。

引き受けるんじゃないかった……戻ってこなきゃよかった……電話になんか出なきゃよかった……。

もしあの時電話にさえ出なかったら、自分がこんな目に遭うことはきつとなかった。

ちよっぴり辛いけど、でもまだ明日からも聖と他愛もない話をして笑っていられた。

けれど明日からはもうそれすらも叶わない。謝った聖に対して許さなかった自分。

それは紛れもなく『絶交』を未散から聖に突きつけてしまったよ。うなものに違いなかった。

なんで……なんであんなことしたのよ……？  
わからなかった……いやそうではない、わかりたくなかった。

必死になつて「頼むから聞いて？」と訴えてきた聖の顔が何度も何度も未散の頭の中で浮かぶ。

もしかしたら聖の言い分を聞いてあげてもよかったのかもしれないと一瞬は思うのだが、次の瞬間にはその考えはいともあっさり握

り潰される。

その理由はただひとつ、聖の、

「ごめん」

という言葉だった。

謝る時というのは当然だが相手に対して「悪いことをしたとき」だ。

その聖が未散に対してやってしまった「悪いこと」とは、今の未散には思い浮かぶものが1つしかなかった。

それは……未散を使って衣の面影を聖は探していた、ということ。それを聖から聞くことだけはどうしてもイヤだった。

だから……未散は聖が口を開くことを許さなかったのだ。

優太に置いていかれひとりになってしまったとき、「衣じゃなかったら誰が来たって嬉しいわけない」とわかっていながら部屋に入るのは億劫で仕方がなかった。

そして案の定聖は「帰れ！」と未散を見もしないで怒鳴りつけた。その聖の姿そのものは当然刃となり、未散の心をズタズタに切り裂いた。

なによ！人が心配してるのに！と怒鳴り返しそうになった。

いや……あの時の未散にはもうそんな力はなかった。

何も言えずめそめそ泣きながら部屋を出てしまっていたかもしれない。

だけど……そこは惚れた弱みでつい頑張ってしまった。

「帰れないよ……そんな聖くん置いて帰れないよ」

怒りも悲しみもグツと押し込んで必死で笑顔を作った。

「じゃあ勝手にしろ、俺は帰る」

そう自分に吐き捨て聖は部屋を出て行ってしまいかもしれない。自分を拒絶する聖の空気に吞まれ、一度はそこまで考えた。

けれどそのときはきつと、今度は自分が部屋から動けなくなっていた。

誰にもすぐることもできず1人で泣いていたかもしれない。

いや……もしかしたらもうそんなことをする気力もなかったかもしれない。

聖はどうするのだろうか……顔は笑っていたが内心はヒヤヒヤしっぱなしだった。

するとどうだろう、聖はこう返してきたのだ　何で誰も俺を責めない、と。

そのとき未散は気がついた。

きつと聖はみんなに「おまえが外したせいで負けた」と言われるとばかり思っていたのだ。

ところがそんなことを言う者は誰一人としていなかった。

それどころか感謝された。

いつもなら地区大会予選第1回戦で敗退のこのチームが県大会ベスト4まで残った。

もしもインターハイ出場ともなれば目指す大学によっては浪人覚悟で受験しなければならなかった。

人によるだろうがこの2つのうちのどちらかの理由でみんなありがたく思っていた。

けれどそれは聖にとっては余計に辛かったのだ。

みんなに気を遣わせてしまった　そう思ってしまったって申し訳なかったのだ。

「……………」

未散は静かに立ち上がった。

聖はきつとキれるだろうとわかっていた。

こんなこと言われたら自分だって怒り狂う。

けれど誰かがやってあげなかったらきつと聖は今日のこの失敗をいつまでも引きずり続ける。

そうなってしまうせばせつかく誕生した佳佑命名の『ゴールデンコンビ』は次の大会では機能しなくなってしまう。

そんなことはきつと誰も望まない　。

未散は覚悟を決めたかのように深呼吸した。

そして腕を組むと上から目線で聖を毒舌で斬った。

「あと5秒もあったのにまっすぐ走っちゃってさ、焦って博打みたいなこととしてしてバツカじゃないの?!」

もちろんこれに聖は憤慨した。

お前に何がわかるんだよ!と本気で聖に肩を押された。

本当はそのままの勢いで聖が部屋を出て行ってくれればよかったのだ。

そうすれば多分あとで優太かそれとも理か佳佑あたりが自分をフオローしてくれるだろうからそれで話は丸くおさまる。そんな可能性もあったのだ。

だが、ロツカーに打ちつけられた肩は予想以上に痛かった。

そして何より……引きちぎられそうなくらい心が痛かった。

だからつい「痛い」と顔に出してしまった。

別にそれだけならよかったのだが、……間の悪いことにそれを聖に気づかれてしまった。

「もういいよ……俺のためにそんなに頑張るなよ……ごめん……痛かったよな……」

あのとときの聖の優しい声とあたたかくて大きな掌に、未散の中にあつた「聖を元気づける任務」という名の張り詰めていたものが崩れていった。

もう2度とこんなことがなくてもいい。

だから今だけは……。

そう思っただけで聖の着ていたジャージを掴む手が震えた。

そしてこのあと未散は、目を閉じている間に聖が自分にしてきたことに動けなくなった。

ずっと思っていた。



…？

聖くんの瞳に今映ってるのはあたし？それとも、やっぱり衣…

聖が今どんな表情かおをしているのかを見るのが怖かった。

だから目を開けるときは恐るおそるだった。

勇気を出して聖を見ると……聖はなんだか困惑していた。

そして最後にこう言った。

ごめん、と。

謝られたとき自分は衣の代わりにすぎなかつたんだと思い知らされ、胸が張り裂けそうだった。

未散、好きな女の唇っていいぞあ。

いつだったか言っていた、優太のあの言葉を未散は思い出ししていた。

あの時は「何を言ってるんだコイツは」とかなりむずがゆい思いで聞いていたが、今は確かにそうだなって思う。

思う、けど……。

聖はきつと目の前にいる女ひとを自分とは思っていないのだ。

衣は来るわけないしあんなことはどう逆立ちしたってできっこない。

きつと聖からしてみたらここに来た女ひとだったら誰でもよかったのだ。

この瞳さえ閉じてしまえば、目の前に衣がないということから解放される。

そうすれば目の前にいるのは衣だという幻想を見ることができ

そんなうたたかの夢を見るために、聖はたまたまこの場所に来た自分を利用したに過ぎないのだ。

誰かに、この寂しさを埋めてもらうためだけに。

あんなふうに見えるときなんて、相手も自分のことを想ってくれているときだけだよ……。

聖の「ごめん」というあの言葉で現実に引き戻された今は「結局自分は衣の代わり」と言う事実だけを突きつけられ、それを受け入れる選肢しかないことだけがどこまでもはてしなく虚しい。それなのに。

聖のあの瞳が、抱きしめてくれた腕の強さが、聖の唇が重なったときの甘い痺れが、未散を捕らえてはなさない。

聖くんずるいよ……あんまりだよ……。

未散はドアに寄りかかったまま天井を見上げた。

これ以上涙がこぼれないように目を閉じたが、未散の目尻はすぐに濡れていった。

こんばんは、愛梨です。

誤解とはいえ、聖と違って「自分が恋い慕う人には想い人がいる」と思っている未散。

これは大人であっても大混乱です（汗）。

でもかわいそうなのは未散の思考回路が偏っているというか何と  
いうか、悲観的なところ。

だから逃げてしまったわけです。

もし未散が勇気を出して聖の言い分を聞いていればまとまった話  
なのに……。

まあ、まとまらないから話を続けることができるんですけどね（  
苦笑）。

さて、未散に追い出されてしまった聖くん。

今度は優太に説教を食らいます。

でもちよつと切ない話が続いたので、説教は説教でも優太らしい  
方向でいこうと思います（どうという方向だ？ 笑）。

ということ、またです。

カラオケボックスの通路で優太は腰に手を当て、じいつ、と聖を見上げていた。

「聖、未散はどうしただよっ?! なんでおまえだけしか来ないんだよっ?!」

「……だからさっき言ったじゃん」  
「嘘つくな!」

疑いの眼差しで優太は聖をまた見上げた。

未散に締め出されてから聖は廊下で30分間、

「吉岡、やっぱりおかしいから一緒に行こ? いい加減出て来いって」

と促し続けたが、

「行かない。聞かれたら『急に家から電話があったみたいで帰った』って言うておいて」

……と「未散がいないことを聞かれたときのトークマニュアル」まで作ってもらってしまった聖はもうなす術がなく1人カラオケボックスへとぼとぼ歩いた。

で、案の定「吉岡はどうした」とみんなに聞かれたが、未散作の即興トークマニュアルで難なくかわした。

……ただひとり、優太を除いては。

「今のは絶対嘘。そんなに言い張るなら未散の母ちゃんに確認するぞ?」

俺が納得できる説明をするまで中に入れてやらん、と顔に書いてある優太は相変わらず仁王立ちを続ける。

今が観念のしどきだな。

聖はふう、とため息をついた。

「……わかった、けど1コだけお願いがあるんだけど」

「なんだよ」

「怒つても殴つてもいいけど、頼むから最後まで話聞いて？」

「わかった、頑張るわ」

よし聖ここに座れ、と言いたげに先に廊下の床に座った優太は自分の隣をペチペチ叩いた。

「けど……中はいいのか？」

聖はドアを後ろ指で指して、ちら、と後ろを見る。

「大丈夫、みんなマイク争奪戦に熱中してるから。俺たち2人いなくたってかまやしないって」

いいから早く座れ、と優太は聖のジャージのズボンを引っ張った。

「……で？」

胡坐をかいた聖に優太せつつく。

「まあ、結論から言うとき、小橋にした話がまずかったというか、あれが事の発端というか……俺が話をややこしくしちゃったというか……」

そこから聖はぼつり……ぼつり……と話を始めた。

……10分後。

「……というわけです。ハイ、以上おしまい。質問は？」

聖は苦笑いしながら自分の膝に頬杖をつけて優太を見た。

「……ていうと、俺がココでバスケやってるの知ったのって俺が来るちょっと前だったってこと？入ったほんとの理由って俺じゃなくて未散?!」

「……ごめん」

「別にいいけどさ……あーもうなんだよそれ?! あん時の俺の涙返せっ!」

優太は聖と衣に一方的に怒って未散を励ましたあの日のことを持ち出して聖を横から押した。

「……ただこれ困ったぞ……」。

「……ちょうど話が終わったところで、」

「西倉、遅刻してきて歌わないとはなにごとだ!」

と、聖は部員に服を引つ張られ部屋へ拉致されてしまったので、ひとり通路に残った優太は「じゃあなー」と手を聖に振りながら考えを巡らす。

結局未散は誤解しているわけだろ？俺が違うって言っちゃえば話は早いけど、未散が信じなかつたら余計やこしくなるしなあ……てかさ、なんで聖って順番逆なの？言う前に手を出すんじゃないよ。俺だってやんないぞ、そんなこと……。

「あーもう！」

優太はひとり頭をかきむしった。

だがそんな悩める少年優太に、ほどなくして天……いや、衣の助けが舞い降りてくるのだ。

Vol. 43 (後書き)

どうもこんばんは、愛梨です。

さてさて、ついに優太は聖の本音を知ることになりました。

さぞかし嬉しかったでしょうけど……同時に悶々とする日々の始まりです(苦笑)。

で、次回ですが。

次回もちよつと、いかにも高校生らしい設定でお送りします。

そこで何が起るのか。

未散と聖の恋の行方はいかに？

引き続き見守っていただけたら幸いです。

という事で、またです。

これを読もうとしている方をお願いです。

私の操作ミスで順番が逆になっています。

これはVol. 45なのですが、これより前にVol. 44があります。

で、Vol. 44のほうは次にアップしています。

なので、Vol. 44を先に読んでからこちらに来てください。

ご迷惑をおかけします、すみません……。

本文はしばらくスクロールしていけば出てきますので少々お待ち下さい……。

廊下を歩いているとすれ違う男子生徒が全員振り返る。  
理由は簡単だった。

みんなみんな未散だなんて思いもしないで、

「な、あれ、誰?!」



と噂しているのだ。

「未散って誰もわかってねえのがおかしい」  
優太は未散の隣でくくくくつ、と笑った。

「おい並木、小橋に言いつけるぞ、誰だよ隣の美女は」  
廊下で作業している隣のクラスの男バス部のコが優太に声を掛けてきた。

「バーカ、未散だって」

疑うなら見てみるって！と優太は彼に手招きした。

「……嘘だあ！」

作業中の手を止め、彼は未散を見に来た。

「……吉岡？」

彼は顔を見て確認する。

「……うん」

未散はおどおどしながら小さく頷いた。

「……めっちゃかわいいじゃん！」

「うおーやられたー！と彼は一人で騒ぎ出した。

「だろ？明日来いよ、未散このカツコすっから」

優太は彼にそう告げて聖のクラスに向かった。

「よし……未散ここで待ってて」

あんまり聖のクラスに近いと未散にバレると思った優太は急に未散を立ち止まらせた。

「え、優太は?!」

1人取り残されるのが怖い未散は思わず優太のシャツの裾を掴んだ。

「心配すんなって、すぐ戻る」

優太は「放せ」と未散の腕を取り払うとそのままどこかへ行ってしまった。

もーやだよー優太どこ行ったのよお……。

未散は廊下の端っこだでできる限り小さくなって優太をひたすら待った。

いたいた。お、聖も男前じゃん。

聖の教室に着いた優太はずんずん中へ入っていった。

「聖！」

「おう、どうした」

ちょうど浴衣の着付けが終わった聖が優太に振り返った。

「聖ってなにすんの？」

優太は聖の浴衣姿をまじまじと見る。

「ああこれ？明日はテキヤの兄ちゃんってところ？」

「あ、そっか。それで浴衣なのか」

「俺としてはあっちの方がいいんだけど、なんせ俺がでかすぎてあ  
れ着るとつんつるてんになっちゃうんだよね」

聖はクラスの男子が着てる『寅さんスタイル』を指す。

「つんつる……？」

語彙力の乏しい優太は聞きなれない言葉と格闘する。

「要するに、俺があれ着ると丈が短すぎてカッコ悪くなっちゃうん  
だよ」

「なるほどね……でもいいなあ、やっぱり背があると浴衣姿カッコい  
いわ」

優太は羨望の眼差しで聖を見上げた。

「あ、そうだ。聖ちよつと来いよ、見せたいモンがあるんだ」

すぐ終わるからさ、と優太は聖の手を引いた。

「いいけど、なに？」

「いいから、来ればわかる！」

聖の質問には一切答えず優太はぐいぐい聖を引っ張った。

「……なにしてんだよ」

聖を連れてきた優太は影に隠れてこそこそしている未散の頭を後  
ろから小突いた。

「ちよつと、どこ行ってたのよッ?!」

こんな格好で廊下に1人にさせられびくびくしていた未散は半分涙目になって優太を睨みつけた。

「……吉岡？」

優太の後ろから浴衣姿の男が顔を覗かせてきた。

ひ、聖くん？！

最近は何となくいしかしてなくなっていたって覚えているその声に一瞬未散の心臓は跳ね上がった。

「……お疲れ」

聖は遠慮がちに未散に挨拶した。

「聖、どう？最初はさ、俺とおんなじ格好する定だったんだけど、これ大好評だからちよつと見せに来てみた」

優太はまるで聖に差し出すように未散を聖の前に立たせた。

やべえ……直視できないよ……それいきなり見せるの反則だろ

……。

目の前にいる未散のあまりの変身ぶりに聖は目線が定まらない。その上どどん顔が火照っていく。

「……………」

聖は思わず目を伏せてしまった。

やっぱりヘンなんだ……！

未散も未散で聖に目を逸らされてこの上なく恥ずかしくなってくる。

「あたしも帰る！」

未散は優太を押しつけ一目散に駆け出してしまった。

「あ、ちよつと未散?!」

優太は未散の腕を取ろうとしたがすり抜けてしまった。

「もう！聖のアホ！なんか言えよ！『カワイイ』ぐらい言ってやれよ、バカッ！何のために連れてきたと思っただよっ！」

後ろを見ていた優太は聖に向き直ってぐいっつと聖の浴衣の襟をつかみ、頬を膨らませて聖の頭を小突いた。

「……優太あれは困るよ……突然連れてくるなよ……」

はあああ、と聖はへなへなと床に手をついた。

「なんだよあれ……かわいいなんてもんじゃねーよ……俺オーバーヒートしちゃうかと思った……」

顔から湯気が出るんじゃないかと思うほど聖の顔は熱い。

あー作戦失敗かあ。

思っていた以上に聖に過敏な反応を示されてしまった優太は頭に手を置いてため息をついた。

文化祭当日。

「佳佑、おもしろい情報を入力した」

「……どんな？」

今佳佑はクラスの出し物であるお化け屋敷の受付をやっている、理は休憩中。

理は真面目にお仕事中の佳佑の隣の椅子に座った。

「今年1年のクラスで『メイド喫茶』やってるところあるんだけど、そこに『超エロカワイイ』メイドがいるんだって」

「へえ。……で？」

はいいらっしやいませ、と客をさばきながら佳佑は理の話に相槌を打った。

「で、どうやら並木と吉岡のクラスらしいんだよ」

「……それ、小橋さんのことじゃないのか？」

なんだたいした情報じゃなかったな、と心の中で思いながら佳佑は理にまた生返事をした。

「俺も最初はてつきり衣ちゃんのことだと思ったんだけど、どうやら違うんだよ……誰だと思う？」

理はもったいぶって話を続ける。

「……吉岡とか？」

オチが見えてしまった佳佑はつい普通に答えてしまった。

「なんで言っちゃうんだよ、つまんねーな！」

理はぶうっ、と怒ったフリをした。

「だったらもつとわかりにくく話しなよ」

佳佑はそんな理を見て苦笑した。

「佳佑くん的にはかなりのおもしろい情報だと思ってね……吉岡に言われに行ってみる？なんでも『いらっしやいませ、ご主人様』って言うてくれるらしいぞ」

理は佳佑の方を向くと机に頬杖をついた。

「……とか何とか言いながら俺にかこつけて理が言われたいだけだろ、さしずめ小橋さんあたりに」

ふん、と佳佑は理を見て鼻で笑う。

「……あ、バレた？」

理は足を組みふんぞり返った。

「あと10分で交代だから待ってるよ。そしたら付き合っよ」  
だからおとなしく座ってて、と佳佑は理を普通に座らせた。

身長以外は女のコだからなあ吉岡は。確かに『超エロカワイイ』かもな。

佳佑は慣れない姿でぎこちない未散を想像して、何となく楽しくなってしまうって、ひとりで笑いをこらえた。

6月中旬。

「それじゃサイズの確認をお願いしまーす」

クラス委員が言いながら順番にビニール袋に入った服を一人ひとりに渡していった。

明日は文化祭。

文化祭をやるのは学校によるだろうが、未散たちの学校はちょうど今の時期に行なう。

2週間前ぐらいから何をやるとか何を用意してとか忙しくしていた。

未散たちのクラスはベタに『メイド喫茶』。

男の客には女が担当し、客のことを「ご主人様」と呼ぶ。

女の客には男が担当し、客のことを「お嬢様」と呼ぶ。

……という実におバカ丸出しの企画だ。

で、今から貸衣装のサイズの確認を始めるところなのだ。

「ちよつとちよつと、本物の男よりカツコイイよそれ」

着替え終わった未散を見て一人が感想を言う。

「へへーそう?」

未散は意識して男らしく立ってみる。

「ねー未散、言ってみて言ってみて」

着替えながらまわりの女の口たちもはしゃぐ。

「いらつしやいませ、お嬢様。どうぞこちらへ」

未散は丁寧にお辞儀をした後、すっ、と手を差し伸べる。

「……どう?こんな感じ?」

「キヤー未散カツコイイ!惚れるっ!」

未散の振る舞いに女子更衣室は大騒ぎ。

女子はメイドの格好をするのだが、未散だけはメイドの格好をするには背が高すぎて合うサイズがないだろうということと男子と同

じ格好をすることになったのだ。

それが今、見ていたクラスの女子にウケまくっていたのだ。

未散はメイドさんのほうが絶対いいと思うんだけどな。

……ところが、1人だけ納得いかない顔をして声にならない声で異論を唱えているのが、すでに着替え終わった衣。

確かに背は男並みだけど、その分足も長いからこのスカートはいたら絶対かわいいし、胸がないってわけでもないし顔だって綺麗なのに……。

衣はスカートを広げて口をへの字にする。

「衣、どうどう？ カッコイイ？」

「……ねえ未散」

みんなに褒められウキウキの未散は衣にも賛同を求めるが、衣はそれをおいていきなり未散にメイドのスカートを突き出した。

「こつち着てみようよ」

「……い、いいいいいよ！ 絶対似合わないから！」

衣にスカートを持たされそうになった手を未散は慌てて引っ込める。

「でも、ここでちょっと着てみるだけならいいでしょ？」

衣はいたずらっぽく目で笑いながら、「ね？」ともう1回スカートを未散の目の前でひらひらさせた。

「……ほんとに着るの？」

未散は顔をしかめる。

「もし笑われてもココだけの話で終われるでしょ？」

はい、と衣は強引に未散に衣装一式を手渡した。

「なになに？ 未散そっちも着てみるの？」

隣で着替えている女の口が興味津々で未散を見る。

「だってどっちも着れるなんて未散くらいしかないからもったいないでしょ」

未散が「衣が着ろって言うから」と言い出しかねないと思った衣が先回りして彼女に答える。

「そうだね、なんかそつちの未散も見たいかも」  
着てみて着てみて、と彼女も未散にけしかける。

「……ほんとに着てみるだけだよ」  
持たされた衣装を置きながら、未散はもたもたと着替え始めた。

10分後。

「衣……やっぱいいよ……やめようよ……」

衣に壁になつてもらつて着替え終わった未散はかなり恥ずかしそ  
うに衣を見る。

「どれどれ拝見しましょ……」

未散に背中を向けていた衣は未散に振り返る。

思つていた以上だ……。

衣は未散の姿に言葉が出ない。

「……嘘、やばくない？それ」

ぼかん、としている衣が気になつた一人が衣の視線の先を辿り……  
……それを見てポツリと呟いた。

「……うん、かなりヤバイよそれ」

未散の姿を見た一人がまた呟く。

「なに？なに？！なんなのみんなして！やっぱりへん？！」

口数が極端に少ない女子の面々に未散の不安は煽られる。

「未散、それ犯罪だよ」

「世の男性の目の毒だわ」

「そうだね、みんな鼻血噴いて倒れちゃうかも」

未散の姿を見た女子はみんな未散を見たまま会話する。

「もーだからなんなのよっ？！」

ヤバいだの犯罪だの言われても意味の解釈ができない未散は、

「お願いだからまともな意見言つて！」

とせわしく足踏みした。

これはちよつと男性陣にも見てもらおうかな。でも、いきなり  
全員は未散絶対嫌がるだろうから……。



衣はメイドの格好をしたまま教室内に作った女子専用の更衣室を出て男子用の更衣室の前に立った。

「優太！ちよつと出てきて！」

「はいはいなんで……おわっ！」

更衣室の玄関のカーテンを引いて優太も白いシャツに黒のズボン、そして黒の長いエプロンを巻いて出てきた。

優太はまさか衣がメイドの格好でここにいるとは思っていなかった。たのでそれはそれは驚いた。

「……衣かわいいっ！」

「ちよ、ちよつと優太やめてっ！」

優太はみんなに見られるかもしれないのも忘れて衣をぎゅっ、と抱きしめ頬ずりし始める。

衣は顔を真っ赤にして優太から離れようとするがいくらどちびでも男は男、やっぱり力ではかなわない。

「あー始まった始まった」

「またやってるよ並木のヤツ」

「出た出た、我がクラスのバカップル」

優太の大声に男子は一斉に更衣室から覗き込んでヒューヒュー言い始める。

「どうだっ！うらやましいだろっ！でもお前らなんかにやんねーよ！」

「いいからもう放して！恥ずかしいっ！」

「いいねえ、小橋のその嫌がる仕草そそられる」

「小橋イ、もうちよつと観客にサービスしろ」

見せびらかしたい優太と見せびらかされるのがイヤな衣の姿は第3者にはからかいの対象でしかなく、しばらく2人はクラスの男子の玩具になる。

だが1分もするともう見飽きてきて、

「はいはいもうどうぞご勝手に。もう疲れた」

男どもはそろそろと退散していった。

「ほんとかわいい……うちに連れて帰りてえ」

彼女バカの優太はまだ衣からはなれようとしな

「もーいい加減はなれてよっ！別にこれを優太に見せるために来たんじゃないんだからっ！」

「え、そうなの？」

何だよチエツ、と優太は舌ちして衣からはなれた。

「はいはい、なんですか？」

優太はぶすつとして衣に用件を聞く。

「今から優太にいいものを見せてあげるよ」

衣はこっちこっちと優太に手招きした。

「いいものって？」

「プリティウーマン」

「……は？」

「まあいいから楽しみにしてて」

意味不能な返事をする衣を不思議そうな顔で見る優太に対して、衣は優太がどんな顔をするのか想像するとおかしくてしょうがない。

思わず「んふふふ」と笑いを漏らしてしまう。

「未散出てきて。大丈夫、今は優太しかないから」

「……ほんとにヘンじゃない？」

未散は覚悟ができていないのでまだもじもじしている。

「んもう、顔だけ出してどうすんの？！ちゃんと出てきて！」

衣は未散の手を引っ張って更衣室から引っ張り出した。

「おいなんだよもたもたすんな、未散早く出てこい……」

やっぱりやだ優太に見られたくない、としり込みする未散を見てイライラしてきた優太は衣と一緒に未散を引っ張ったのだが、未散を見た瞬間言葉を失った。

未散つてもしかして、本当はすっげーイイ女……？

優太は瞬きもせず呆然とした顔で未散を見る。

「ね、ね、優太、どう思う？ヤバいでしょ」

優太の反応が想像通りで、衣は笑いをこらえて優太に聞いた。

「……なあ、ちよつとみんな来て！未散ヤバい！ヤバすぎる！」

優太は更衣室にいる男子を呼んだ。

「何だよ並木今度は……うわっ！」

「……やっぱり吉岡って女だな、いいじゃんそれ」

「……てより、吉岡入り口に立たせたただけで男の客相当来るんじゃない？」

優太の呼びかけにやる気なく出てきた男子だったが、未散を見て一瞬だけなにも言えなくなったのだが、そのあと全員男として実に正直な感想を述べ始めた。

「未散にそつち着させてもカッコいいんだけど、これもこれでいいでしょ？どつちがいいと思う？」

衣はクラスの男子に意見を求めた。

「俺は絶対こつち」

「俺もこつちにしてほしいわ」

「ギャルソンも見てみたい気はするけど、俺たちよりカッコよかつたらけつこつショックだしなあ」

「俺はギャルソン見たくないね、こつちだけでいいよ」

「えー！ヤダよ恥ずかしいよ！」

「なにが『恥ずかしい』だ、本来お前はこれ着るんだぞ?!」

いつの間にかクラスの男子と未散は言い争いを始めていた。

「あ、そうだ。優太、ちよつと……」

衣は優太を手招きした。

「これ、西倉くんに見せようか？」

「これって？」

優太がに聞くと、衣は「あれに決まってるでしょ」とまだ男子ともめている未散の後ろ姿を指差した。

「だって、あれから2人つてまともに話してないんでしょ？きつかけ作ってあげなくちゃ」

あたし頭いいでしょ、と衣は偉そうに優太に笑った。

衣の言つとおり、未散と聖はあの日以来相当気まずいようである。以外はまともな会話を交わせていない。

事の真相が明らかになってから優太は衣にだけは本当のことを話した。

衣は衣でかなりホツとしたのだが、気がかりなのはやはり、

「でも、未散は知らないんだよね……」  
ということ。

話の辻褄が合わなくなるので衣はまだまだしばらくは何も知らないフリを続けなくてはならないが、未散は自分たちのことで3年も余計なことを言わず黙って見ててくれてたんだからこのぐらいやってあげなくちゃ、と衣としては思うのだ。

相変わらず女の子の格好をして褒めちぎられている未散を見て、衣はこう考えたりしていた。

いつそのこと明日は男の子たちに声をかけまくられる未散を見た西倉くんが、やきもきして勢いあまってホントのこと言っちゃえば全て丸くおさまるのにな。

……と思ったときにふと浮かんだ案だったのだ。

「よし、連れてってみるか……未散！ちよつと行くぞ！」

優太は未散を呼んだ。

「どこ行くの？」

「いいから、行くぞ！」

聖のところ、は禁句だ。

優太は黙って未散を連れ出し聖の教室へ向かった。

15分後。

当番の引継ぎを済ませた佳佑と理は階段を下りていた。

目的地は『メイド喫茶』。

「どんなかなどんなかな……あ！」

理は佳佑をほっといて1人わくわくして歩いていると入り口で笑顔でお辞儀をしている衣を発見した。

「ちよつとあれヤバいだろ。かわいすぎるっ！」

いても立つてもいられない理は佳佑をおいて走り出した。

「衣ちゃんかわいいつ！持って帰ってえ！」

理としては挨拶程度というかたいした意味もなくひしと衣にしがみつkipよこぴよこ跳ねた。

「や、やめてくださいっ！なにすんのよっ！」

誰に飛びつかれたかわかってない衣はおもいきり理のスネを蹴つとばした。

「いてーっ！」

衣が蹴ったところはまさに弁慶の泣き所、今度は半べそになりながら理はびよこぴよこ跳ねた。

「……ふ、福原先輩?!大丈夫ですか?!」

恐怖に慄きながら相手を見て、その相手が理とわかると衣は慌てて理の傍に寄った。

「う、ごめんなさい、大丈夫ですか……?」

「うん、大丈夫……」

痛いよお、と呻きながら理はスネをさする。

「ほんと、ごめんなさい、すみません……」

衣も理と一緒に彼のスネをそつとさすった。

「謝らなくていいよ、どう見ても理が悪い」

のんびり歩いていた佳佑がようやくメイド喫茶の入り口に着き、

ポケットに手を入れしゃがみ込む2人の前に立ち止まった。

「あ、小田先輩。……あ、違う違う。いらっしやいませ、ご主人様」

衣は立ち上がり佳佑にお辞儀をした。

「かわいいね」

佳佑は犬か猫の頭を撫でるようにして衣の頭に手を置いた。

「ありがとうございます」

衣はニコニコしながら佳佑に礼を述べた。

「あ！佳佑先輩っ、なにするんですかっ?!」

たまたま入り口にいる衣と佳佑を見ていた優太が怒って走ってきた。

「おう並木、お前もカツコいいじゃん」

佳佑はそう言うと言から手をはなして優太の頭をぽぽん、と掌で叩いた。

「へへ、そうですか?」

本当は「衣に何するんですかっ!いくら先輩でもダメですっ!」

って言いに行ったはずなのに、佳佑に褒められてそんなことは優太はすっかり忘れ照れ笑いする。

「……そういえば吉岡は?」

佳佑は今はメイド喫茶店となっている優太たちの教室を見渡した。

「いますよ、ほら」

優太は中を指差した。

「……あーあれが噂の『超エロカワイイメイドさん』か」

佳佑は中を覗き込んだ。

「呼びましようか?……未散っ、おい未散っ!」

優太は未散を呼んで手招きすると、未散はびく、と肩を上げ振り向いた。

「なんで佳佑先輩が?!」

穏やかな笑顔で手を振ってくれる佳佑に未散は引きつる。

「な、なんですか？冷やかしお断りですよっ」

未散は顔を引きつらせたまま佳佑に向かってずんずん歩いてきた。

「馬子にも衣装……」

「……え？」

いつのまにか佳佑の後ろにいた理がぼそつとそう言い、その声に反応して3人は理を見る。

「ふーん、吉岡ってなんだかんだいっても女だな。いいじゃんそれ」

めずらしく理は素直に褒めた。

「……そうですか？」

未散は不安そうに上目遣いで理と佳佑を見る。

「うん。かわいいかわいい」

佳佑は未散の頭も衣や優太と同じように撫でてやった。

「お気遣いありがとうございます」

未散は佳佑と理に頭を下げた。

「気なんか使ってないよ。噂どおりの『超エロカワイイメイドさん』だと思っよ、なあ理……っつて、あら」

佳佑が横を見るとすでに理はいなかった。

佳佑が前を見ると、理はちゃっかり衣に案内され、優太に「うちの店員に気安く触らないで下さい！」と怒られながら先に中に入ってしまったっていたのだった。

「どうした、浮かない顔して」

なんとなく元気がない未散が気になり佳佑は未散の顔を少し覗き込んだ。

「そんなの人によりますよ。似合わないって思う人もいるし……」

未散はいじけた様子で佳佑に答えた。

「そんなこと言うヤツがいるのか。おかしなヤツがいるもんだな、あの理が素直に褒めたのに。それ誰？俺も知ってる人？」

佳佑は腕を組み納得できない顔を未散に向けた。

「……聖くん」

未散は蚊の鳴くような声で答えた。

「西倉かぁ……」

思ったとおりの答えだったがそう思われないように佳佑は未散に返した。

あいつのことだ、多分この姿に照れちゃってまともに見れなかったんだろうなぁ……。

エプロンの裾を持っていじいじしている未散を見ているうちに、佳佑はなんだかとてもかわいそうになってきてしまった。

……実は佳佑、自分が未散を見ているだけあって未散が聖を想い慕っていることも、聖も未散を見ているのもとっくに気がついていた。

また、聖の性格もたった2週間しか付き合っていないのに見事に見抜いていたのだ。

しょうがない、助けてやるか。

佳佑は「全く世話が焼ける」と思いながらも未散に呼びかけた。

「吉岡」

「……はい」

佳佑が声を掛けると、未散は相変わらずしょぼんとした顔で佳佑を見上げた。

「世の中にはいろんな男がてさ、並木みたいに思ったことは何でも口にするのもいれば理みたいなものもあるし、あとは……そう思えば思うほど言葉が出なくて先に顔や態度に出るものもある。これは俺の勘だけど、西倉はそのタイプだと思うよ？」

「……」

そんなことないですよあたしには似合わないんですよどうせ、という表情で黙ったまま自分を見る未散に佳佑は微笑んだ。

「なんなら並木あたりに聞いたらどうだ？何か聞いてるかもしれないし」

「……もういいんです、ほんとに」



「あ、吉岡?!」

未散は客に「すみませーん!」と言われたタイミングで佳佑から逃げるようにして中へ行ってしまった。

これは、本人に言わせるしかなさそうだな。

やれやれ、と思いながら佳佑は苦笑するとため息をついた。

Vol. 46 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

いかがですかね、学園祭編は。

それにしても、佳佑ってどこまでお人よしなんだろう……書いて  
いる私が思います（笑）。

しかも今なら充分未散に入り込めるのにねえ……。

ま、そのへんについてはおいおい書いていきますので気になる方  
はどうか読み進めて下さい（笑）。

さて。

次回も引き続き学園祭編でお送りします。

密かに佳佑は聖にあることを漏らすのですが……。

何を言うのか、気になる方は次回をお読み下さい。

それでは、またです。

メイド喫茶で30分ほどいたらだと過ごした佳佑と理は次の目的地へ向かった。

「……お、いたいた。ここにも『馬子にも衣装』が1人」

聖の姿を見つけた理は「よお、色男！」と大声を出しながら聖に手を振った。

「なんですか、『馬子にも衣装』だの『色男』だのっていらつしゃい、と聖は理に苦笑いする。

「いやさ、これだけのガタイがあるとこっぴどいのが似合っいいよなあって思っ」

理はそう言いながら遠慮なしで聖の肩をばしばし叩いた。

「あの、すみません。ちよつといいですか？」

外部から見に来た女のコ3人に聖は声を掛けられる。

「はい、なんでしょう？」

聖は営業スマイルで彼女達に笑いかけた。

「お名前聞いてもいいですか？」

「……西倉です、西倉聖」

「何年生ですか？」

「……1年だけど……あのすみませんけど、俺はその気ないんで」

あーまたか……もうこれで何回目だ……？」

だんだん逆ナンされていることに気づいた聖は急に声色を冷たくした。

「彼女いるんですか？」

だが1人の女のコが聖の拒否モードをまるで無視して質問を続ける。

「……いたらなんだって言うの」

ギロリと聖は彼女を睨んだ。

「……な、なによ！いい気になってんじゃないわよ！」

聖の態度が癪に障ったらしく、負け惜しみを聖にぶつけ3人は教室から出て行った。

「おいおい西倉モテモテじゃん、もうちょっと優しくしてやれよ」  
後ろからずつと観察していた理が聖の隣に来て肘でつついた。

「どうせ今日だけですよ、珍しいもの着てるから。それに」

聖は理に突かれていた腕をなんとなくさすりながら言葉を続けた。

「どうもああいうのは苦手で……言うのも苦手だけど……」

はは、と聖は気のない笑い声をあげた。

「ふーん、照れ屋さんなわけだ……あ！西倉、俺あれやりたい。やっつていい？」

聖を見上げようとした途中で目に入った模擬店に理は心奪われた。

「どうぞ……ってもう行っちゃってるし」

すでに店の中に入って100円をテキヤの兄ちゃんをやっている聖のクラスメイトに渡している理の姿を見て理のすばやさに笑ってしまった。

「儲かってんの？」

理と聖を横からのんびり見ていた佳佑が聖の隣に立って話しかけてきた。

「どうなんですかね……でも確実に優太のクラスには負けてますね」

「確かに」

聖は苦笑し佳佑は笑って肩をすくめた。

「俺もさつき並木たちのクラスに行ってきたよ。西倉は見た？超エロカワイイ吉岡未散ちゃん」

佳佑はさりげなく話を聖に振る。

「あああれですか、見ましたよ。けど……」

「けど？」

「見慣れなくて、俺はちょっと……」

「なに？じゃあかわいくないってこと？」

佳佑の思ったとおりの返事が聖から戻ってきたのがおかしくて、佳佑はついつい少し意地悪なことを聞いていた。

「誰もそんなこと言っていないじゃないですか！」

聖はこれもまた佳佑の思ったとおり、ムキになって返事を返してきた。

「わかったわかった、西倉の気持ちはよくわかった」

佳佑は聖の肩に腕をおき軽く叩いた。

「けど吉岡はかなり落ち込んでいたぞ、あれだけみんなにかわいって褒められているのにちっとも嬉しくないみたいで。これは俺の推測だけど、その原因は西倉のつれない態度のせいじゃないのか？」

「つれない言われても俺そんなつもりは……って、え？！」

「何？」

聖の突然自分を動揺しまくりで見てくる反応に「なにかおかしいことでも言ったかな」と思いながら佳佑は聖を見上げた。

「吉岡、先輩にそんなこと言っただんですか……？」

聖の方はうるたえながら佳佑を見る。

「じゃなかったらこんなこと、西倉に言うわけないだろ」

人がいいにもほどがあるなと自分で思いながらも、佳佑は聖を見返した。

「西倉」

「……はい」

「吉岡は、お前以外の男にどんなにカワイイ言われても意味ないみたいだよ。まあお前の性格上大変だとは思っけど、ココは頑張らなきゃいけないんじゃないのか？」

「うおー外したー！と大声出して悔しがる理を見ながら佳は聖に呟いた。

「ま、別に言いたくないならいいけど。でも、知らないよ？いつの間にか誰かにどっか連れ去られちゃっても。それでもいいのか？」

「連れ去るって、誰が？」

「……さあ、例えば俺とか？」

「……え」

聖はぎよっとして佳佑を見る。

おっと。どさくさにまぎれて言ってしまったな。

「うそうそ、冗談だよ」

本気にするなよ、と佳佑は笑いながら聖に手を振った。

「けど半分は本当だぞ。外部の男性の客からけっこう誘われて断っているところ、随分見たし」

佳佑は上目で聖を見た。

「けっこう困ってたみたいだよ、助けに行つてやったら？」

「……………」

佳佑は言いながら視線を聖から外した。

聖は佳佑に何も言い返せないまま困惑した顔で佳佑を見る。

あーもう知らん知らん。あとは自分で考える。

聖の視線に気づかないフリをして佳佑は腕を組み、いつになく真剣にダーツをやる理に目を見やった。

Vol. 47 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

さてさて、半分冗談交じりとはいえついに佳佑、聖に宣戦布告です。

これ、あとあと出てきますので覚えておいてください。

で、次回ですけど。

いったんちよつといい感じになりますが、そのあと未散が大ピンチ！

何が起こるんでしょうかねえ……気になる方は次をご覧ください。

というところで、またです。

メイド姿で控え室で待機していた女の口が衣をつつく。

「ね、あれ、バスケ部の人だよな？誰だっけ？」

同じく休憩していた衣は彼女の指差す方に向けた。

そこには1人で入り口の前をおろおろする聖がいた。

「……ああ、西倉くんかあ」

未散でも探しているのだろうかと思いつつ衣は彼女に答えた。

「それにしてもイイ男よね、浴衣姿がセクシーって感じ？」

「イイ男って言えばさ、さっき来た会長の連れの人もカツコよくなかった？」

「小田先輩でしょ？あたしは彼のほうが好み」

「あたしは会長さんも捨てがたいかな」

「そうやって考えるとさ、男バス部ってなんかすごいね」

「衣には悪いけど並木も未散ぐらい背があつたらもつと大変だったろうし」

「でも並木は性格がなー。バスケやってるときは惚れた！って思ったけど教室で見るとただのやんちゃ坊主よね」

「ちよつとちよつと、彼女がいるのにダメだつてそんなこと言っちゃ」

「えーいいでしょ、ベダボメして衣を不安にさせるよりは」

控え室は女の子特有の話題で一気に賑やかになった。

……その頃。

噂の人となっていることなどつゆ知らずの聖は入ろうかどうかどうしようかまだ迷っていた。

すでに未散がニヤついた男性客に言い寄られて泣きそうになりながら丁寧に断りの申し出をしている姿を10分もしないうちに3人ぐらいにしている姿を見て、今すぐにもこの部屋からその男ども



を摘み出してしまおうかと思うほどはらわたが煮えくり返る思いでないながらも、やっぱりこういうところに1人で入るのはどうなのかとまごまごしていた。

なにやっつてんだあれ。

入り口で挙動不審の浴衣姿の大男がとても気になった優太は、おそらく聖だろうと思いつながらでも入り口まで行き、

「お客様、どうか耐えましたか？」

と言ってみた。

「……ああ、優太か」

優太の顔を見てホツとしたのか聖は安堵の笑みを浮かべた。

「あれ、1人？」

「うん。友達みんな店番してるか彼女と回ってるんだよねだから入りにくくて」

言いながら聖は中の様子をガラス越しに伺った。

「なんだよ、入ればいいじゃん」

ほら、と優太は聖の腕を引っ張ると強引に喫茶店の中へ促した。

「よし、聖座れ」

優太は椅子を引き聖を無理やり座らせた。

「この席未散担当だからさ、あとは任せるけど上手くやれよ。昨日みたいなことすんじゃねーぞ」

優太はニツと聖に笑って「少々お待ちください」と礼をしてテーブルからはなれた。

「え、ちよつ、優太?!」

優太を捕まえようと聖は手を伸ばしたが、優太はさりげなくかわして奥へ行ってしまった。

「うわーやめてくれよー勘弁してくれよ……」。

もう逃げられない聖は両手で顔を隠した。

所戻って女子控え室。

「ちよつとなにあれ、クールそうに見えてあのくしゃくしゃ笑顔は

あれ、違反でしょ」

「なんか並木ムカつく。並木、はなれるっ！」

「クラス違うから全然気づかなかったな。同じ学年にあんなクールビューティがいたとは」

「でも西倉くんてなんか怖そう。背が高いからかもしれないけど」

「そうそう、なんか聞いた話だけど女の子から声掛けられるの全然ダメみたいだよ。変に気安いと怒るんだって」

「えーそれやだなあ」

「そう？照れ屋さんて感じてなんかカワイイじゃん」

中に入ってきた聖を観察しながら、また女の口たちの会話が始まった。

「ねえ衣、西倉くんて彼女いるの？」

控え室にいる1人がまた衣に聖のことを聞いてきた。

「いないけど、多分無理だと思うよ」

「え、それどういうこと?!」

「あ、いや、えーとあ……」

あたしのバカッ、余計なことを……。

いない、で終わりにすればよかったのに未散のためなのかはたまに彼女を思っただけなのか、衣はつい口を滑らしてしまった。

「……まさか、西倉くんて『類は友を呼ぶ』で衣のこと好きなんじゃないでしょうね」

「ちちちち、違う、断じて違う！」

彼女のジトツ、とした視線を感じながら衣は全身全霊で否定した。

「あーっ！ちょっと!」

「信じられない、並木のヤツ、なんでそこに座らせる?!」

「ずるーい、今だけ未散代わってー!」

聖を観察していた面々が今度は聖の座ったテーブルのことで話の花を咲かせた。

なんでそこに座ってるのお……?」

未散への嫉妬の嵐が控え室で吹き荒れている頃、フロアで一緒に接客をしていた男子に「吉岡、後ろいるからな」と言われてテーブルを見るとそこにいるのは、浴衣姿の聖。

もうやめてよ……顔見れないよ……誰よココに座らせたの……？

昨日は気が動転してあまり見てなかったのだが、今日も着ている浴衣姿に未散の心はちっとも落ち着かない。

外の景色を頬杖をついてぼんやり眺める聖の横顔を見るのがもう精一杯だ。

どうしよう……聖くんめっちゃめっちゃカッコいいんだけど……やだやだやだっ、こっち見たっ……。

未散の視線に気づいたららしい聖が未散を見て微笑んだ。

行くしかないよね、もう……。

はあ、とため息をつくると未散はテーブルへ足を運んだ。

「いらっしやいませ、ご主人様」

「どうも」

お辞儀をして顔をあげると、聖は微笑んだまま上目遣いで未散を見る。

うわーん！誰か助けて！お願いだからその表情かおやめて……。

誰に何をどう助けて欲しいのかわからないけれどもう未散の頭の中はパニックに陥っていた。

どうしよう、なんか喋んなきゃ、なんか……。

相変わらず頭の中は上手く回らないけれど無言なのもどうかと思つた未散は必死になって会話のネタを探した。

「……いいね、浴衣姿」

やっと会話ネタを見つけてメニューを見る聖に未散は話しかけた。

「そう？ありがと。でも」

メニューから目を外した聖は未散を見上げる。

「吉岡には負けるよ」

「なんで？」

「だって、昨日その格好見てあっさりK・O負けしたもん、俺  
聖はそこまで言うとかメニユーに目を戻した。」

今、聖くんなんて言った？『K・O負け』ってそれ……。

褒め言葉と解釈していいのだろうかと考えると、今度はそればかりが頭の中を駆け巡る。

「聖くん、あの……」

未散が聖に真意を確かめようと口を開こうとしたそのときだった。

「吉岡、ちよつと！」

入り口にいた男子が未散を呼んだ。

「はい」

なんだろうと思いつつながら未散は入り口に向かった。

「ねえまだ終わんないの？俺ずっと待ってるんだけど？」

げ、げげげっ！

相手の顔を見て未散はこれでもかというくらい顔から血の気が引いていった。

それはつい2時間前にしつこくしつこく未散をナンパしてきた、いかにも「顔はいいけど軽そうな男」だったのだ……。

未散が苦い顔をしながらその男の前に立つと、すぐに彼はまわり  
にいた人を押しよせ、未散の腕を取り廊下に出た。

「未散ちゃんまだ？さつき2時間したら休憩だって言ってたよね？」

「どうやってか知らないけれど未散の名前を知っている彼は、かっ  
てに未散ちゃん呼ばわりをし、笑みを浮かべてながら見下ろした。

「もうやめて下さいっ、こ、困りますっ！」

未散は男の腕をほどこうと必死で振り払おうとした。

「かわいいの。照れてんだ？」

しかし男はひるまない。

余裕の笑みを保ちながら彼は未散の手をさらに強く握ると空いた  
手で頬を突いた。

やめてっ、やめてやめてやめてっ！

とつさにぶると首を振り、自分の頬にあった男の手を払った。

「あんまり言うこと聞かないとここで口説いちやうよ？いいの？」

男は空いている手で未散の顎を捉えると自分に顔を向けさせた。

怖いよ怖いよ、怖いーっ！

まるで獲物を捕らえたような彼の目に、未散は窮地に陥った気分  
になっていた。

どうしていいかわからず動けない。

誰か、誰か助けてっ……。

それでもまだ未散は抵抗を試みている。

力の限り彼から顔を横に向けぎゅっと目をつぶった。

「そういうことされると余計言うこと聞かせたくなっちゃうの、わ  
かんない？」

耳を彼に向けていたのがいけなかった。

男は未散の耳元でそう囁いた。

な、なに？どうしよう、立つてられないんだけど……。

「があくつと膝が折れそうになるのを未散は必死で堪えた。」

「まだ言うこと聞かないつもり？じゃあ次はどうしようかな……」  
じわりじわりと彼の手が自分の首筋に向かっているのが気配で感じ取られた。

「やだやだやだつ、触んないでっ……！」

「じわ、と涙が浮かんでくるのを必死でこらえながら、未散は肩を精一杯すくめて最後の抵抗を始めていた。」

未散が廊下で誘惑されているのをクラスの男子は野次馬根性丸出しで見ている。

「なんかはじめて見たかも、あんな弱気な吉岡」

「意外と男に対しての免疫あいつないんだな」

「うわーつつかれてるつつかれてる」

「なんでだろ、吉岡がすっげーかわいく見える」

「さすがの吉岡も男にあんなことされたら女になっちゃうんだな」

「……ちよつとヤバくね？顎持ち上げられてるぞ」

「嘘だよ嘘だよココでやつちゃう？」

未散が聞いたらぶつ飛ばされそうなことを男どもは好き勝手に言い合っていた。

「あの嫌がり方はかえって誘ってるよなあ」

「たまたまフロアに出てきた優太が「未散のはずなのに俺がぞくぞくする」と未散から目をはなさないまま他人のフリをしているつもの聖のテーブルの椅子に座った。」

「なあ、最初は優太と同じでギャルソンのはずだったんだろ？誰だよメイドに変えたの」

「見たくない現実には聖はむう、という顔をした。」

「言いだしっぺは衣。あいつの目に狂いはなかった」

「小橋のヤツ……。」

「優太の答えに恨みを込め、控え室から顔を覗かせてにこにこ笑っ

てこつちにひらひらと手を振る衣を聖は睨みつけた。

なあ聖、と優太はテーブルに頬杖をついた。

「おもしろくないだろ、腹立つだろ。でもそうやってご機嫌ナナメで座ってるだけじゃ未散は気づかねーぞ。未散は今もお前が好きなのは衣だと思ってるんだからさ。どうすんの？」

優太は頬杖をついたまま口を開いた。

「あんな男聖ならちよろいって。サーツと出てってかさらっちやえばいいじゃん」

未散ってさ、と優太は続ける。

「あの外見じゃん？俺の知ってる範囲だけど、特に背がでかくなっちゃってからは女の扱い受けたことほとんどないんだよね。だからそんなことされたら間違いないく聖に惚れるよ」

んふふふ、と優太は聖にまた笑った。

「最高の点数稼ぎだと思っうよ？行って来いって……あ！」

ふと優太が未散を見て叫んだ。

思わずつられて聖も未散を見る。

そんな聖の目に映ったのは……身動きが取れないように未散の手足を取り、彼女の首筋に触れようと近づく男の姿だった。

「あんのやろっ……！」

ブチッ、と自分のどこかが切れた音を聞いた気がしながら、聖は椅子を蹴倒し大股で教室を出ていった。

「よしよし、作戦大成功」

聖がまっしぐらに男に向かってる姿を見て優太はほくそ笑んだ。

全く素直じゃないんだから。最初っからやりやあいいのに。

聖を見ていたクラスの女子が「西倉くんカツコイイ！」「未散ズルイ！」と控え室から出てきて騒ぐのを横目で見ながら優太は衣に満面の笑みでピースする。

衣はそれを見て「優太ナイス！」と口をパクパクさせながらやっぱり満面の笑顔で右手の親指を立て返した。

まわりはそんな異変は起きていたが相変わらず未散は蛇に睨まれた力エルのままだった。

男の卑しい手がかすかに未散の首筋に触れた。びくつ、と不覚にも未散の肩が動いた。

「嫌がつてる割には反応が違うんだけど、どういうこと？」

男はまた未散の耳元でくすくす笑った。

そんなこと聞かれたってわかんないっ……。

理由がわからない未散には何も答えられない。

こんな男の前で誰が泣くもんかという意地だけで、未散はもう目を開けたら溢れ出してしまふ涙をかたくなに目を閉じて抑えていた。

けれどそれでおさまるほどの量ではなかったらしくほんの少しだけ涙がこぼれる。

「……………」

未散は男に掴まれていない手で乱暴に涙を拭いた。

それを男は見逃さなかった。

無理やり壁に未散を押し付けると羽交い絞めにした。

「あー泣かしちゃった？でも、俺は悪くないよ？そうやって煽る未散ちゃんが悪いんだからね」

未散にとっては全くもって理解不能な言葉を言い放ち、未散の首筋へと男の手は忍び寄っていった。

まわりは相変わらず冷たいもので、1人くらい助けに来てくれてもいいようなものなのに、クラスの男子も、通りすがりの人も、みんな見てみぬフリをして未散の横を過ぎて行く。

あたしって無力だ……。

いくら「男勝り」といわれていてもやっぱり本物の男にはかなわないことを思い知らされていた。

もうちょっと可愛げがあったら誰か助けに来てたのかな……  
なんかもういいや……もう疲れた……。



どうにでもなれと思ったとたんにあんなに入っていた肩の力が抜けていった。

男がそれを見て勝ち誇ったような笑みを浮かべているのが目を閉じていても感じ取れた。

未散は彼の近寄ってくる気配を感じながら観念したかのように立ち尽くした。

……そのときだった。

誰かが下駄の足音を立ててこっちに向かってくるのを未散は感じていた。

そしてその足音は未散の目の前で止まると……足音の主だろうか、未散の手から男の手を奪り取った。

「ちよつと、あんた何様？ここどこだと思ってるの？一応学校なんだけど」

静かではあるが明らかに怒っている口調の、どこかで聞いたことのある男の声が未散の耳に入ってきた。

何？なにになにに……？

未散は恐る恐る目を開けた。

未散の目の前にあったのは……後ろ姿の聖だった。

聖は男から隠すようにして未散の前に立ち、男の胸ぐらを掴んでいた。

「ナンパするなら他でやってくれる？ここでやられるとはつきり言つてすつげー迷惑」

聖はそう言つと同時に床に突き落とすようにして男から手をはなした。

男は床に叩きつけられる。

「吉岡、逃げるぞ」

呻きながら起き上がるうとする彼を見て聖は未散の手を掴まえ走り始めた。

「あ、ちよ、ちよつとー！」

こけそつになりながら未散も走り出していた。

「おい、こら待てっ！」

起き上がった男は2人を追いかけてようとした。

「起き上げるの早えーんだよっ！」

しかしそこでタイミングよく教室から出てきた優太が男の足を引っ掛けた。

すると男はいともあっさりひっかかり、ギャツと情けない声を出して床にびたん、と音を立てた。

「悪いんだけどもうちょつと転んでて」

優太は男の背中に乗つかると「な、お前らも乗って！」と優太は近くにいたクラスの男子の手を引っ張り、男の背中や腰、足に腰を下ろさせた。

「残念でした、彼女のこととは諦めて」

優太は「降りろこら！」と喚く男の前にしゃがみこみ、ニカツ、と笑い片目をつぶった。

今日の優太は働き者だなあ……。

俺の大事な親友なにすんだよっ！と本気で男の頭をべしつと叩く優太に衣は後ろに手を組みながら微笑んだ。

VoI・50(後書き)

こんばんは、愛梨です。

読んでいる流れを止めるのはいかかと思ひまして、ちょっとこのスペースはしばし空欄にしておきました。

大ピンチの未散でしたがそれを助けた王子様は聖でした。

とはいっても、優太がかなりけしかけてますけどね(苦笑)。

さてさて、聖は未散とどこへ行ったんでしようねえ………？

次回でいったん区切りがつきます。

だからちよつとだけイイ感じですよ。

ちよつとハラハラさせるかもしれませんが、なんとかまとまりますのでご期待下さい………って、たいしたことなかったらすんません(汗)。

というこで、またです。

無事に悪党から救出し未散の手を取り逃げ続ける聖は、階段を駆け上がる。今は物置化している3年生の教室のドアを開けた。

そして未散を押し込むようにして中に入れ、自分も入ってドアを閉めた。

実際は優太が男をひっ捕らえたのもう追っ手はないのだが、そんなことはわからない聖は未散の手をはなさないままドアの壁に寄りかかり息を潜めた。

「聖くん怖い、怖いよっ……」

もうここにはあの男はいないのはわかっているけど、さっきまでの自分の手を縛るように掴んでいた力の強さや声や目つきを思い出すだけで下から恐怖が押し寄せる。

未散は思わず溺れた人のように聖の左腕を手繰り寄せ抱きかかえていた。

吉岡ちよつと待って、それやめて、俺がマズい……。

祭りはまだまだ盛り上がり上がっているわけで、おそらくこんな物置みたいになっている教室には誰も来ないわけで、目の前には自分に全て頼りきっている惚れた女がいるわけで、その女が昨日聖に衝撃を与えた姿をしているわけで、無防備に自分の腕にしがみついているわけで……。

ヤバい、ヤバいやバいやバいつ……。

未散がしがみついてくればしがみついてくるほど、女特有の感触が聖の腕には伝わってくるわけで、聖の空いている手が制御不能寸前になる。

「……つたく、吉岡自覚なさすぎなんだよっ！」

もう無理と思った聖は未散から腕をはなす口実に未散の手を振りほどきながら冷たく言い放った。

「昨日からあれだけみんなに言われてるのになんでわかんないんだ

よ。だからこんなことになるんだろーが」

まだ自分の腕に当たっていた余韻が残っているため未散に何をしようか分からない聖は、彼女を見ないことがいちばんの得策と思いついて背を向けた。

「わかっているよ、珍しがられてからかわれてたつてことぐらい……聖くんだつてそうでしょ？」

情け無用で腕を振り払われた未散は愚痴り始めた。

「どうせ似合いませんよ、衣みたいにかわいくないですよ、ギャルソンの方が似合いますよーだ……」

未散も聖に背を向けてプイツ、と横を向くと、

「助けていただきまして感謝しておりますっ、ありがとうございましたっ！」

不機嫌極まりない表情で聖を睨みつけ、可愛げない言い方でお礼を言った未散はドアに手を掛けた。

こいつは人の気も知らないでっ……！

ムカツときた聖は振り返ると未散に手を伸ばしていた。

またやってしまったと一瞬思ったがもう遅い。

何の予告もなく後ろからドアを開けようとする未散の手を掴むと、空いたもう1つの手で未散を強引に引き寄せていた。

「なにすんのよっ！はなしてっ！あたしは衣じゃないっ！」

抱きしめられた聖の腕の強さに、未散の中であの日の悲しい思いが一気に押し寄せた。

「もうやだっ！衣の代わりなんか絶対やだっ……！」

聖の腕から逃れようと未散は死にも狂いでもがいた。

けれどそうすればするほど聖の腕は自分の体に絡みついていく。

「お願い……もうはなして……はなして……」

力尽きた未散は泣きながら聖に懇願していた。

「もういいでしょ……いい加減にしてよ……」

聖の浴衣の袖を掴むと、未散は右に左に弱々しく揺らした。

こんなかわいいの誰がはなすか、バーカ……。

頭には来るけれどさっきの男の気持ちがよくわかると思いながら、ぐずぐずいいながら駄々っ子のようにまだ暴れる未散を聖はさらにきつく抱きしめた。

「いい加減にしろは俺のセリフだよ、誰もそんなこと言ってねーだろ……？」

なんでだよ、と聖は未散の背中につぶやいた。

「なんでこんななの着てんだよ……こんなを着ちゃったら吉岡がほんとは超エロカワイイ女だってみんなにバレちゃうじゃんか……そんなの、やだったのにさ……」

「……………」

予想外の聖の言葉に未散の動きが止まった。

でもそれに気がつかない聖は腕の力を緩めることなくさらに言葉を続けた。

「見に行ったときみんなかわいかったよ、そう思ったのは認めるよ……けどさ、吉岡だけは無理。かわいって思うだけじゃすまなかった。ずっと見てたら人がいるのも忘れて俺がどうにかなっちゃそっうだった……そういうの、吉岡全然わかってねーんだもん、すっげー腹立つ……」

未散の手を掴んでいたその手をさらに強く握り締め、聖はドアから未散の手をはなさせた。

「吉岡のやることなすこと全部に俺がどれだけ引っ掻き回されてるかお願いだからわかってくれよ……俺の好きな女が小橋だとかそんなこと思っなよ……」

言いたい放題言った途端急に恥ずかしくなってきた、聖は未散の肩に顔を埋めた。

「……今ここにいるのもあの日聖くんの目の前にいたのもあたしだった？衣じゃなくて……？」

それまで黙って聞いていた未散が少しだけ聖に振り返りそう返していた。

「言っとくけど他の女で好きな女見れるほど俺は器用じゃないし、

興味がないならどんなに綺麗でかわいい女でもむやみやたら触るよ  
うな、そんな節操ない男じゃないつもり」

聞いてることにちゃんと答えているのかかなり怪しい回答を聖は  
やっぱり顔を伏せたまま未散に返した。

「小橋のこともあれはもう大昔の話。とっくに時効成立してるから。  
あれは単に小橋に謝りたかったことがあってそれがずっと気になっ  
てて忘れられなかっただけ、小橋自身をどうこうじゃない」

だから、と聖は続ける。

「あの時吉岡に謝ったのは吉岡になんの断りもしないであんなこと  
しちゃったから。小橋の代わりにしたからじゃないよ……」

聞かれてないことにまで答えている気がするが、結局思う事全部  
を聖はぶちまけた。

あーもうなにやってんだる俺……。

こんなことまで話すつもりはなかったのに、もっとカツコいき  
たかったのに、今の自分はかなり情けない。

おまけにそれがきつちり未散に伝わってしまったと思うこと  
ってもカツコ悪かった。

でも今更どうすることもできず、聖は未散の肩にため息をついた。

え、嘘、泣いてる……？

しばらくして自分の腕にぼたぼたと涙が当たることに聖は気づい  
た。

うわーまたやっちゃったよ……なに泣かしてるの俺は……。

おそろおそろ聖は顔を上げた。

思ったとおり未散は自由になる手でしきりと目をこすっていた。  
けれど……なぜか顔を見ると笑っていた。

それって、あたしの自惚れじゃないんだよね、思ったまま解釈  
していいんだよね……？

未散は自分の力で涙を止められなくなっていた。  
初めは都合よく考えているだけだと思っていた。



でもここまで言われてしまつては「聖くんの好きな女は衣」と思つてしまつような悲観的思考を持つことのほうがもはや難しかった。

聖くんの好きな女は衣じゃない。衣じゃなくて……。  
まさに泣き笑いとはこのこと。

笑いたいのにあとからあとから涙が頬を流れた。

「そつやつてまた泣く。頼むからさ、こういうところであんまり女の口にならないでくれる？俺またおんなじことするよ？」

言いながら聖は後ろから未散を覗き込んだ。

思ったとおり未散は……聖が黙つていられない顔をしていた。

今は俺は悪くない、絶対悪くない。そんな表情する吉岡が悪い。心の中でそう言い訳しながら聖は後ろから未散に近づくと……唇で右の頬に触れた。

え？え？！な、なに？！

突然のことに未散は自分の右のほつぺに手を当てながら聖に振り向いた。

「悪いけど今度は謝んねーからな、俺悪いことしてないもん」

弁解する聖は未散が何も言つてないのになぜか怒つていた。

いや、開き直つていたというほうが正しいかもしれない。

「……聖くんだからいいです、許します」

聖のなんだか偉そうなモノの言い方に、思わず未散は笑つていた。

まだ残つていた最後の涙が未散の笑顔にこぼれ落ちた。

それにつられて聖もまた、笑つていた。

Vol. 51 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

未散と聖のコイバナ編はいったんここで終了です。  
読んでくださった方、ありがとうございました。

でもこれ、まだまだ続きます。

だって、なんか中途半端感が拭えないでしょ？(笑)

実際次回はそこを優太と衣に突っ込まれるんですけどね。

しかも、しかもです。

またもや新キャラが登場します。

RPGで言ったらラスボス的存在のキャラが登場します。

一体それは何者なのか。

それは……続き読んでください 結局それかいな(汗)。

それでは次回より後編に入ります。

引き続き応援よろしくお願いします(平伏)。

それでは、またです。

それは10月の終わりのこと。

「聖い、いい加減にしろよ。もう何ヶ月たったと思ってるの？」

あつちい、とTシャツの裾を持って、優太はぱたぱたと体に風を入れた。

今はリバウンドのトレーニングを終えて小休止。

あまりに暑くて体育館の外にシューズのまま出て優太は聖を巻き込んで涼んでいた。

こんなふうによきもきしながら3年も自分たちのことを見守ってくれていたんだろうかと未散の辛抱強さを尊敬しながら、優太は「いつになったら動くんだよ」と聖にせつついた。

「んなこと言われたって……」

優太の攻め立てるような言い方に聖はうなだれてTシャツの裾を意味もなく引っぱりながら答えた。

4ヶ月前の文化祭の日。

聖は重大なミスをした。

いや……正確には重大なミスを優太に指摘されてしまった。

しつこくナンパしてくる男から未散を助け、さらには2人きりになるチャンスにまで恵まれた。

一時は雲行きが怪しくなったが、聖としてはそれはそれは一大決心で未散に衣との事に関しての誤解を解き、愛の告白をした。

その結果未散にはなんとか理解してもらった。

それで気をよくしてしまった聖はそこからついついイケナイ悪戯を始めてしまったのだ。

「んんっ……！」

ほんの少し聖の唇が首筋を這わせただけで未散の甘い吐息が漏れた。

恐らく未散にとっては初めての感覚だったのだろう、完全に聖の寄りかかり咄嗟に聖の腕を力なく掴んでいた。

こうなってしまうたら聖の方は面白くてしょうがない。

未散が抵抗しないのをいいことに調子に乗って唇を這わせる場所を肩や背中にもまで広げた。

……けれど、

「聖くんもうやめよ……いつまでするの……？」

きつと誰も聞いたことがない未散の上ずった声と自分に振り向いて見上げる潤んだ瞳に、

これ以上同じことしたら間違はなくこの場で吉岡押し倒すわ…

…。

危ない危ないと思いつつ、

「しょうがねえな、今日はこれで許してやる」

と、何を許すのかよくわからないことを言つてのけ、聖は意味深に笑いながら未散から腕をはなした。

だけどあの時の未散は今でも聖の頭の隅にいて、未散が見せるふとした仕草に刺激されて突如思い出すこととなり、そのたびに聖は慌てて掻き消していた。

おまけに未散には、

「うん、わかった」

と、これまたどういいう意味なのかわからない返事をされてしまった。

なんだよその返事……俺の都合で理解していいわけ？

未散に直接真意を聞けない聖は今も変わらず悶々としている。

つまり……悪戯をしたのはこっちのはずがモノの見事にその仕返しをされてしまっている、というわけだ。

それでもとりあえず收拾はついた　少なくとも聖はそう思っていた。

しかし優太はそれに対して非常に痛い突っ込みをしてきたのだ。

「……なんだそれ、すっげー中途半端じゃん。遠まわしすぎてわらん」

優太は聖にそう言う口をへの字にした。

「わかるって、優太じゃあるまいし」

完全に優太を馬鹿にしたように聖は鼻で笑って返したのだが、優太はますます口の端を下げた。

「いやわかんないね、ってか俺はわかりたくない。ダメ、そんなの」

優太を腕を組み、ギロ、と聖を見上げた。

「優太にダメ言われても……」

聖はぽりぽりと頭を掻いた。

「じゃあ聞くけどさ、未散はなんか返事したのか？俺にはどこでなにと未散が返事したのかさっぱりわからなかったぞ？」

ほらどうした言ってみるといわんばかりに優太は鼻の穴を膨らませて相変わらず聖を見上げ続けた。

「それを言われると確かに……」

聖のこの弱気な発言がいけなかった。

「ほらみる！未散わかってねーじゃん！ダメ！もう1回やり直し！」

優太はすかさず聖に命令を下したのだ。

「そんなあ」

優太を見下ろして聖はもう泣きそうな顔をする。

「そんなあ、じゃない！悪いのは聖だろ！」

優太は聖の脇腹をグーで押そうと腕をさっさと伸ばした。

「もう無理だよ……あれ以上無理なにしろって言うんだよ……恥ずかしいじゃん……」

優太に押されそうになる脇腹をなんとかかわしながら聖は抗議した。

「なにが『恥ずかしいじゃん』だよ？！相手からどんな返事が来るのかわからないままビクビク言うよりマシだろ？！そのぐらい我慢

しろ！ちゃんと言えっ！」

だーっ！まったくよー！と優太はもう一回拳で聖の脇腹を攻めた。

「すぐそれができるなら誰も苦労しないって……」

今度は見事に脇腹に優太の鉄建を食らった聖は「いつてえ……」と脇腹をさすった。

同じ時間、未散も未散で似たような突っ込みを衣に入れられていた。

「ふーん、そう。それはよかった」

後夜祭前の片づけをしながら未散の話を聞いていた衣は「あーよかった、これでもう知らないフリをしなくてすむ」とかなりホッとしながら心の中で胸をなでおろしていた。

「あれ？でも待って」

衣はなんか抜けている気がする、と思ったのだ。

衣装をたたみながら衣は未散に呟いた。

「なんかさ、未散はどこで西倉くんに返事をしたんだ？って思っちゃったんだけど」

「そ、そうかな」

脱いだ服をわたたとたたみながら未散は衣に答える。

「うん……西倉くんは『ああここで言っただな』ってわかるんだけど」

たたまれた服を衣はダンボールにしまいながら思ったことをそのまま未散に伝えた。

「……言われてみればそうかもしれない」

未散の服をたたむ手が止まってしまった。

「えーっ！？ダメじゃんそんなの！」

最初にダメ出したしたのは自分の癖に、さらに衣は未散にダメ出しをした。

「どうしよう、ね、衣、どうしよう……」

未散は急におろおろし始めた。

「どうしようって言われても……」  
無責任は衣は困っている未散になにも言っただげられない。

そんなわけで、優太と衣のせいで2人の関係は振り出しに戻った  
ような状態になってしまった。

しかもそれが未散最大の悲劇の始まりになるうとは、このときは  
誰も知らない。

Vo1・52(後書き)

こんにちは、愛梨です。

未散と聖のコイバナ後編を始めました。

それにしても……聖くんちょっとやらしいから！高校生なのに！

！（汗）

未散も未散で相当やらしいし！！（苦笑）。

そんなことしてるから優太と衣に突っ込まれるんだってば！……

なんて全然関係ないのに思ってみたりする私です（笑）。

で、前回予告したとおりそのうちラスボス（？）が登場してきますけど、次回はその前の余興というか、ちょっとだけ2人の距離が縮まる胸キュンエピソードでお送りします……って、「胸キュン」なんて誰も今どき言わないわね（苦笑）。

というわけで、またです。



その日の夜。

聖はしばらく自分の机の上にある小さな引き出しをジッと見ていた。

その引き出しはある日を最後に一度も開けられることがなかった。

その日は言葉では言い表せないくらい苦しくて辛かった。

今でも覚えているのだが、半べそで家に帰ってきて早々にその引き出しの中のモノをゴミ箱に投げ捨てた。

でも……情けないことに、想いを断ち切れなくて結局捨ててから5分もしないうちにゴミ箱からまた拾って後生大事に引き出しにしまった。

しかしいつの間だろう、その引き出しはもちろんその引き出しの中身の存在もすっかり忘れていた。

だからこうやって引き出しを眺めるのは久しぶりのことだった。

あれから一年半か……。

聖はその引き出しに手を伸ばし取っ手を引っぱった。

出てきたのはシルバーのチェーンと、そのチェーンに通された男物のシルバーの指輪だった。

チェーンは引っ越すときに優太がくれたものだった。

そして指輪は、中3になる前の春休みに買ったものだった。

でも指にはめたのはたった1回だけだった。

聖はそつと指輪を持つとチェーンから外して左手の薬指にはめた。

どうやら指は成長してないらしくぴったりはまった。

しょうがない、モノに頼るか……。

左手をかざしなら聖は1人苦笑した。

2日後。

聖は優太を連れてあっちこっちの店を覗いていた。

「聖い一体なんだよお、俺もう疲れた」

やたら指輪を見ては自分の小指にはめてくる聖に優太はげんなりしていた。

「ごめんな。しかも優太にあげるわけじゃないのに」

申し訳なさそうに聖は優太に笑った。

「当たり前だよ、聖から指輪なんかいらねーよ！」

おお気持ち悪っ、と優太は身震いする。

「誕生日プレゼントにしようと思って」

はい指貸して、と聖は優太の手を取った。

「……あ、そういうこと」

優太はようやく納得していた。

「で、指輪あげんの？……うわー聖ってキザ」

俺には真似できん、と優太は聖の顔を見てニヤニヤした。

「俺は優太みたいに言えないからこれしか方法がないんだよ」

うーんどっちがいいかなあとぶつぶつ言いながらも聖は優太に答えた。

「でも、なんで俺の指にはめてんの？」

大丈夫なのかそんなんで、と優太は少し心配になる。

「大丈夫、だからさっきわざと3人でコーヒー飲みに行ったんだよ」

「……どういうこと？」

「優太のどの指が吉岡の薬指と同じ太さかを観察するために行ったようなものだから」

俺って頭いいだろ、と聖は優太に笑って片目を閉じた。

「……学年トップはやるのが違うわ」

優太は感心する。

そう。

つい30分前まで聖は優太と未散を誘って学校の近くのコーヒー

シヨップにいたのだ。

で、聖が知リたかつた未散の誕生日と薬指の太さは何気ない会話の中で見事に聞き出した。

入学以来学年トップの座を守り抜いているこの男はどうやらこういうことにも頭が回るらしい。

11月17日。

未散がこの世に生まれた日を、聖なりに彼女にとって人生で一番幸せな誕生日にしてあげようと思つていたのだ。

翌日。

女バス部の部室は大騒ぎになっていた。

「ちよつと見た？西倉の首」

「見た見た、あれつて指輪だよね？」

「しかも2つつてところが超意味深」

「彼女でもできたのかな」

もう気分はオバサンたちの井戸端会議。

着替えながら言いたい放題が始まつていた。

今日も例によつて男子は練習中暑くてほぼ全員がTシャツを脱いだのだが、その時に「西倉なんだよそれ?!」と男の声がどよめいた。

その声に女子も「なにになに?」と見ると……部員の1人が聖の首にかかつている指輪を指でピンとはじいていたのだ。

「決まつてるだろ、聞くな聞くな」

聖はそう言いながら指輪を手にとつて、ふふふんと笑いながらそつと唇を押し当てたのだ。

それを見ていた男共は「西倉カツコつけすぎ!」「聖なにそれわざと?!」と実に様々な眼差しで聖を見、女子の方は「あれ、あたしがほしい!」と浮ついた声を上げていた。

未散はそんな中、1人聖から目を離せなかつた。

ごめんな、もう少し待つてて。

聖はまわりに気づかれないうちにしながら、女物の指輪を親指と人差し指とで挟みながら未散に向けて翳すと確かにそう言った。

もう少して何？待ってるって、一体いつまで……？

聖の言葉に未散は笑顔を作る余裕なんかなかった。

「ねえ、未散は知ってるんじゃないの？」

未散の隣のロッカーを使っている先輩が不意に未散に話を降ってきた。

「知ってるって、何をですか？」

まわりは聖の話でまだ盛り上がっていることなどわかっていなかった未散は真顔で先輩に質問を返した。

「だから、西倉の指輪をあげたい相手のコのこと」

未散西倉と仲いいみたいだし、と先輩。

「いやああたしはそれはちよつと……」

自分だと言ったらどうなるんだろうとは思ったが言う勇氣のない未散は言葉を濁した。

「もしかして未散だったりして」

「え、なにそれ」

「ちよつと、どういうこと?!」

ところが1年生の誰かが爆弾発言をしたことにより終わりかけていたはずの話が再び盛り上がり始めようとしていた。

すかさず全員がその爆弾発言の彼女を見た。

彼女はニヤリと未散に不敵な笑みをこぼすと口を開いた。

「だって文化祭のとき未散のこと助けてたじゃない、あれはただの親切心とは思えなかったな。ナンパ相手に本気で怒ってたもん、あの時の西倉」

どうなんですか吉岡未散さん？と彼女はジャージをたたみながら未散に含み笑いをする。

「ああそうそう。それで確かさあ、そのあと西倉、未散連れ去っちゃってたよねえ」

別の1年生のコがシューズを脱ぎながらまた言い始める。

「あーそういえば、2人ともしばらく戻ってこなかったよねえ」  
また別の誰かが言い出した。

「一体どこで何してたんだか」  
スカートを穿きながらまた別のコが未散に、ムフ、と笑った。  
「どこって……逃げ回ってただけだからなにもないよ……」

未散は努めて冷静にそう言い返しながらも、咄嗟に左手でまるで隠すように自分の首筋の左側を押さえていた。

というのも……自分の首筋をなぞった聖の唇を思い出してしまったからだった。

あの時はホントにどうなっちゃうんだろって思った。

もし自分が「もうやめよう」って言わなかったら多分聖は  
なんとなくその続きを考えてしまった未散の顔は一気に赤くなっ  
た。

おまけにあの時、最後に聖は、

「今日はこれで許してやる」

とのたまっていて、それに対して未散は、

「うん、わかった……」

なんて言っていた。

言ったそのときはなにも考えずに言ったので特に何も気にならな  
かったのだが、今こうやって客観的に自分の言ったことを聞いてい  
るとなんだかともんでもないことを言ってしまったような気がした。

あの返事は聖からすれば「次は今日以上のことをしていただいで  
かまいません」と半ば言われているようなもの。

ということとは……。

うわー！バカバカバカっ！なにをあたしは……！

未散は心の中で首をブルブル振った。

「ふーん……？」

みんなはそんな未散にそれ以上は何も言っではこなかったのだが、  
めいめい勝手に妄想しているのは明らかだった。

あれ……なんかあたし、自分で暴露しちゃった……？

部員全員の無言の笑顔に未散はもう愛想笑いをするしかなかった。

そんなわけでハッピーエンドへのカウントダウンは始まっていたように見えていたのだが、それは気のせいだったということに気がつくのは間もなくのこと。

Vo1・53(後書き)

こんばんは、愛梨です。

前回と今回でお互いの気持ちが悪く交錯するように書いてみたんですけど……なんかやんなっちゃう(笑)。

このもじもじ感というか中途半端感というか……恐らくですが悪いのは……聖です(苦笑)。

でも、腹の探りあいをしているのではなく単に自分のことではないっぽいのが高校生らしいかなと思ってます(笑)

さて、次回ですが……いよいよラスボスの登場です。

どんな人物なのかは……次を読んでのお楽しみ、ということにしておいてください。やっぱりこのパターン(苦笑)

というところで、またです。

未散の誕生日まであと10日というある日のこと。

聖が部室の前まで歩いていくと、部員そして顧問までが部室のドアの前で全員ニヤニヤ顔で聖を待っていた。

「西倉、お客さんだ」

顧問が「おまえもスミにおけないな」と言いたげに笑うと、肘で聖を突いた。

「西倉はついでみたいなのモンだけど、挨拶したいって言うから部室で待っててもらってるよ」

部長も聖を顧問の反対側からやっぱりニヤニヤした顔で肩を思いっきり叩いた。

「……なんでみんなそんな顔してるの？」

何が楽しいのかがわからない聖はどうも気になる。

「だってそのお客さん、すごいカワイイ女のコなんだもん」

西倉いいよなー、とみんな声を揃えた。

「……誰ですか、一体？」

見当がつかない聖は少し恐怖を感じながらみんなの笑顔につられて笑っていた。

「まあ、入ればわかる」

どうぞごゆっくり、と部員は部室のドアの前をあけると聖にやっぱりニヤけながら手を振った。

誰だよ……開けるの怖いなあ……。

1人部室の前に残された聖はひと呼吸してドアのノブを回してそのまま押した。

ドアを開けるといたのは……明らかに私立高校っぽいブレザーの制服を着た女のコ。

部室にある椅子に腰掛けていた。

「……久しぶり、聖」



部室にいたその彼女は、聖を見るとそう挨拶して遠慮がちに笑った。

すっかり忘れてた……バスケットをやらなければいつか「この日」が来てしまっただけだったのに……。

「……………」

彼女の顔を見て聖は声が出なかった。

聖は未散がこの学校でバスケットを続けていることを知ったことでまたバスケットを始めたわけだが、もしそれがなかったらバスケットをもう一度やることは絶対に思わなかった。

未散を再び見かけるまではバスケットなんか2度とやるもんかと思っ  
ていた。

その原因を作ったのは……目の前にいる彼女なのだ。

「なんでわざわざ来たんですか、別にマネージャーなら他にもいる  
でしょ」

時間をかけてやっとふさがったはずの心の傷が、彼女に言葉を投げつけた途端にえぐられ始めた。

「あたしが行くって言ったの。聖がいるのもわかってた。多分、会  
っちゃうんだろっつなっても思った」

そう言つと彼女はまっすぐに聖を見た。

「わかっててどうして来たんですか。俺はもう先輩の顔なんか見た  
くなかったのに……」

聖の方は彼女を見ることができない。

自分のロッカーのドアを勢いよく開け、ロッカーの中だけが視界  
に入るようにしていた。

でも、そんなことをしても全く意味がない。

聖のえぐられた心の傷はどくどくと血が流れ始めていた。

「そっだよ……でもあたしは聖に会いたかった。だからインター  
ハイ予選でコートにいるのを見つけたときは涙が止まらなかった……」

……

「……………」

彼女の言葉に聖は振り向いた。

彼女はそんな聖に泣きそうになりながら笑いかけた。

「最後に会った日に『俺はもう2度とバスケットボールは持ちません』って言ったのに、1年たったら並木優太と並んでスーパープレイヤーで注目されてるんだもん……まさかそんなことになるなんて思わなかった……でもよかった、またバスケ始めたんだね……」話をすればるほど彼女の声はすすり泣く声に変わっていった。

「こんな所で泣かないください、俺困ります」

思わず手を差し出しそうになる気持ちを押し込み、聖は彼女から顔を逸らしてロッカーのドアに再び手を掛けた。

「ごめんごめん、聖の優しい所につけ込みそうになった」

彼女はポケットからハンカチを出して目の下に当てた。

「……1年以上見ないと男の人って変わるね」

少し落ち着いた彼女は眩しそうに聖を見上げた。

「なんにも変わってないですよ、俺は」

聖はつつけんどんに返しながらガクランのボタンに手を掛けた。

「うっん変わった、すごい変わった。カッコよくなって大人になった」

「……………」

背中で聞いた彼女のその言葉に反応して振り向かないようにするには聖にとってはかなりの努力だった。

今彼女がどんな表情かおをして自分を見ているのか、それを見えしめたら自分が何をしてしまうのか、それをわかっていたからのような気がする。

「……じゃあ、あたし帰るね」

彼女はそう言うのと立ち上がった。

「17日にまた会っけど。ウチと練習試合だからよろしくね」

彼女はそう言うのと部室から出て行った。

彼女がいなくなるのがわかると足もとから力を奪われるような感覚に聖は襲われた。

体を支えようとしてロツカーに手をついていた。

こんなに時間が過ぎたのに……もう終わったかと思ってたのに……。

心の傷はまだズキズキしていた。

聖は思わず学ラン越しに胸を掴んでいた。

人生で初めて自分のことを好きだと言ってくれた女ひとだった。

そして、人生で初めて自分が憎んだ女ひとだった。

それが彼女ひとだった。

彼女の名前は、あまが いひより雨貝日和。

そう。

聖の「初めての彼女」は年上の女だったのだ。

Vol. 54 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

ついに登場です、ラスボス日和ちゃん!! (笑)

聖の元カノというのは想像つきましたかね?

まあ、トップページを読んだ方なら想像もなにもないですけどね、書いてますから(汗)。

しかも日和、外見がまたやっかいなんです。

それは読めばわかるんでいいんですけど……なんかすみません、ものすっごいベッタベタな展開にしまってます(汗)。

さて次回ですけど、またまたタイムスリップしたいと思います。

今度は中坊聖くんをご覧に入れましょう。

というわけで、またです。

聖と日和の出会いをよくある話だった。

この頃すでに優太は県内のバスケットボール界では実力はもちろんのこと、見た目のかわいらしさも手伝ってちよつとした有名人だった。

小学4年の終わりに親の都合で転校してからは一度も連絡を取ったことはなかったが、同じフィールドにいればまた優太に会えるかもしれないと思って中学から聖もバスケットを始めた。

このときの日和はというと男女バスケット部兼任のマナージャーだった。

それが理由で2人は出会ったわけだ。

我が校の小野小町　　そう日和は男子から称されていた。

なぜ小野小町なのかというと、見た目の美貌とは裏腹にどんなにかっこいい男に言い寄られてもピシヤリと一言、

「ごめんなさい、気持ちは嬉しいけどあたしはそんな気ないから」と、ことごとく跳ね除けてきたからだ。

一体誰がこの現代に蘇った小野小町を落とすのかと噂するのは日常茶飯事だった。

しかし聖から見た日和の第一印象はというと正直あまりよくなかった。

別にこれは日和が悪いのではなく単なる偶然に過ぎなかったのだが、外見があまりにも衣に似ていたのだ。

だから同級生達や先輩達が、

「雨貝先輩、かわいい!」

「日和のそのつれない仕草、最高だね」

と、日和をまるでアイドルのように崇めている輪の中にはどうしても入れなかった。

ちつくししょう、古傷が痛むなあ……。

特に衣とそっくりな日和の笑顔を見るたびに聖は日和を遠ざけるようにしていた。

だから日和とは社交辞令というか挨拶ぐらいしかしなかった。

だが、聖が入部した2ヶ月後には状況が変わっていったのだ。

「西倉、ちょっと来い」

練習が終わってめいめいが帰ろうとする中、顧問が聖を呼んで手招きした。

「……はい」

聖は顧問に駆け寄った。

「西倉、今日からボディーガードを頼まれてくれないか」

「ボディーガード、ですか？」

何を言い出すんだこのオッサンは、と聖は心の中で眉をしかめた。

「今朝雨貝が『部活を辞めたい』って言い出してな。理由を聞いたら帰り道が怖いって言うんだよ」

顧問の話はこうだ。

ここ1ヶ月ぐらい、日和は帰り道に見知らぬ男に声を掛けられたり追いかけられたりしているらしくて、それに耐えられなくなっているらしい。

しかもそれをしてくる男が1人2人じゃない上に全く知らない男のため余計に恐怖心が募っているらしいのだ。

「一応警察には届けは出してみたらしいけどそれだけじゃ心細いから、今日から雨貝を家まで送ってやってくれ」

「……なんで俺なんですか？」

挨拶しかしたことがない女と帰るなんてできれば避けたいもの。

聖は断る理由を探そうと顧問に質問を返した。

「おまえが隣にいればよっぽど勇氣ある馬鹿な男じゃなきゃ近づいてこないだろうというのと、あとおまえだけなんだよ、雨貝のこと

ついでに送れる距離に家があるのが」

他の連中は遠回りになっちまうからなあ、と顧問は聖の質問に答えた。

「それにもう一つ言うと……雨貝の要望でもあるんだよ」

「……なんですかそれは」

顧問の一言に聖は思わず突っ込みを入れた。

「多分他の男だとかえって危険な気がするんじゃないのか。でもおまえならそれがなさそうって雨貝は思ってるらしい」

なんだまだ質問があるのか、と言いたげに顧問は腕を組み始めた。

「……いえ、わかりました。はい」

どうあがいても断るのは無理と思つた聖は観念してしまった。

どうすんだよ、何話せばいいんだよ……。

部室に戻りながら聖は深くため息をついた。

Vol. 55 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

日和が厄介な理由、わかりました？ (笑)

そうなんです、なんと日和は笑った顔が衣に瓜二つ、なんです。だからできるだけ接触しないように努力する聖だったんです。

でも、似てるっただけで他はぜんぜん違うなんてことはよくある (というよりそれが普通) のに、なんせ中坊ですから割り切れないわけです (苦笑)。

いやはやすっかり困った聖くんですが日和はというと……？

では次回は、渋々一緒に帰るハメになった聖と日和が聖を指名した理由について迫っていきこうと思います。

ということ、またです。



着替えたら職員室に來いと顧問に言われた聖は、憂鬱な気分のままバッグを肩に引つ掛けのろのろ歩いていた。

階段を下りて左へ曲がると職員室があるのだが、その前の廊下で顧問ともう来ていた日和が聖を待っていた。

やだなあなんで俺なんだよ……。

部室でも聖と顧問の会話を聞いていた先輩に、

「西倉あ、変なことしたら承知しねーぞ」

「聖、なんなら俺が代わろうか？」

とまあ、聖からしたらうつとうしい以外の何者でもない言葉を掛けられすでに気が重いのに、

「西倉頼むぞ、ちゃんと家の前まで送ってくれよ」

と顧問には最後の念押しまでされてしまった。

外履きに履き替え一応日和の歩幅に合わせて歩くものの、なんだかとっても家までが遠くに感じる。

はあ、早く先輩んち着かないかなあ……。

気まずい雰囲気か2人の間を取り巻いた。

「……西倉」

聖より3歩ぐらい先を歩いていた日和が聖を呼びながら振り向いた。

「……はい」

聖は思わずびくつとして立ち止まった。

「……西倉って、あたしのこと嫌いだよね？」

日和はそう言いながら怒ったような、泣きそうな顔をして聖を見上げた。

うつ、どうしよう。なんて言い訳しよう……。

まるで衣に言われている気がする聖はまったく言葉が思いつかない。

聖の思考回路は完全に停止していた。

「そうわかった、もういいよ。明日からは違う人に送ってもらおうに頼むから……ごめんね、嫌いな女と一緒に帰るなんてイヤだよ」

返事をしてこない聖に日和は背を向けるとさっさと歩き出した。

「ち、違うんですっ!」

気がついたら聖は日和の背中にそう言っていた。

別に勘違いされたままでも都合はいいはずだった。

そうすれば送らなくてもいいし胸が痛むこともない。

でもどうしてだったんだろう。

このまま気まずいのはイヤだ。

そう思ってしまったのだ。

「べ、別に兩貝先輩が嫌いとかじゃないんですっ」

何かから言えばいいのかわからないまま聖は続けた。

「小1のとき好きだったコがいて、でも俺はいじめちゃって、それで結局そのコには振られちゃって、で、そのコに先輩が似てるもんだから……あ、いや、す、すみませんっ!」

話はめちゃくちゃだった。

最後にはいろんな意味を込めて聖はぶんつと日和に頭を下げた。

「……そんなに似てる?」

「……え」

聖が見上げると日和がすぐ目の前で不安そうに聖を見上げながら立っていた。

「そのコにそんなに似てるの?」

無理に笑顔を作りながら日和は聖にもう一度聞いた。

聖は返事の代わりに首をぶんぶんと横に振った。

似てるも何も聖の記憶には衣がどんな顔をしていたかということ以外はまったくといっていいほどないので日和とくらべようがなかった。

ただど確かに言えるのは、避け続けた自分のことを衣はきつと気

にも留めなかつただらうけど、日和の方は気にしてくれていた……  
それだけははっきりしていた。

「西倉、お願いだからあたしを見て。あたしは兩貝日和なんだよ？  
西倉が昔好きだったコのそっくりさんなんかじゃない……」

そこまで言うとき日和は聖の目の前でぼろぼろと涙をこぼした。

そして聖の方はというと、目の前で女の子が泣いているというの  
にただ呆然と立ち尽くしていた。

日和の涙の理由を聖が知るのはいずれから1年後のこと。

そしてそれまでには聖の日和への感情も徐々に変わっていったの  
だった。

こんばんは、愛梨です。

多分中坊ってこんな感じじゃないかなあ……と思って書きました。男の子が意味のある女の子への気遣いができるようになるのってどんなに早くても高校生になってからですからね(笑)。

今でこそそれなりに気遣いができる聖ですけど、中学生のときはこんな感じでした(苦笑)。

さて、次回ですけど。

引き続き聖の中学生時代編でお送りします。

場面はここから約1年後、日和が部活を引退した日まで一気に飛びます。

ホントはここでゆっくりとこのときの聖から見た日和を書きたい所ですが、書くとなんかややこしくなるので今回は割愛します。

でもいつか書きたいなあとは思ってますので、気になる方はどうか首をながーくしてお待ち下さい(苦笑)。

というところで、またです。

初めはかなりイヤイヤだった日和の自宅までの送り届けも、気がついたらもう今日で最後という日になっていた。

今日は日和たちの代が引退する日だった。

このときの聖にとって日和と帰ることはもう苦痛だった。

だがその苦痛は同じ苦痛でも1年前の苦痛とは違うものだった。明日からはもう帰る時間は同じではなくなる。

そうなれば一緒に帰る理由なんてない。

だから明日からは帰りはいつも1人……。

2年生になってからはこの日が来るのがとてもイヤでイヤで、だから日和たちの引退が遅くなるように勝とうと必死で練習した。

けれど残念ながら聖たちのチームは地区大会ベスト16で終わってしまったのだ。

「こつやつて送ってもらうのも今日が最後だね……ありがとね、毎日毎日1年間」

あと100メートルも歩けば日和の家に着くというところで日和は聖にお礼を言い出した。

「いえ、通り道でしたし……」

感謝を述べられるといよいよこれが最後なんだということをイヤでも思知らされ、聖は気のきいた言葉はなに1つ思い浮かばない。

「明日からは西倉たちの代だね。頑張つてよ、副部长」

聖の気持ちをさっぱりわかっていない日和はバシッと聖の背中を叩いた。

「あ、雨貝先輩こそ受験勉強頑張ってください……」

おー痛つてえ、と小さく呻きながら聖は日和にそう言いながら背中をこすった。

そんなことをしながら歩いているうちに日和の家の前に着いてしまった。

「ありがと。……じゃあね、気をつけて帰ってね」

石段を後ろ足で上りながら日和は聖に手を振った。

「はい。じゃあ、失礼します……」

明日からはなかなか会えなくなるというのに聖は昨日と全く同じように日和に返して軽く頭を下げると、姿勢を戻して回れ右をし聖は歩き出した。

あー終わっちゃったよ……。

だったら今から家に入ろうとする日和を掴まえて言いたいことがあるなら言えばいいのに、臆病者の聖は振り返る勇気がない。

はあ、と聖は肩を落とした。

そのときだった。

「西倉っ！」

後ろから日和の声がした。

聖はびくびくっ、としながら後ろを見た。

「ねえ西倉、あたし、明日から西倉が部活終わるまで図書室で勉強して待ってるから、明日も一緒に帰っていい？」

あたしイヤなの、と日和は近所迷惑になるのも忘れて聖に大声で話しかけた。

「西倉と一緒に帰れなくなっちゃうのも、あたしじゃない他の女のこと西倉と一緒に帰るのもイヤなの」

そこまで言うつと日和は立ち止まったままの聖に駆け寄ると聖の腕を掴んだ。

「あたしずっと西倉が好きだった。でも、そのときは理由がわからなかったけれど西倉はあたしのこと嫌いなんだろうなって思ってた。だからその理由を知りたくて顧問の先生に『一緒に帰ってくれる子は誰がいい？』って聞かれたときも『西倉がいい』って言った。初めて一緒に帰った日にあたしを西倉が避ける理由知って絶望的だった。ただ西倉はそれでも毎日一緒に帰ってくれたからあたしはどんどん期待してた……でも、気のせいだった。西倉は頼まれ

たら断れないからそれで送ってくれてただけなんだよね……」  
突然の日和からの愛の告白だった。

「……………」  
一気に捲し立てられ聖の頭はパンクしそうだった。

どうしよう、何言ったらいいんだよ……。

考える余力がない上に日和の涙があふれている目で見上げられてさらに聖は動けなくなる。

なんか言え、なんか……っ。

せき立てる自分があるものの、あせってしまっただけで言葉が出てこない。

「……………」  
聖は何も言えないことが申し訳なくて俯いてしまった。

「やっぱりそうなんだ……わかった……ごめんね、今の聞かなかったことにして」

聖が俯いた訳を「自分の告白が迷惑だったから」と誤解した日和は聖に謝った。

聖の袖を掴んでいた手をはなし、家に戻ろうと聖に背を向けようとしていた。

「先輩、待つて」

間一髪、聖は日和の腕を捕らえていた。

日和は聖に振り返った。

振り返った日和の頬には、いくつもの涙が零れたあとが残っていた。

それをまともに見てしまったのがいけなかった。

聖は日和の腕を引っぱっていた。

「に、西倉……？」

突然の聖の行動に日和は目を泳がせる。

なにしてる俺は……ど、どーすんだよこの状況……?!

日和を抱き寄せてしまった聖はもうすでにこのあとどうしたらいいのかと焦っていた。

どうやら昔から口より先に手が出てしまい後悔するのは変わっていないらしい。

「……す、すみません！」

傍目から見たら「やるじゃん聖くん」という感じだが、当の本人はとうとうあたふたしまくっていた。

もうどうしていいかわからず謝りながら慌てて日和からはなれた。

「ああああ、あの、俺は、えっと、その……あーっ！」

返事をしようと思っても何から言えばいいのかわからず、最後には頭を掻き毟った。

それを見ていた日和ははじめは啞然としてしていたが、だんだんおかしくなってきた。「ふふっ」と噴出し始めた。

「西倉」

「はははは、はいっ！」

「……あははははは！」

聖に質問しようと思って日和は聖に呼びかけたのだが、直立不動で返事をする聖に日和はとうとう大笑いを始めてしまった。

ななななな！どうすんだよ！笑わせてる場合か！

これでは色気も何もないわけで、どう考えても返事どころじゃない。

本気で腹を抱えて笑っている日和を見ながら相変わらず聖は硬直したままだった。

「……わかった、よくわかった。あたしが悪かった、ゴメンね」

ああおなか痛い、とまだ笑い足りないらしい日和は「ど、どうしよう」とぶつくさ呟く聖の顔を見て

笑いを堪えながら謝った。

「いや、あの、そんな、謝られなくても……」

なんで日和が謝ってきたのかわからない聖はぶるぶると両手を振った。

「西倉、質問していいかな」

「……え」



話を急に振ってきた日和に聖の両手はぴたりと止まった。

それを見てまた笑いそうになりながらも日和はあのね、と言葉を続けた。

「西倉は今まで自分から女の子をぎゅっとしたことってある？」

「め、滅相もないですよ！さっきのが初めてってどうか……あ、す、すみません！」

最初の日和の質問に聖はまたわたわたと手を振ると、はっとしたように今度は謝りはじめた。

「別に謝らなくていいんだけど……じゃあね、もしも今ここにいるのがあたしじゃなくて他の女の子だったら西倉はどうしてた？」

「またもやかちこちの聖に笑い転げそうになるのを我慢して日和は2つ目の質問を聖に投げかけた。」

「どうって……謝るだけですよ、『すみません、そんなこと言われなくても困ります』って」

「目の前で泣かれちゃっても？」

「そうですね、そんなことされたら俺逃げ出します、多分」

「うわあ、西倉って冷たい」

「少しだけ責めるように言いながら日和はわざと腕を組んで笑いながらも軽く聖を睨んだ。」

「だってしょうがないじゃないですか！泣かれたからってどうこうできないし……」

「これこそまさしく逆ギレ、聖はムキになって日和に言い返した。」

「……西倉」

「……はい」

組んでいた腕をほどきながら日和は真顔で聖を呼んだ。

「聖もそれに釣られてか表情を元に戻していた。」

「あたしが彼女だと今年はクリスマスもバレンタインもきつとないよ？それでもいい……？」

日和は意を決したかのように聖を見ると、聖にそう聞いていた。

「わかってますそんなこと、全部わかってます」

聖の返事は即答だった。

ほんの少しだけ辛そうに笑いながらも聖は頷いていた。

「先輩以外の女とクリスマスやるくらいなら先輩と勉強してる方がいい。先輩以外の女からチョコ貰うくらいなら俺が先輩にチョコあげます……俺はそっちのほうがいいから」

聖は日和に歩み寄るとしゃがんで日和を見上げると、腕を伸ばして日和の頬についた涙のあとを拭いた。

「今度のクリスマスもバレンタインも俺はいりません。明日からも先輩と一緒に帰れるならそれでいいです」

それが聖からの精一杯の日和への告白だった。

「西倉、ありがと。ありがとね……」

日和は聖の言葉に笑っていたがすぐにその笑顔は崩れてしまい、首にしがみついて泣きじゃくり始めた。

「先輩こんなところで泣かないで下さい、俺困ります……」

そう言いながらも、もう聖が慌てふためくことはなかった。

日和の背中に右手をそつと手を置き、もう1つの手は髪を聖はあやすように優しく撫でていた。

そしてほどなく聖は『あの雨貝日和を落とした男』として君臨することになる。

それは日和が卒業するまで語り継がれていったのだ。

Vo1・57（後書き）

こんばんは、愛梨です。

やるな、中坊聖……なんてね（笑）。

それにしても……今までを見てても思う方はいると思いますが、  
案外聖はこういうときは全然冴えない。

よっぽど優太の方がしつかりしてます（苦笑）。

まあでもまとまったんでヨシとしてください（笑）。

今回は今作品では最初で最後の聖と日和のラブラブモードをお送りします。

そしてその次からは……いよいよ聖が「バスケットはもう2度としない」と決めてしまった理由が明らかになります。

きつとこれ、大人だったら絶対ありえませんか。

まだ恋愛慣れしてない世代だからこそ起こってしまう悲しい話です。

もうある程度恋愛経験を積んでいる人であれば、

聖……気持ちわかるけど許してやって欲しかったなあ……。

日和……おまえバカだなあ……そんなに強くならなくていいのに……。

……って思う人が多いんじゃないかなあと思います。

あとそうそう、みなさん覚えてますか？

久しぶりに「彼」も登場しますよ。

中学時代の聖を語るうと思っただらなくてはならない「彼」がまたもや物語を動かします。

とらいつことば、ちょっと一気に読んだ方がいいと思つのでしばらくはここはお休みしますね。

どつぞー気に入っちゃってください！

とらいつことば、まだです。

3月下旬。

聖と日和は手を繋いでアクセサリショップに入っていった。

日和は4月から高校生になるので中学生同士で歩くのは今日で最後だった。

「本当は欲しいけどなくなったら聖が困るもんね……」

卒業式の日に日和が少しだけつまらなそうに聖の第2ボタンを貰えないことを愚痴っていたので、まだ日和には内緒なのだが今日はその代わりになるものを買いにさりげなくこの店に入ったのだ。

「わーこれかわいい……」

日和はあれこれと手にとっては感激していたが、しばらくすると日和がしきりと手にするものが決まってきた。

でもなんだか難しい顔をしている。

「……どうしたんですか？」

聖は日和の隣に並んで日和を覗き込んだ。

「うっん、これかわいいなあと思って。でも3000円かあ、高いなあ」

右手の薬指に値札がついたままの指輪をはめて日和は上にかざすと「でもこれ一応値下げしてるんだよねえ」とつぶやきながら、日和は指輪を外し名残惜しそうに元に戻そうとした。

「日和先輩」

聖はまだ指輪を持ったままの日和の手を捕らえた。

「それ、第2ボタンの代わりということでもいいですよ」

3000円は正直痛いけど日和先輩が喜んでくれるならいいか……。

聖は意識して穏やかに笑うと日和が持っていた指輪を取り上げた。

「……いいの？」

日和は遠慮がちに聖に聞いてくる。

聖はそれに対して笑ったまま静かに頷いた。

「その代わりお願いがあります」

「お願い？」

不思議そうに聞き返す日和に聖はまた頷いた。

「俺もこれ買います。で、ココにはめるんで、日和先輩もココにはめてもらっていいですか？」

そう言いながら聖は日和が夢中になって指輪を見ている間に選んだ指輪を自分の左手の薬指にはめて指差したあと、日和の左手の薬指を指した。

「……なんか聖のお嫁さんになったみたいで照れるね」

日和は聖の提案にはにかみながら笑うと黙って小さく頷いた。

店を出た時には2人の左手の薬指はきらきらと太陽の光に照らされて輝いていた。

これから会うときはこの指輪を左手の薬指にすること。

そんな約束も2人の中で交わされていた。

けれど。

2人がこうして歩くのはこの日が最初で最後となったのだ。

それは5月の下旬のことだった。

「なあ聖」

「うん？」

「おまえさあ、日和先輩と別れてない、よなあ……？」

最後の大会に向けての練習が終わってジャージを脱ぎながら、隼は微妙な質問をしてくる。

「別れたつもりはないよ俺は…… まあ確かに最近は全然会ってないけど」

向こうも練習で忙しいみたいでさ、と聖は隼に返した。

「まあしょうがないよなあ、毎年インターハイ行っちゃうような高校のマナージャーだもんなあ」

言いながら隼は脱いだジャージをたたんだ。

聖、待ってるからね。来年は一緒にインターハイ行こうね。最後に会った日、日和は聖にそう言っていた。

そして新学期が始まると、お互いに部活が最優先になっていたので会うことはせずに電話かメールをしていた。

けれど4月中旬の頃から「最近毎日遅くまでマナージャーの仕事が終わらなくて、家に帰ってきてても疲れてすぐ寝ちゃう。電話できなくてごめんね」なんていうメールがよく入るようになった。

そしてそのメールの間隔もどんどん開いていった。

そして……とうとうそのメールすらも入らなくなった。

5月に入ってから聖は何回か電話したりメールを送ってみたが折り返しの電話もメールの返事もなかった。

もしかして自然消滅を狙われている……？

そう思い始めていた。

だからさっきの隼の質問は聖が見て見ぬフリをしてきた部分なのだ。

「……なあ隼。おまえ、なんか見たんじやないのか？」

聖はシャツを探すためバッグに手を入れた。

「……何を？」

隼もシャツをカバンから探しながら答えた。

「『何を？』っておまえ、自分でふっかけた話忘れるなよ」

聖はシャツのボタンをはめながらちら、と隼を見た。

「ああ、その話ね……」

隼としては終わった話になっていたのだが、聖が聞き直してくるのでもう一度元に戻した。

「最初はたまたまかな、って思ったんだよ。でも……俺、もう5回ぐらい見てるんだよね」

隼は言いにくそうに切り出しながらシューズの紐をほどいた。

「……何を？」

冷静に言っただつもりだったが、聖のその声は完全にいつもと違っていた。

「日和先輩が男と歩いているところ。しかも手まで繋いでた。あれは

……たまたま同じ方向に帰っているような雰囲気じゃなかったよ……

……」

隼はもう聖の顔を見れなかった。

あえて脱いでいる最中のシューズを見詰めていた。

「でも見間違いかもしれないし、日和先輩のそっくりさんかもしれないし……」

今度は言い訳するかのように早口で聖に言いながら隼はシャツの裾を制服のズボンにしまいベルトをしめた。

「隼、ちよつと付き合え」

すでに着替え終わった聖は荷物を肩に引っ掛け隼の腕を掴んで歩き出していた。

「ちよ、ちよつと待ってって！付き合うから！俺の荷物っ！」

聖の引っぱる腕の強さに負けそうになりながらも隼は机においてある自分のカバンをなんとか掴んで聖についていく。



「聖、どうする気……?」

昇降口で靴に履き替えながら隼は恐る恐る聖に聞いていた。

「決まってるだろ、現場取り押さえるんだよ!」

言うや否や聖は隼を置いて走り出した。

もし隼の言っていることが事実でそれを目の前で見てしまったら

自分はどうなってしまうのかなんて今の聖には想像がつかない。

でもこのまま知らないままにいるのはもっと自分が哀れだ。

どうか隼が見たものは他人の空似であって欲しい。

そう祈りながら聖は隼に日和を見かけた場所へ案内させた。

だがそんな聖のかすかな希望は無残にも崩れ去ることになる。

学校を出て40分後。

聖は隼が日和を目撃した現場である駅に程近い道路にいた。

隼の話によると駅から出てきたというので道路を挟んで駅の反対側で隼と待っていた。

そして……2人は見てしまった。

日和が聖の知らない男と手を繋いで笑い合っている姿を。

「……な、どう見ても日和先輩だろ……？」

隼は聖を見上げ遠慮がちに聞いていた。

「隼、これ持ってる」

突然聖は持っていたバッグを隼に押し付けると、見知ぬ男と手を繋ぎその男に笑顔を向ける日和に近づいた。

「お、おいつ！聖っ！」

怒りの感情が暴走し始めた聖に気がついた隼が慌てて声を掛け聖の腕を取ろうとしたが、紙一重で間に合わない。

「聖っ、バカっ！戻って来い！」

隼はつい大声を張り上げていた。

多分聖という言葉に反応したのか、日和らしき女性がこつちを見た。

そして聖を見た彼女　日和は目を大きく見開いた。

「どういふことですか、これは?!」

聖は掴み寄る勢いで日和を責めた。

「……………」

日和は何も言い返せないまま聖から顔を背けた。

「あーあ、作戦失敗かあ」

そう発言したのは日和の隣を歩いていた男だった。

聖がちらと下を見ると、男は今もすっかりと日和と手を繋いでいた。

「言つとくけど日和は何も悪くないよ。俺と彼女の利害関係が一致しただけだった、それだけだから」

「なんだよそれ、どういうことだよ?!」

わけのわからないことを言う彼に聖は上から睨みつけた。

「つまりはこういうこと。バスケ部のマネージャーとして入部してくれた彼女を俺は好きになった。でも彼女には年下の彼氏くんがいた。だから一度は俺も身を引いた。けれど、君に会えない寂しさを誰かに埋めて欲しいかった彼女は俺に頼ってきた。……わかった? 聖くん」

どういふわけか自分の名前を知っている彼は実にすらすらと事情を説明するとさらに続けた。

「俺は彼女にとつてはあくまでも君の身代わり。今ココで手を引くと君に言われるなら、俺はすぐにでも日和をココにおいて帰るよ」  
けど、と彼はそれまで笑っていた顔から険しい表情に変えた。

「日和がこんなことをするしかなくなる前におまえがなんかしてもよかったんじゃないのか? どうして日和がおまえにじゃなくて俺に甘えたのか、おまえ考えたことあるか?」

男は聖に詰め寄ると聖の胸ぐらを掴み自分に引っぱった。

「日和はおまえの負担になりたくなかったんだよ。本当はおまえに会いたくて会いたくてどうしようもなかった。けど、『最後の大会が近いから練習頑張っていて疲れているだろうし受験生だから勉強も頑張らなくちゃいけないから自分だけわがまま言えない』ってずーっとずーっと思ってた。だからおまえからのメールも電話もなんて返事したらいいのかわからなくてそのままになってしまった。……そういう日和の気持ち、おまえ全然わかんねーだろ?」

そこまで言うとな彼は乱暴に聖から腕を放した。

「気づくの遅せーんだよ、バカ。根本的に運動部のマネージャーをやれる女のコつてのはすごく気遣い屋なんだよ。自分の感情を押し殺してでも人のために動ける、そういう女にしかできない仕事なんだよ。そんなコはどこかでちゃんと息抜きさせてあげないと潰れて

しまう。本当ならそれをおまえがやるべきなんじゃないのか？どうにかして時間作って会いに行くぐらい中坊の頭がありや思いつくことぐらいできんじゃないかよ？！」

どうなんだよ、答えてみるよ！と彼は聖を下から睨み返した。

「中坊言うんじゃないよ！」

完全に馬鹿にされたと思った聖の怒りは爆発し、その勢いで男に拳を振り上げた。

「聖お願いやめて！大事な試合の前なの、怪我されたら困るの……！」

それは聖にとってはあまりに惨い光景だった。

日和が守ろうとしたのは聖じゃなかった。

聖じゃなくて、彼のほうだった。

日和は彼を庇うようにして聖の前に立つと聖の振り上げた腕を必死になつて押さえていた。

俺のことよりそいつの方が心配なのかよ。そいつの方がそんなに大事なのかよ……。

惨敗だった。

聖は振り上げていた拳を力なく下ろしていた。

ふと見ると目の前には涙目の日和がいた。

でもその理由なんて聖にはもうわかりたくなかった。

今更日和に何を言われても聖は聞きたくなかった。

「先輩すんません、気づいてあげられなくて」

考えて考えて考えて、聖はやつとそれだけを言いながらなんとか日和に微笑んだ。

けれどその笑顔は少しでも気を抜いたら消えてしまいそうだった。血の味がするぐらい口の中を噛み締め涙が溢れないように目を閉じて深呼吸していた。

そしてもう一度日和に必死になつて笑顔を作った。

「だけど、先輩がやつてること、俺がガキなだけかもしれないけど、さんざんほつたらかしたくせに言うかもしれないけど、そうい

うの、俺は許せないから」

言いながら涙がこぼれそうになっていた。

聖はギリツと下唇を噛んだ。

そして聖は日和に精一杯の強がりを見せた。

「俺、この大会終わったらバスケやめます。日和先輩にはもう会いたくないから俺は……もう2度とバスケットボールは持ちません……」

それが聖から日和への別れ話だった。

聖は2人に「失礼します」と頭を下げると背を向け歩き出した。

どうしてなんにも言ってくれなかった……そんな年下って頼りないのかよ……？

今聖の頭の中で思い出していたのは、日和の隣にいた男だった。

仮に彼が高校3年生だとしても自分との歳の差はわずか3歳だ。

なのに「中学生」と「高校生」ではこんなにも違うのかとまざまざと見せつけられた気がした。

自分は始終冷静でいられなかったのに対して彼はずっと落ち着いていた。

それがきつと日和が聖をないがしろにした理由なのだろう。

その証拠に日和は自分が別れると言っているのに引きとめようともしなかった。

そして追いかけてきてくれることもなかった。

それはもう紛れもなく、日和が別れ話を承諾したということ。

なんでこんな話、俺がしなくちゃいけないんだよ……？！

自分が日和に別れ話をする日が来るなんて夢にも思ってたなかった。

……いや、そうじゃない。

別れ話をさせられたというほうが正しかった。

確かに言ったのは自分だ。

でもそれは、日和が言わないから自分が言ったにすぎない。

自分から言えない日和が聖に言わせたのだ。

「ちつきしょう……！」

もう笑うことなんてできやしなかった。  
聖の口元はみるみる歪みだしていった。

もう誰が悪いのか何が悪いのか聖にはわからなくなっていた。  
だけど今ここにある気持ちはたった1つだけ。

こんな現実を知るまでは誰よりも愛しい人だった日和が今はこんなにも憎い。

「なんでだよ……どうして……?!」

そう呟いたときには、もう聖には歩く力なんてなくなっていた。  
着ていた学ランの左胸を握り締めながら聖は膝かられ落ちてしまった。

「聖っ！」

何もできずに立ちつくしていた隼は聖が動かなくなった瞬間に駆け寄っていた。

そして聖と一緒に膝をつきながらからろうじて聖を支えた。

「俺そんなに悪いことしたのかよ……なんで他の男というんだよ……  
…なんで俺じゃないんだよ……?!」

それを最後に聖はもう何も喋れなかった。

隼が痛さのあまり歯を食いしばってしまうほど聖は隼の背中を掴み、出てくる嗚咽と涙を堪え続けた。

けれどそれは全くのムダで、あとにも先にもこんなにも泣いたのはきつとないだろうというくらい泣いた。

それでも聖が左胸から自分の手をはなすことはなかった。

そこには最後に会ったあの日に買った指輪が入っている胸ポケットがあつたのだ。

それから聖はまもなく携帯の番号を変えた。

部活引退後は優太や未散と同じようにスポーツ推薦の話も持ち掛けられたが全て断った。

通学路でうっかり会ってしまわないように日和の通う高校とは反対方向になるように学校を選んで受験した。

そして……今に至るのだ。

Vol.60 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

聖と日和が別れたいきさつはこんな感じですよ。

まあぶっちゃけ日和を弁護する猶予は……ここではありません(汗)。

けれどわざわざこんなタイミングで出てきたってことはなんかあるわけです。

はたして日和はなにをしかすのか……まあちょっと待っていてください。

というところで、またです。



聖が部室でそんなことになっている頃、今週掃除当番の優太は掃除を終えて持つているバッグを振り回しながら廊下を走っていた。角を曲がると見知らぬ制服を着た女のコがこっちに向かって歩いてくる。

あれって確か今年インターハイベスト4まで残った高校の制服だよな……。

もしかしたら自分が行ったかもしれないなかつた高校の制服だなあと思いながら、優太はその制服を着ている彼女をなんとなく見た。

その時、ふと彼女も優太を見た。

「……嘘、並木優太!？」

彼女は目を丸くしながら優太を指差しいきなり人の名前を大声で呼んだ。

「やーん嘘だあ!本物じゃん!」

彼女はまた大きい声で独り言を言い優太に駆け寄ってきた。

な、なんだこの女?!

優太の方は思わず身構えた。

「あの、突然ごめんなさい。あたし雨貝って言います。並木さんの活躍、インターハイの予選で見えました。会えるなんて思ってたからちよつとびっくりしちゃって」

彼女は優太の目の前に来たかと思うと一気に喋りだした。

「あの、握手してもらっていいですか?」

そして彼女は今度はおもむろに優太に右手を差し出した。

「ああ、はい……」

完全に彼女のペースに飲み込まれた優太はそのそと右手を出した。

「よしっ、これでみんなに自慢できる」

彼女は優太の手を強引に繋ぐとぶんぶんと振った。

「どうもありがとう」

彼女は手をはなしながら優太に笑いかけた。

背がでかい、社交的な衣……。

いいえどういたしましてと返しながら、優太は自分と対して背の高さが変わらない彼女になんともいえない不思議な感覚に襲われた。

「あの、すみません、ウチの学校に親戚とかいませんか？」

「いないけど、どうして？」

聞かずにいられない優太は彼女に実にくだららない質問をしていた。

彼女の方はというと案の定首をかしげた。

「……いや、いいです、ハイ」

つつい知り合いで似ている人がいると言ってしまうベタな質問を優太は彼女にしてしまっていた。

「……もしかしてこの高校にいるのかな、彼女」

ふと雨貝と名乗った彼女は独り言のようにつぶやいた。

「え？」

優太は彼女の独り言が聞こえてしまったのでつい聞き返した。

「あたしね、この高校でバスケをやっているコで中学のときの後輩がいるんだけど、彼に言われたことがあるの、『小学校の同級生に似ている人がいた』って」

彼女はそう答えると優太に微笑んだ。

「……それってもしかして聖のこと？西倉聖」

聞かずにはいられない優太はつい彼女にたずねるような言い方を  
する。

「そうだけど……え?!なんでわかるの?!」

彼女にとっては予想外の展開だったのだろう。

実に正直な感想を述べてきた。

「俺と聖と雨貝さんのそっくりさんは、その、友達なんで」

事実を話そうとも思ったが説明するとややこしくなると思い、優

太はかなり省略して彼女に説明した。

「そう、そんなこともあるんだね……」

納得したように彼女は頷いた。

「けど……驚いたなあ、まさか並木くんや聖がウチの学校のライバルチームになるなんてねえ」

急に話を変えて彼女は腕を組み始めた。

「てつきり後輩として入ってくるもんだと思ってたから。並木くん

も……あと聖もね」

「すみません、裏切ってしまった」

別に謝る必要はないのだがなんとなく悪いような気がして優太は彼女に軽く頭を下げた。

「いいえ。その代わり徹底的にリサーチさせてもらうから、覚悟してね」

じゃあまたねと彼女は優太ににこつと笑つと優太の横を通り過ぎた。

俺の気のせいかな。

優太は廊下を足早に歩く彼女の後ろ姿を追いかけていた。

聖の名前を自分が、そして……彼女自身が言ったとき、ほんの少しだけ彼女の顔の表情が変わっていた。

それは懐かしそうであるけれどどこか悲しそうだった。

なーんかわけアリっぽいなあ……。

聖に聞こうかどうか彼女の背中を見ながら、優太は「どうすっかな……」と頭をポリポリ掻いた。

Vol. 61 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

今回も最初で最後、優太と日和でお送りしました。

日和を見て優太もビックリしました。

多分相当衣に似てるんですね(苦笑)。

それにしても……優太は自分のことにはドンカンなのに、何で他人のことにはこんなにピンカンなんでしょう？

まあ、人間そんなもんですけどね(苦笑)。

さてと次回ですが、おっと……実はけっこう久しぶりですね。

優太&聖でお送りします。

聖が初めて話す元カノの話をお優太はどう聞くのでしょうか……。

というわけで、またです。

優太が部室のドアを開けると、ちょうど聖がロッカーに手を掛けて立っていた。

しかし聖の姿はロッカーに隠れてしまつてよく見えない。

「聖？」

優太はひよこつと聖の脇から顔を出した。

「……ああ、優太か」

ふつと現実に引き戻されたような表情をして聖は優太にふつと笑つた。

なんだ？どうしたんだ、聖のヤツ。

優太から見た聖はなぜか左の胸を左手で押さえていて、笑つているのになんだか辛そうに見えた。

「さつきさ、廊下で変な女に会つたよ……雨貝さん、つて言つたかな」

優太は荷物を床に置くとロッカーに寄りかかった。

「もしかして、さつきまでここにいた？」

聞こうかどうしようか散々迷つたが、やっぱり気になる優太は少しおどおどしながら聖を見上げた。

「……まあな」

随分間をおいて聖はロッカーに手を掛けたまま口を開いた。

「あのさ、すっげーイヤなこと聞くかもしれないけど……あの女、誰？」

優太は聖から視線をはずすとポケットに手を突っ込んだ。

「……まあ元カノ、つてヤツ？」

色々考えてなのか聖はまた間をおいて、今度は吹っ切つたように努めて明るく優太に答えた。

「あんまりいい別れ方してないからちょっと気持的に、さ」

つまり最後まで言葉にできない聖はそのあととはごまかすようにし

て学ランのボタンに手を掛けてボタンを外し始めた。

「ほんとは高校入ってバスケットするつもりなんかなかったんだよ。彼女に……日和先輩にこうやってまた会っちゃうってわかってたから」

学ランを脱いで聖はロッカーにあるハンガーを取り出した。

「でもいるわけがないと思ってた吉岡がここでバスケット続けてた……それがわかった時はもう、日和先輩にまた会っちゃうかもしれないなんてすっかり忘れてまた俺はバスケット始めて……」

ハンガーに学ランを通すと、聖はロッカーにハンガーを戻した。

「そしたら……今日部室で再会しちゃいました……まあ、そんな感じ？」

自嘲気味に鼻で笑いながら聖はシャツのボタンに手を掛けた。

「……あんまりいい別れ方してない、って？」

いい加減自分も着替えないと、と思い始めた優太は遠慮がちに聞きながらその場で学ランの第一ボタンに手を掛けた。

「結論から言うと俺がフラれたのかな、二股掛けられちゃったというかさ……その時一緒にいた男に『おまえがほったらかしてたら俺は仕方なくおまえの代わりをしてんだ』って怒られて……でもあの時の俺はそんなの全然理解できなくて、どうしても許せなくて、その場で彼女に別れを告げた。でも実際は彼女が言えないから俺が言ったんだけどさ」

そこまで言うとき聖は一気にシャツを脱いでまたロッカーからハンガーを出してかけた。

「……俺、逆だと思ってたよ」

話を聞き終えた優太が学ランをそばにある椅子にかけた。

「てつきり俺はおまえの方が雨貝さんをフツたんだと思ってた」

「なんで?!」

聖は驚いて優太を見下ろすと瞬きをした。

「……いや、なんとなく、カンてやつ。彼女、おまえに未練たらたらな気がしてさ」

自信がない優太は下を向いてごによごによと言いながらシャツも椅子の背に置いた。

「なあ聖、もし、もしもだよ？彼女が『ヨリを戻して欲しい』って言うてきたらおまえどうする？」

自分でもなに血迷ったことを聞いているんだろうと思いつつも優太はジャージを袖に通した。

「それはないだろ……それに」

ジャージを頭からかぶった聖は首を出して優太を見た。

「仮にそんなことがあったとしても俺は戻らないよ。彼女のことばもう終わったことだから」

着替え終了の聖はパタンとロッカーを閉じると「先に行くからな」と優太に言い残して部屋を出て行った。

やっぱり気のせいだったかな。

優太はどうしても気になった。

聖のいつになく歯切れの悪い口調。

そうかと思つたら無理に明るく言ったり。

それはまるで自分に言い聞かすような、そんな言い方だった。

大丈夫かよ。やっぱり嫌な予感がする……。

シューズの靴紐をしめながら、優太は眉間にしわを寄せ口を尖らした。

Vol. 62 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

さあさあ、雲行きが怪しくなってきましたよ(汗)。優太のイヤーな予感当たってしまうんでしょうか。しかも練習試合と未散の誕生日が同じ日です。これは一体何を意味するんでしょうか……？

何が起るのか、気になる人は次をどうぞ！

ということ、またです。



11月17日、午後6時。

未散は昇降口で腕をこすりながら聖が来るのを待っていた。

今日はマフラーだけじゃ寒いなー。

うう寒いーっ、と言いなながら壁に寄りかかりしゃがんだ。

そしてジャージのポケットから少しよれよれの4つ折りされた紙切れを取り出した。

その紙切れは今朝優太から貰ったものだ。

「未散、はい」

その紙切れを貰う前、未散はバッグに強引に入れていたせいで潰れてしまった袋を目の前に出された。

「……なにその袋」

未散はその袋を寄こそうとする優太にしかめ面をした。

「なんだよいらねーのかよ、誕生日だからせっかく衣と買ったのにさ。……じゃあいいよ、未散になんかやらん」

袋を未散の前に出したときは得意げだったのだが、未散の反応にぶすつとふてくされながら優太はその袋をまたバッグにしまおうとした。

「あーあーあーあー！欲しい！欲しいです！ありがたく頂戴いたしますっ！」

まるで敵からボールを奪うような勢いで未散はその袋を優太の手から？ぎ取った。

「もう！誕生日プレゼントの袋だったらバッグに押し込まないですよ！」

貰った分際で偉そうに未散は優太に文句をつけた。

「別にいいじゃねーかよ、タダの袋なんだからさ」

それに対して優太は実にガサツなというかある意味男らしいというか、そんな反論をした。

「……まあ、いいか。未散、おめでと」

なんだろなんだろ、と隣でニコニコと笑って袋を開ける未散を見て優太は苦笑い。

「……あ、あとコレも」

そう言いながらポケットからよれよれになっっている紙切れを優太は取り出すと、未散の前に出した。

「……なにそのゴミ」

未散は「自分で捨てなさいよ」という顔をした。

「あつそ、わかった、じゃあいいよ捨てるよ……あーあかわいそうになぁ、おまえ読まれずに捨てられちゃうみたいだよ……」

わざと涙声を作りそのどう見ても紙くずにしか見えない紙切れを掌において優太はさも愛おしそうに撫でた。

「せつかく聖直筆の手紙なのにさぁ……」

「……だつたらもつとちゃんと保管してよ!」

聖直筆、の言葉に未散は優太の掌を見てすぐさまその紙切れをかっさらった。

「ま、楽しみにしてなよ。今日はすごいことがあるから」

優太は未散を見上げニツ、と笑った。

今日誕生日だよね。おめでと。

練習試合が終わってからの時間を、俺にください。

多分優太や小橋からも貰うんだろうけど、俺からも誕生日プレゼントを考えていますので。

とりあえず、昇降口に集合ということ。

それでは。

とても男の人が書いたとは思えない綺麗な字が並んでいた。

優太に貰ってからもう数え切れないくらい何度も読んでいるが、そのたびににやけてしまっていた。

しかし笑ってみても寒いものは寒い。

ちよつとならいいよね。

そう思いながら未散は食堂へ缶コーヒーを買いに立ち上がった。

5分後。

もしかしたら待たせたかもしれないと思った未散は走って昇降口まで来たが、聖の姿はなかった。

まさか聖くんはそんなことしないよねえ……？

これかもし優太なら間違いないどこかに隠れていて後ろからこっそり出てきて「わっ！」とかやるのだが、聖は性格的にそれはないとは思いつつもなんとなく隠れられそうなところに足を運び覗いてみた。

だが当たり前のことだがやはり聖はいなかった。

まだ部室にでもいるのかな……。

未散は持っていた缶コーヒーをバッグに入れ部室に向かって歩き出した。

い。だがこの3分後に何が起きるのか、このときの未散は知る由もない。

Vol. 63 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

未散ちゃん、ただ今幸せいっぱいでございます。

でも最後に書いたとおり、この3分後にはあることを目撃します。  
それは未散にとってなんなのか……。

……はい！

気になる人は次行ってくださいね！ またこれかい（苦笑）

ということ、またです。

Vo1・64(前書き)

中途半端な手直しのまま保存したりしたので読みにくくなってました。

す、すみませんでした……(平伏)。

今は手直しが終わりましたので安心してお読み下さい。

そろそろ昇降口へ行こうかと聖が椅子から立ち上がると誰かが外からソックをしてきた。

さすがに待たせすぎたよな……。

少しだけ申し訳なさそうな表情かおをしながら聖はドアのノブへと手を伸ばした。

本当はとつくの昔に帰ことはできたのだが未散と昇降口で待ち合わせをしているところを部員に見られたらなんか恥ずかしいので、みんなが帰ったら帰ろうとダラダラと部屋にいたのだった。

で、ようやくひとりになったので「さてと」と思っていたら未散が迎えに来てしまった……というわけだ。

「吉岡ゴメンな、今行く……」

謝りながら聖はドアを開けた。

しかし、最後まで言い切れなかった。

そこにいたのは、未散じゃなかったのだ。

「……帰ったんじゃないかっただんですか？」

驚いた表情を隠すことなく、聖は目の前にいる日和にそう質問していた。

「今日は現地解散なんだ。それにちょっと聖に渡したいものがあった」

そう言いながら日和は「入っていい？」と目線だけで聖にたずね、聖がおろおろしている隙を狙ってさりげなく部屋の中に入りドアを閉めた。

「もう今は趣味が変わっちゃったんだったらゴメンね」

そう言つと日和は持っていたカバンから小さい紙袋を取り出した。

「ありがとう……」

いらない、とも言えず聖はその紙袋を受け取った。

一応礼儀として日和の前で袋を開ける。

「……………」

中身を見た聖は感激というか驚きというかで声が出ない。

聖の掌に袋からこぼれ落ちたのは、日和に指輪買ったあの日指輪を買ってしまったためにお金がなくなってしまったので買うのを諦めたネックレスだった。

「本当はそれ、去年の誕生日に聖にあげようと思ってて、こっそり買ってずっと持ってたんだ」

今更遅いよね、と日和は寂しげに笑った。

「ねえ聖」

「はい……………」

日和の呼ぶ声に聖は日和を見下ろした。

「先輩、それ……………」

にわかには信じがたいものを目にした聖は思わず日和の左腕を取っていた。

日和の左手の薬指には、聖が買った指輪が夕日に当たって鈍く光っていたのだ。

「聖にあんなことしておいて勝手なのはわかってる、でもあたしは今でも聖が好きよ」

だから、と日和は聖に悲しげに笑った。

「これもどうしても捨てられなかった……………聖が嫌な顔ひとつしないで買ってくれたことばかり思い出して、どうしても捨てられなかった……………」

日和は左手を大事そうに右手で包み込むようにしながらも、その右手には涙を堪えようとしてか徐々に力が入っていった。

「……………」

聖は明らかに動揺していた。

最後に彼女を見たときは見知らぬ男と手を繋ぎその男に笑いかけていた。

でも自分が現れた途端顔をこわばらせた。

そして最後にはその彼を庇っていた……。

そんな日和が今はこんなことを言った。

でもあたしは今でも聖が好きよ　と。

どういうことだ？

なんなんだいったい？

「じゃあ……あの時一緒だった彼はどうしたんですか」

意味不可解な日和に聖は聞きたかったことをそのまま口にしていった。

「今はもう大学生になった。でもそれ以上のことは知らない」

日和は顔を上げると表情を歪めながらそう答えた。

「彼とダメになったから俺に戻るって事？そんな都合のいい話あるわけないでしょ」

そう言われるのは想定範囲内だったけれどそれでもやっぱりふざけるなと思ってしまった。

聖は掴んでいた日和の左腕を突き放した。

「……彼は、そうじゃないの」

ぼつりと日和はそう漏らした。

「あれは、彼がついたとつさの嘘」

「……嘘？」

嘘、という言葉の中にある真実が知りたい聖は日和を顔を見ていた。

「彼は……『もしも聖があたしより年上だったらきつとこんな感じなのかな』って思わせてくれる人だった……その中でもね、いちばん聖に似てたのが『手』だった……大きいんだけど指が長くてキレイで……だからあたしは彼にどんどん惹かれていった」

「……」

聖には返す言葉がなかった。

彼に自分を見ていた日和。

そんなこと、気がつきもしなかった。

「……」



隠されていた事実を知った聖は呆然と立ち尽くしたまま動けなくなっていた。

「だけど聖に会って目が覚めた、『やっぱり彼は聖じゃない』って思った。けど……あんな状態でなに言っただって言い訳にしかならないでしょ？だからあたしは……聖の言ってることを受け入れるしかできなかった……『聖待つて！』って言いたかったけど言えなかった……」

言いながら日和は少しだけ強引に引っばると自分の頬で聖の手に触れた。

「本物だ……本物の聖の手だ……」

ずつとずつと欲しかった聖の手の暖かさに日和の肩が小さく震えた。

気がつくとも聖の手は日和の涙で濡れていた。

「……………」

今更ながら聖は日和に対してやってしまったことを後悔していた。あの時日和の言い分を聞いていれば、携帯電話の番号を変えなければ、こんなふうには日和を泣かせることはきつとなかった。

今ならよくわかる。

悪いのは日和だけじゃない。

そこまで追い詰めた自分にも非がある　と。

先輩ごめんな……俺も悪かった……。

そう思った瞬間、聖は自由になる手を日和へと伸ばしていた。

その手は日和の頬をそつと撫でた。

「聖……？」

自分を見下ろして泣きそうな顔をしている聖に日和はもらい泣きをしそうになっていた。

その日和の表情は別れを告げたあのときの日和と聖の中で重なっていく。

「先輩、すみません……ごめんなさい……」

謝っている時にはもう、聖は日和の顔を見れなくなっていた。

日和の頬から手をはなせないままうなだれていた。  
「聖は謝らなくていいんだよ？悪いのは全部あたしなんだから」  
謝る聖に対して日和は優しく微笑むと首を振っていた。

その姿に聖はお互いがまだ中学生だった頃を思い出ししていく。

部活が自分達の代に変わったとき、部長は「来年は県大会に行くぞ！」とやる気マンマンだった。

もちろんそれに聖も賛成だったし2年生もほとんどが同意していた。

そのため練習が延長することはしょっちゅうで、見回りに来た用務員のおっちゃんに「いい加減帰れ！」と怒鳴られたりもしていた。そのぐらい延長してしまったときは当然日和も図書室を追い出され聖を外で待つ羽目になった。

ある時は雨の中傘をさして、またある時は残暑が厳しい中タオルで汗を拭いながら、そしてまたある時は身を切るような寒さの中で足踏みしながら……そうやって日和は毎日のように聖が来るのを待っていた。

そんな状況だったわけだから、聖は日和にほぼ毎日「すみません！」と謝っていた。

けれどそれに対して日和が怒り出すことは一度だつてなかった。

「うっん、聖は謝らなくていいんだよ？今日もお疲れ様」  
受験生なのに聖を気遣い労ってくれていた。

そんな日和を会えなくなってから忘れてしまっていた。  
だからメールの返信がなくなっただけで、電話に出てもらえなくて折り返しが来なかつたぐらいで疑心暗鬼に苛まれたのだ。

だったら日和の家の前にも行って待っていればよかったのだ。  
すみません、顔見たくて来ちゃいました。

きつと自分を見て驚く日和の姿を見つけたらそう言って笑えばよ

かったのだ。

「だけど実際の自分はそんなことをしようともせず、「自然消滅を狙われているのでは」と日和を疑った。

だから簡単に隼の目撃証言も信じてしまったし、現場を押さえたときにはただ「裏切られた」と悔しくて、涙を浮かべて黙って自分の話を聞いていた日和のことなどなんにも考えてなかった。

傷ついたのもこんな思いをしているのは自分だけだとあの時は思っていた。

けれどそうじゃない。

何も言えなかった日和も自分と同じだけ傷ついていたに違いないのだ。

「先輩……ホント……すみません……」

聖の手はいつの間にか日和の頬からはなれていた。

謝りながら力なく日和の肩を掴んでいた。

しかしその手はどんどん落ちていき、最後は床についてしまった自分の膝の上に置かれた。

膝に置かれたその手は少しずつ拳になっていく。

そしてその拳にはひとつ、またひとつと涙が落ちていった。

「だから謝らなくていいってば」

聖を見下ろしていた日和はそう言いながら聖と同じように膝をつくと、聖の頭をそっと抱えた。

そこからはもう、聖は言葉を紡ぐことはできなくなっていた。

嗚咽が込みあがり涙でむせた。

まるで子供が母親にしがみつくように日和の背中に手を回していた。

そんな聖に日和は何も言わずに聖の頭をやさしく撫で続けた。

「……聖、お願いがあるんだ、聞いてくれる？」

嗚咽が収まりつつあった聖に日和はポツリと漏らしていた。

聖は乱暴に涙を拭くと黙ったまま日和を見上げた。

「聖、もう1回だけでいい。もう1回だけ、あたしを好きになって」

もう遅いかな？という顔で日和は聖に笑った。

「ホントに信じていいんですか……けど俺はあんなの……もうたくさんです……」

やり直してもまた同じ目に遭うんじゃないかという不安がないと  
いったら嘘になる。

でも今は奇跡が起こったように日和がまた目の前にいるという現  
実に聖は完全に支配されていた。

聖は日和の左手を取っていた。

そして指輪がはめられている日和の薬指にそっと自分の唇を押し  
当てた。

それを見た日和の目からは涙がこぼれた。

「あたしはもうあんな間違いはしない……信じて……」

聖の頭を抱き締めたまま日和は聖を見つめた。

「聖……ずっと会いかったよ……」

切なげにつぶやいたその言葉を最後に、日和は優しくだけど、強  
く聖の唇を捉えていた。

ちよ、ちよっと待って！なにするんですか。

まさか日和がこんなことをしてくるなんて思ってもみなかった。

聖の目は驚きで見開いていた。

だからはじめはそう言うつもりで日和の方を掴んだ。

だけどその決心は日和の体温が唇に伝わってくるにつれてどんど  
ん鈍っていく。

確かにあの時は本当に許せなかった。

2度と会いたくなかった。

辛くて苦しくて抱え切れなかった。

だから1年かけて忘れた……はずだった。

だけどそんなことなどできやしなかったのだ。

会いたくなかったのは、この瞳めに日和が映る限りいつまでも忘れ  
られなくなるのが心の奥でわかっていたからなのかもしれない。

あたしは今でも聖が好きよ。

日和からのこの言葉を待っていた自分がどこかにいたことを、日和が恋しかったことを、今こんなにも思い知らされていた。

きっと俺もそうだったんだと思う。ホントは俺もずっと会いたかった……。

聖の手が日和の肩からはなれていく。

その手は腕を伝って下りていった。

日和先輩もうどこにも行かないで。俺のそばに、ずっといて……。

自分の胸の中にいる日和を会えなかった時間を埋め合わせるかのように、聖は無意識のうちに日和を壊れるくらい力強く抱きしめていた。

聖はもう、今はこの腕の中にいる日和のこと以外にも考えられなかった。

何もかも忘れていた。

……なにしてるの？

そう未散に言われるその時までには。

こんばんは、愛梨です。

大好きだった元カレ（あるいは元カノ）に振られて、年数が経って「ヨリを戻そう」と言われたとき、例え今は他に好きな人がいるとしても心は動いてしまう。

例えそのときはものすごくこっぴどく振られて再起不能になるんじゃないかと思うくらい落ち込んで泣いたとしても、自分からキライになつたわけじゃないから結局承諾してしまおうかと思つてしまふ。

もちろん不安はあるけれど「今度はそんなことにはならない筈」と言い聞かせて……。

そういう経験は歳を重ねている方であれば経験したことがある人が多いと思います。

今回はまさしくそれです。

だって完全に未散のこと忘れてるもん、聖。

さてさて。

確か未散は部室に向かっている最中でした。  
んでもって部室の中はこんな状況。

いやあ、どうなつちやうなんでしょうか？！

気になります？

じゃあ次行つてくださいね！ またこのパターンかよ（苦笑）

ということ、またです。

未散は部室に向かって廊下を歩いていった。  
彼女が歩く足音以外は何ひとつ聞こえない。

やっぱりもう部室出ちゃってるかなあ。

人のいる気配が全くないので戻ろうかと足を止めた。

でも、「あと少しで部室だから」とも思って未散はまた右足を前に出す。

角を曲がり男子バスケット部の部室のドアが見えてきた。

だが人の影は、ない。

未散はまた立ち止まっていた。

ドアの前まで行っていなさそうだったら戻ろうかな。

そうしようそうしよう、と1人頷き未散はまた歩き出した。

そしてほどなくして部室ドアの前に来た。

なんかやけに静かだなあ……。

どこかですれ違ったかな、と思い未散は昇降口に戻ろうとした。

だがその時、なぜか部室のドアのノブに目がいつってしまった。

一応回してみようかな……。

未散は手でドアのノブを掴みひねってみた。

え、う、嘘っ。

てつきりカギがかかっているとはかり思っていたので、ドアのノブが勢いよく回ったことに焦った。

おっと。

未散は少しだけバランスを崩した。

ドアのノブが回ったついでにドアが開いてしまったのだ。

「聖くんごめん、かっけてに開けちゃ……」

それが、未散の笑顔が凍りついた瞬間だった。

着替え中だったら悪いなと思い、未散は謝ろうと言葉を発しながらドアを開けた。

だが途中でやめてしまった。

自分の目に入ってきたものに未散は言葉を失った。

目の前に見えているのは、未散の声が全く聞こえていない様子で横顔が衣によく似ている彼女を愛おしそうに抱きしめている聖の姿だった。

聖の腕で少し隠れているけれど間違いなく2人はただ抱き合っているわけではないのは容易に理解できた。

そしてさらに見えたのは、彼女の左手に小さく輝く指輪。

どういうこと？なんなのこれ……？

自分の手が冷たくなっていくのを未散は感じていた。

目の当たりにしているこの現実には未散は目を逸らすことも逃げ出すこともできない。

なにかで固められたかのように足も動かない。

「……なにしてるの？」

それを言うのがやっとだった。

未散の声に最初に気がついたのは彼女の方だった。

幾度と唇を重ねてもまだ足りなくて名残惜しそうに彼女は聖からはなれると「……あなた誰？」という顔で未散を見た。

「日和先輩どうしたんですか……？」

まるで過去にも何度もしていたかのように自分の指に彼女の髪を絡ませながら聖も彼女の視線を追うようにこちらを見た。

「吉岡……！」

聖の表情は驚愕へと急変していた。

未散は1歩、また1歩とあとずさる。

すぐに背中が壁にぶつかった。

「……………っ！」

声が出なかった。

未散は腰が抜けそうになりながら壁づたいに右に歩き出していた。



「吉岡っ！」

聖の自分の名前を叫ぶ声を聞いたのと同時に未散は走り始めた。た。

なにも考えられないままただ走った。

足をもつれさせながらも必死で足を動かした。

何度も何度も「吉岡待って！」という聖の追いかけてくる声に止まりそうになりながらも、聞こえないフリをしてひたすら走った。

昇降口に着き、上履きを脱ぎ、右手で下駄箱に上履きを押し込み、シューズを取り出して床に叩きつけるように置いて、履いたかどうかの状態でもた走り出す。

だが、相手は優太とコンビを組める男。

未散がもたついている間に追いつかれた。

「吉岡、お願いだから待って……！」

聖は走りながら精一杯手を伸ばし未散の左手首を捉えた。

未散は聖に背を向け、そして聖は未散の背中を見ながら、その場で大きく肩で深呼吸を繰り返していた。

Vol. 65 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

ぎゃあ〜!!

で、出たっ!! (汗)

……って感じでしょうか(笑)。

未散にとつてのラスボス、日和。

かなりの強敵でございます。

だって未散の存在を聖から抹殺しちゃいましたからね(汗)。

で……勇者未散(?)は今回は……逃げてしまいました(苦笑)。

でも聖が追いかけてきて未散は捕まった!

さあどうなる?!

……って、本文はシリアスなのにここはこんなにおちゃらけでいいの? (汗)

さあさあ未散はどうするのか、聖は何を言ってくるのか、気になる人は次行ってくださいね!

ということ、またです。

あの女は誰？

なにがどうなってるの？

なんであんなことになってるの？

あれを見たあたしに、どう解釈しろと……？

聞きたいこと言いたいことはたくさんあるはずなのに、それが言葉にできない。

「……あの人、今日練習試合に来ていた学校のマネージャーさんでしょ？衣に似てたから覚えてたんだ……」

未散が口にした言葉は思っていることとはまったく別のことだった。

「聖くん正直に答えてね……彼女の<sup>あの人</sup>こと、聖くんは好きだったよね……？」

未散は聖に背を向けたままそう口にしていた。

なぜそう思ったのかの理屈なんて未散にはなかった。

あの時の聖は腕の中にいた彼女だけが全てだったように見えた。もうどこにも行かないで。

ずっとずっと、俺のそばにいて。

聖の彼女への心の声が未散にも痛いくらいに伝わっていた。

自分と出会う前、どれだけ彼女に恋焦がれていたんだろう。

どれだけ彼女と辛い別れをしたんだろう。

彼女を思いどれだけ泣いたんだろう。

彼女を忘れるためにどれだけ苦しい思いを聖はしたんだろう……。考えれば考えるほど未散の中には「あたしなんかかなうわけない」という諦めの気持ちがじわりじわりと込み上がってきていた。

自分という存在も自分との約束をも一瞬にして聖の中から消し去ることのできる彼女の存在の大きさを思い知らされた今の未散には、もうなす術はなかった。

「ただ単に知りたいという好奇心の延長なのかそれとも身を引くために納得したかったからなのかそれを聞かれると答えられないけれど、聞かすにはいられなかったのだ。」

「……吉岡の言うとおりだよ、彼女は俺の元カノ。別れた時は俺が完全に『二股かけられてた』って思ってた彼女に怒り狂ってそれに対して彼女は弁解してこなくて……別れた後はそれっきりだったんだけど、この前の練習試合の申し込みに来たときに再会して………したらさっきホントはそうじゃないことがわかったというか俺も悪かったってわかったっていうか……」

「隠してもしょうがないと思ったのか、多少たどたどしい表現ながらも聖はすんなり答えた。」

「……そう」

未散は相槌を打つと笑顔を作り聖に振り返った。

「聖くん、追いかけてきてくれてありがとう。でももういいよ、もうわかった」

未散はそう言うつと自分の腕を掴んでいる聖の指を外そうと空いている手でこじ開けようとした。

「だがどうしてなのか聖は未散の腕を放すまいとして強く握り返してきた。」

「聖くんお願い、もうはなして？」

「もうなんで？と笑いながら未散は腕を振りほどこうとした。」

「だが聖ははなそうとしない。」

「早く戻りなよ、知らない学校の部室に一人ぼっちなんてかわいそうだよ……？」

未散の微笑が徐々に困惑の表情に変わっていく。

それでも聖は未散を無表情で見つめたままさらに未散の腕を掴んだままだった。

「……どうしてはなさいの?! はなしてて言ってるでしょ?!」

「聖の手がまだ未散の腕をはなそうとしないことにだんだん腹が立つてきた未散は、右に左に腕を振り始めた。」

「お願いだから帰らせて。じゃなきゃあたし、聖くんになに言い出すかわかんないよ……?」

はなしてよっ!と未散は腕を引っぱり聖の手から逃れようとした。

だが聖は黙ったまま未散の腕から手を引こうとしなかった。

「さつさはなせばいいじゃない!なんではなさないの?!」

聖の意図が全く読めない未散の怒りのボルテージはどんどん上がっていく。

「どうして?!どうしてあたしが平気な顔しているうちに帰してくれないの?!」

なんとか笑顔を作っていた未散だったがもう限界だった。

「黙ってないでなんか言いなさいよ!」

聖を睨みつけるとありつたけの声で叫んでいた。

言いながら頼みもしていないのに未散の口元が歪み涙が頬を流れ落ちていく。

「『どうして』は俺が聞きたいよ。なんでそんなに物分りがいいんだよ、俺に対してなんにもないのかよ」

ずっと黙って未散を見ていた聖がようやく重い口を開いた。

「物わかりがいいんじゃないよ。あたしは別に聖くんの彼女じゃないんだから聖くんが誰と何をしようがあたしには聖くんにとやかくいう権利はない……違う?」

何を言い出すのかと思えば、と未散は自由になる手で涙を拭きながら馬鹿にしたように聖に笑った。

「なんでそんなにいいコぶるんだよ」

未散の返事が面白くないらしく聖は嫌味を返していた。

「……いいコぶってなんかいいよ、全然」

未散は目をこすりながら言い返した。

「じゃあ言えればいいだろ?!」あの女は誰、なにしてるの?!」  
「人を待たせておいてなんであんなことしてるの?」って言えばいいだろ?!」

未散の返してきた言葉になぜか聖はイラつきながら未散にまた言い返した。

どうしてわかってくれないの？なんであたしがそれをしないのか、どうしてわかんないの……？！

どうにかおさまったはずの涙をまたぼろぼろとこぼしながら、すっかり腫れあがってしまった目で未散は聖を見上げた。

「そんなの決まってるでしょ？！『おまえウザい』って聖くんに思われたくない、それだけが理由よ！」

できれば言いたくなかった。

言う前に帰ってしまいたかった。

「こんなの見られたくないからに決まってるでしょ……？」

それだけやっと言うと未散の目からは悔し涙がとめどなくあふれ出した。

顔を聖から逸らして懸命になつて掌でを拭き続けた。

自分が今どれだけ彼女に嫉妬しているのかを聖に知られるのが嫌だった。

聖を罵るのは簡単だけどそれをやってしまったら聖の自分に対しての目が間違いなく変わってしまうのが怖かった。

吉岡はいいコだよな。

聖にはずつとずつと、そう思つてて欲しかった。

あの時、吉岡振つて失敗したかなあ。

聖の心の中でそんなふうに綺麗なまままでいたかった。

だから言いたいことは全部我慢した。

……なのに。

自分の醜い部分を結局さらけ出してしまった。

「あたしはただ聖くんに嫌われなくなっただけ……聖くんが今でも彼女のが好きでも彼女とやり直すんだとしても、それでもあたしは聖くんが好きだもん……」

言われた聖の方はどれだけ困るかなんてそんなことはわかっていた。

でも言わずにはいられなかった。

これが未散の跡形もなくすぐ消える聖に対しての……いや、今はすでに聖の心の中を占めている彼女への最後の抵抗だった。

「聖くんよかったね。指輪、受け取ってもらえて」

「指輪……？」

聖が「何を急に」と不可解といわんばかりの表情かおをしたがそんなもの、未散はもう見ていなかった。

聖の顔は涙で見えなくなっていた。

けれど胸元のチェーンだけははっきり見えていた。

最近聖が肌身離さずつけていたそのチェーンには指輪があるはずなのだ。

ついさっきまでその指輪は自分のもとに来るものだと思っていて疑わなかった。

けれど今は違う。

その指輪は多分彼女の元に行ったのだ。

だから今はきつと、聖の胸元には指輪は1つしかないわけで……。

「聖くん、あたしね、聖くんに嫌われたくないんだ。だから、もう帰らせてくれないかな」

しゃくりをあげながら未散は聖を見上げると話を続けた。

「あたし、これ以上聖くんの顔見てたら聖くん嫌われるようなこと、きつと言っちゃう。だからもし、少しでもあたしに悪いなあって思うんだったら、もう、手、はなして……」

涙声ながらも笑って言う未散をモはや聖が引きとめることはできなかった。

聖はようやく未散からその手をはなした。

「じゃ、またね。ばいばい」

未散は聖に小さく手を振ると、校門に向かって歩き出した。

「……あ！」

少し歩いたところで未散は聖に振り返った。

そしてそこからいきなり何かを2つ投げってきた。

反応が遅れた聖は投げてきたそれを受け止めることができず、アスファルトに叩きつけられたそれはゴロゴロと鈍い音を立てて転がった。

「それあげる！寒いから2人で飲んで！」

それだけを言って聖に再び笑いかけた未散は、そのあとは一度も振り返ることなく歩き続けた。

がんばった。あたし、がんばったよね……？

ゆっくり歩いたら立ち止まってしまいそうだった。

また泣き出しそうだった。

だから徐々に足早になっていった。

「……うっ……ふっ……」

気が緩んだのと少しだけ「もしかしたら追いかけてきてくれるかも」という淡い期待がモノの見事に外れた悲しさで嗚咽が込み上がってきていた。

「未散！」

どこかからか自分を呼ぶ声がする。

え？誰？どこから？

ひっく、としゃっくりを上げながら未散はぐるりとあたりを見た。

「衣……優太……」

恐らく心配してだろう、2人はずっと近くのコーヒーショップで待っていたらしい。

未散の姿が店の中から見えたのが、2人で慌てて出てきたのが未散にもわかった。

「あれ？聖は？なんで未散1人なの？」

あとで来るのか？と優太はきよきよとした。

「来ないよ、聖くんは」

「来ない……って、え？！なんで？」

未散の言葉に衣は驚いた声を出した。



聖くん元カノさんとヨリ戻すんだって。  
そう平然と言うつもりで未散は口を開いた。  
……だけど。

言ってしまったたら認めたことになる。  
言ってしまったたら自分の失恋が決定的になる。  
そう思ったら口に出せない。

「ほんとに聖くんがずっと好きなのは衣なんだよ……元カノも衣にそっくりであたしなんか全然敵わなくて……」  
気が触れたとしか思えないことを未散はなんの違和感も感じずに衣を見た途端呟き始めていた。

「未散……？」  
衣が心配そうに未散の顔を覗き込んだ。

「なによ！来ないで！」  
衣と目が合った瞬間突然未散は、怒りを露わにして衣を突き飛ばした。

不意を突かれたため避けることもできず衣は歩道に弾き飛ばされた。

「な、何だよ急に……」  
眉間にしわを寄せながら優太は未散に文句をつけると、衣を起して服を払った。

これがいつもならなんとも思わない光景だ。

というより、優太の起こした行動はいたって普通のこと。  
なのにどうしてだろう。

今は腹が立って仕方がない。

「ねえなんで？あたしと衣ってそんなに違うの？！なんで聖くんも優太も女としてみるのは衣だけなの？あたしだって女なのに！」

「未散……？」  
ふと見た衣の表情が聖の元カノとぴったり重なり、言ってもどうしようもないことを未散は衣に当り散らしていた。

「ねえ衣、優太だけでいいでしょ？！贅沢すぎんよ！聖くんまで

取らないですよ！」

「……おい未散、おまえいい加減にしろよ！」

どう考えても八つ当たりになつてゐる未散の言葉に優太がキレた。優太が衣からはなれると未散に近づいた。

そして……なんのためらいもなく手を上げた。

パン！とあたりに優太の掌が未散の頬に当たつた音が響き渡る。

「優太！なにすんのよ！」

「うるせえ！おまえは黙つてろ！」

驚いた衣が優太を制しようとするが、優太の方は衣にまで大声を張り上げるとギロリと未散を下から睨みつけた。

「なんなんだよ、なんだつて言うんだよ！よくわかんねえけどさ、衣に当たるんじゃないよ！」

優太はそう未散に怒鳴ると、未散のジャージの襟元を掴み無理矢理未散をかがませた。

「おまえさあ、衣がなんにも気にしてないと思つてんのか？自分が親友の惚れた男の初恋の女だつていうことがどれだけ辛いとおまえにわかるか？わかんねーよな！」

「優太やめてつてば！」

「いややめないね、だつてこいつわかつてねーもん！」

衣の悲鳴にしか聞こえない声を優太はまた押しつぶし、未散が今まで見たことのない形相で睨みつけたまま優太は乱暴に未散の襟元から手をはなした。

「ゴメンね未散……あたしなんにもわかつてなかった……あたしどうしたらいいのかなあ。」

まだ聖と再会したばかりの頃、優太は一度衣を叱り飛ばしたことがあつた。

そのときは未散に「謝りに行ってこい」と背中を蹴つ飛ばされたのだが、そのとき謝る前にコトの次第を優太が衣に説明した途端衣はその場で泣き出してしまったことと、何を言つてやればよかつたのかわからなくて「わかつたからもう泣くな」と言うのが精一杯で

あとは抱き締めてやることしかできなかつた自分をふと思い出していた。

「そんなこと言ったってしょうがねえだろ……おまえより先に衣が聖と出会った事も聖が衣を好きだったこともどうしようもないことだろうが……今更過去に起こったことなんか順番変えられねえんだからさ……」

こんなこと誰も望んじやいねーんだよ。

そんなのおまえなんかよりずっとずっとずっと衣が思ってるよ、バカっ。

そう悲しげな目をして優太は未散から目を逸らした。

それから30分間、再び未散は泣き崩れた。

「衣ごめんね」と馬鹿の1つ覚えのように繰り返した。

見かねた衣は未散に歩み寄り「あたしは大丈夫だからね、あたしこそゴメンね」と優太にぶたれた頬にそっと触れながら一緒に泣いて泣いた。

そして優太は……もうどうしていいかからず、道路に座り込んでしまった衣と未散を見下ろしていた。

どうもこんばんは、愛梨です。

すみません、更新が遅くなりました(汗)。

ここもだいぶ手直ししました。

そのため遅くなりました……すんません。

さてさて……。

ここなんですけど、最初にかいたときもそうなんですけど、ものすごく時間がかかりました。

だって主人公が不幸のどん底に落ちるんですから(涙)。

主人公が不幸のどん底に落ちるときのほうが書きやすいという人もいると思いますけど私の場合は書いている自分までどよーんと落ち込むので進まない進まない(苦笑)。

けど結局書きたかったのは自分なわけですから頑張って書きました。

それはさておき。

あーあ、とうとうこうなっちゃいました。

おまけに優太にははたかれるし……未散ちゃんまさしく踏んだり蹴ったりです。

このまま未散はおわってしまうんでしょうか？……って、終わっちゃったら話が終わるっつーの！ 1人突っ込み(汗)

こうなるともう、衣も優太も助けてあげられません。

でも捨てる神ありや拾う神ありで手を差しのべてくれるジェントルマン(？)が登場しますよ。

久々にあの人が登場します。

……まあカンの鋭い方はわかるでしょう、きっと。

ちよっと待っててくださいね。

一方、未散に缶コーヒーを投げつけられ置いてかれた聖くん。  
彼はどうなったのか。

次回はそこをお見せしましょう。

ではまたです。

未散から手をはなせと言われバイバイと手を振られた聖は、ふと未散が自分に投げつけてきたものを思い出した。

アスファルトに目を落とすと缶コーヒーが2つ転がっていた。

聖は缶コーヒーへと手を伸ばした。

手が缶コーヒーに触れたとき、思わず「え？」と口にしていた。

まだあったかいよ、これ……。

聖は手に取った種類の違う2つの缶コーヒーを思わず握り締めていた。

普通ならもうとつくにもっと冷たくなっているはずなのに、拾ったときに思っている以上にあつたかかった。

多分それは聖と自分のためのものだったはずだ。

けれど未散は、それを聖と日和にと随分乱暴にはあつたが差し出してくれた。

きっと冷たい風が吹き抜ける昇降口で待たされている間にはじめは自分が飲みたくて買ったのだろう。

でも自分だけ飲むのもどうかと思って結局は2本買った。

買ったコーヒーは1本はブラックでもう1本はコーヒーというよりカフェオレだった。

多分カフェオレが自分用でブラックが……聖用。

部活帰りに学校の近くのコーヒーショップに優太と3人で、または衣も入れて4人で、あるいは2人で行くと、聖はいつもブレンドコーヒーを頼んで砂糖やミルクはもちろんスプーンさえも貰わずにそのままカップを持ってテーブルについていた。

それを未散は覚えてくれていたのだ。

そしてあげくには迎えにまで来てくれた。

それなのに自分はこのように自分から誘ったくせにそれをすっかり忘れて結果的には元カノと密会をしていた。

なにしてるの。

そう呟いて、まるで目の前で大惨事が起こったような顔で自分と日和を見ていた未散。

あの顔を見て自分たちのことをどこから見ているかなんて聞かなくともわかった。

なのに未散は自分のこともそして日和のことも咎めなかった。

それどころか自分が置いてきた日和を気遣っていた。

そして最後には「嫌われたくないから何か言ってしまう前に帰してくれ」と健気に笑っていた。

自分を傷つけた相手にどうしてそんなことが言える……？

自分に背を向けるまですっと笑っていた未散にかけてやれる言葉はそれしかなかった。

でも聞いても無駄だから聞かなかった。

だってあたし聖くに嫌われたくないもん。

どんなに胸を締め付けられて苦しくても、きっと未散は笑ってそう答える。それがわかっていたので聞けなかったのだ。

コーヒーをぼんやり見つめながら聖はのろのろと歩き始めていた。

なんか俺っていつつもこんなのはっかり……。

自分の不甲斐なさにため息も出ない。

聖の足取りはホントにおまえはバスケ部員なのかといたくなくなるくらい重かった。

こんなことになるんだったらさっさと言えばよかったな……今日まで待ってもらった意味全然ないじゃん……。

別にカツコつけるつもりはなかったのだが、

「俺からの誕生日プレゼントはこれね」

って指輪を渡すつもりだった。

もちろんそのときは未散の左手の薬指につけてあげようと思ってた。

そうすればわざわざ口にしないでくれるはず。

そう見込んでの計画だった。

けれどそれは全て自分のせいで台無しになった。

そして拳句には「あたしは聖くんが好きだもん」って未散に言われてしまった。

なにがおもしろくて女に先に好きとか言われてるんだか。

自分が先に言いたかったから待っててもらったんじゃないのか。か。

もうやだ……どっか誰も知らないところに引き籠もりたい……。

聖は足もとにあつた石ころを見つけ蹴飛ばそうと振り上げた。

しかし残念なことに足は空を蹴っただけ。

見事に空振りしてしまった。

「ちつきしょう！なんなんだよ！」

なんだか石にまで「おまえはほんつとに間が悪いねえ」とバカにされた気がして、思わず聖は自分に蹴られることなくそこにある石ころに怒鳴った。

けれどそれをしたところで気が晴れるわけでもなく、再び聖はとぼとぼと歩いた。

そして部室に戻ると。

日和の姿は、もうなかった。

日和からしてみたらそれは当然のことだろう。

自分の学校でもないのにいつまでもひとりでここにいるのは不自然だし、ましてや聖は日和には何も言わずに部室を出てきてしまったわけだから日和としては帰るしかないだろう。

だが今の聖にはそんな思考回路が存在しなかったので日和がいなということに青くなっていた。

「なんで帰っちゃうんだよ……」

がらんとした部室相手に聖はそう言うと、やる気なく缶コーヒー



をテーブルに置く、と足を投げ出して椅子に座った。

そしてさもめんどくさそうに缶コーヒーの1本を手にしてプルタブを開けた。

「……うわっ、甘っ！」

聖は眉間にしわを寄せると缶コーヒーを置いた。

「どうやらカフェオレの方を開けてしまったらしい。」

缶コーヒーにまでバカにされてんのかよ……。

聖は缶コーヒー相手に顔をしかめた。

「それにしてもなあ……まだ持ってたとはなあ……」

ぶつくさ言いながら聖はテーブルに両手で頬杖をついた。

日和の左手にあった指輪を目にしたとき、日和に対して頑なに閉じていた自分の心が大きく開いた。

一方的に別れを告げたあのときは、てっきり捨てられていたんだろうなと思っていた。

そう思っていた指輪を、日和はあげたあの日と同じように大切にしてくれていた。

だから「もう1回だけ、あたしのこと好きになって」と日和に言われた時、自分は「本当に信じていいんですか？」って言っていた。

「ごめんなさい、もう遅すぎます。無理です」とは言えなかった。

だってそのときはもう、聖の心は完全に日和と最後に会ったあの日に戻っていたから。

あれからもう1年半が過ぎていたのに日和はなににも変わってはいなかった。

自分を見上げる瞳も自分の名前を呼ぶ声も簡単に包み込めるぐらい小さな手も、そして今でもかすかに唇に残っているぬくもりも……何ひとつ変わってなかった。

これが未散と出会う前だったら、きっと何の迷いもなく日和とや

り直すことを考えたはずだ。

いや……もし未散が部室のドアを開けなかったら、未散との約束なんて思い出すこともなくあのままお互いを求め合っていた気がする。

……けれど。

それなのにもかかわらず未散に見られてしまったとわかったとき、逃げ出した未散を夢中で追いかけた。

そして……日和にはなんの一言もなく部室に置き去りにした。

あんなことしておいてそりゃないよな……俺ってヒドい奴……。

「あーっ！くっそ！」

聖は空いている手をロッカーに叩きつけ声にならない声を上げた。しかしどうも壁を叩いて骨に当たったらしい。

「いってえ……」

聖は壁に叩きつけた手の小指側の側面をさすりながら押さえた。

「どうしよう……俺、どうすりゃいいの……？」

聖は再び足を投げ出すと天井を仰ぎ目を閉じた。

それからまた重い重いため息をついた。

Vo1・67 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

今回は聖くんサイドに完全に絞って書いてみました。

ここでも「口より先に手が出て後悔する」聖くんです(苦笑)。

実はこの部分、Mixiで載せていたときも両論賛否でした(苦笑)。

「聖のスケコマシめ！」だの「日和はなんなんだ！」だの「未散の根性ナシ！」だのまあみなさん言いたい放題でした(苦笑)。

でも、こういう部分こそ10代の恋愛じゃないかなと思います。

後先考えずに突っ走っっちゃったり、もう一度取り戻そうと捨て身で挑んだり、逆に色々考えてしまって怖気ついてしまったり……。

これが大人だったらもうちょっと探りを入れてから行動を起こすんでしょうけど、そんなまどろっこしいことは普通高校生はやりないですから(笑)。

はあ、いいなあ、こういう恋愛もう1回したいわ……(おいおい)

さてさて。

このどうにかなるのか？という状況に「彼」が久しぶりに登場します。

なにもかもお見通しの彼がとった行動とは？

そして彼が抱える過去とは……？

……あ、ここまで書いたら「彼」が誰だかわかっちゃっじゃん(汗)。

ま、いっか。

ということで気になる人は次をどうぞ！

というところで、またです。

月曜日、放課後。

一番乗りで部室に来た優太は着替えを済ませると、開いたままのロッカーのドアに手を掛けて意味もなく揺らしていた。

「昨日未散と聖に何があったのかはあのあと落ち着いた未散から全て聞いていた。」

でも聖からはなにも聞いてなかった。

「というより……聖から連絡が来なかったのをいいことにほっとしていた。」

未散にもそうだったのだが聖にも何を言ったらいいのかわからないのだ。

でもだからといって何も喋らないわけにもいかない。

「あーどうすっかなあ……」

身体の奥がなんだかむずむずする優太はロッカーのドアをぐらぐら揺らす。

「ちーす」

他の所はどうだか知らないが、ここの部員は代々部室に入るとき何時だろうがそう挨拶して入る。

「あーおつか……」

ロッカーのドアから優太は顔を出して入ってきたその人に挨拶をしようとした。

だが相手の顔を見て優太は固まってしまっていた。

何の心の準備もできていないまま聖とご対面してしまったのだ。

「……………」

「……………」

2人の間に実に気まずい沈黙が流れる。

聖は優太と目を合わせないように目を伏せると自分のロッカーを開け、バッグをロッカーに投げるように入れた。

「……なあ聖」

黙ったまま着替え始める聖に優太は声を掛けた。

「俺さ……今回の件に関しては無関係でいい？」

別に悪いことをしたわけでもないのにまるで聖のご機嫌を伺うかのようにおどおどした目で優太は聖を上目でちらり、と見た。

学ランを脱ごうとした聖の手が優太の予想外の意見に止まった。

「……え？」

聖は優太を見て今思っている感情のまま実に間の抜けた返事をした。

「もうさ、俺どうしたらいいかわかんねーんだ。聖にも未散にもなに言ったらいいかわかんねーし……だから俺は降りる」

不自然に慌てて目を逸らしながら優太はいい訳じみたことを口走ると「ごめんな」と優太は意識して聖に笑顔を向けた。

「いや……そのほうが俺はありがたいよ」

学ランを脱ぐ手を再び聖は動かし始めると意識して明るく優太に返した。

「ちゃんと答えは出すから……ごめんな」

聖も優太に言い返し、やっぱり作り笑いを向けた。

「じゃあ俺は今まで通り聖と未散のダチということで、2人のことはなあんにも気にしないでいくわ」

よし決まり、と優太は勢いよくロッカーを閉めた。

「先行つてるわ、早く来いよ」

頼むぞ相棒、と優太は聖の背中をバシッと叩いて部屋を出て行った。

優太って案外気がきく奴だな。

聖は部屋を出て行く優太の背中に微笑んだ。

すると聖は突然思いついたようにカバンを開き携帯を探し始めた。

3日後。

今となつては珍しい男が1人、バスケット部の練習を遠目から見ていた。

前バスケット部主将、佳佑だ。

久しぶりにみんな……というのはタテマエで本音は未散なのだが、顔を見たいと思った佳佑は補習が終わったと同時に体育館に足が向かっていた。

部活をしていた頃はもっぱらコンタクトだったが最近は何で面倒でメガネをかけている。

そのためか後輩達は誰も気がつかない。

あれ、どうかしたのかあの2人は。

佳佑は未散と聖を見て首をかしげた。

2人のなんだか避け合っている空気を感じ取ったのだ。

多分本人達じゃ口を割りそうにないから、ここは正直者の並木にでも聞いてみるか。

「おーす！久しぶり！」

優ただけ呼ぶのは不自然なのでまずはみんなと話そうと、小休止に入ったところで佳佑はひらひらと手を振った。

「あ！佳佑先輩！」

部員全員、佳佑を見て駆け寄った。

あつという間に佳佑のまわりは後輩達で賑やかになった。

しかしここはさすが元主将、

「はいはいもう練習に戻れ、休憩終わりだろ」

佳佑は時計を見て後輩達を厄介払いするかのようには追いついた。

基本的に後輩達は「佳佑先輩が大好き」なため全員「えーっ！」

と渋い顔をしたがすぐ「はい」と不満そうに返事をしながらも従順に練習に戻っていった。

「あ、並木、ちよつと」

佳佑は練習に戻ろうとする優太を呼び止める。

「はい！」

優太は「なんですかご主人様！」とまるで飼い主に呼ばれた犬コ

口のようにニコニコ顔で佳佑に駆け寄った。

「あのさ……なんかあったのか、西倉と吉岡」

「なんでわかるんですか?!」

「しーっ！声でかい！」

多分優太はこの質問にでっかい声でびっくりするだろうとは思っていたが、佳佑の想像を遥かに超える優太の声のでかさに佳佑は思わず優太の口を塞いだ。

「まあ一応元主将ですから。それに……あの2人はわかりやすいんだよね」

本当は未散を見ているから聖も気になるだけなのだが、そんなことが優太にバレてしまつては多分優太があたふたする。

それがわかる佳佑は優太の口を塞いだ手を外ながらその場しのぎの理由を述べた。

「……ほんの1週間ぐらい前からややこしいことになつちやつたんですよ」

佳佑に話してもたいした影響はないだろうし口は堅そうだしと思ひ、優太は話し始めた。

「……ふーん、小橋さんによく似た元カノねえ」

佳佑は相槌を打った。

「別に聖は衣を引きずつてるとかそういうのはもうないと思うんですよ。聖が今好きなのは未散なのはあいつ見てるとわかるし。けど、元カノと別れた理由がただ単に聖が勘違いしてただけだったらしくて……だからやけばつくいに火が付いたみたいな、そんな状態になつたみたいで……おまけにそれを未散はまともに見ちゃつたみたいで……」

優太の割には随分冷静にかつ簡潔明瞭に佳佑に説明した。

「なるほどねえ」

佳佑は再び頷いた。

「けど俺もうどうしたらいいかわかんなくて。そりゃ俺は聖と未散がうまくいってくれれば嬉しいけどそんなに好きだった元カノにヨ



りを戻そうって言われたらそりゃ悪い気はしないだろうし……だから俺は今回はもう放棄しました……でも、俺薄情でしたかね」

優太はまるで悪いことをして叱られる覚悟の上で親の前に立っている子供のような顔を佳佑にした。

「わかるよそれ、俺もそうしたことあるし。……昔理がさ、そういうことあったから」

それも正解だよ、と佳佑は優太に安堵感を与える笑顔を向けた。

「……理先輩が？」

そつちに興味が湧いてしまった優太が今度は佳佑に質問した。

「なんだよ、理だつてそんな話の1つくらいあるに決まってるだろ、失礼な奴だな。あいつはあいつで壮絶な過去があるんだよ……でもこれ以上は秘密」

佳佑はまた優太に笑つて人差し指を口元に持つていった。

「ふーん……理先輩つてそういうの、そつなくやれそつなイメージだけだ」

そつなのかあ、と優太は心底感心したように腕を組みながら唸つた。

「……よしわかった、じゃあ一肌脱いでやるよ」

佳佑は大きく伸びをしながら優太にニツ、と笑った。

「え、でも勉強は」

優太は不安そうに佳佑を見た。

「大丈夫大丈夫、これは息抜きだから。ちよつど勉強ばかりで飽きてたしそれに……そんな話聞いちゃつたら気になつて勉強できないし。この部にとつて西倉と吉岡は中心人物なんだからその2人が調子悪いと部全体に影響が出る。元主将としてはそれも困るしね」

優太にはそんなことを言いながら佳佑はまた笑つて片目を閉じた。

佳佑には聖の心の状況はもう見えていた。

でも聖は多分今は自分の本音にまだ気がついていない。

このままいけば聖はきつと間違った選択をする。

だけど聖もそんなに馬鹿じゃない、すぐに自分の選択ミスに気がつくはずだ。

その時被害を被るのは恐らく。

あんまりやりたくないけどしょうがない、やってみるか。

人の心を強引に動かしたり相手が気づくように仕向けるのは正直性分じゃない。

だけど今は、とにかく未散を助けてやりたいという気持ちで佳佑の心の全てを占めていた。

だから今だけはこじつけだろうがなんだろうが収集をつかせる理を見習ってみようかと思っただのだ。

「並木、今度吉岡が掃除当番なの、いつだ？」

佳佑は優太にそうたずねた。

それから2日後。

練習が終わり未散はひとりボールを拾っていた。

今日は片付け当番。

ちなみに男子は……優太。

でも優太は、

「未散、悪い、俺ハラ痛いからトイレ行ってくるわ」

そう言っつて体育館を出たつきりだ。

「んもー、こんな日におなか壊してんじゃないわよ……」

未散は舌打ちしながら呟いた。

本当なら未散がボールを拾ってかごに入れてる間に優太がモツブがけをして終わりなのだが、あいにく優太はまだ帰ってこない。

しょうがない、モツブ掛けするか。

よっこらせ、と年寄りじみた声かけをしながら未散はだらだらと立ち上がった。

「あれ？今日は男子は誰？ブツチか？」

後ろから聞き覚えのある男の声がした。

「……佳佑先輩」

振り返って未散はそう口にしていた。

その頃優太は聖を探していた。

「じゃあさ、その日に男子の当番は並木にしてくれるか？で、片づけを始めたらすぐ何でもいいから用事を作って体育館を出る。で、西倉を捕まえて当番代わってとか俺が探してたとか何か言っつて体育館に戻ってこさせる。……できるか？」

そう佳佑に頼まれているので今はそれを実行しているのだ。

くっそーもう帰っちゃったかな……。

廊下で聖の背中を見つけることができないまま昇降口まで来てし

まっていた。

優太は即座に聖の靴箱を見た。

「げげっ、帰っちゃった……嘘だよ……」。

優太は「どうしようどうしよう!」と言いながらシューズのまま外に出た。

すると聖がちょうど校門に向かって歩いている途中なのを優太は見つけていた。

「ひ、聖っ!ちよ、ちよっと待って!」

シューズのままなのも忘れて優太は聖に駆け寄った。

聖は「ん?」という表情で振り返った。

「ああああ、あのさ、……ちよ、ちよっと体育館に戻っていいんだけど」

なんと行って引き止めるかのトークを今走ったせいで忘れしてしまった優太は、なんとか頭を搾り出して引き出した。

「え?なんで?」

「なんで、って。えーとえーと……」

聖のごくごく普通の問いに対し、今度は完全にド忘れしてしまった優太は「思い出せ思い出せ」と言いながら聖が「大丈夫か?」と心配するくらい自分で頭をゴンゴン叩いた。

「……あ、お、思い出した!なんか、さっき、佳佑先輩が来ててさ、聖に用があつたみたいで」

「佳佑先輩が?」

優太のなんだか嘘っぽい言葉に聖はいぶかしな顔をした。

「ほらほら、先輩からの呼び出しなんだから行けっ!」

はいはい回れ右!と優太はかなり強引に聖を昇降口の方に向けさせると背中を押した。

「俺約束あるんだけど、明日じゃダメ?」

顔だけ後ろに振り向きながら聖は優太に交渉を試みていた。

実を言うと聖は今日、隼と会う約束をしていた。

だからいつもよりさっさと帰ろうとしたのだ。

「大丈夫、すぐ終わるって。ほら！」

何が何でも聖を体育館に行かせなくてはならないという使命感を持つている優太は、返事もそこそこにグググ、と聖の背中を押した。

「……わかったよ」

聖は諦めたように昇降口へと歩き始めた。

ふう、あぶないあぶない。

疑いの目を聖には向けられたが、どうにか優太は聖を体育館に戻す作戦を成功させた。

「じゃあ先に戻るわ」

「え？ちよ、ちよつと優太?!」

聖が唾然としているのなんてお構いなし。

優太はこれまた不自然に聖をおいて走り出した。

佳佑先輩、後は頼みます！

優太は昇降口に入ると、聖に見つからないようにすぐ近くの男子トイレに隠れた。

聖が昇降口に戻り始めた頃体育館では……佳佑と未散でモップがけをしていた。

「吉岡、最近元気ないんじゃないのか？」

モップがけの手止めることなく佳佑は未散に質問する。

「そんなことないですよ、元気ですよ」

よいしょ、と言いなながら未散もモップがけを続ける。

「今日も俺が顔出したのはただの偶然だと思ってる？」

「……え」

未散のモップがけをする手が止まった。

そして顔を上げると、自分の正面にモップに寄りかかるようにして佳佑が立っていた。

「吉岡ってそんなナリしてるし性格も普段は男勝りだろ？だから、ちよつとでも弱ってるとすぐわかるんだよね」

「……………」

もの見事に言い当てた佳佑に未散は俯いてしまった。

「この前来た時一番気になったのは吉岡、次に気になったのは西倉だから今日も来た」

佳佑は未散の顔を覗き込んだ。

「俺でよかつたら聞くぞ？この部を退いた先輩としては吉岡にはいつも元気でいてくれなくちゃ困るし。それに、最近勉強ばかりで飽きてるからたまには違うことで頭使いたいし。悪くない話だろ？」

佳佑は少しだけ顔を上げた未散に微笑んだ。

もうダメだ……もう無理だ……。

佳佑の笑顔に、その掛けてくれる言葉一つひとつに、未散の目に見るみる涙が溢れた。

確かにそのへんの男より背はあるかもしれないけど俺よりはちっちゃいし、そんな綺麗な顔してる男なんかいないぞ？

吉岡はちゃんとかわいい女のコだったこと、もっと自覚しなきゃダメだった。

佳佑からの、今でも忘れてない言葉を未散は思い出していた。

入部して間もない頃男子部員に混ざってなにかの力仕事をしたとき、吉岡はやらなくていいと未散が持っていた箱を取り上げたのが佳佑だった。

背が他の人より群を抜いて高くなってしまっただけからは1度だって女扱いされたことのなかった未散が初めて女の扱いを受けたのがこのときだった。

それが未散の中ではとても大きいことだった。

その日から佳佑は未散にとって「男だと意識ができる人」だった。

でも詳しくはわからないけれど、佳佑の抱える過去を知るのが怖くて手が届かない男だと諦めた。

それから聖と出会ったことで佳佑の存在はまた違ったものになってしまったけれど、陰ながら気に掛けてくれてなにかと助けてくれ

るのはなんとなく気がついていた。

そんな佳佑に救いの手を求めるのも佳佑に自分の全部を預けてしまいたいと思うのもきつとズルいことなんだと思う。

だけど佳佑ならわかってくれれると思った。

聖を忘れられるまででいい。

佳佑にはそばにいてほしかった。

佳佑先輩、あたしを助けて。

心に押し込めていた思いが一気に押し出されていった。

「……佳佑先輩って、いつもそう。いつつもそうやってあたしが困っていると助けてくれるんですね」

受験生にこんなことを言っていていいんだろうかと思いつながら未散はモツプを握り締め、顔を上げると笑顔を作って口を開いた。

「あたし聖くんに会うまではずっと佳佑先輩が好きだったんです……でも理先輩に話を聞いて、それで尻込みしちゃってなんにもしなかった」

だけど、と未散は続けた。

「今まで助けてもらった分、今度はあたしが先輩のこと助けます。佳佑先輩にどんな過去があったのかわからないけど、あたしでよかつたら一緒に背負います。だからまた佳佑先輩のこと、好きになってもいいですか……？」

目の前にいるのが佳佑だからそう思うのかそれとも今のこの気持ちから逃げ出したいだけなのか、未散にはもうわからなかった。

そのぐらい佳佑が現れたタイミングはあまりによすぎた。

佳佑が何も言わないのいいことに未散は我を忘れて喋りつくした。

佳佑は表情を変えずに最後まで未散の話聞いていた。

そして……未散には笑っていたが黙ったままだった。

そのせいだろう、この広い体育館に怖いくらいの静寂が流れてい

た。

なんか1人盛り上がった気がするんだけど……あぁもうどうしよう……佳佑先輩絶対困ってるよ……。

佳佑が何も返してこない時間が長くなるにつれて未散は冷静になつてきた。

恥ずかしいやら怖いやら、それでも未散はおどおどしながらも佳佑の言葉を待った。

長い長い沈黙の末、ようやく佳佑は口を開いた。

「そんなカワイイこと言ってくれるんだ？いいよ、じゃあ付き合おうか」

言つや否や佳佑は未散の頭の後ろに手を置くと、かがんで未散に微笑んだ。

しかしその表情は未散が知っている佳佑ではなかった。  
どこか妖艶でキケンな香りがする微笑だった。

嘘、なに?! なになになに?! なんなの?!

あまりの急展開に未散は佳佑から目をはなすことができないままうろたえた。



予想していなかった佳佑の返事とその仕草に未散は硬直していた。

佳佑はモツプから手をはなした。

モツプはカシャン、と音を立てて床に倒れた。

佳佑のあいたその手は未散の顔に伸びていた。

そしてその手は未散の髪にかすかに触れた。

「佳佑先輩……？」

緊張でがちがちの未散は声が震えていた。

「なに？どうした？」

その様子を見て何を思ったのか佳佑はくすつと笑った。

「どうしたって言われても……だって……先輩いつもと違う……」

こっちはもうパニック寸前だというのに佳佑の方は余裕綽々。

未散の方は何か言わなきゃもう暴れそうになっていた。

「そう？でも俺は彼女にはいつもこんな感じだよ？」

手馴れた感じというかダテに歳は食ってないというか、佳佑はさりりと答えた。

「そんなの知らないよ、聞いてないよ……」。

未散は瞬きすることすらもできなくなっていた。

意外な一面を見せてくる佳佑にかなり動揺しているけれど目はなせない。

「吉岡、これから大丈夫？俺けっこう並木とおんなじタイプだから理性きかないよ？」

「どういう、ことですか……？」

まるで試すような佳佑の口ぶりに未散はごくつと唾を飲み込んだ。

「例えばね、こういうこと」

「え、や、あ、ちよつ、先輩あのっ……」

一瞬の出来事だった。

佳佑はいきなり未散に攻め寄った。

未散はその分後ずさりし、持っていたモップの柄を思わず床に叩きつけるように放り投げた。

しかしすぐに壁にぶつかり佳佑に見下ろされる状態で動けなくなつた。

佳佑は未散の両手を取って壁に押し付けるとそのまま顔を未散に寄せた。

嘘嘘嘘っ！待って待って待ってっ！

体中でそう叫ぶが声が出ない。

目もつぶれない。

「……どうした？なにしてんの？」

2人の唇が触れるまであと少しというところで、佳佑は目を閉じようとしないうちに未散に不思議そうな顔をしたがまたすぐに微笑んだ。

「なにしてんの？って……先輩、なにしようとしてます……？」

そんなのは聞かなくてもわかつてはいるが、未散はまるで空気の読めない女のような質問をしていた。

「なにしようとしてるって……見りゃわかるだろ、掃除の続きをやるように見えるか？」

ちよつとだけ楽しそうに佳佑はくすつと笑った。

「だって……ここ体育館ですよ……誰か来たらどうするんですか……？」

未散の心臓は今だけでもうはちきれそうになっていた。

まさに息絶え絶えに佳佑に言い返した。

「別にいいよ、誰かに見られたって俺は構わないよ？」

「……………！」

佳佑の言葉に未散の目は驚きで丸くなっていった。

その様子を見て佳佑はまたくすりと笑う。

「あれ……もしかして吉岡はこういう状況は初めてだったりする？」

緊張でかちこちの未散に佳佑はふとそんな質問を投げかけた。

「初めてじゃないです、けど……」

「ふーん前もこんなことあったのか？誰だろ？……あ、ひよっとして西倉？」

「な、なんでそれ……」

佳佑はあてずっぽうで言っただけに過ぎないということがこのときの未散には想像がつかなかったらしい。

佳佑が聖の名前を口にした途端反射的に未散の顔が赤くなった。

「ふーんそうかあ。羨ましい限りだね、最近つてことじゃん」

実に正直な答えに佳佑は「このやるっ」と言いたげに笑うと未散の鼻を摘んだ。

「……佳佑先輩はないんですか？」

つい頭の中に浮かんでしまった疑問を未散は佳佑に口走っていた。

「なくはないけどもう2年以上前が最後だからなあ、『ない』に近いかな……だから」

そこまで言うとな佳佑は未散の手を掴んでいた手をそのまま自分の左胸に当てた。

「わかる？さつきからものすごい心臓バクバクいってんだよね……」

あ、違うな、目の前にいるのが吉岡だからかも」

「え……」

「吉岡はいつもの俺じゃないって言うけど、俺だって人間だよ？相手によっちゃ見栄も張るし暴走もするさ」

「……」

「吉岡には俺がどう見えてるか知らないけど、今俺けっこういっぱいいっぱいだよ？」

そう言うとな佳佑は照れ笑いした。

「いっぱいいっぱいって……佳佑先輩っぱくない」

未散も釣られて笑った。

「吉岡」

さつきまで笑っていた佳佑の表情が急に変わった。

今度はいつになく真剣な眼差しで未散を見つめる。

「……はい……」

未散も佳佑を見つめ返した。

「理からどこまで聞いた？」

「どこまでって……ほとんど何も聞いてないですよ。ただ『佳佑と付き合うなら命と引き換えだぞ』って言われたくらいで……」

なんでそんなことを聞いてくるんだろうかと思いつつも、未散は佳佑からの質問に答えていた。

「それ、わかりにくいかもしれないけどホントのことだから。でも何かを躊躇ためらうように佳佑はそこで一瞬口をつぐんだ。

けれど意を決したように再び口を開いた。

「あんなこと言ってくれたの吉岡だけだから、俺も吉岡の抱えてる辛いこと一緒に背負ってやる。絶対独りぼっちになんかしないから……」

そこまで言うのと佳佑は今までずっと握り締めていた未散の手をはなした。

その手は未散の少し涙で腫れた頬を優しく包み込んだ。

そして……そっと自分のおでこ未散のおでこをくつつけた。

未散は目を伏せて黙って頷いた。

その瞬間、未散の頬を涙が伝った。

佳佑は未散の額からはなれるとその涙に唇を優しく押し当てた。

そして 佳佑は未散の頬から手をはなした。

はなれたその手はかすかに未散の手に触れていた。

佳佑は触れた指先を未散の指に絡めた。

そして未散は目を閉じて佳佑を待った……。

VoI・70 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

まだまだ夜は長い日が続きます。

暇つぶしにでもなればと思ってアップさせていただきました。  
いかがでしたでしょうか。

さてさて。

佳佑くん、ついに爆走です(汗)。

まあそりゃそうだよな、惚れた女にあんなこと言われれば。

……とは言うものの、年の功ってヤツでしょうか？聖よりははるかにスマート……っーかキザ？(笑)

うーん、このあとどうなっちゃうんでしょうかね。

このまま佳佑は未散とチューしちゃうのか？！

それとも邪魔(？)が入るのか？？

答えは次回に回します(笑)。

というところで、またです。

絶対独りぼっちになんかしないから。  
今の未散にとって佳佑のその言葉は、まさに寒い冬に包まる毛布のような暖かさを持っていた。

聖とあんなことがあってからすでに1週間近くたっていた。

衣も優太もあの日は話を聞いてくれたけれど、次の日からはあえて『あの話』だけはしようとしなくなつた。

その理由は単純だった。

『あの話』をされたところで優太も衣も未散を慰めることもできなければ聖を非難することもできないからだ。

特に優太にとっては聖は無二の親友だ。

そんな人にどうして聖の話なんかできるだろう。

だから未散も2人が何も聞いてこなければ何も喋らなかつた。

いつものように衣と笑い合い優太とはバカをやっていた。

時々衣が心配そうな顔をするが見てみぬフリをして元気な素振りを見せ続けた。

あの日以来そうやってきた。

けれどそのたびに未散の心は確実に一寸先も見えない闇へと葬られていった。

自分のこの想いはこのまま消し去るしか道はないんだと頭ではわかっていても気持ちがついてこない。

そのせいでどこをどう歩いたら光の差し込むほうへ行けるのかもわからずに立ち止まったままなのだ。

もしかしたらここでいつそのことめそめそと「助けてくれ」と泣いてしまった方がラクになるのかもしれないも思った。

でもどうやらこの前衣と30分間泣きはらしたせいか今はもうその涙も枯れ果ててしまったようでもう絞っても出てきやしない。

そう思ってた。

それがどうしてだろう。

佳佑のたった一言が再び未散に涙を戻させた。

それも悔しいとか悲しいとかじゃない涙で、生まれて初めてのこ  
とだった。

さつきまでは自分が知らない佳佑の姿に戸惑いがあったけど聖か  
らは決して貰うことのなかったこの感覚に安堵感さえ感じる。

だから今は目を閉じているから何も見えないけれど怖くなかった。

でもいいのかな……あたしこんなで……だけど今は先輩の手を  
はなしたくない……。

未散は佳佑と繋がっているその手をぎゅっと握り返していた。

だが甘い時間が流れたのはそこまでだった。

「……やっぱりやめた」

佳佑はそう言うと未散におでこをピン！と弾いた。

「い、痛っ」

おでこに感じた痛さに未散は思わず目を開けおでこに手を当てた。  
そしておっかなびっくりに佳佑を見ると……佳佑は「やれやれ」  
という表情をしていた。

「まったくもう、少しは抵抗してくれよ。俺はそれを期待したのに  
なんでやらないかなあ。それじゃあ俺からやめるしかないじゃんか」  
困ったお嬢さんだ、と佳佑は呆れたように笑って未散を見ていた。

「え、だ、だって……」

話が読めない未散は焦りの顔を隠せない。

それを察した佳佑は「つまりね」と話を続けた。

「吉岡は自分が何しようとしてたかわかってなさすぎ。俺がここで  
やめなかったら吉岡は本当に西倉のこと諦めなきいけなくなるんだ  
よ？それ、おまえは全然わかってない」

まったく、とぶつぶつ呟きながら佳佑は腕を組み始めた。

「例えばだよ、1週間ぐらいたつて西倉はけつきよく元カノとヨリを戻さなかつたつてなつたら吉岡どうすんの？それでもちやんと俺のこと好きになれるの？きつと無理だと思つよ？だつて吉岡は西倉が自分のこと好きなの知ってるし」

「佳佑先輩どうしてそれを……？」

「どうやら佳佑が話を知っていることに気がついた未散は困惑の表情になる。」

「だが佳佑はそれにはまったく答えずに喋り続けた。」

「目の前にある現実に対してどうするかなんて本人の自由だよ。でも吉岡にはあえて言っちゃう、俺と付き合つなんて考えちゃダメ」

「佳佑はそこまで言つと腕を組んだまま腰を落とすと未散と目を合わせた。」

「自分の好きな人がいつまでも近くにいるなんて思つちゃダメだよ。いつどこでそれが終わつちゃうかなんてわかんないんだから」

「言い終わると佳佑は未散からはなれて床に落ちているモップの柄を拾い始めた。」

「俺の元カノがそうだった。出会つてたつた4ヶ月で、俺の前からこの世から、消えていなくなった。俺と付き合つてたばかりに命の危険にさらされて、最後には還らぬ人になつた……もう2年以上前の話だけだね」

「てことはさつき先輩が言つてたのつて……」

「そう、そのときのこと。でもちやんと今でもあんなふうに見えるんだね、自分でも思つてなかつた……つてホントは、さつきも言つたけど吉岡のコトを言えないくらいガツチガチだつたけどね」

「……………」

「悪戯つぼく笑つ佳佑の急に始まつた昔話に未散は返す言葉が見つからない。」

「佳佑はそんな未散に振り返ることもなくまた言い始めた。」

「あんな目に遭つ人をもつ見たくないつて思つた。だから俺とあの時の俺を一部始終見ていた理はあんな大げさなことをしてまで俺と



同じ目に遭いそうだった並木を助けた」

モツプの1本を拾い、もう1本を拾いに佳佑はモツプをひきずったまま歩いた。

「今でも思うよ、『俺のことなんか忘れててもいい、他の男を好きでもいい、もう1回だけでいいから彼女に逢いたい』って」

しゃがんで2本目のモツプの柄を持つと佳佑は立ち上がった。

「だから俺は吉岡が羨ましいよ。もしかしたら片思いのままになっちゃうかもしれないけど毎日こうやって会えるじゃん？そういう当たり前の幸せ、吉岡にはわかってほしい」

立ち上がったあと佳佑は未散に振り向かないまま話を続け、終わった後ちよつと鼻をすすって天井を見上げた。

「まあそれでも本当に苦しくて辛くて本気で西倉のこと忘れさせて欲しいっていうなら、その時はもう1回言ってきた。そうになったら俺も考えるから」

佳佑は「なんだろ、涙出てきた」と言いながら目をこすり、未散に振り返ると「はい、片付けよろしく」とモツプの柄を突き出した。

「先輩ごめんなさい、ごめ……」

佳佑の懐かしそうどこか寂しそうな笑顔に、未散はモツプの柄を取る前にぐずり出した。

佳佑がなんのためにひと芝居打ったのかその理由をようやく理解していた。

佳佑は未散に知って欲しかったのだ。

それがたとえ一方通行なのだとしても『自分が想い慕う人に明日も会えることの奇跡』を。

だから佳佑は限界まで未散を追い詰めた。

そうすればきつと途中で未散は「こんなのは違う」と気づいてくれるに違いない　そう信じていたのだ。

だけど佳佑のそんな親心をまったくわかってない子供の未散はあまりに情けないことをしようとしているので、仕方なく佳佑は種明

かした……。

憶測の域を越えないけれど恐らくはそんなところなのだろう。

「頼むからもう泣くなよ……なんか俺が後輩イビリしてるみたいじゃないか……」

泣き出す未散ははつきり言って佳佑には予想外だった。

口調はいつものものんびり穏やかなものではあったが、内心はいつ聖が優太に言われて体育館こくに来るのかを考えると冷や汗モノだった。しかし今の未散には佳佑の声も困惑した笑顔もただの涙増進剤にしかなくてない。

「だ、だって……ふえーん！」

とうとう未散は嗚咽まで上げ始めてしまった。

確かに自分は自分でかなりの痛手を追った。

けれど自分よりもはるかに大きな傷を抱え続けながらもこうやって救いの手を惜しむことなく差し出すこの男ひとを目の前にしてしまっ  
ては、自分の負った傷なんかかかすんでしまっていた。

聖のことを諦めることができないのならまた明日からもずっとず  
っとこの届かぬ想いを背負ったままにはなる。

正直に言っ  
ていいなら逃げ出したいし投げ捨ててしまいたい  
そうしたいくらい苦しい。

でもそれがどうしたというのだ。

世の中にはそれすらも永遠に叶わない人もいるのだ。

愛する女ひととの思い出がたった4ヶ月で終わってしまったことのほ  
うが、愛した女ひとを失いたった一人この世に置き去りにされたのに自  
分も一緒にこの世から消えることを許されることもなく生き続けな  
ければならなかったほうがよっぽど辛い。

そんなのに比べれば自分の苦しみなんてちっぽけなものだ。

「せ、せんば……ご、ごめ……」

さつきから佳佑に謝らないといけないと未散は思っていた。

けれどそう思う事そのものも今の未散には号泣の素。

さつきからずっと佳佑には何を言っているのかさっぱりわからな

い言葉を発していた。

「まったく、ウチの部の逸材はどいつもこいつも手がかかる……」  
よしよしもう泣くな、と佳佑は苦笑いしながら未散の頭を撫でた。

この光景をもう随分前から体育館の入り口のところで黙って見て  
いる学ラン姿の長身の男がいた。

言つまでもなく体育館に連れ戻された聖だ。

なんなんだよ『もう1回好きになつていいですか?』って。佳  
佑先輩もなにしてんだよ……?!

遠目からしか見ていないし会話も途切れ途切れしか聞こえないと  
はいえ、聖はなんと間の悪いところだけしか知らないんだらうとい  
う状態だ。

「……………」  
聖の心の中は『不安と嫉妬心とで渦巻いている』という表現が一  
番的確な状態だった。

『ま、別に言いたくないならいいけど。でも、知らないよ?いつの  
間にか誰かにどっか連れ去られちゃっても。それでもいいのか?』

『連れ去るって、誰が?』

『……………さあ、例えば俺とか?』

文化祭で何気に交わした佳佑との会話があの時からずっとずっと  
つきまとっていた。

結局それは冗談だと佳佑は笑っていたが、佳佑がそんなことを言  
えるような性格ではないのはわかっているので多分あれは本音なん  
だらうと聖は思っていた。

しかも立ち聞きで初めて知ったが未散にとって佳佑は「好きだっ  
た人」。

それに佳佑は少なくとも聖も含めバスケット部員全員が認める「イイ  
男」だ。

そんな彼がもし本気になつて未散にアプローチを仕掛けてきたら

自分なんか到底敵わない。

くっそー冗談じゃねーぞ。

自分だって同じ……いや、それ以上のことを未散の前でやったくせに、そのことは今は全く棚に上げて未散の頭に気安く手を乗せる佳佑に聖は腹を立てていた。

「佳佑先輩、俺に用事ってなんですか？これですか?!」

わざと足音を立てながら佳佑に殴りかかる勢いで聖は大股で2人のところへと近づいて行った。

「佳佑先輩、ど、どうしよう」

聖がこっちに向かってくるのに先に気づいた未散は涙が一気に引っ込みおろおろし始めていた。

だが佳佑は未散の頭から手をはなしながらニヤリと笑い、

「おー、ナイスタイミング」

と独り言を呟いた。

ナイスタイミング?!バッドタイミングの間違いでしょーっ?

!

笑っている佳佑と怒っている聖、2人の顔を代わる代わる見比べながら未散は背中に冷たいものが上から下へと落ちてくるのを感じていた。

こんばんは、愛梨です。

夜な夜なすみません(汗)。

結局佳佑くん、一步を踏み出すことはしませんでした。

まあこれについてはあとで本人から釈明(?)がありますのでそれまでお待ちいただければと思います。

ちよつとだけ書くと……実はこのとき、佳佑は聖に『昔の自分を、そして未散には『元カノ』を見てました。

そこで思っただんです、「吉岡が抵抗しないなら自分から引かないと」って。

でなければ昔自分が元カノに与えた苦しみをまた未散に与えてしまつから。

それが今回佳佑が出した結論だったんです。

どつちかというと高校生の恋愛って『貰う』『手に入れる』みたいなイメージですが、唯一そうじゃないのが佳佑。

引きずっている過去もあるしもとの性格上でも『愛』になっちゃうというか……それを表したかつたんです。

あ、そう考えると実は未散もそうかもしれない……。

一方未散ですけど……これきつと「ダメだつてそんなことしちゃ！」とはタテマエ上言うけど、実際は「でも……わかるなあ……」っていう人多いんじゃないかと思ってます。

失恋した弱みにつけ込まれ(?)て彷徨ってしまうあの心理です。でも実は、それをしたのは演技でとはいえ佳佑のはずが佳佑も未散にやられています。

ここではあえてあまり触れてませんが、まあどこかでじっくり

書きますのでちょっと待っててもらっていいですか？（汗）

……で。

次回はいよいよ佳佑VS聖編です。

聖に気づかせるため佳佑は聖に何を仕掛けるのか……。

あ、ちなみにここは「論争」なので殴る蹴るはありませんのでそれが心配な方も安心して読んでください。

まあ……胸ぐら掴む程度はありますが（汗）。

という事で、またです。

怒りモード全開の聖は佳佑を睨みつけずんずん近づいてくる。

「吉岡、これかたづけて」

ほい、と佳佑は聖を見たまま未散にモップの柄を2本同時に投げた。

「え、でも、先輩は……?」

かろうじて床に落すことなく未散はモップの柄を2本とも佳佑から受け取った。

「大丈夫。とりあえず西倉と2人きりにしてくれないか、吉岡がいと話しくいから」

悪いな、と佳佑は未散にいたずら小僧のように笑って左目を閉じた。

大丈夫かなあ……でもいたら逆に佳佑先輩に怒られそうだしなあ……。

かなり心配ではあるが、この部は縦社会がきちんとできているので先輩には『絶対服従』なのだ。

未散はモップを引きずりそそくさと用具室へ走り去った。

未散のその様子をわき目で見ると聖は突然佳佑の学ランの襟元に手を伸ばした。

「吉岡に何してるんですか?!」

両手で佳佑の学ランを掴んだ聖は佳佑を見下ろす。

「なんにもしてないよ」

「はぐらかさないてください!」

即で笑ってごまかそうとする佳佑に聖は言葉を叩きつけた。

「ほんとだつて……まあしようとはした、それは認めるよ……でもできなかつた。嘘だと思ふんなら吉岡に聞いてみな」

ほらはなせ、と佳佑は聖の腕を振り払った。

「西倉さあ、おまえ調子いいヤツだな、なんなのそれ」

佳佑は呆れた表情で聖を見上げた。

「西倉はヨリ戻すんじゃねーの？だったら俺が吉岡に何しようが吉岡が俺とどうなるうがおまえには関係ないだろ。違うか？」

なあ、と佳佑は聖に呼びかけた。

「それともなに？俺と吉岡がいいカンジになったの見て面白くなかったとか？やっぱり吉岡手放すの惜しくなった？」

どうなのよ？と佳佑は聖をじっと見た。

「……………」

聖はぐうの音も出ない。

「……………じゃあこうしようよ」

佳佑は手をズボンポケットにしまった。

「俺に吉岡ちようだい？で、西倉は元カノとヨリを戻す……………どう？悪くない話だろ？」

「『吉岡ちようだい』って、それどういう……………」

佳佑の耳を疑う提案に聖は啞然とした。

しかし佳佑は全く動じなかった。

「どうもなにもないよ、欲しいからそう言った、それだけだけど」  
反論あればどうぞ、と言いたげに佳佑は顎をかすかにしゃくった。

「……………けどさ」

聖が何も言っただけなので佳佑は少しうなだれながら床を足のつま先で軽く蹴りながら言葉を続けた。

「今のまんまじゃ吉岡の中に入り込むの無理なんだよな。だって吉岡に100の気持ちがあるんだったら、99は西倉のことでいっぱいなんだん」

西倉さ、と佳佑は顔を上げ聖に切なげに笑った。

「いつそのことさすがの吉岡でも立ち直れなくらい切り捨ててやってよ。それをしてくれるならあとは俺がなんとかする、絶対にあいつのこと立ち直らせてやる。だから……………思いつき振ってやってよ」



「……どうしてですか？どうしてそこまで俺がやんなきゃいけないんですか？！そこまで先輩に言われる筋合いはないですよ！」

「そのぐらいやってくれないだろ？！じやなきや俺があいつん中に入れねんだよっ！」

あくまで穏やかに言う佳佑にだんだん怒りが込みあがってきて聖は最後の方はもう叫んでいた。

それにつられてか佳佑も無性に腹が立ってきていつの間にかポケツトから出していた手で聖の胸ぐらを掴んだ。

「……ほら、早く言ってきて来いよ、吉岡のことぼろぼろにしてやれよ。とつと振って嫌われて来い！」

先に口を開いたのは佳佑だった。

「多分部室か用具室にいるよ、さっさと行けっつて」  
行けよ！と佳佑は掴んでいた聖の学ランの襟を突き放した。

「……相手が先輩じゃなかったらそうしてるかもしれない。だけど佳佑先輩にだけは『わかりました』って思えない。『吉岡をお願いします』なんて絶対言わない」

キッ、と聖は佳佑を睨みつけた。

「先輩に託すくらいなら俺は日和先輩を捨てる、先輩にだけは吉岡は絶対渡さない！」

怒りの鬱憤は言葉を発するだけじゃ物足りなかった。

聖は佳佑の肩を思いつきり突き飛ばしていた。

佳佑はかろうじて転ばずにすんだが壁に背中をぶつけた。

聖は無礼を謝ることもなくきびすを返して歩き出した。

なんだよ……もう答え出てんじゃん、自覚なしかよ……。

背中が痛くてなのか聖のあべこべになのかわからないまま佳佑は思わず苦笑していた。

しかし痛いものは痛い。

西倉もうちよつと手加減しろよと思いつながら「おーいつてえ……」と呟いて自分の後ろ手で背中をさすった。

「佳佑先輩、大丈夫ですか？！」

未散の方はというと2人を見ているのが怖くてどちらかの大きい声が聞こえるたびにびくつと肩を震わせ用具室に隠れるようにして縮こまっていたのだが、体育館から誰かが出て行くような足音を聞いてびくびくしながら体育館に出てきたのだった。

そしたらいたのが……背中が痛いと言え佳佑だったのだ。

聖はどうしたのかが正直気にはなるけれど、たいしたことはないといえ痛がっている人のほうが先と思った未散は佳佑に駆け寄った。

「……吉岡」

「はい」

佳佑の自分を呼ぶ声に未散は佳佑を見ていた。

すると佳佑は……いつもの見慣れた穏やかな笑顔を未散に向けてくれていた。

「もう少し待つてな、俺と付き合いおとしなくてホントによかった」って思える日がすぐ来るから」

「なんですか、それ」

意味わかんないです、と未散は佳佑の背中をさする手を止めることなく笑った。

「でも」

佳佑はそう言いながらそっと自分の掌を未散の頭に置いた。

「俺の過去を一緒にしよってくれるって言ってくれたのはホント嬉しかったよ。ありがとな」

まるで可愛がっている妹に言うように佳佑は未散にお礼を口にしていた。

でもそれは暴走しそうな感情をなんとか押しとどめさせた佳佑の、未散への精一杯の愛情表現だった。

理と……そして、きつと気づいてしまったであろう聖にしか知られていない自分のこの気持ちは決して未散には知られてはならないのだ。

もし知ってしまったえば今の未散なら自分を選んでくれるだろう。けれどいつか必ず未散は気づいて自分と聖との間で苦しんで……最後はきつと聖を選ぶ。

そして未散は自分にこう言うに違いないのだ。

佳佑先輩、ホントにごめんなさい と。

それで未散が自分に対して後ろめたさを感じることもなく聖のところに行くならまだいい。

けれど佳佑はわかっているのだ、きつと未散は自分に対しての罪悪感を引きずり続けるだろう と。

そんな結末が待っているこの恋をする覚悟は、情けないけれど今の自分にはなかった。

けれど、何にも考えないでいいんならこの手で守ってやりたかった。

たとえそれで聖から恨まれ、最後には奪われることになるんだとしても。

佳佑は「いやいやそんな」と照れ笑いする未散の頭を撫でながら寂しそうに笑った。

Vo1・72(後書き)

こんばんは、嘘つき愛梨です(汗)。

一昨日「明日もアップする」って言うっておきながら結局今の時間に(汗×2)。

す、すみません……(平伏)。

またもやMixiで載せていたときの話になっちゃいますが、こもいろんな人からメールにてあれこれ頂きました。

一番多かったのが「佳佑のその行動ありえないでしょ、まるで仙人じゃん!」っていう意見でした(苦笑)。

確かに言われてみればそうかもしれない……ってそのときは苦笑でしたんですけど、でもそれが実はのちのちスピンオフを書くことと思っただけの1つにもなりました。

で、前も話したとおり今はスピンオフを書いている最中(とはいっても思いつきり止まってますが)なわけですが、どうにもこうにもこっちで書いている佳佑に違和感を感じてしまったので必死こいて書き直しました。

まあそれが仇となりアップが遅れたんですが(汗)。

それにしても……自分で書いというナンですが、佳佑って悟ってるよな(笑)。

さてさて。

佳佑に核心を迫られぼろつと答えを口にした聖。

でも佳佑の言うとおりで本人全然自覚ありません。

そんな聖に大きなヒントを与える隼の登場です。

なにげに彼は出演時間少なくせにキーマンなんです。

だって日和の浮気現場(?)を押さえたのも未散に聖を合わせた

のも隼ですから。

さあて、鍵を握る男園田隼くん、今回はどんな活躍をするのか…  
…ご期待下さい。

という事で、またです。



佳佑に失礼を働いた聖はカツカしたまま学校を出た。

カリカリしながら駅まで歩き、イライラしながら電車を待った。

そして電車に乗っても車内に大げさに言えば殺気立った雰囲気振り撒き、降りてからも明らかに怪訝そうにまた歩く。

そんな聖の行き先は、転校してきてから高校の入学式を迎えるまでほぼ毎日のようにたむろっていた隼の家だ。

「お久しぶりです」

「あらあら聖くんいらっしやい」

「おじゃまします……って、え」

玄関に入って隼の母上に挨拶して靴を脱ごうと足元を見て聖はぎよつとした。

ざつと見、10足前後の男物の靴やらシューズやらが無造作に並んでいたのだ。

「『聖が来るって言うから来ました』ってみんな言っただけだよ。学校が聖くんだけ別方向だからなかなか会えないからってここぞとばかりにぞろぞろ来てるわよ」

隼の母上はそう言つと「どうぞごゆっくり」となにやら揚げ物が入っているっぽい箱を5つほど聖に渡した。

落とさないようにしながら階段を上ると、すでに聞き覚えのある大爆笑の声が壁から漏れていた。

隼のヤツ、絶対面白がってやがる。

隼の部屋に入るのが聖はだんだん億劫になってきた。

多分隼と2人ではないのとは思っていたとはいえ、集まった人数が多すぎる。

メールでは10行ぐらいで説明しただけなのにいったい隼はみんなに何をどう話したのか、考えただけで恐ろしい。

「なあ、聖遅くないか？」

1人が言い始めた。

「なんか先輩に捕まったって言ってたからそのせいだろ」  
これは多分隼。

「もしかして、その先輩までこの三つ巴に加担してたりして？」

また誰かが突っ込んだ。

「うわードロドロじゃんそれ」

また他かが口を挟んだ。

「そんなの俺には一生縁がない話だと思ってたけど、体験者が近くにいるってなんかすげえ」

……彼らは聖の深刻な話で、本人がいないことをいいことに完全に遊んでいた。

こいつら……ッ！

聖はムツとしてちゃんと閉まってないドアの隙間に足を入れるとそのまま廊下に引っぱった。

開いたドアの音に部屋にいた全員がいつせいに聖を見た。

「はーん、じゃあ代わってくれよ。……なんだよ、人が悩んでるっつーのにお気楽言いやがって」

悪気ゼロなのがわかってるので本気で怒るわけにもいかず、聖は引きつり笑いをしながら部屋にいる面々に言い放った。

「まあまあそんなに怒るなって、みんな恋バナに恵まれないからひがみやつかみの裏返しなんだからさ」

はいはい主役はココね、と隼は聖から箱を受け取り絨毯の上に聖を促した。

「そうそう。俺なんか男ばっかだから何にもねーもん、そんな色気話」

「俺もない」

「贅沢言つなよ、学校に行けば女いるだろおまえは」

「いりゃいってもんじゃねーだろ。量じゃねーよ、質よ、質」  
「……おまえ、俺に喧嘩売ってる？」

聖が座ろつとしている間にまた話が始まっていた。



「どうやらここに居るメンバーは諸事情により女性との接触の機会があまりないらしい。」

「……で？なんだっけ？吉岡さんと日和先輩がどうしたって？」

「うっそ、なにそれ」

「吉岡さん、おまえと高校おんなじなの？」

「聖への質問は隼だけだったはずが、気がつくまで質問は2つに増えている。」

「ついでに言うと並木優太同じ学校だよ。今、コンビ組んでる」

「質問から思いついて、聖は隼から貰ったウーロン茶のプルタブに手を掛けながら全く質問とは関係ない話を振った。」

「うえーそれ最強じゃん。敵にしたくねーコンビだな」

「だから今年おまえの学校強かったのか」

「話が反れているのに全く気づかず、みんな聖の話にうんうん頷いた。」

「今日居るメンバーは、全部で12人。」

「そのうち『元』も『現役』も関係なく数えるとバスケットマンは9人いる。」

「そのため、中学時代は学校は全く違っていたが訳アリで有名な優太と未散の話をもついてこれるメンツが今日は多いのだ。」

「並木優太のことはもういいよ、男の話はいらん」

「誰かが話を遮った。」

「あーそうだよ、俺らが聞きたいのは吉岡さんと日和先輩の話」

「で、なに？なにになになに？」

「部屋にいる全員がワクワクした顔で聖を見た。」

「ちっ、せっかく話を逸らせたと思ったのに。」

「残念に思うがしょうがない。」

「はいはいわかりました。話せばいいんだろ、話せば」

「聖はそう切り出し話を始めた。」

「時々質問、お決まりの突っ込み、庇護、さらには異論反論も入ったせいでそれがなかったらものの5分で終わる話が45分かかった。」

「……贅沢な悩みだよそれは、っでは思うけど……俺がおんなじ目に遭うのは勘弁だなあ」

「しかも日和先輩と吉岡さんだろ？外見的にはどっちも捨てがたいわ」

「あーそれわかる。どっちかがもつと普通だったら悩まないかも」

「え、そこ論点か？」

「いや、この際だからそこもかと」

みんな完全に他人事。

そんなような感想を口々に述べていた。

やっぱりコイツらに言うところなるんだよなあ……。

聖はついつい渋い顔でウーロン茶を飲んだ。

「……でもさ」

隼がポテトチップを取りながら聖を見た。

「もう随分前だけど、聖から『またバスケやることにした』ってメル貰ったときは俺ホントに驚いたんだよね」

「え？そうなの？『ふーん、わかった』しか送ってこなかったくせに？」

しかもこつちが送ってから3日ぐらいたってからだったよな？と聖は隼の話を疑ってかかった。

「いやだつてさ、聖にとつてアレはものすごい衝撃だったと思うから、おまえがバスケをまたやることはきつとないんだろうなって思ってたもん、マジで。だから逆にそれしか言葉が出てこなかったっていうか」

手にしたポテトチップスを口に放り込み、もぐもぐしながら隼はまた口を開いた。

「もしその話直接聞いてたら、俺聖の前でもものすごいリアクションしてた自信あるよ。その証拠にメールの画面にも『はい?!』とか言ってたし」

アホだろ俺、と隼は聖を横目で見ながら言うと、聖は「確かにな」

と同意しつつも軽く鼻で笑ってしまっていた。

「でもそれぐらいビックリしたんだって、俺は。だって聖にとつて『またバスケットを始める』ってことは『絶対どつかで日和先輩に会っちゃおう』ってことじゃん？それを忘れてなのかわかっててあえてなのか……一体どういふ風の吹き回し？って速攻で聞いてたと思うし」

隼はそうキツパリ言い放ち、またポテトチップスに手を伸ばした。

「聖さ……もしかしてその答えが今のおまえの本音なんじゃねーのか？まあ、それが『並木優太がいたから』っていうなら話は別だけど」

「どうなのよ？と隼はかつてに聖のウーロン茶を飲み出した。

「優太がいたのは入部してから知ったからそれはないな……」

隼にそう返したあと、聖はしばらく間を置いてクツキーに手を伸ばした。

まわりはもう聖の話などどうでもよくなっているらしく隼の部屋にある玩具を物色して遊び始めていた。

その中で聖はクツキーをかじりながら思案に暮れていった。

そして2日後。

聖はある行動に出ることになる。

Vo1・73 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

最近はこちらに何か書くのが楽しい私めです(笑)。

ここんとこずっとシリアスでしたから、今回はちょっとばかり「聖と愉快的仲間たち 中学時代編」でお送りしました。いかがでしたでしょうか。

実は隼くん、一見ただ思ったことを正直に言っているだけなんですけど、これがなぜか全部聖にとっての決定打になっているという一種の『名脇役』でした。

まあ今回はこれで隼くんはクランクアップなのですが、いつか彼を主人公にした話も書きたいなと思ってます。

そのときはもちろん聖が『名脇役』となる……ハズ(汗)。

さてさて。

佳佑と隼からのお告げ？導き??によりいよいよ聖は動き出します。

まあ結論見えちゃっている部分もあるので面白くない部分もあるかもしれませんが、よかつたらその結論に行き着くまでの『過程』を見守っていただければと思います。

というところで、またです。

2日前と同じように、聖はもう1年以上足を運ぶことがなかった場所にいた。

中学3年間のうちの2年間分の喜怒哀楽全部の思い出が詰まったこの場所。

そう、日和の家の前だった。

何時に彼女が帰ってくるのかなんてさっぱりわからないので「これは待つしかないな」と腹を括り、制服のズボンに手を突っ込み肩を竦ませ足踏みしながら寒さをしのいでいた。

本当は今日から定期考査1週間前なのでこんなところで寄り道している場合じゃないのだが、今の聖には定期考査なんてどうでもよかった。

仮に今回全教科全科目赤点を取ったって聖には何の問題も起こらないし、もしそのとで追試やらレポート提出やらがあったって別にそれでもいい覚悟だった。

どうせテスト勉強なんて今回はやれそうにないし。

世の大人が聞いたら憤慨しそうなことを今の聖は平気で思っていたのだ。

待つこと1時間半。

角を曲がってこっちに向かってくる日和を見つけた。

「日和先輩！」

聖は会釈をした。

「……………」  
日和の方はまるで鳩が豆鉄砲を食らったような、そんな表情になる。

「すみません、びっくりしましたよね？」

日和が立ち止まってしまったので聖のほづが歩み寄った。

「あの、この前、すみませんでした」

「……ううん、わざわざありがとう」

聖は日和を部屋に1人にしてしまったことを謝った。

日和の方はなんで謝られているのかすぐにわからず少しだけ言葉を返すのに時間がかかった。

「今日は……この前の返事をしに来ました」

「……はい」

わかっていたかのように日和は返事をし「どうぞ」と聖にかすかに微笑んだ。

聖はそんな日和に軽く頭を下げた。

その翌日。

3年生の教室が集まる3階の廊下を理はふらふら歩いていた。すると、

「……西倉？」

3年生にはいない大男が廊下をきよろきよろしているのが理には見えていたのだ。

「おう！なんだどうした？誰か探してんのか？俺か？」

本当は誰を探しに来たのかはとうに検討がついていた理だが、そこはわざと外して聖に声を掛けた。

「あ、理先輩……お久しぶりです」

聖は理を見つけるとホツとした笑顔を見せながら会釈した。

「あの……佳佑先輩って何組ですか？」

姿勢を戻して聖は確実に佳佑の居所を知っている理に質問した。

「佳佑？……ココだけ」

理がそう親指を立てて指したちょうど先に、全開のドアから見える佳佑の誰かと雑談している姿があった。

「佳佑！お客さん！」

どう声を掛けようか困っている聖を見かねた理が佳佑を大声で呼

んだ。

佳佑の方はというとはじめは相手が理という理由で「なんだよ」というちょっと嫌そうな顔をしてこつちを見るが、その隣に聖がいるのを見て表情がガラリと変わり「ん？んん？」という顔をする。

「なにになに？どした？」

この前の取っ組み合い寸前の言い争いなんてまったくなかったかのように、佳佑は聖に寄ってきていつもの笑顔を向けて話しかけた。

「……佳佑先輩に謝りに来ました」

「……うん」

なにやら不安そうな聖に佳佑は「続きどうぞ」という笑顔のまま頷いた。

「俺、元カノとはヨリは戻しません。一昨日彼女にもそう言ってきました……だから」

ここまでは少し俯き加減で佳佑に話していた聖だったが、顔を上げ佳佑の瞳を捉えた。

「吉岡は佳佑先輩にはあげられません、すみません」  
いつもならここで頭を下げるのがいつもの聖だが今回だけは違った。

「すみません」なんてホントはこれっぽっちも思っていないのかもしれない。

それにここで頭を下げるのはなんだか違うというか、かえって佳佑に失礼に思っただの。

「……いいよ、わかった」

呆れたようにため息をつく、それでも笑って佳佑は聖に頷いた。

「西倉さ、1つ聞いていい？」

佳佑はそう言いながら教室のドアに寄りかかった。

「なんで俺にだけは吉岡くれないの？理だったらいいわけ？」

「……くれる言われても俺はいらんぞ」

「バカ、例え話だって」

聖に聞いているのになぜか理が口を出すものだから、そんな理に佳佑は腕を組みながら軽く睨んだ。

「……先輩は多分、吉岡の中にある俺の記憶、きれいさっぱり忘れさせちゃうと思うから。そんなの、悔しすぎる」

聖はそう言うのと、いったん佳佑から叛けた目をまた佳佑に合わせた。

「……そっか」

「じゃ、俺戻ります。すみません、忙しいのに」

佳佑の言葉を聞いた後聖はそう言い、律儀にまたお辞儀をして2人に背を向け歩き出した。

「……随分カツコつけちゃったんじゃないの？佳佑くん」

聖の背中を見ながらも理はちら、と佳佑を少し見た。

「……いいんだよ、これで」

腕を組み直し、佳佑は聖の背中から目を逸らさずに理に答えた。

「またまた、無理しちゃって」

ぶぶ、と理は軽く噴出した。

「吉岡は男に負けないぐらい元気だからいいんだよ、そんな娘に俺みたいな背負い込ませらんないよ。だから……これでいい」

でもなあ、と佳佑は急に伸びだした。

「西倉のヤツ腹立つよなあ……あいつのせいで惜しいことしたよ、西倉さえ出てこなかったら俺と吉岡付き合えたのにさあ」

「まあねえ……って、おい。おまえ本気でその気あったのかよ」

予想だになかった佳佑の重大発言に、理は聞き流せず漫才の突っ込みのごとく手の甲で佳佑の胸を叩いた。

「さあ、どつでしょうねえ」

ちよつと痛い胸をさすりながら佳佑は理を見下ろすと意味深に笑った。

「……なんて嘘、そんな気ないよ。もともとこうなるのわかってた



し、……それに」

「それに？」

微妙に間が空いたのがとても気になった理はつい佳佑に相槌を打った。

「西倉が元カノとヨリ戻しちゃったなら吉岡がかわいそうじゃなか」

「かわいそう……って、佳佑がそのあと請け負うつもりだったんだしそんなのいいだろ」

そうなのだ。

理が唯一理解できないのがそこだった。

なんで佳佑は手に入ったはずの未散をみすみす手放したのか。

それだけがどうにもわからない。

だからつい理は「なんで？」と言わんばかりの言い方をしていた。それに対して佳佑は理の顔を見ることなく回答し始めた。

「どのみち俺はあと半年もしたらここからいなくなる。その頃には西倉は自分が犯した選択ミスに気がついていないはずだから、今度という今度はヨリを戻した元カノを傷つけてでも俺がいない隙を狙って吉岡を奪いに来る。当然吉岡は……俺に対しての良心の呵責と一度は閉まつたはずの西倉への想いとで苛まれる……俺はそんな吉岡、見たくないから」

「……だから最初から矯正をかけたわけか」

ようやく佳佑の意図を解読できた理は納得したように腕を組んだ。

「かなり荒療治だったけどね」

いやー疲れた疲れた、と佳佑はわざと自分で肩を揉み始めた。

「……けど」

「けど？」

まだあるのか、と言いたげに理は佳佑を見上げ、佳佑はそれを気にせず寄りかかっていたドアに軽く頭を当てた。

「久しぶりだった……睦月あいつが死んでからは初めてだった」

佳佑は傾けていた首をそのままに再び口を開いた。

「初めから吉岡には最後までなんにも言わないでおこうって思ってた……けど、『あたしでいいなら先輩の過去一緒に背負います』って吉岡が言ってくれたところから俺の中の計算が狂い始めた。今までそんなこと言ってくれるコいなかったからね」

「……なるほど」

言いながら理はふつと微笑んだ。

しかし理のそんな反応に構うことなく佳佑は続けた。

「バレてないとは思っけど実は吉岡に俺の本音大暴露しちゃってた。おまけに『あわよくば……』って本気で思ったし」

同じ姿勢のまままだ見える聖の背中に佳佑は1人でおかしそうに笑った。

「まあ結局最後の最後で俺が怖気づいちゃったし、吉岡が俺と付き合う前の睦月に見えちゃった時点でダメだったけどさ」

「……………」

「それに西倉もある意味『俺の生き写し』だろ？それわかってて無碍なことができるオニには俺はなれなかったってことかな」

「……………」

どこまで人がいいんだかね、と佳佑がいつもと変わらない笑顔でポツリと呟くものだから、理にはもう返す言葉が見つからないまま佳佑をまた見上げた。

理は佳佑の独り言を黙って聞いている間に思い出していた。

それは……今から2年以上前、彼氏がいる年上の女に恋をした佳佑のことだった。

恋をしたそのときは彼女　睦月に彼氏がいることを知らずに恋をした。

しかし……佳佑が想いを睦月に告げたとき、睦月が隠していた『彼氏がいる』という事実』を知り自ら身を引いたのだった。

けれど心までは身を引くことができず耐え忍び、一方で実は睦月も佳佑への恋心を封印して彼氏と付き合い続けた。

あえて聞かなかつたが、佳佑のいう「未散が睦月に見えた」とい

うのはそんな彼自身の昔の恋を髣髴とさせるような出来事が目の前で起こったからなんだろうと理は思った。

そして今は睦月亡き後もこうやって生きていく中で残酷な現実を佳佑は知ってしまった。

それは 人間というのは失くしてしまったものをいつか忘れてしまふということ。

どうしてなくしたかなんて関係ない。

失えば過ぎていく時間と共に愛した女は風化されていくもの。

そしてもう幻でなければ見ることでできないものよりも、この手で掴もうと思えばつかめるものを人は探し始めてしまう。

それをわかっている佳佑は自分の気持ちを押し殺してまでも聖に気づかせ未散を聖の元へ戻らせたのだ。

自分が味わった苦しみや睦月が抱えた悲しみを2人にさせないために。

「おまえ、よくやるよな……俺には絶対やれねえ」

「え？」

「……いや、なんでもない」

ここで佳佑を褒めたらこの損な役回りをいつまでもしそうな気がする。

理はふと出てしまった「褒め言葉」を佳佑に聞かれる前にかき消した。

「今回は西倉っていう『逃げ道』が俺にはあつたからな。でも、それがなかったらさすがに観念するのかな。だけど……その前にまた出てきてくれるかだよ、吉岡みたいなことを言ってくれるコがさ」

「……なんだよ、聞こえてんじゃん」

佳佑が言い終わって理が軽く舌打ちをするとちょうどチャイムが鳴った。

佳佑は教室の中へ戻り、理も自分の教室へと向かった。

佳佑の『つかの間の休憩』はこうして幕を閉じた。

Vol. 74 (後書き)

こんばんは、愛梨です。

前回あたりからラストに向けて動き始めてます。

多分あと3?4?話で完結です。

よかつたら最後まで見守っていただければと思います。

前は準でしたが、今回は佳佑と理がクランクアップしました。でも、ま、佳佑&理コンビは次回作では出ずっぱりですけどね。

ここも最初に書いたときから比べるとだいぶ修正をかけました。特に聖が去つてからのシーンはかなり加筆しました。

だって……これ最初に書いた頃はスピノフなんて考えてなかったし(汗)。

ちなみにここでやっと佳佑が一線(ていうのか?)を越えなかった理由をかなりはしよりましたが述べさせていただきました。

まあ……つまりはいろんな思いが交錯してたわけです、一言で言ってしまうと。

もうこんなところで書いてたら普通に小説の一部になっちゃうんでこれ以上はやめます。

なので……もし「もっと詳しく知りたいわ」という方は……スピノフ読んでください ちゃっかりCM中(笑)。

さてさてさて次回ですが。

久しぶりに優太&衣のバカップルぶりをお見せしたいと思います。そして……論争第2弾いきます。

誰と誰なのかはここでは秘密です……って、すぐわかりますね(苦笑)。

それでは、  
またです。

定期考査前日。

優太と衣は学校の近くのコーヒーショップで猛勉強をしていた。

「もう！だからさつき教えたでしょ！これはそっちを使うの！」

「えーさつきの問題となにが違うんだよお」

「これのどこが?!全然違うでしょ?!」

衣が先生で優太が生徒なのは一目瞭然。

どうやら2人は数学をやっているらしい。

多分そんなに難しい問題ではないようなのだが、どうやらどの公式をどの問題で使えばいいのか優太はさっぱりわかっておらずそれに衣がだいぶイラついている……そんな按配だろう。

「……なにに。ああ優太、これはさ……」

突然男が脇から登場し優太に解説を始めた。

「……で、違うのはここ。この言い回しがヒント。こっちが出てきたら、公式はこれ。で、こっちの言い回しが出てたら、使う公式はそれ。わかった？」

実に手際よく説明を終えた男は優太の前に4つ折りの紙をすっとな出した。

「……聖じゃん」

「……どうも」

2人は聖を見上げ同時に全く違うことで聖に声を掛けた。

「どうですか、テスト勉強は」

聖はコーヒーが入ったマグカップを片手に空いている椅子に腰掛けた。

「あたしは大丈夫なんだけど優太がね」

「なんだよ、衣が教えんの下手くそなんじゃんか！」

「なによ！じゃ、自分でやんなさいよ！」

聖がいるのも忘れて2人はまたくだらない論争を始めた。

普段はこういうときに怒るのは衣だけなのだが、どうも今回は優太はかなり追い詰められているらしくて受け流す余裕がないらしい。

「はいはい。……じゃあいいよ、優太は俺が面倒見るよ。そのほうがお互いのためだろ」

どう？と間に割って入った聖が2人を見比べた。

「そりゃその方がいいな、聖のほうが教えんのうまいし。衣下手すぎなんだよ」

「なによ、優太が理解できなさ過ぎなのよ！」

優太の余計な一言でまたいらぬ口喧嘩が勃発しそうになっていた。

「はいはいはい、そこうるさいから。だから『学年1のバカップル』とか言われるんだって」

「いーだっ！という顔で向き合う優太と衣に聖は今度は手まで使って2人の間を取り持った。

「でもいいの？西倉くん自分の勉強は？」

優太のお守りがどれだけ重労働かをわかっている衣は実に当たり前前の心配をした。

「今回はもう諦めた。実力で受けるつもり」

「うえーそんなセリフ、1回でいいから言ってみてえ」

聖の答えに優太はなんで聖が実力で受けることになったのかもわかってないで純粹に羨ましがった。

「ふーんそうなんだ……じゃあ今回は頑張って学年トップ取るのかな。今回は王者が試合放棄してるし」

実は密かに聖をライバル視している衣は「しめしめ」と言わんばかりに頬杖をつき、聖にほくそ笑む。

「どうぞ。でも次はないから」

聖も負けじと衣にニヤリと笑いながら足を組み、偉そうに椅子の背もたれによりかかった。

「あ、言ったな……てことは、もう結論出たんだ？」



途中までは笑い混じりに喋っていた衣だったが最後の方は真面目な口調になっていた。

「だからこれ、優太でも小橋でもいいんだけど、頼まれてくれないかな」

言いながら聖はもう一度2人の前に4つ折りの紙を差し出した。

「……衣やつて。俺この前渡したら、未散にボロクソに文句言われたからもうヤダ」

面倒くさいのもうイヤ！という表情で、優太は衣の前に紙を移動させた。

「ボロクソって？」

胸ポケットに入っている生徒手帳に紙を挟みながら衣は優太に聞いた。

「もつとちゃんと保管しろって怒られた」

未散はでつかいくせに器ちっちゃいんだよ、と優太はぶうと膨れた。

「……どうせポケットに入れっぱなしにしてしわくちゃにして渡したんでしょ、それは怒るって」

西倉くんにも失礼じゃん、と衣は完全に未散の味方をした。

「このデジタルの時代にあえてアナログにしてんのにそれが優太にはわかんないかなあ。……悪い、俺もできれば今回は小橋に頼みたいわ」

よろしくお願いします、と聖は衣に頭を垂れた。

「確かにお預かりしました。綺麗に渡すからね」

衣は言いながら生徒手帳を胸ポケットにしまった。

「……はい、ごもつともです」

すみません、と優太は聖にぺこりと頭を下げた。

「あ、西倉くん、これいつ渡せばいいの？テスト終わったら？」

さっきの手紙なんだけどさ、と言いたげに衣は胸ポケット越しに生徒手をとんとんと叩いた。

「……いや、明日のテストが終わるまでにお願ひしたいんだけど」

聖からは思いもしない答えが来る。

「え、だって明日って……」

テスト初日じゃない、と衣が言おうとするが聖にこう遮られた。

「いいの、明日俺が誕生日なの」

「……なるほどね」

聖の回答に2人はあえてそれ以上は何も聞かず、ただ聖に笑みを返した。

その頃未散は、教室ですつと勉強をしていたが見回りに来た先生に「もう帰れ」と追い出されてしまったので帰ろうとしていた。

とてもいい調子で問題を解いていたのに先生に全てぶち壊れ、未散は少タイライラしていた。

靴を履き替えようと上履きを脱ぎ、下駄箱に入れ、そのまま靴を取り、ちよつと投げ気味にアスファルトに置く。

しかしそれがいけなかったらしく左足の靴だけひっくり返ってしまった。

そこでちゃんと手を使ってしまえばすぐに元に戻るのに、膝を曲げるのが面倒と思った未散はなんとか足だけで戻せないかと足の指を使って靴を動かす。

だがこういうときに限ってまったく靴は動かない。

「あーもう!」

足もむずむずし始めてイライラは倍増し始めていた。

そのときだった。

「吉岡未散さん?」

不意に誰か女の人の声が自分の名前を呼んだ。

「はい?!なんでしょうか?!」

もうなによ、こっちは忙しいのに!という感情丸出しの表情で未散は声のしたほうに顔を上げた。

「はじめまして、雨貝日和っていいいます。……吉岡未散さん、だよ

ね？」

未散に声を掛けたその彼女は、衣によく似た笑顔で雨貝日和と名乗った。

聖くんの元カノさん……いや、彼女さん……。

未散は驚いた顔のまま姿勢を元に戻した。

Vo1・75(後書き)

こんばんは、愛梨です。

前回『優太と衣のバカップルぶりをお伝えします』と書いたものの、『バカップル』って普通は超甘々の状態を指すんだよね……ということにあとで気がつきました。

なので……すみません、またもや嘘をつきました(汗)。

実際は夫婦漫才ですね。

それともう一つ。

ここでは言い争うシーンはまだ入らないです。

次回になるのでそれも……すみません。

ということで、次回はいよいよ日和VS未散でお送りします。

まあ昼ドラのようなドロドロにはならない(だってそれだとあまりに現実味がない)とは思いますが……もしも、そっというのが苦手な人は様子を見ながら読んでくださいね。

ということで、またです。

Vo1・76(前書き)

今、少しずつですがこの作品の手直しをまた始めました。

結論は変えてないのですが過程を大幅に変えた箇所もあります。

もし興味があればお越し下さい。

2人の間になんとも言えない静寂が流れた。

「なんだろうなんだろう、何しに来たんだろう……？」

ただ静かに微笑を浮かべて立っている日和に未散はうるたえた。

「ああああ、あの、聖くんならもう帰っちゃったと思いますよ？あ  
たしクラスが違うんで、部活がないともう彼がどこで今何してるか  
なんてわからなくて」

どうしてもこの嫌な空気をかき消そうととりあえず未散は適当に  
話してみた。

しかしそんな未散に日和は予想外のことを口にした。

「……いいの。別に聖に会いに来たわけじゃないし。今日はあなた  
に会いに来たの」

日和はそう言い始めると急に態度が変わった。

腕を組み始め斜めから未散を睨みつけた。

「悪いんだけど、聖返してよね」

「え……？」

かわいらしい顔には似合わない、まるで昼ドラの悪女役のような  
日和のセリフに未散は即座に返事ができなかった。

「あんたさ、あとからしゃしゃり出てきてなんなの？しかも思いつ  
きりあたしたちのプライベートなところに入ってきて見るだけ見て  
拳句逃げ出して。おかげでムードぶち壊しじゃない」

ホント最低、と日和は軽蔑の眼差しを未散に向けた。

「あんたさえいなかったらあたしたち元に戻るの。だから、聖か  
ら手を引いてくれないかな」

わかりました以外の返事はあなたにないわよ、と言いたげな目で  
日和は未散をまた睨んだ。

「……」

「……」

しばらく重い重い沈黙が漂った。

どう答えたらいいんだろう。

何と返せばいいんだろう。

彼女の言うように自分が諦めればそれでいいんだろうか？

それとも自分は諦めちゃいけないのか。

「……別に、聖くんがあなたを選ぼうとあたしを選ぼうと、あたしはなんでもいいです」

考えた末に未散が発した言葉はそれだった。

「聖くんがそばにいて欲しいのがあなただということならあなたの言うとおりあたしは諦めるように努力するだけ。……だけど」

年上だということや自分の知らない聖の過去を知っているという引け目もあって、未散はなかなか日和の顔を見れなかった。

けれどここから先だけは日和に負けたくない。

意を決して未散は日和を睨みつけた。

「もし今度聖くんに悲しい顔させたらあたしは絶対あんたを許さない。どんな手を使ってでも必ず聖くんをあんたから取り返す」

ほんとはものすごく怖かった。

誰にモノを言っているのかを考えたらもう泣きそうだった。

衣にそっくりで、でも1つ上で、聖が愛して憎んだ女で。

だからこそあの聖が唯一心揺さぶられる女で、そして……きっと今では世界中でただ1人、自分が恐れを感じる女で。

また2人を気まずい空気が支配した。

相変わらず日和は怖い顔をしていた。

「……なんかちょっと安心した、あたしと吉岡さんてよく似てる」

「え……？」

またもや思いもしなかった日和の言葉と笑顔に、未散は恐らくかなり気の抜けた顔をした。

「ごめんね、ちょっと吉岡さんがどんなコなのか知りたかったの。

安心したっていうのはあたしと似てるから。もし吉岡さんがあたし

と全然違うタイプだったら納得できなかったけど」

「『似てる』って言われても……」

何を根拠に日和がそう言うのかが未散にはわからない。  
思わず首をかしげていた。

「そつやって相手の気持ち先に考えて我慢しちゃうところが似てる……でもそれが裏目に出てあたしは聖と別れる羽目になったけど」  
ふふふ、と日和は1人可笑しそうに笑った。

「吉岡さん気をつけてね、意外と聖は言わないとわかんないから」  
まあ頭はいいからカン違いされやすいんだろうけどね、と日和は付け加えた。

「……で、ホントの用事はこれ」

日和はそれだけ言うのと左手をにぎったまま未散に差し出した。  
そして黙ったままその手を広げた。

それ、この前の……。

未散は視線を日和の掌から顔に戻した。

日和の手の中にあっただのは……未散が日和の左手の薬指にあったのを見たあの指輪だった。

「聖に頼まれたの、今日までにこれをあなたに渡すようになって」  
だからはい、と日和はさら右手を未散に出した。

どうして……なんでわざわざこんなことを……？

未散はその指輪をしばらく見ていた。

「……なんか納得してないみたいだね」

日和は未散の表情を見て声を掛けた。

「だって……なんでこれをあたしに渡すんですか……？」

「なんでって、……だから言ったでしょ『聖に頼まれたから』だって」

未散の質問に日和は「わかんない人だなあ」と少しだけ呆れ顔を  
した。

「もう10日ぐらい前かなあ、聖があたしの家に来たのね。で、来たと思ったらいきなり頭下げて開口一番にこう言うの、『すみませ



ん、あの指輪返してもらっていいですか？あの指輪を先輩が持ったままだと泣く女ひとがいるんです。その彼女に俺が先輩とのことを終わってないって誤解されたくないんです』って」

でね、と日和は続けた。

「しょうがないと思って部屋に取りに行こうと家に入ろうとしたらまたこう言うの、『返すのは今じゃなくていいです。今月の29日までに吉岡に渡してください。部屋に来た彼女です、覚えているでしょ？』って」

「……………」

未散は相槌を打つのも忘れて日和の話聞いていた。

「多分、あたしがこうすることで吉岡さんにちゃんとわかってもらえるって聖は思ったんだろうね。『もう俺は日和先輩に未練はない』っていう証明をしたかったというか」

日和はそう言うと言っていた手をいったん引つ込めた。

「ほんととは、こうなるのはわかってた。聖ね、あなたに見られてすぐに追いかけて行ったの。でもあたしにはなんにもなかった、『待ってて』も『すぐ戻るから』も、なんにも……あなたに見られたってわかってしまった瞬間から、聖はもうあたしのこととはどうでもよくなっちゃったんだろうね」

そこまで言うと言日和はおもむろに未散の左手を取った。

「……………って言うより置いてかれた時点で思ったけどね、『あたしの負けだ』って」

言いながら手を取った未散の左手を日和は広げた。

「吉岡さんが来る前にあたしが部屋に押しかけて『ヨリを戻そう』って言ったの。でも聖にはそんな気は全くなかった。だからあたしは最終手段に出て……そしてあなたに見られた。それが事実。だから……あんまり聖のこと責めないでやってね？」

日和は未散の掌に自分の右手を握ったまま乗せた。

「恨めしくも思っただけであたしはあなたに感謝もしてる。あたしは聖からバスケを奪ったけど、その聖にまたバスケを与えたのは吉岡さ

んだから」

俺がもう1回バスケットをやるうと思っただ理由ですか？

先輩とあんなことがあった1カ月後ぐらいに県大会で吉岡に一目惚れして。

でも……しばらくはずっと忘れてました。

そしたら同じ高校にいてバスケットも続けていることを入学して4日目ぐらいだったかな、知ったんです。

そのときはもう、そんなことをしたらいつかどこかで絶対に日和先輩に会ってしまうことなんてすっかり忘れてまた始めてました。

それだけ俺はどうしても吉岡の傍にいたかったんです。

そのためには、もう1度バスケットを始めるしか方法がなかったんです。

どうしてまたバスケットをやる気になったの？と別れ際に日和は聖にたずねたのだが、聖は最初から最後まで、

「要するに吉岡なんです、理由は」

と照れ笑いしていた。

それをふと思い出しながら、日和は手を広げると未散の掌に指輪を乗せた。

「……あの、すみません」

「なに？」

「聖くんがまたバスケットをやるうと思っただのは、あたしじゃなくて優太です」

別にいいのに未散は日和の話に訂正を入れた。

「……吉岡さんて謙虚ね。でも、度が過ぎるとムカつくんだと」

日和は呆れたように未散に言った。

「いやいやそんな、あたしは本人に聞いたから」

未散は首と手をぶるぶると振った。

「……ま、どっちが事実なのかは知りたかったら本人に聞いて」

未散に指輪をぐっと握らせると日和は未散から手をはなした。

「……それにしても参っただなあ。聖といい並木優太といい、おまけ

になんで吉岡さんまでここにいるの？もう番狂わせもいいところだわ」

てつきり一緒にやるんだろって思ってたのに、と日和は急に未散に対して『他校のバスケット部マネージャー』の雰囲気で言葉を投げると苦笑いした。

「すません、色々」と

未散も苦笑した。

「……じゃあね」

日和は手をひらひらさせて未散に振ると昇降口を出て行った。

今、日和はどんな顔をしているんだろっ。

笑っているのだから。

怒っているのだから。

それとも、泣いているのだから……。

なにもわからない日和の背中を見ながら、未散は日和から預かった指輪をそつと握り締めていた。

こんばんは、愛梨です。

さてさて、日和VS未散はいかがでしたでしょうか。

人によっては「物足りない！」って思うかもしれませんがね。

でも、どっちも聖が恋した女の子ですからあんまりどっちかを鬼畜生にするのは気が引けてしまったのでこの程度でやめておきました……って、これは単に私がヘタレなだけ？(汗)

ちなみにですが。

いつか日和を主人公にしたスピノフを書こうと思ってもいます。

決定的に聖に振られた日和がそのあとどうなったのか。

また、日和視点の聖とかを書きたいなと思っています。

実はもう大雑把には考えているんですけど、細かく描写するのがまだできない(というか思い浮かばない)状況です……。

しかも根が不器用なので並行して書くとかそんな神業はできませんのではたしていつになるのやら……。

もし、気になる方がいれば心の片隅で充分ですので覚えておいていただけたらと思います。

で。

この話もあと2話で終了予定です。

今回はやはり優太&衣をきっちりクランクアップさせてやりたいのでほとんどこの2人のお話でいこうと思います。

というのも……多分この2人、これから先もう出番がほとんどないと思うので(涙)。

それではまたです。

テスト1日目が終了した。

「はい、郵便です」

それだけ言うと帰る準備をしている未散の机の上に衣は聖から預かっていた例の手紙を置いた。

「……え、なに」

未散は不思議そうに衣と紙を1回ずつ見た。

「ちよつとお、なによその感動薄いの」

「やっぱりあげない、と衣は手紙を取り上げた。

「ありがとありがと、すっごい嬉しいですっ！」

「ちようだいよお！」と未散は衣の袖を掴んだ。

「やっぱりダメじゃん、未散はこのデジタルの時代にアナログにこだわる男の気持ちがあつてない」

優太も未散の席に寄って来て、全然その言葉の意味をわかってないで聖の受け売りそのまま未散に嫌味を言った。

「じゃ、ミツシヨン終了なのであたし達は帰るね」

いつになく素っ気ない感じで衣は未散の席から離れた。

「……あ」

自分の背中をなんだかとても不思議そうな顔をして見ていた未散に衣は振り向いた。

「今日はもう泣いちゃっても自分でなんとかするか西倉くんになんとかしてもらってよ?! あたしはもうやらないからね!」

「ちよ、ちよつとなによそれ!」

衣がこれまた未散を突き放すような言い方をするので未散は慌てふためいた。

「そうそう、今日は俺たち見て泣き崩れんじゃねーぞ、1人でとぼとぼ歩いてんなよ!」

優太も未散に振り返るとこれまたわけのわからないことを言い散

らした。

「大丈夫かなあ」

優太まで何なのよ?!と大声を張り上げる未散を完全に無視して、教室を出て優太と昇降口に向かいながら衣はすでに心配していた。

「聖が回りくどいことを言わず、未散が早くとちりしなければ」

優太は『大丈夫なための条件』を述べた。

「そこが心配なんじゃない」

やっぱりそうよねえ、とため息をつきながら衣は上履きを脱いだ。

「ま、俺たちは勉強でもして待つてるしかないからなあ。……あ、

そつだ、衣さ数学の問題で……」

優太の心配はすでに明日の自分の数学の点数に変わっていた。

「……それ、前にあたしも教えて西倉くんに教えてもらった問題じゃないのよ。もう！何聞いてんのよ?!」

ほんつと信じらんない！と衣は優太の腕をバシツと叩いた。

「優太は人の恋路を心配してる場合じゃないよ……あたしは優太の進級のほうが心配になってきたわ」

言いながら衣は靴を履いた。

「進級は大丈夫だけど赤点が心配かな」

「そついう問題じゃないでしょ?!」

どこまでも呑気な優太に衣はまた怒って優太の腕をはたいた。

「なんだよ……俺だって頑張ってるんだからさあ、ちよつとくらい助けてくれよ。本当はこんな高校に来れる頭なんか俺にはなかったのに……」

2度も衣に叩かれた腕を「痛い……」と優太は口を尖らして自分でさすった。

またそつやってかわいいこと言っただから。

そんな優太を横目で見ながら衣は優太に気づかれないうちに優しく微笑んだ。

自分と一緒にいたくてバスケットで高校に行くのをやめてまで苦手な

勉強を頑張ってくれた優太に衣はやっぱり敵わないのだ。

「わかりましたわかりました。じゃあ今からやりましょう、優太くん個人指導」

はい行くよ、と衣は優太の手を引いた。

「衣先生、できるようなったらごほうびありますか？」

とっても嬉しそうな優太はすでに生徒、いや……児童になりきって衣に引つ張られるままついてきていた。

「勉強は自分のためにやるものです、そんな不純なことではいけませんよ」

しかし真面目な衣はおふざけ優太を許さない。

実に当たり前のことを優太に言っていた。

「えー！……じゃあやんない」

急に優太は立ち止まると全くもって無意味な駄々をこね出した。

「あのねえ」

この男は……っと思いつつながら衣は優太に振り向いた。

「なんだよ、衣は先生って前に俺の彼女じゃねーのかよ」

小学生の膨れっ面みたいな顔をして優太は衣に文句をつけた。

どうやら優太は『ごほうび』ということにかこつけて衣としたいことがあるらしい。

「だって……勉強どころじゃなくなるじゃん……」

優太の言動によつやくなになが言いたかったのかわかった衣はもじもじと反論した。

「そんなことない、俺はもつと頑張れるぞ」

何がそんなに偉いのか優太は胸を張り腕を組んだ。

「じゃあ優太くんの頑張り次第ということだ。……これでいいんでしょ？！」

衣は顔を真っ赤にして優太にキレぎみに言った。

「わかった、俺頑張るわ。衣、行くぞ」

言うや否や今度は優太が強引に衣の手を引いて前を歩き出した。

「……決断早っ」

そんな優太に衣は突っ込みを入れつつついていく。

未散がいなかったら話すことさえできない2人だった。  
でも今はもう未散の手をはなれてちゃんと2人で歩み出している。



## Vo1・77（後書き）

こんにちは、愛梨です。

珍しく昼間にアップしてみました。

前回予告したとおり、今回は優太と衣のラストパフォーマンスでお送りしました。

いかがでしたでしょうか。

多分この2人っていつまでも夫婦漫才やり続けるんだろうなあ……  
…と思いながら書いてました（笑）。

ちなみにこの2人が再登場するのは、前々からお話させている佳佑&理コンビが主人公の話の中で比較的話が進んでからになるかと思えます。

どこで出てくるかをよかったら楽しみにしてくださいと思えます。

とはいっても……特に部活の後輩ってわけでもない衣の方は恐らくほとんど、いやもしかしたら全く出てこないかもしれません。

もし読んでくださっている人の中で衣ファンの方がいれば……すんません（汗）。

ということで、次回が最終回になります。

多分アップは年明けになると思います。

というのも……例によって手直しをしてたんですがなんか私の頭の中で泥沼化してしまい、今はこっちもさっちもいかない状況に追い込んでしまったので（汗）。

なので実はまるつきり書き直そうかとまで考えています。

なので……すみませんがしばしご猶予を頂きたい思います。

それでは年明けにお会いできればと思います。  
みなさんよいお年を！

VoI・78(前書き)

最終話です。

日和先輩から指輪を貰っているはずなのでそれを持参の上体育館へお越しください。

もし指輪を家に忘れたというなら取りに戻ってから来てくれていいので。

吉岡が来るまで俺は待つてるから。

追伸。

実は今日、俺の誕生日です。知らなかったと思うけど。

テスト初日なものにも関わらずこの手紙を吉岡に読んでもらっている理由、どうか汲み取ってください。

唯一俺が吉岡に敵わない国語の力があればわかってもらえるとは思ってますが。

衣から受け取った聖からの手紙にはそう書いてあった。

これをどんな顔をして考えて書いたのだろうかと思像すると、未散はおかしくてしょうがなかった。

未散は手紙を見て軽く噴出すように微笑むと、また折りなおしてスカートのポケットに入れた。

そのポケットには日和から昨日預かった指輪も入っていて、手紙を入れたとき未散の指にかすかに当たった。

だから本当のところはこの手紙を読んだらすぐ体育館に行くことは可能だった。

だけど聖がまた誰かに言い寄られているのを見てしまうのではないかという、大げさに言えばトラウマがあってなかなか足が向かなかったのだ。

行こうかどうしようか迷って50分。

でも、こんな日に体育館に行く人なんかいないか。

テスト中に図書館に行く人は大勢いるだろうが体育館に行く人は  
まずいない。

それに気がついた未散は教室を出て走り出した。

体育館につながる廊下を走っていると誰かがボールを床に打ちつ  
けている音が聞こえてきた。

誰？誰誰誰？！

走るのをやめそつと体育館の中を窺うと、聖が壇上に学ランを脱  
ぎ捨てた姿で1人、リングのまわりで遊んでいた。

そして「あつちー」とシャツのボタンを外すと、ぱたぱたとシャ  
ツで扇いだ。

「テスト中なのに感心だね」

聖に近づきながら未散は聖に声を掛けた。

「まあ……暇だし、寒いし」

聖は未散に顔を向けながらボールを床にバウンドさせた。

「暇だし……って勉強しなよ、今テスト中じゃん」

未散は聖からボールを奪った。

「まあそうなんだけどさ……でも今回はもう無理、諦めた」

言いながら聖は未散からボールを奪い返した。

「吉岡にあんなの見られてカン違いされて好きだって言われて、そ  
んなのばっかり頭に浮かんじやってさ……英単語なんか入るかって  
の」

聖はなぜか楽しそうに笑うとボールを床に置いた。

「『カン違い』って……だって、聖くん否定しなかったじゃない」

未散はその場にしゃがむと、こっちに向かってゆっくり転がるボ  
ールに手を伸ばしながら聖に言葉を返した。

「そりゃそうだよ、吉岡が来るまでは日和先輩とやり直そうかなっ  
て考えたし」

「……………」

少し意地悪な笑みを浮かべて未散を見る聖に、未散は露骨に面白

くない顔をした。

「でもさ……吉岡の顔見たら一瞬で日和先輩のことなんか放り投げた。そこで俺の本音はもう出てたんだよね、きつと」

「え……？」

手は相変わらずボールに向いたままだったが、未散の顔は聖の言葉に振り向いていた。

聖は壇上の壁に寄りかかっていたものの未散の真正面にいた。

今の聖にはあの時のうるたえていた面影など微塵もなかった。

何も迷うことなくただまっすぐに未散だけを映していた。

「もし俺が今でも日和先輩とのことを終わってないって思ってたら、多分俺は今もバスケやってないと思うんだよ。でもそんな単純なことを俺はすっかり忘れてたっていうか」

「そんなことないでしょ、だって優太がいたからまた始めたんですよ？」

偶然に再会した親友と好きなことがやれると思えば、その好きなことが元カノとを繋ぐものになるのだとしても払拭するのはそう難しいことじゃないだろう。

それに前々から聖があんな時期に入部した理由を未散は本人の口から聞いていた。

今俺んちさ、こっから電車で30分かかるからちよつと遠いんだよね。

だから慣れるまでは部活やるのやめようと思ってたんだよ。

けどさ、この前の総会で「もしかして優太がこの学校にいるのか？」って思ってた、それを確かめたら優太いるんだもん、そりゃやらないわけにいかないよね。

もう半年ぐらい前の言葉なので一字一句違わずというわけではないが、とにかくそんなことを聖は優太に「なんで今なの？」って聞かれた時にそう答えていた。

だから未散は自分の記憶にあるその情報をもとにそう聖に訊ねていた。

「ごめん、それさ……」

「え？」

「嘘、なんだ、よね……」

ところが、唐突に聖は未散のその記憶が偽りだと言い出した。

当然未散は聖の「嘘」の言葉に目を丸くしていた。

すると、今まで未散を騙っていたという後ろめたさだろうか、聖は未散から目を逸らした。

「優太がいるのを知ったのは入部してからだから、入部した理由は優太じゃないんだよ」

「じゃあ、なんで……？」

今までずっと「聖が入部した理由は優太がいたから」だと聞かされていたしそれを信じて疑わなかった未散なので、急に「それ嘘だから」と当の本人に言われても他の理由が想像つかない。

未散は疑問符を頭に浮かべた顔をして聖に質問していた。

しかし聖は……どうしてなのか手で顔を隠していた。

「あのさ……頼むから『怖い』とか『キモい』とか言うなよ？」

「……うん」

なんだろうその伏線は、と思いつつも未散は聖のお願いに頷いた。  
「結論しか言わないからな」

「……うん」

「『え？』とか聞き返すなよ?!」

「……うん」

どれだけ前置きをすれば気が済むんだか、聖はしつこく未散に念を押した。

「俺がバスケット部に入った理由は……吉岡だったんだよ」

「あ、あたし?!」

未散思わず自分を指差し、目は驚きでさらに見開いた。

それを見てしまった聖はもう堪えられない。

とつとつ未散から顔も逸らしてしまった。

「嘘……だって優太がこの学校にいるから入ったって言ってたじゃ

ん……………」

「だから！恥ずかしかつたんだよ！『なんでこんな時期に？』って優太に聞かれたからさ、そう言っとけばいちばん無難だろ？！吉岡が理由だなんて言えるかよ……………」

あれだけちゃんと言っているのに聞いていないのか、ぶつぶつ言い出す未散に聖はつついっついでムキになって言い訳を始めていた。

「それならそうだって言ってくればよかったのに……………」

未散からしてみれば聖のせいで随分遠回りをさせられた感が拭えない。

思わず聖に文句をつけていた。

「それができる性質たちなら最初からやってるよ、それができないから苦労してんじゃん……………」

「……………はいはいそうですね、わかっております」

不満そうに口をへの字にする聖を見て、未散は小さく噴出していた。

「……………あ、そうだ」

どうやらこの話はこれで終わりにしたかったらしい。

聖は何かを思い出したように呟くと、突然ずんずんと未散の方に近づいた。

そして未散の目の前で立ち止まると……………おもむろに右手を出した。

「吉岡、出して」

「……………え？」

未散には何を出せばいいのかわからない。

思わず聞き返していた。

「あれ？指輪貰っただろ？日和先輩から」

「貰ったよ、貰ったけど……………」

未散は言いながらポケットに入っていた指輪を取り出した。

「これどうするの？」

「どうするって……………なんで？」

不可解な質問をする未散に聖は答えるのを忘れて質問し返してい



た。

「もし捨てちゃうんだつたら、貰っていい？」

「『貰っていい？』って……そんなのどうすんの？」

どのみち「それ捨てていいから」って言おうとしたのでちょうどよかったいえばよかったのだが、昔の女に買ってあげた指輪が欲しいなんていう未散の気持ち理解できない。

聖は首をかしげていた。

「だってこれ、聖くんがずっとそこにしてた指輪でしょ……？」

言いながら未散はシャツの中から見えるチエーンを引っ張り出した。

けれど最後まで言い切れなかった。

というのも、チエーンにつるされている指輪は2つ……。

え？あれ？なんで？

今度は未散が目をぱちぱちさせた。

「あのさあ、俺そこまで無神経じゃねーぞ？これはあくまで日和先輩に買ったもの、第2ボタンの代わりだったの……っていつても、あげた日とこの前の2回しかしてもらったことないけどさ」

未散がその指輪を欲しがった理由を察した聖が半ば呆れたように言うと未散の手から指輪を回収し、そのままスタスタと近くにある外とつながっている引き戸に歩き出した。

そしてガラガラと音を立てさせて重い引き戸を開けると、……指輪を投げた。

「ちよつと！なんで捨てちゃうの？！さっき貰っていいって言ったじゃない！」

未散は大声を張り上げながら聖に走り寄ると、今はもうどこかへ消えてしまった指輪を探すように外を眺めた。

「つたくもう！なんでわかんねーかな！」

「……え」

聖は頭を掻きながら未散を軽く睨みつけた。

その気迫に押された未散は身を仰け反らせた。

「とにかく俺は、吉岡に気にして欲しくないんだよ。だからわざわざ指輪あねを吉岡に渡してって日和先輩に頼んだってば。多分先輩にはすっげーイヤな男に思われたとは思う。だってあんなの、わざわざ日和先輩に引導渡すようなもんだしさ」

それを言うのと聖は不機嫌極まりない様子でぷいつ、と横を向いた。「けど俺はそれで吉岡に日和先輩のことはもう俺の中では終わってる事だつてわかってもらえらんだつたらそれでいいって思ったんだよ。それに、……あの指輪をまだ日和先輩が持ってるとか俺が持ってたたら吉岡イヤだろ？俺だつて吉岡が持ってたたらヤダよ、なんか気にされてるみたいで……」

なにかご意見ございますか?!と聖は相変わらずそっぽを向いたまま顔を真っ赤にして未散に少々ヤケクソ気味に聞いていた。

「……いいえ、ございません」

未散は納得したように微笑んで首を横に振った。

「あのさ」

「うん」

「……吉岡はいいのか、佳佑先輩じゃなくて」

聖は引き戸に手を掛けると、戸に顔を向けたままどうしても気になることを未散にたずねていた。

優太に強引に体育館に連れ戻されたあの日に見た未散が今でも脳裏から離れていなかったのだ。

普段は優太相手に本気で痴話喧嘩をしあの理にも口答えする勝気な女だけど、本当は誰よりもかわいくて仲間思いで　それまで聖は未散をそんな女ひとだと思っていた。

だけど佳佑の前にいた未散はまるで知らない女ひとだった。いつもそばにいて抱き締めてやらなければすぐに消えてしまいうな、どこか危うげで儚かった。

自分の前ではどんなことがあるうとも気丈に振舞っていた未散が、佳佑の前ではなんの抵抗もなく弱い姿を曝け出していた。

それはつまり、佳佑にはそれだけ心を許しているということなの

だろう。

だから聖にはこう思えてならなかった。

もしかしたら吉岡には俺なんかより佳佑先輩の方がいいのかなと。

「きつと佳佑先輩は俺みたいなのは絶対しないと思うよ？先輩は大事なものを無くした痛みを知っているから吉岡を不安にさせることもないと思うし」

未散に顔を向けることができないままだったが、それでも覚悟を決めて引きどの取っ手を聖はぐつと握り締めた。

「なのに俺を選んだよ？ホントに後悔しない……？」

わざわざ未散に言うのはものすごく勇気が必要だった。しなくていい話なのかもしれない。

でも今ここで聞かなければこれから先きつと、自分は佳佑の存在に怯え続けることになる。聖はそう確信していたのだ。

佳佑がどんな思いで未散を諭し自分に説教したのかは聖なりにわかっていた。

だから余計にあんなにも自分を犠牲にできる佳佑が、そして今でもきつと未散を見守り続けている佳佑が何よりも怖かった。

でも未散が佳佑のことはもう過去の話だとそれさえ言ってくれるのなら、未散が自分のことをそうしてくれるように自分も未散を信じようと思った。

聖は言い終わると未散に向き直り意識して優しく微笑んだ。

「……あたしにとっての佳佑先輩は聖くんにとっての日和さんとおんなじ。だから佳佑先輩には『もう1回好きになってもいいですか』って言った。でも……聖くんにはそんなこと言っていないでしょ？」

はにかむように笑い、未散は聖に返した。

「……だからさあ、なんでそう吉岡は無防備なんだよ」

「そんなコト言われても……え、や、ちょ、ちょつと！」

1回目は泣いた顔で2回目は怒った顔だった。

そして3回目は笑った顔。

なんだ全部に弱いんじゃないの、と言われてしまったらそれまでののだが、またもや聖は未散に心臓を鷲掴みされてしまった。

聖は未散の手を掴むと、そのまま引き戸に未散の背中を押し付けた。

「ちょ、ちょっと！な、なにするのよ！」

なんかこの前と同じようなことになってないか？と思いつながら未散は「ここ体育館なのわかってる?!」と聖に目で訴えた。

「……今ようやくわかったよ、佳佑先輩の気持ち」  
「気持ちって、なんの？」

羽交い絞めされている状態のまま未散はいきなり始まった聖の独り言に突っ込みを入れた。

すると聖は困惑した笑顔になった。

「吉岡見るとここがどこなのか忘れる。あとで誰かに何か言われようがどうでもよくなる。この前は佳佑先輩がやってるのを見て『ようやるよ』って思ったけど俺も人のこと言えないわ」

「そ、そんなこと言われても知らないよ！なによ、あたしが悪いっていうの?!」

「正直に言っつていいならね」

「なんなのよそれ……」

まるで「悪いのはおまえ」と言わんばかりの口ぶりに未散は呆れてモノも言えない。

「そっぴやさあ、吉岡このあとなにされた？」

「え？」

「この前同じようなことされたら、佳佑先輩に」  
不意に嫌な記憶が聖の頭の中で蘇っていた。

佳佑は「なにもしてない」と言っていたものの聖は信じちゃいなかった。

というのも、聖が見ていたところからは佳佑の背中しか見えていなかったのだからホントに何もしてないのかがわからなかったのだ。

「で、このあとは?!」

まるで警察の取調べの「やったのはおまえだな!？」と言つのと全く同じ口調で、聖は未散に問いただした。

「……多分あたしが泣いちゃったから可哀相だったからだと思っただけど、ほっぺに、ちよつと……」

どうやら言いにくいらしい、未散は俯き加減でごにごによと答えた。

なにが「なにもしてない」だよ!してるじゃん、充分に!

心の中で「佳佑先輩の大嘘つき!」とボヤきながら、聖は未散の顎に手を掛けると半ばムリヤリ上げた。

「どつち?!」

「え?」

「だから!右か左かって聞いてんの!」

「そ、そんなの覚えてないよ!」

「じゃあいいわかった」

ムツとした顔で聖はそう言い放つと、未散の両頬に唇を押し付けた。

「……ちよ、ちよつと!ちよつと待つてつてば!」

未散は自由になつていた右手で聖の左腕を思いつき叩いた。

「あれ、違うのか?」

未散が待てといつた理由をわかっているのかわかっていないのか、聖はニヤリと笑いながら未散に聞いた。

「当たつてる、当たつてます!もういいでしょ!?お願いだからはなしてよ!」

未散は「そういう意味じゃない!」とは思つたものの、とにかく恥ずかしくてやめさせようと必死。

再び聖を叩こうと手を上げた。

しかし……あっけなく未散の腕は聖に捕らえられてしまった。

おまけに今度は足を使ってくるかもと先回りして、聖は未散の体を押さえ込んだ。

「ちょっと！なんなのよさつきから！くつつかないでよ！」  
手も足も出せない未散が出せるものはもう1つしかない。  
唯一動かせる口で抵抗をした。

「やなこと」

だが、相変わらず話を聞こうとしない聖にまたもや跳ね除けられた。

「だって腹立つじゃん、だから記憶摩り替えてやる……」

そしてやっと、聖が未散の手をはなさない訳を漏らした。

「そんなことに嫉妬心燃やさないでよ……」

それでもつて未散は、またもや愚痴を呟いていた。

「で？このあとは？」

しかし聖は未散の文句に耳を傾ける気は毛頭ないらしく、また未散を問い詰め始めた。

「……まだやるの？」

「まだやるよ？」

「えーっ、もういいでしょお？！」

「ダメ！はい、続きは？！」

「……………」

今の聖は完全に聞き分けのない子供そのものだった。  
とうとう未散の方が根負けしてしまった。

「続きは……おでこくつつけられた」

こうなったら気が済むまで付き合うしかないか……そう半ば諦めて未散は聖に答えた。

「……こんな感じ？」

「……うん」

返事をしながら未散はいつのまにか目を閉じていた。

「で？それから？」

「あたしの手を掴んで」

「うん」

「で、佳佑先輩が顔を近づけてくるからあたしは目を瞑った……」

「うん、それから？」

「それからあとは……んんっ！」

本当なら「目を瞑った……でもね、そのあと佳佑先輩にデコピンされてそれで終わり」と言う筈だった。

しかし迂闊にも思い出すにつれて夢うつつになつていたので聖に隙をつかれ……またもや自分の唇に聖の唇がかぶせられていたのだ。「な、なにすんのよ！」

ぶんぶんと首を振って聖から逃れると、未散は声をとがらせた。

「なにつて、佳佑先輩の真似しただけだけど」

「真似になつてないから！ だいたいそんなことされてないし、佳佑先輩は今でも死んだ元力ノさんが好きなんだから、あたしにそんなことするわけないでしょ！」

悪びれもせずそう言い返す聖に未散は声を荒げていた。

「吉岡おまえさ……」

「なによ?!」

「それ……本気で言ってるの？」

「こんなことで嘘ついてどーすんのよ?!」

「……………」

未散の怒鳴り声を聞いた聖の方は胸をなでおろしていたが、ちょっとだけ佳佑が気の毒に思えてしまっていた。

どうやら未散は佳佑の気持ちをこれっぽっちもわかっていないらしい。

だからだろう、未散の返事は見当違いもいいところだった。

「いや……もういい、わかった」

でもだからといってわざわざ佳佑の未散への『想い』を言う必要もないだろうし……というより言いたくないし、それにもしかしたら佳佑は未散にあえてバレないようにしたのかもしれない。そう思った聖はもうこの話を打ち切ろうとした。

しかし未散の方はというとまだ言いたいことがあるらしい。

「もう！ なんてこんなところでそういうことすんのよ！ 聖くんのは

「かっ！」

「……と、顔を赤面させ聖にご立腹中だった。」

「……てことは、こんなところじゃないならいいんだ？」

「誰もそんなこと言っていないでしょ?! 屁理屈こねないでよ!」

「なにも揚げ足をとって遊ばなくてもいいのに、聖がそんなことを言うからまた未散は癩癩を起こしていた。」

「……そういや、前も俺、吉岡に怒られたっけな……。」

「未散の怒った顔を見ているうちに聖はできることなら忘れておきたかった過去の失態を思い出していた。」

「恋愛における自分の学習能力の低さに聖は1人で失笑してしまっていた。」

「……な、なによ!?!」

「ふと聖がこつちが怒っているというのに笑い出したのでさらに気分を害された未散は目を吊り上げた。」

「いや……前も吉岡におんなじこととしてそのときも吉岡に喚かれたな、って」

「だって……聖くんが結局あたしのこと好きなのかわかんないんだもん……」

「……」

「日和さんの事だって、もしあたしが部室に行かなかっただろうしてた? きつとあたしが昇降口で待ってたことなんてずっと忘れてたでしょ?!」

「……」

「聖は自分の犯した失敗に閉口してしまっていた。」

「なにも未散に思い出させなくていいことを思い出させていた。」

「そして今、未散は自分を見上げて睨みつけているはずなのにその目はやりきれなさだけが映っていた。」

「……きつとそうだったとは思う。だから吉岡に俺はあんなところを見られたんだろうしね」

「もう今は日和に未練はないと言い切れる。」



けれどあのときは未散ではなく日和を選んでいた自分が確かにいた。

それを考えれば今ここで真っ向から日和のことをなんとも思っていないと否定しても未散はきつと信じないだろう。

そう思った聖は未散の自分に対しての疑惑に素直に答えた。

「……………」

思ったとおり未散は自分の言葉に狼狽していた。

かすかにだった但未散の目は明らかに聖からそむけてしまっていた。

「だけど…………遅かれ早かれ俺は気づいたと思うよ、『あの日の俺は間違ってた』ってね」

そう言いながら聖は腕を首の後ろに回していた。

「もしかしたら…………最悪な状況になってからだったかもな」

「最悪、って？」

首の後ろで指先を動かしながら聖がそう言うと、未散は逸らした目を戻して聞き返してきた。

「…………吉岡が佳佑先輩の所にいつちゃってから、とかね」

言い終わったところで聖が首の後ろに回していた腕の動きが変わった。

その腕は指先でチェーンを持ちながら前に戻っていった。

「でも仮にそうなっちゃったとしても、俺は佳佑先輩がいないのいいことに奪還を考えただろうけどね」

「日和さんはどうするの？」

自分を佳佑から奪い返すなんて言い出すものだから、未散は驚いていた。

でもそのとき日和はどうなるのか　単純にそう思った疑問を未散は聖に投げかけた。

「…………どうするって決まってるだろ、頭下げて頼んだと思うよ？」  
俺と別れてください』って」

「せっかくそこまでしたのにあたしがなびかなかったらどうするの

？だって相手は佳佑先輩だよ？勝てると思ってんの？」

意地の悪い質問をしているなどは思ったが、聖がどう返してくるのかを未散は知りたかった。

試すかのように未散は聖に含み笑いをしていた。

「……多分勝てなかっただろうね。だから俺は……少なくとも吉岡と顔を付き合わせている限り忘れることもできなくて、何もかも失ったって後悔し続けてたんじゃないかな」

そう話しながらも聖の手は、いつの間にかチェーンから指輪を外していた。

そして指輪を持っていない手は未散の左手を取っていた。

「でもそんなの部活辞めればいいだけの話じゃない？まあ……みんなに大騒ぎされるだろうけど」

あたしの左手なんか持って何をするんだろう？とつい自分の左手に目を向けながら未散はまた嫌がらせのような質問を聖に向けていた。

「まあそりゃそうだ……けどさ」

未散が自分の手元を見て明らかに目をみはったのに気づかないフリをして聖はさらに続けた。

「そんなことしたって結局吉岡とは会おうと思えば会えちゃうだろう？だから無駄なんだよ、そんなことしたって。それに……今の俺には辞める度胸はないからなあ……」

「どうして……？」

「だって、こんなものまで買ったのに今更引けるかよ。しかも貰い手がいないのに捨てられないんだよ俺は。けっこう女々しいのは自分でもわかってるからさ」

「……」

「それに、俺に気がないってわかっててもバスケにさえやっていれば理由なんかなくても吉岡の傍にいられるだろ？そりゃそれはそれでしんどいけどムリヤリ忘れようとする方が俺には辛いからさ」

前の恋がそうだった。

日和とただの先輩と後輩の関係だった頃はそれはそれで切なかった。

だけど、日和に絶縁状を叩きつけたあとの方がもっと胸がつぶれる思いだった。

自分の気持ちに正直でいるほうが自分には合っている。それが聖の中にある結論なのだ。

「……ということ、ものすごい遅くなったけど誕生日プレゼントね」

聖は未散に左手が見えるように持ち上げた。

未散の目に映ったのは……薬指にちょうどよくおさまっているシルバーの指輪だった。

「まあ、いらなくて言うなら自分でとっちゃいな？」

そう言うと聖は未散から手を放した。

すると未散は指輪を隠すように右手を自分の左手に重ねると、まるで指輪を取られまいとするかのように左手を自分の体のほうへ引き寄せた。

そして何度も何度も首を横に振った。

「ありがと……大事にする……」

俯いてはいたものの、少し涙声にはなっていたものの、それでもはつきりと未散は聖に言っていた。

「でもさ」

未散は顔を上げるとじつ、と聖を見据えた。

「なんか……モノでごまかされた気がするんだけど」

「そ、そんなことねーって！」

口にできないからそうしたのであってごまかしたわけではないのだが、妙に鋭い未散に聖は慌てふためいた。

「じゃあ、あたしのこと好き？」

「……え」

「だから！あたしのことが好きかって聞いてんの！」

「……」

これは未散からの挑戦状なのか？ 聖は言葉に詰まった。

領けばいいのか？ そう考えて聖は首を縦に振ってみた。

しかし未散の頬はみるみる膨れた。

「ちよつと！誰が首の運動しろつて言つた？！」

「首の運動つて……」

まさかそんな返しが来るとは思わず、聖は思わず突っ込んでいた。しかしそれを未散は流してしまった。

「貰つといて文句言うのは忍びないんだけどさ、あたしはせつかくだったら聖くんからの誕生日プレゼントは『好き』っていう言葉の方がいいんですけど！」

「……吉岡つて経済的な女だな」

絶対俺を困らせようと思つて言つてるよな そう思つてしまつた聖はついつい出た言葉が嫌味になっていた。

しかし未散が怯む様子はまったくなかった。

「もう2度と言わなくていいよ、だから1回ぐらい言つてくれてもいいでしょ?!」

「……………」

涙目で見上げる未散に聖は心底困つてしまった。

実は聖、惚れた相手に『好き』ということと言つたことが今まで一度もなかった。

なぜ言わずにすんだかというと、元カノである日和は聖はそういつた甘い言葉は一切言えない性格だと半ば諦めていたようで強要することがなかったのだ。

「あのさ……俺そついうの今まで言つたことないんだけど……」

もし日和にも言つたことがないとわかれば諦めてくれるかなと淡い期待をして聖は未散にやんわりと断りを入れてみた。

しかし、全く効き目がなかった。

それどころか助長してしまつていた。

「だつたらなおさら言つてよ!!1個ぐらいあたしにしかやつてないことやつてほしいんですけど!!」



Vo1・78(後書き)

どうもこんばんは、愛梨です。

なんだかんだで約1ヶ月ぶりです。

やっと、ほんとにやっと終わりました。

やっとアップできました。

やっと……完結です。

こんなところまで読んでくださり、ありがとうございました！

どうしようか悩んで考えて早1ヶ月。

もしや今まで読んでくださった方にまで「もうコイツなんか知らん！」って思われてしまったのではないかと今とってもビクビクしてます(汗)。

ホントはもっとさくつと終わらせようと思ってたんですけど、結局いちばん長くなりました。

これっていいのか？よくないのか？？

……正直わかりませんが、とにかく今はいいや、書ききったことを素直に喜びます(苦笑)。

最後の最後なんですけど、最初は聖はちゃんと言えたというところまで終わりにしてました。

でも……今までの聖を考えると不自然？

でも最後だからこそ言ったというのもアリ？

あ、でも待てそれだと衣と一緒になっちまうなあ……。

ってあれこれ考えた結果、「まあ、言えたかどうかはみなさんのご想像にお任せ！」っていう、実はいちばん安易でズルい結論にしちゃいました(笑)。

「や、やっぱ無理！」って聖が言うと「無理じゃない！」って

未散が怒る、その繰り返しを延々続けるのか、それとも「俺も未散が好き」って、おいおいおいさつきまで吉岡だったのにいきなり未散呼ばわりですか?! っていう展開になるのか……あとは、皆さん自由に妄想してください(笑) って最後までいい加減な作者ですみません(平伏)。

さて、未散と聖、そして優太と衣を中心に描いてきた今作はこれでお開きですが、次回からは前々から予告していた通り、佳佑と理を中心に綴っていいと思います。

作品名はこれと大して変わりません。

『こんな恋の話 2nd Season』と題してお送りします。未散たちが入学する前の2人やその2人が恋に落ちた未散以外の姫様たち、それから大学生になった2人をご覧いただければと思います。

それから……今回は主にお笑い担当(?) だった理がほとんどお笑いをやりません。

また、佳佑の過去のこともありますから2nd Seasonの方は基本的にはシリアスな感じになると思います。

さらには……こちらの方では佳佑たちがそれぞれ片思いをしてそれがどうやって成就していくのかというだけでなくその先も書いたりますので、まあ多少は今作品以上のお色気シーン(?) も少々入ったりすると思います。

あ、でも、15禁にしなくてはならないレベルで入れるつもりはないのでそこはご安心下さい……っって、誰ですか、今「ちっ」って言ったの(笑)。

ああもう、またすみません。

本編も長かったのにこんなまで長かったら鬱陶しいですよ(汗)。

ここまで辛抱強く読んでくださったそのあなた、本当にありが

とう（涙）。

とうとうここでひとまずお別れですが、近いうちにお会いしまし  
う。

次回作は「あれ？なんか違うくない？」「同じ人が書いてるよう  
には思えないんだけど」「って思われるような冒頭になるよう頑張り  
ます。

それでは、またです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9114g/>

---

こんな恋の話

2010年10月8日13時31分発行